博士学位論文（東京外国語大学）

Doctoral Thesis (Tokyo University of Foreign Studies)

氏　　名	金民
学位の種類	博士（学術）
学位記番号	博甲第 231 号
学位授与の日付	2017 年 9 月 6 日
学位授与大学	東京外国語大学
博士学位論文題目	現代韓国語の動詞の連体修飾構造に関する研究――動詞の連体形と被修飾名詞の共起様相――

Name	Kim, Min
Name of Degree	Doctor of Philosophy (Humanities)
Degree Number	Ko-no. 231
Date	September 6, 2017
Grantor	Tokyo University of Foreign Studies, JAPAN
Title of Doctoral Thesis	A Study on the Construction of Adnominal Clause of Verbs in Modern Korean――The Aspect of Co-occurrence of the Adnominal Forms of Verbs and the Nouns――

東京外国語大学博士論文

現代韓国語の動詞の連体修飾構造に関する研究

――動詞連体形と被修飾名詞の共起様相――

金　民（キム・ミン）

目次

第１章 序論 1
1.1. 研究の目的 1
1.2. 先行研究 2
1.2.1. 連体節と被修飾名詞の関係 2
1.2.2. 連体形をとる用言 3
1.2.3. 被修飾名詞 5
1.2.3.1. 特定の連体形語尾と制約的に共起する被修飾名詞に関する研究 5
1.2.3.2. 用言の連体形と被修飾名詞の分布に関する研究 １２
1.3. 研究の対象と方法 １４
1.3.1. 研究の対象と考察の範囲 １４
1.3.2. 研究方法と言語資料 １５
1.4. 本稿の構成 １７
第２章 動詞による連体修飾構造の特徴 １８
2.1. 連体形をとる頻度の高い動詞 １８
2.2. 動詞の連体形との共起頻度が高い名詞 ２１
2.3. 連体節と被修飾名詞の関係 ２４
2.3.1. 「内の関係」 ２５
2.3.2. 「外の関係」 ２８
2.4. 本稿における名詞分類 ３１
2.5. 本稿における動詞分類 ３２
2.6. 第2章の結び ３４
第３章 하는による連体修飾構造の特徴 ３６
3.1. 하는の意味用法について ３６
3.2. 하는をとる動詞の語彙的・文法的特徴 ３９
3.2.1. 하는をとる頻度の高い動詞 ３９
3.2.2. ＜하는志向動詞＞のテンス・アスペクト的特徴 ４８
3.3. 하는との頻度が高い名詞＝＜하는志向名詞＞ ５１
3.4. 하는連体修飾構造Ⅰ―「内の関係」（意味的格関係） ５５
3.5. 하는連体修飾構造Ⅱ―「外の関係」（内容補充的関係） ５８
3.5.1. 하는＜同一内容関係＞ ５９

3.5.1.1. 하는+<様子名詞>..... 59
3.5.1.2. 하는+<行為名詞>..... 60
3.5.1.3. 하는+<方法名詞>..... 62
3.5.2. 하는＜状況的内容関係＞..... 63
3.5.2.1. 하는+<現象名詞>..... 63
3.5.2.2. 하는+<感覚名詞>..... 64
3.5.2.3. 「하는＋名詞（助詞）」が接続形のように機能する名詞 65
3.6. ＜하는志向名詞＞が한や할と共起する場合..... 67
3.6.1. ＜하는志向名詞＞が한と共起する場合..... 67
3.6.2. ＜하는志向名詞＞が할と共起する場合..... 68
3.7. 第3章の結び..... 69
3.7.1. 하는をとる動詞に見られる特徴..... 69
3.7.2. 하는「内の関係」に見られる特徴..... 70
3.7.3. 하는「外の関係」に見られる特徴..... 72
第４章 한による連体修飾構造の特徴 ７４
4.1. 한の意味用法について..... 74
4.2. 한をとる動詞の語彙的・文法的特徴..... 77
4.2.1. 한をとる頻度の高い動詞..... 77
4.2.2. ＜한志向動詞＞のテンス・アスペクト的特徴..... 83
4.3. 한との共起頻度が高い名詞＝＜한志向名詞＞..... 87
4.4. 한連体修飾構造Ⅰ―「内の関係」（意味的格関係）..... 90
4.5. 한連体修飾構造Ⅱ―「外の関係」（内容補充的関係）..... 94
4.5.1. 한＜同一内容関係＞..... 94
4.5.2. 한＜状況的内容関係＞..... 95
4.5.3. ＜한＋名詞（助詞）＞が接続形のように機能する名詞..... 95
4.6. 主に後置詞に用いられる한と共起する＜한志向名詞＞..... 97
4.7. ＜한志向名詞＞が하는や할と共起する場合..... 98
4.7.1. ＜한志向名詞＞が하는と共起する場合..... 98
4.7.2. ＜한志向名詞＞が할と共起する場合..... 99
4.8. 第4章の結び..... 101
4.8.1. 한をとる動詞に見られる特徴..... 101

4.8.2. 한「内の関係」に見られる特徴 １０２
4.8.3. 한「外の関係」に見られる特徴 １０３
4.8.4. 主に後置詞に用いられる한と被修飾名詞 １０３
第５章 할による連体修飾構造の特徴 １０５
5.1. 할の意味用法について １０５
5.2. 할をとる動詞の語彙的・文法的特徴 １０７
5.2.1. 할をとる頻度の高い動詞 １０７
5.2.2. 意志動詞・無意志動詞の観点から見た할をとる動詞 １１０
5.3. 할との共起頻度が高い名詞＝＜할志向名詞＞ １１０
5.4. 할連体修飾構造Ⅰ―「内の関係」（意味的格関係） １１３
5.5. 할連体修飾構造Ⅱ―「外の関係」（内容補充的関係） １１４
5.5.1. 할＋＜予定名詞＞（계획（計画）類） １１５
5.5.2. 할＋＜意志名詞＞（작정（つもり）類） １１６
5.5.3. 할＋＜当為名詞＞（의무（義務）類） １１８
5.5.4. 할＋＜要件名詞＞（권리（権利）類） １１９
5.5.5. 할＋＜可能性名詞＞（염려（心配）類） １２０
5.5.6. 「할＋名詞（助詞）」が文法的な機能を果たす場合 １２３
5.5.6.1. 할+방침（方針），계획（計画）など+-이다（…だ） １２３
5.5.6.2. ＜할＋名詞（에）＞が接続形のように機能する名詞 １２３
5.5.6.3. 「할＋名詞（로, -이다）」が強調の機能を担う名詞：정도（程度） １２３
5.6. ＜할志向名詞＞が하는や한と共起する場合 １２４
5.7. 第5章の結び １２５
5.7.1. 機能の観点から見た「할＋＜할志向名詞＞」 １２５
5.7.2. 할が表す意味の観点から見た「할＋＜할志向名詞＞」 １２５
第６章 結論 １２８
6.1. 要約 １２８
6.2. 意義と今後の課題 １３５
参考文献 １３８

図表目次

表 1. 한があらわす意味と動詞のアスペクト的クラス（中島仁(2002:42)引用）... 4
表 2. 各連体形がとる被修飾語の分類（中島仁(2012:293)引用） １２
表 3. written（文語）のジャンル分布..... １６
表 4. spoken（口語）のジャンル分布 １６
表 5. 動詞の連体形をとる頻度別分布 １９
表 6. 言語資料における連体形をとる頻度の高い動詞 ２０
表 7. 動詞の連体形との共起頻度が高い名詞（相対頻度） ２２
表 8. 本稿における動詞分類の概略..... ３２
表 9. 自動詞の＜하는志向動詞＞ ４１
表 10. 他動詞の＜하는志向動詞＞ ４４
表 11. ＜하는志向名詞＞ ５１
表 12. 動詞分類別の하는をとる頻度..... ７０
表 13. 自動詞の＜한志向動詞＞..... ７８
表 14. 他動詞の＜한志向動詞＞..... ８０
表 15. ＜한志向名詞＞..... ８８
表 16. 後置詞に用いられる한と共起頻度が高い名詞 ９７
表 17. 動詞分類別の한をとる頻度..... １０２
表 18. ＜할志向名詞＞..... １１１
表 19. ＜할志向名詞＞と意志動詞／無意志動詞 １２７
表 20. 하는，한，할の意味用法と語彙論的・文法的特徴..... １３４

図 1. 名詞別動詞の連体形との共起頻度..... ２３
図 2. 끓다（沸く），들뜨다（そわつく）の하는，한，할をとる頻度..... ４２
図 3. 남기다（残す）と기다리다（待つ）の하는，한，할をとる頻度..... ８１

第1章 序論

1.1. 研究の目的

現代韓国語の用言の連体形[1]は，用言に連体形語尾が結合して作られる．本稿ではこれ以降，記述の便宜のために，用言に連体形語尾「-는，-ㄴ，-ㄹ，-던」[2]が結合した形を，用言하다で代表させて「하는，한，할，하던」のように表記することとする．

用言の中でも，動詞連体形については，テンス，アスペクト，ムードなどの文法範疇をめぐって様々な議論が行われてきた．[3] それにもかかわらず，動詞連体形の文法範疇については一致した見解に至っておらず，多くの文法書や辞書では하는，한，할をテンス，アスペクト，ムード的意味の混合した形式であることを認めつつも，하는は「現在」，한は「過去」，할は「未来」と認めている傾向がある．単にテンスの観点から言えば，次の例の먹는（食べる）は「現在」，먹은（食べた）は「過去」，먹을（食べる）は「未来」を表す:

(1) 밥을 먹는/먹은/먹을 사람 ご飯を食べる／食べた／食べる人

ところが，実際のテクストを調べると，하는，한，할はそれぞれをとる動詞の様相も非常に異なる様相を見せるし，次の例を見て取れるように，いずれも「現在」を表すような用例が見られる:

(2) 이 모임에는 일하는 사람이 많다. この集まりには働いている人が多い.
(3) 이 모임에는 결혼한 사람이 많다. この集まりには結婚した人が多い.
(4) 이름 모를 꽃들이 피어 있다. 名前の知らない花が咲いている.

例えば，(2)の「일하는 사람」（ここで働いている人），(3)の「결혼한 사람들」（結婚した人）の일하는（働いている）と결혼한（結婚した）はいずれも被修飾名詞が表す主体の現在の属性を表す．従って일하는（働いている）と결혼한（結婚した）はテンス的に「現在」を表すと言える．そして(2)の일하는の過去形は일한（働いた）より，일했던（働いていた）の方が自然に思われる．次に，할について言えば，「이름 모를 꽃들」（名前を知らない花）はテンス的に「現在」を表し，할は話題としている「花」に対する話し手の考えを述べているようである．このように，韓国語の連体形하는，한，할はテンス的に対等な 3 項対立とは言えないし，それぞれの連体形は実際の構造と意味において複雑な様相を見せている．

---

1) 連体形を韓国では,「관형사형(冠形詞形)」と呼ぶことが多いが, 本稿では菅野裕臣他(1988)に拠って「連体形」と呼ぶことにする. 菅野裕臣他(1988:1022)は,「体言の前に来て, 体言と関係を結ぶ形」を「連体形」と定義している.

2) 남기심・고영근(1985:159)は-는，-던は-ㄴ-，-더-と-ㄴの複合形式であるため，韓国語の連体形語尾は-ㄴと-ㄹのみを認める．連体形に現れる-더-と終止形や接続形に表れる-더-を同一の形態素であると考えることの問題点については金倉燮(1987:18-20)，李翊燮・任洪彬(1983:196)，任洪彬(1993:305-318)，노마히데키[野間秀樹](1994:2)，野間秀樹(1997a:102)参照．金倉燮(1987:20)は-더-(ㄴ)は世界に現れている状況の時相を表すのに対し，-더-(라)は知覚された状況の時相を表すと述べている．また，この 2 つの形態素を同一と認めるかどうかは，本質的な共通性に焦点を合わせるか，もしくは，非本質的であっても，重要な意味を持つ相違点に焦点を合わせるかの問題であると述べている．

3) 南基心(1978)，남기심・고영근(1985)，배진영(2001)，문숙영(2005)，박재연(2009)，吳充淵(2012)，菅野裕臣(1986)，野間秀樹(1997a)，中島仁(2012)など．野間秀樹(1997a)，中島仁(2012:287-289)には連体形の文法範疇に関する総合的な記述が見られる．

一方，被修飾名詞にも特徴が見られ，先行研究や辞書で言及されている名詞以外にも，特定の連体形と共に頻繁に現れる名詞が多数観察される．例えば，소리（音）はいわゆる「現在」を表す連体形「하는」とよく現れる．例えば，소리（音）は“Google”[4] で検索してみると，「물 흐르는 소리」（水が流れる音）のように，하는と頻繁に現れ，「물 흐른 소리」（水が流れた音），「물 흐를 소리」（水が流れる音）のような例は殆ど現れない．それぞれの連体形と高い頻度で現われる被修飾名詞にはいかなる名詞があり，そのような現象をもたらす原因は何であろうか．

このような状況の中，本稿は実際の言語資料の分析を通じ，現代韓国語の動詞連体形のうち，하는，한，할を対象に，それぞれの連体形が成す連体修飾構造の語彙的・文法的特徴を分析・記述することを目的とする．あわせて，それぞれの連体形の構造上の特性と連体形が表す意味との関連性についても考察する．本稿はとりわけ相対的に周辺的な要素として扱われてきた被修飾名詞に注目することで，既存の研究とは異なる観点から連体修飾構造のあり方を記述しようとするものである．[5]

本稿のこうした試みは，理論的な研究では見ることができなかった言語の側面を見ることにより，連体形や連体節をめぐる様々な問題を解決するための足がかりとなると思われる．

1.2. 先行研究

本稿で注目しているような，実例に基づいた動詞の連体修飾構造に関する研究は日本におけるいくつかの研究を除いては殆どない．日本での諸研究も特定の連体形のみを対象にしており，動詞の連体修飾構造全般に関する本格的な研究は管見の限り，見当たらない．

ここでは連体節と被修飾名詞の関係，連体形をとる用言，被修飾名詞に関する先行研究を順次見ていくことにする．

1.2.1. 連体節と被修飾名詞の関係

韓国語の連体修飾節と被修飾名詞の関係には，関係化(relativization)と名詞句補文化(NP-complementation)があり，両者は被修飾名詞が連体節の一成分になるかどうかによって区別される．

李翊燮・任洪彬(1983:270-274)によれば，(1)a は関係化，(1)b は名詞句補文化とされている．「내가 읽은 책은 참 재미있더라」（私が読んだ本は実に面白かった）の책（本）は，連体節の一成分になるのに対し，「네가 책을 읽은 사실이 놀랍다」（お前が本を読んだ事実が驚きだ）の사실（事実）は「네가 책을 읽은」（お前が本を読んだ）の成分になりえないと述べている：

(1) a. 내가 읽은 책은 참 재미있더라（私が読んだ本は実に面白かった）
　　b. 네가 책을 읽은 사실이 놀랍다（お前が本を読んだ事実が驚きだ）

---

4) Google の検索オプションにおいて，検索の対象にする言語を「韓国語」，検索地域を「大韓民国」に指定し，「물 흐르는 소리」（水が流れる音），「물 흐른 소리」（水が流れた音），「물 흐를 소리」（水が流れる音）を検索した結果である．

5) 連体節が被修飾名詞に従属し，全体が名詞句として機能する点で，被修飾名詞は連体修飾構造の中心であると言える．寺村秀夫(1982:209)は連体構造について次のように述べている：

> 連体修飾は，元来は実質的な概念や具体的な存在を指し示す名詞に，それを修飾する単語や句が前接し，全体が名詞句として文の中で機能するものである．その修飾部分はまさにその意味で被修飾名詞に従属し，それを中心としたいわゆる内心構造（endocentric construntion）を形成する．

李翊燮・任洪彬(1983:270-274)は(1)a の関係文は，同一の，または「同一指示的な(coreferential)名詞」があるが，(1)b の名詞句補文の場合は，「同一指示的な名詞」が補文の中にないとしている．

さらに，名詞句補文は例えば，「책을 읽은 사실」（本を読んだ事実）のような「直接補文」と「책을 읽는다는 사실」（本を読むという事実）のような「間接補文」に分類でき，それぞれを要求する名詞をめぐってはいくつかの論考が見られる．[6)]

李翊燮・任洪彬(1983:)は，前者を「直接補文」，後者を「間接補文」と呼び，「直接補文」を要求する名詞には，경우（場合），가능성（可能性），까닭（わけ）などの名詞があり，「間接補文」を必要とする名詞には，소식（便り），소문（うわさ），말（言葉），주장（主張），명령（命令），요청（要請）などの名詞があると述べている．김선효(2002:146-151)には，補文名詞の分類に関する総合的な言及が見られる．

日本語学にも同様な分類があり，寺村秀夫(1980)によると，次の例における a のような構造が「内の関係」，b のような構造が「外の関係」である：

(2) a. サンマを焼く男…「内の関係」
　　b. サンマを焼く匂い…「外の関係」

(2)a は「男がサンマを焼く」という文に戻せるので，韓国語の「関係化」に相当すると言える．(2)b は「匂い」と「サンマを焼く」が 1 つの文になる構造ではないため，「関係化」とはいえないが，「サンマを焼くときにする匂い」のように解釈でき，典型的な「名詞句補文化」ともいえない．

연재훈(2012)は韓国語での関係化の可能性は文法的な関係ではなく，意味的・語用論的な要素によって決定されると述べている．[7)] 特に，次のような非論項の被修飾名詞を持つ関係節の解釈や，共指示の名詞がない関係節の解釈には，特別な意味-語用論的制約が関与すると述べている：

(3) 살 돈이 있니?　買うためのお金はある？
(4) 먹은 그릇은 깨끗이 닦아라.　食べたお皿はきれいに洗っておきなさい．
(5) 어제 먹은 식당은 아주 비싸다.　昨日食事した食堂はとても高い．

実際の用例を見ると，연재훈(2012)が述べているように，関係化なのか，名詞句補文化なのか，はっきり区別しにくい例が相当に存在する．韓国語の連体節と被修飾名詞の関係については 2.3 にて詳細に取り上げることにする．

1.2.2. 連体形をとる用言

中西恭子(2002)は하는には自動詞が，할には他動詞がやや多く現れているが，これだけでは하는と할を特徴づける結果とはいえないと述べている．そこで，それぞれをとる用言を「内の関係」「外の関係」という分類基準に従って分類してみると，하는「内の関係」では自動詞，할「外の関係」では他動詞の頻度がもっとも高いことがわかった．そして，存在詞

6) 名詞句補文をいくつかの種類に分類し，それぞれの補文と共起しうる名詞に関する論考としては，남기심(1973)，李翊燮・任洪彬(1983：282-283)，강범모(1983)，김선효(2002)などがある．

7) 연재훈(2012)は韓国語や日本語のような Rel－N 類型の言語では，被修飾名詞に対する情報が意味的に適切な形で前に表示されるため，聞き手は前の文脈から最も適切な候補を表題名詞の意味として解釈するとし，聞き手は意味的な情報を元に，前に出た関係節の動詞と後に来る表題名詞の統辞論的関係を適切に推論することができると述べている．

は，하는「内の関係」で際立って多く現れ，補助動詞하다は할「内の関係」でもっとも多く現れていると述べている．

中島仁(2002)は한の表す意味を動詞のアスペクト的クラス(浜之上幸(1991)) [8]と関連付けて考察し，한が「現在と切り離された過去の事柄」を表す場合にのみ，한をとる動詞に制限がないとし，한を「過去」を表すテンス形式と規定している．한の表す意味を動詞のアスペクト的クラスとの関連をまとめた表を以下に引用しておく：

表 1．한があらわす意味と動詞のアスペクト的クラス（中島仁(2002:42)引用）

	状態動詞	状態性動作動詞	動作性動作動詞					
自他動	—	—	自動詞		他動詞			
主体	—	—	変化	非変化	変化		非変化	
客体	—	—	なし	なし	非変化	変化	非変化	変化
現在と切り離された過去の事柄	○	○	○	◎	◎	○	◎	○
現在の状態に影響をあたえている過去の事柄	×	×	○	×	×	○	×	○
現在の状態	○	○	×	×	×	×	×	×

※「◎」その意味しか表さない．「○」その意味をあらわしうる．「×」その意味を表すことができない．

中島仁(2002)は한が「現在の状態に影響をあたえている過去の事柄」を表す場合には，動詞の種類に制限があり，「動作性動作動詞」のうち，自動詞では主体が変化しているもの，他動詞では主体や客体が変化しているものに限られると述べている．しかし「하고 있다」をとりえない「状態動詞」の中でも，한をとって，「現在の状態に影響をあたえている過去の事柄」を表す動詞が見られる．例えば，「（재료가）남다」（（材料が）残る）は，浜之上幸(1991)の分類によれば,「状態動詞」であり，「現在の状態」しか表せないはずである．しかし次の例における남은（残った）は「남아 있는」（残っている）に置き換えることができ，「現在の状態に影響をあたえている過去の事柄」を表していると見ることができる：

(6) 남은 재료로 반찬을 만들었다 .
残った材料でおかずを作った.

浜之上幸(1991)の動詞分類では，動詞が連体形をとった際に表す意味が動詞分類の基準となっていないため，浜之上幸(1991)の動詞分類を連体形の研究にそのまま適用するのは限界があるように思われる．連体形の研究では，動詞が連体形をとった際に表す意味に注目して分類する必要がある．

8) 浜之上幸(1991)では，「하고 있다」を持つものを「動作動詞」，「하고 있다」をもたないものを「状態動詞」と分類している．「動作動詞」は「하고 있다」が表す局面の明確性によって，局面を特定しうるものを「動作性動作動詞」，局面を特定できないものを「状態性動作動詞」として区別している．「動作性動作動詞」はさらに「主体変化動詞」と「主体非変化動詞」に分類される．

前野敬美(1997)は할をとる用言について「形容詞や存在詞，指定詞の例が動詞の例と比べて非常に少ないと言える」と述べており，村田寛(2000:89)は할をとる用言について「基本的に動詞であり，中でも意志動詞が多く動詞中の実に 72.4%を占める」と述べている．

1.2.3. 被修飾名詞

これまでの研究において，被修飾名詞の問題は相対的に周辺的な要素として扱われきており，被修飾名詞の問題を中心課題とした研究は官見の限り見当たらない．[9)]

先行研究では，特定の連体形語尾と制約的に共起する被修飾名詞や特定の連体形と共起する被修飾名詞の種類に注目してきた．それでは，特定の連体形語尾と制約的に共起する被修飾名詞に関する研究と，特定の連体形と共起する被修飾名詞の種類に関する研究を順次見ていくことにする．

1.2.3.1. 特定の連体形語尾と制約的に共起する被修飾名詞に関する研究

ここでは，特定の連体形語尾と制約的に共起する被修飾名詞に関する先行研究を，辞書における記述と先行研究における記述の順に見ていくことにする．さらに，日本語における論考についても検討する．日本語は，＜連体節＋被修飾名詞＞という連体修飾構造をはじめ，連体節と被修飾名詞との関わり方の種類など，韓国語と多くの類似点を持っているためである．

まず，韓国語の辞書には，各連体形語尾に関する記述の中で，連体形語尾と名詞が文法的な形を成しているものに関する記述が見られる．

菅野裕臣他(1988)は連体形語尾ごとに，連体形語尾と名詞との文法的な形を示している．その一部を以下に示す．なお，連体形語尾の意味のうち，形容詞と結合した場合の意味は省略する：

-는《非過去連体形》…する

～가운데（…中），～길에（…途中で），～날에는（…日には），～동시에（…と同時に），～동안에（…間に），～모양이다（…ようである）〈本稿による省略〉

-ㄴ《過去連体形》 …した

～김에（…ついでに），～끝에（…の末に），～동시에（…同時に），～뒤에（…後に），～일이 있다（…ことがある），～후（…後）〈本稿による省略〉

-ㄹ《連体形．実現していない動作･状態》《①未来．この場合はⅠ-는と置きかえ得る》…する《②予定，意図，義務，可能性，推量》…する，…するべき

～길이 없다（…方法がない），～나름이다（…次第），～도리가 없다（…方法がない），～마음으로（…気持ちで），～모양이다（…ようである），～생각이다（…つもりである），～예정이다（…予定である），～일이다（…ことである），～작정이다（…つもりである），～정도로（…程に）〈本稿による省略〉

菅野裕臣他(1988)は連体形語尾と被修飾名詞の文法的な形について，連体形語尾と名詞の見出しの両方で示している．例えば，작정（つもり）については，連体形語尾-ㄹと작정（つもり）の両方において以下のような記述が見られる：

---

9) 不完全名詞と連体形語尾の共起をめぐる論考には，高永根(1982)，李翊燮･任洪彬(1983:280-281)，서정수(1996)，안효경(2001)，趙義成(2007)が参考になる．

-ㄹ：
▶~작정으로⇨작정（菅野裕臣他(1988:279)）

작정：
▶Ⅱ-ㄹ ~이다
▶Ⅱ-ㄹ ~으로（菅野裕臣他(1988:718)）

一方，特定の名詞の項にそれとよく共起する連体形語尾に関する情報を載せている辞書について，名詞の例と共に，以下に示す．以下，下線および日本語訳は筆者による：

＜국립국어연구원(1999)『표준국어대사전』＞
가운데（中）（관형사형 '-ㄴ, -는' 다음에 쓰여）어떤 일이나 상태가 이루어지는 범위의 안（連体形「-ㄴ，-는」の後に使われ，あることや状態が行われる範囲の中）
例）그는 어려운 **가운데서도** 남을 돕는다.
彼は苦しい中でも他人を助ける.
애국가가 울려 퍼지는 **가운데** 태극기가 게양되었다.
愛国歌が響いている中，太極旗が掲揚された.
＜연세대학교 언어정보개발연구원(1998)『연세 한국어사전』＞
용기（勇気）[‘-ㄹ 용기’의 꼴로 쓰이어]（「-ㄹ 용기」の形式で使われ）어떤 일을 하는데 필요한 힘 또는 마음（あることをするのに必要な力または気持ち）

一方，いくつかの研究は，韓国語の連体節を「関係節」と「名詞句補文」に分類し，[10] そのうち名詞句補文の特徴の一つとして，特定の連体形語尾をとる名詞について言及している．
李翊燮・任洪彬(1983:270-285)は,「名詞句補文化（NP-complementation）」の特性の一つとして以下のように指摘している:

(7) 철수가 집을 나간/나가는/나갈 경우에는 어떻게 하겠느냐?
チョルスが家を出た／出る／出る場合にはどうするの？
(8) 내가 그 집에 *간/ *가는/ 갈 필요는 없다.
私が彼の家に行った／行く／行く必要はない.
(9) 나는 그 집 앞을 서성거린/*서성거리는/ *서성거릴 기억이 없다.
私はあの家の前をうろついた／うろついている／うろつく記憶がない.

李翊燮・任洪彬(1983:280)によれば，(7)の「경우」（場合）の場合は，語彙的な意味により過去，未来，現在のことを表現するのに比較的自由であるのに対し，(8)の「필요」（必要）は「未来的」，(9)の「기억」（記憶）は「過去的」であるため，時制に関連する補文の性格に大きい制限があると述べている．このような指摘は，名詞の語彙的な意味と時

10)「関係節(relative clause)」は남기심(1973)では「関係冠形詞節」と呼ばれる.「名詞句補文」は李翊燮・任洪彬(1983:279)では「内容節(content clause)」, 남기심・고영근(1985:381)のように「同格冠形節」とも呼ばれる. 서정수(1996:1305)は,「冠形化補足節」と呼び,「名詞句補足節/補文(noun phrase complement)」の一つであるとする.

制に関連する補文の性格との関連を示すもので，実際にいかなる被修飾名詞がいかなる動詞の連体形とよく共起するのかという問いに繋がる．

권재일(1980:89-90)は，「(名詞句）補文化」の場合は自律名詞の個別的特性により，内包化語尾に制約があると述べ，「사실」（事実）の場合は制約がないが，「필요」（必要）の場合は，制約があるとしている：[11]

(10) 철수가 책을 읽-{ *은 / *는 / 을 } 필요 (권재일(1980:90))

チョルスが本を読む必要

このような制約は，自律名詞が特定の内包化語尾を制限する意味資質を持っているためであるとし，필요（必要）には，「確定法」，「現実法」を制約する意味資質があると仮定している．

강범모(1983)は補文名詞のうち，가능성（可能性），개연성（蓋然性），확률（確率），정도（程度）などの名詞を「非実現性補文名詞」と呼び，[－実現性]という資質が与えられるべきであると述べている．[12]

권재일(1985:78-79)は，以下のように「自律名詞の冠形化語尾の制約」の目録を提示している：

関係冠形化構成　制約なし

補文化構成(Ⅰ)―純粋に体言として機能―
制約なし：일（こと），방법（方法），상태（状態），
까닭（わけ），원인（原因），이유（理由），모습（姿）
-은-制約：필요（必要），수단（手段），가설（仮説）
-는-制約：필요（必要）
-을-制約：사례（事例），동기（動機），반성（反省），흔적（痕跡）

補文化構成(Ⅱ)―主に副詞語形成に関わる―
制約なし：당시(-에)（当時（に）），때(-에)（時（に）），경우(-에)（場合（に））
-은-制約：찰라（瞬間），순간（瞬間），동시(-에)（同時（……に））

---

11) 권재일(1980:87-89)は自律的に機能する名詞を「自律名詞」，そうでない名詞を「拘束名詞」と呼んでいる．「自律名詞」は名詞句補文化構成，および関係冠形化構成のいずれにも使われるが，「拘束名詞」は名詞句補文化構成にしか使われないと述べている．
권재일(1985:73)は「철수가 책을 읽은 사실」（チョルスが本を読んだ事実），「철수가 읽은 책」（チョルスが読んだ本）はともに，「철수가 책을 읽었다」を基底構造とすると述べ，同一名詞句制約が必要な「철수가 읽은 책」は「関係冠形化」，そうではない「철수가 책을 읽은 사실」は「（名詞句）補文化」と呼んでいる．
12) 강범모(1983:53-59)によると，「実現性」は話者が現実世界で賛否を見分けることができるかできないかによって決められる性質である．

-는-制約：연후(-에)（後（……に）），뒤(-에)（に）（後），이후(-에)（以後（に）），결과(-로)（結果（として））
-을-制約：연후(-에)（後（に）），뒤(-에)（後（に）），이후(-에)（以後（に）），동시(-에)（同時（に）），이상（以上），끝(-에)（末（に）），곁(-에)（そば（に）），가운데（中），지금（今），한편（一方），다음（後），나머지（余り），틈(-에)（間（に）），사이(-에)（間（に）），결과(-로)（結果（として））

ある名詞が特定の連体形語尾との共起において「制約がある」ということは，ある名詞が特定の連体形語尾とは共起しないことを示しており，本稿に示唆するところはあるものの，반성（反省）という名詞が名詞句補文とよく共起する名詞であるのか，-ㄹとの共起に制約があるとされる동기（動機）が本当に-ㄹと共起しないのかなど，いくつかの疑問が残る．

次に，서정수(1996:1315)は，名詞句補文を「冠形化補足節」と称し，「冠形化補足節」の場合，「사실」（事実）の場合は「-ㄹ」が現れず，「가능성」（可能性），「개연성」（蓋然性）などの名詞は「-ㄹ」のみと現れるとしている．

김진웅(2002:52-68)は，名詞句補文をその統辞論的・意味論的特徴により類型化する際，各補文の特徴の一つとして，特定の連体形語尾としか共起しない補文名詞について言及している．例えば，-는のみを許容する「感覚補文名詞」として，감촉（感触），광경（光景），기척（気配）などを挙げている．しかし광경（光景），기척（気配）は次の(11)，(12)のように，한と共起した用例が見られる:

(11) 상상해보세요, 그 맑디맑은 남대천가에 해당화가 지천으로 핀 광경을요. ＜BTGO0346＞
想像してみてください，その澄み切ったナムデチョンのほとりに満開のハマナスの光景（ハマナスが満開している光景）を．

(12) ＜…＞조금 전 아하스 페르츠가 깨어난 기척에 침상가로 달려왔다가, 다시 깨어나기를 내쳐 기다린 것 같았다. ＜BTEO0317＞
＜…＞少し前アハスペルツが起きた気配に気付いてベットのそばに駆けて来たが，再び起きるのをずっと待っていたようであった．

一方，이은경(2005)は「-는 도중에」（…する途中で），「-ㄴ 다음에」（…した後で），「-와 반대로」（…と反対に）のような「名詞を中心語とした文法的連語構成」[13]を類型別に下位分類している．この研究は，「-기 전에（…する前に）」，「-와 동시에（…と同時に）」のような名詞の前後に文法的な要素が制限的に結合するものを対象にし，連体形語尾以外に名詞化語尾や助詞のような文法的な要素も考慮している点，またすでに文法的な形として辞書や文法書に載っているものを対象にしている点で本稿とは対象が異なる．しかしコーパスを用いた客観的な研究方法で，連体形語尾と名詞の制限的な共起を取り上げている点で，本稿に示唆するところが大きい：

1つの連体形語尾と結合する構成

13) 이은경(2005)は，「名詞を中心としてその前後に助詞や語尾が制限的に結合するような構成」を「名詞を中心語とした文法的連語構成」と呼び，名詞がどのような語尾や助詞と結合しているのかによって類型化すると共に，コーパスの利用して高頻度構成を調査した研究である．

「-ㄴ」が先行する構成：[ㄴ-다음（後）]，[ㄴ-뒤（後）]，[ㄴ-직후（直後）-에（に）]，[ㄴ-후（後）]
「-는」が先行する構成: [는-도중（途中）- Ø]
「-ㄹ」が先行する構成: [ㄹ-때（時）]，[ㄹ-생각（つもり）-이다（…だ）]，[ㄹ-예정（予定）-이다（…だ）]，[ㄹ-정도（程度）-로（で）]

2つの連体形語尾と結合する構成
「-ㄴ，-는」が先行する構成: [는-대신（代わり）- Ø]，[ㄴ-덕분（おかげ）-에（に）]など（本稿による省略）
「-ㄴ，-던」が先行する構成: [ㄴ-끝（末）-에（に）]
「-는，-던」が先行する構成: [는-길（ついで）-에（に）]

3つの連体形語尾と結合する構成
「-ㄴ，-는，-던」が先行する構成:[ㄴ-가운데（中）-Ø]，[ㄴ-관계（関係）-로（で）]，[ㄴ-나머지（あまり）- Ø]など
「-ㄴ，-는，-ㄹ」が先行する構成: [ㄴ-노릇（もの）-이다（…だ）]
＊ハイフンも이은경(2005)のまま

이은경(2005)はこのような制限的な構成が「-는」より，「-ㄴ」または「-ㄹ」に制限される構成が多いと述べている．そして連体形語尾が 2 つ先行する構成としては，「-ㄴ，-는」が先行する構成が一番多く，連体形語尾が 3 つ先行する構成は，「-ㄴ，-는，-던」が大半であると述べている．

特定の連体形語尾のみと共起する被修飾名詞に関する日本における研究として菅野裕臣(1987:73)は，一部の名詞は必ずⅡ-ㄹ連体形を取るとしている：[14]

Ⅱ-ㄹ 목적으로（ただしⅠ-는/Ⅱ-ㄹ 목적|…する目的）
Ⅱ-ㄹ 가능성（…する可能性）

しかし，特定の連体形語尾と被修飾名詞の共起の問題は，被修飾名詞と連体節がいかなる関係で共起するのかという問題を抜きにしては解明できない:

(13) 유학을 가는 목적이 뭐야?
留学に行く目的は何なの？

(14) 새로운 학문을 배울 목적으로 유학을 간다.
新しい学問を学ぶ目的で留学に行く.

(13)は목적（目的）が連体節で示される事柄（유학을 가는（留学に行く））の背景となる構造であり，この場合は，「유학을 간」（留学に行った），「유학을 가는」（留学に行く）の方が自然である．それに対し，(14)は목적（目的）が連体節で示される事柄（새로운 학문을 배울（新しい学問を学ぶ））と同一の事柄を表す構造であり，この場合は，「새로운 학문을 배울」（新しい学問を学ぶ）の方が自然である．

14) 用言の語幹は第Ⅰ語基，第Ⅱ語基，第Ⅲ語基のいずれかの形で現れ，語尾はその 3 つのどれかに付くことがあらかじめ決まっている．菅野裕臣他(1988:1009-1013)参照．

村田寛(2000)は할を取る被修飾体言の中には基本的に「-ㄹ」連体形のみを取る，「ㄹ名詞」とでも呼べる名詞があるとし，가능성（可能性），가망성（見込み），확률（確率）の用例を挙げている．しかし，村田寛(2000)にも「ㄹ名詞」がいかなる構造で現れるのかに関する記述は見られない．

一方，日本語学でも韓国語と同様に，被修飾名詞が連体節の一成分になりえない関係（韓国語の名詞句補文とおおむね一致する）について，一部の被修飾名詞が連体形との共起において制限的であるという指摘がなされている．

1.2.1 で述べたように，寺村秀夫(1982)は，「さんまを焼く男」のように「男がさんまを焼く」の形にもどせるものを「内の関係」，このような形にもどせないものを「外の関係」と呼んでいる．被修飾名詞が本来持っている意味特徴から，「外の関係」の連体修飾部分の形がいずれかに決まる場合があると述べている．例のうち，次のようなものは修飾部分が常に「基本形」[15] をとる場合である：

寺村秀夫(1982: 207-209)

(15) 私には発言する資格がない．
(16) 彼には彼女を殺す意図はなかった．
(17) 彼は爪を噛む癖があった．
(18) 毎朝紅茶を飲む習慣だった．
(19) 地震を感じると列車が自動的にとまる仕組みになっている．

そして寺村秀夫(1982)はこのような修飾部分がテンスともアスペクトとも関係のない，概念を表すものとして考えるべきであると述べている．[16] また，奥津敬一郎(1974:189,345)は「日本人がよく働く（トイウ）こと」のように，連体節の間に「トイウ」が挿入できるような名詞を「同格名詞」と呼び，中でも，「欲」という名詞は，「将来に向かって主体が実現したいことだから，それを表現する補足文の時制は当然，未完了形となる」と述べている．そして補足文の時制が未完了形となる名詞として，「欲望，望み，希望，意欲，願い，意図，意志，理想，理念，計画，目的，覚悟」などを挙げている．

朴長庚(1987)は次の例を挙げ，日本語の連体修飾構造において，動詞形態の「形式化」，「固定化」とその類型について論じている：

(20) ベンガル語も習得し，インド人の友人たちと協力して，辺地の農村に学校を
{作る / *作った} 決意をした．

(21) 三原はこの会話をぼんやりと聞いた．
{ありふれた / *あるふれる} 若い男女のやりとりである．

15) 寺村秀夫(1982)はテンスにおいて，「タ形」と対立する「ル形」を「基本形」と呼んでいる．
16) 日本語のいわゆる「ル形」は，主に韓国語の連体形하는と할に対応する．(15)，(16)の「発言する」「殺す」はそれぞれ韓国語では「발언할」，「죽일」となり，いわゆる「未来」を表す連体形할に対応し，(17)～(19)の「噛む」「飲む」「とまる」はそれぞれ韓国語では「씹는」，「마시는」，「멈추는」となり，「現在」を表す連体形하는に対応する．

朴長庚(1987)は，(20)では「ル」形のみが，(21)では「タ」形のみが許容されるとし，いかなる場合においてそのような動詞形態の固定化が起こるのか，そしてそのような動詞形態の固定化をもたらす原因について分析を行った．

以上，連体形語尾と被修飾名詞の制約的共起に関する既存の研究について考察した．既存の研究をまとめると，次の通りである：

> 既存の研究の殆どは，名詞句補文化という連体修飾構造において，特定の連体形語尾と被修飾名詞の制約的共起に注目している．しかしコーパスを対象に，特定の連体形語尾のみをとるとされた被修飾名詞の用例を調査すると，他の連体形語尾をとる例も見られる．制約的共起を論じるためには，連体節と被修飾名詞の関係，連体形をとる用言の種類[17]など，共起の諸条件について詳細に記述しなければならない．

17) 例えば，用言の種類を言及せず，「-ㄹ」は가능성のみと共起するとの記述があるが，連体形がとる用言が形容詞である場合は，「높은 가능성」(高い可能性)のように，「-ㄴ」とも容易に共起する．

1.2.3.2. 用言の連体形と被修飾名詞の分布に関する研究

1.2.3.1 では，名詞句補文における被修飾名詞と連体形語尾の制約的分布に関する先行研究を取り上げ，言語資料の調査により，制約的な分布の条件をより明確にする必要があることを述べた．ここでは，用言の連体形の意味用法を明らかにしていく過程において，実際の言語資料に基づき，被修飾名詞の分布を分析した研究について述べることにする．

노마히데키[野間秀樹](1994)は하던ともっとも高い頻度で共起する被修飾名詞は「人間名詞」であり，人称代名詞を含めると，하던用例の 43.7%が「人間名詞」であるとしている．また「하던」は「했던」にくらべ，「時間名詞」が多いとし，単語としては，날（日），때（時），（時頃），해（年）が現れたと述べている．さらに，被修飾名詞のみならず，それを修飾する用言にも注目し，「時間名詞」を修飾する用言には되다（なる）が 5 例あり，すべて「되던 해」（なった年），「되던 그해」（なったその年）のような結合であったと述べている．노마히데키[野間秀樹](1994)はもっとも早くから，連体形の研究において被修飾名詞に着目した研究である．被修飾名詞に留まらず，それらを修飾する用言の種類，連体形と被修飾名詞の関係といった連体形の研究において考えるべきことを多く取り上げ，要素間の相関関係にも言及している．

次に中島仁(2012:293)は，先行研究における各連体形の被修飾名詞の分類結果を次の表のように示している．노마히데키[野間秀樹](1994)は하던と했던，中島仁(2012:293)は한，中西恭子(2002)は하는，前野敬美(1997)は할についての調査を行っている：

表 2. 各連体形がとる被修飾語の分類（中島仁(2012:293)引用）

	하는		할		한		하던		했던	
人間名詞	148	13.7	40	7.6	146	13	181	38.4	84	15.2
場所名詞	140	12.9	25	4.8	45	4	27	5.7	15	2.7
具体名詞	114	10.5	30	5.7	247	22.1	54	11.5	26	4.7
事柄名詞	109	10.1	40	7.6	51	4.6	32	6.8	20	3.6
抽象名詞	113	10.4	94	18	105	9.4	36	7.6	49	8.9
不完全名詞	260	24	139	26.6	337	30.1	31	6.6	287	51.9
活動名詞	56	5.2	89	17	7	0.6	18	3.8	32	5.8
団体名詞	35	3.2	3	0.6	4	0.4	9	1.9	2	0.4
時間名詞	80	7.4	44	8.4	98	8.8	43	0.2	16	2.9
物質名詞	10	0.9	1	0.2	15	1.3	1	0	3	0.5
位置名詞	15	1.4	4	0.8	17	1.5	0	0.4	0	0
その他	1	0.1	1	0.2	3	0.3	2	0	5	0.9
性質名詞	0	0	13	2.5	2	0.2	0	1.7	0	0
動物名詞	0	0	0	0	23	2.1	8	0.8	3	0.5
数量名詞	0	0	0	0	0	0	4	5.3	1	0.2
人称代名詞	0	0	0	0	20	1.8	25	0	10	1.8
なし	0	0	0	0	0	0	0		0	0
合計	1084		523		1120		471		553	

※左の例は用例数，右の例は各連体形の用例総数に対する割合(%).

上の表によると，하는においてもっとも多い被修飾名詞は「人間名詞」であり，한は「具体名詞」，할は「抽象名詞」と「活動名詞」，하던は「人間名詞」である．しかし，それぞれの研究の言語資料や対象とする用言の種類が異なる点，そして「抽象名詞」なら，いかなる抽象名詞が多いのかのような，特定の連体形と高い頻度で共起する名詞の具体的な様相については明らかにされていない．

前野敬美(1997)は할の意味・用法を明らかにするために，할をとる用言や被修飾名詞の種類，および副詞類など，語彙的・統辞論的諸条件を分析した．そして，하는や한などの形式と할を対照・分析し，「할は抽象名詞・内容という関係をきわめてとりやすい」と述べている．しかしそれぞれの要素が別々に取り上げられている傾向があり，被修飾名詞がいかなる用言といかなる関係で現れるのか，そして할の意味とはいかなる関係を持つのかについては十分に論じられているとは言い難い．この研究も他の研究と同様，「抽象名詞」の中でもいかなる「抽象名詞」が多いのかなど，被修飾名詞の具体的な姿についての記述は見られない．

一方，中西恭子(2002:12)は，前野敬美(1997:5-6)が「할が修飾する名詞に抽象名詞が圧倒的に多い」としたことに対し，「할の場合であっても「内の関係」ではわずか 6%にすぎず，할における「抽象名詞」の出現は著しく「外の関係」に偏っていることがわかる」と述べている．中西恭子(2002:12)は，連体形の研究において，各々の連体形がいかなる被修飾名詞と現れるかを調査するに留まらず，それらの被修飾名詞が連体形といかなる構造で現れるのかといった問題についても言及している．しかし，例えば「抽象名詞」が多いなら，いかなる種類の「抽象名詞」が多いのか，さらに，同じ範疇に属する名詞の中でも動詞の連体形との共起においては独自の振る舞いをする名詞はないのかなどに関する言及は見られない．

村田寛(2000)は「할がとる被修飾名詞で特徴的なことは抽象名詞の割合が高いことで，＜할＞の用例の約 42.3%を占める」と述べている．さらに，抽象名詞の次に頻度が高かったのは活動名詞で 15.5%であった」とし，「抽象名詞と活動名詞を合わせると，할の被修飾名詞のほぼ 2 例に 1 例は抽象的な概念を表す名詞ということになる」と述べている．さらに，할が「意志」を表す場合には主体の活動を表す名詞が多く，할が「当為」を表す場合には抽象的な名詞が多いと述べており，被修飾名詞の種類と할が表す意味との関連性についても注目している．しかし主体の活動を表す名詞の中でも，どのような名詞が할とよく共起するのかについては具体的な言及が見られない．例えば，被修飾名詞が생각（考え）であれば，「갈 생각이 없다」（行くつもりはない）のような例で，할が「意志」を表す．それに対し，被修飾名詞が연습（練習）であれば，「오늘 할 연습을 다했다」（今日するべき練習はすべて終わった）のような例で，할は「当為」を表す．

また，村田寛(2000)では할が「推量」を表す場合について，「主に할を取る用言が「하고 있다」や「해 있다」を取っていたり，用言が状態的なものだと事柄を推量して述べるようである」と述べる一方で，次のような用例を挙げ，被修飾体言によっては推量の意味にならない場合があると指摘している：

(22) 아, 지금 나는 이러고 있을 시간이 없습니다.
あっ，今私はこうしている時間がありません．

(23) 둘째 가능성은 놈이 종교계 또는 의학계 쪽의 직업을 가지고 있을 가능성이 있습니다.
2 番目の可能性はやつが宗教界または医学界のほうの職業を持っている可能性があります．

村田寛(2000)では，(22)は「可能」，(23)は「可能性」の意味を表しているとし，「このように＜할＞はそれが現れる文脈によってニュアンスが変わってくる」と述べられている．しかし，(22)の「이러고 있을」（こうしている）が推量にならないのは，被修飾名詞のみの問題ではないように思われる．例えば，「오후 2 시면 졸고 있을 시간이다（午後の 2 時なら，居眠りしている時間である）」のような例では，用言が「하고 있다」で，被

修飾名詞が시간（時間）であっても，할は「推量」を表す．従って，(22)のような例では할の表す意味が被修飾名詞，할をとる用言のみならず，上位節の述語などによって決められると考えられる．

以上で取り上げた先行研究をまとめると，次の通りである：

一連の用言の連体形の研究は，実例の分析を通じ，用言の種類，被修飾名詞の種類などの統辞論的な条件について分析を行っている．しかし特定の連体形と高い頻度で共起する名詞は「抽象名詞」であるとの記述に留まっており，それ以上の議論の展開は見られない．

こうした現状の中で，本稿は動詞の連体形による連体修飾構造が実際にいかなる様相を見せるのか，そして連体修飾構造を構成する諸要素は連体形の意味といかに関わっているのかという問いに全面的に取り組む，実証的かつ包括的な研究を目指す．

1.3. 研究の対象と方法

1.3.1. 研究の対象と考察の範囲

本稿で対象とする動詞の連体形は，하는，한，할である．하던については，基準時点が하는，한，할とは異なる様相が見られ，今回は除外した．하는，한，할の「時」は上位節の「時」を基準とする相対時制である場合が多いのに対し，하던は「発話時」を基準とする場合が多く，区別して扱う必要がある．

動詞は먹다（食べる），보다（見る）のような単一動詞のみならず，공부하다（勉強する），연결되다（繋がる）のような派生動詞も対象とする．補助動詞は主な研究対象ではないが，必要に応じて言及することもある．

存在詞，形容詞，指定詞に関しては，連体形語尾の結合の仕方が動詞の場合と形式の上でも異なるため，動詞とは区別して扱うのが妥当であると考える．

次のような形は，機能や意味の上で，먹는（食べる），가는（行く）のような，動詞と連体形語尾が純粋に結合したものとは異なるため，対象から除外した：

간다는（行くという），가려는（行こうとする）のような，連体形語尾の前に他の接辞がついているもの

なお，次のような形は計量的な作業には含まれるが，用例の分析においては区別して扱うことにする：

① 「집으로 돌아가 아내를 기다릴까 하는 생각이 들었다」（家に帰って，妻を待とうかという気になった）の「하는」のように，「～という」の「いう」に相当する하는
② 「해야 되는」（しなければならない）のような動詞の分析的な形[18] が連体形として現れているもの

被修飾名詞の場合は，完全名詞（自立名詞）[19]を対象とする．ただし，今回言語資料から抽出した用例には，「하는 법이다（…するものである）」「하는 바람에（…する拍子に）」における법，바람のように，被修飾名詞が形式名詞化している例も含まれている．

---

18) 菅野裕臣他(1988:1018)は一単語内の色々な文法的な形を総合的な形と呼び，補助的な単語を含む 2 単語以上からなる文法的な形を分析的な形と呼んでいる．

19) 菅野裕臣他(1988:1017)によると，名詞のうち自立的に用いることが出来，多くの体言語尾（およびとりたて語尾）や指定詞を取りうるものを「完全名詞」と呼ぶ．本研究では固有名詞は除く．

動詞の連体修飾構造の分析に際しては，動詞を述語とする連体節と被修飾名詞，それを含む上位節までをその考察の範囲とする：

＜動詞の連体修飾構造の考察範囲＞

운동장에서 노는 아이들을 본다.

運動場で遊んでいる子供たちを見る.

{[V1-는] N(助詞) V2-ㄴ다}

連体節　被修飾名詞　上位節の述語

なお，「지나가는 말로」（ただ軽い気持ちで（lit. 通り過ぎる言葉で）），「굳은 약속」（硬い約束（lit. 固まった約束））の지나가는（通り過ぎる），굳은（固まった）のような，節とは言えない連体修飾句に相当するものも一応調査対象に含めることにする．[20]

1.3.2. 研究方法と言語資料

本稿では하는，한，할，それぞれの連体形が成す連体修飾構造の語彙的・文法的特徴を分析・記述するために，連体形をとる動詞およびそれに先行する要素，被修飾名詞，連体節と被修飾名詞の関係，そして上位節の動詞の種類に注目し，考察を行う．中でも連体修飾構造の中心でありながらも，従来の研究では，比較的周辺的な要素として扱われてきた被修飾名詞に重点をおいて考察を行うことにする．

言語事実の観察の際しては，ある被修飾名詞が特定の動詞の連体形と共起する，しないといった＜+－＞式の分類方法をとらず，ある被修飾名詞が各々の連体形とどの位の頻度で共起するのかに注目する．動詞についても同様であり，いかなる動詞が各々の連体形をどの位の頻度でとるのかに注目する．理論的にはあらゆる名詞が各々の動詞の連体形と共起しうるわけであるが，実際の使用において，名詞はいかなる種類の動詞連体形と，どの位の程度で共起するのだろうか．このようなことを明らかにするために，実際の言語資料から用例を抽出し，それを計量的に分析・分類する方法を用いる．被修飾名詞の動詞の連体形との共起様相の把握及びそれによる語彙の分類は，語彙項目に関する具体的かつ実質的な情報が必要な自然言語の処理や辞書の編纂にも有効な資料となりうる．

本稿で用いるコーパスは，韓国の文化観光部が 2007 年に公開した「21 세기 세종계획 균형말뭉치」の「형태분석말뭉치」（形態分析コーパス）（約 1000 万文節）である．このコーパスは written（文語）と spoken（口語）で構成されており，written（文語）のジャンルの配分は次の通りである：

20）注 30 参照.

表 3. written（文語）のジャンル分布

範疇	資料の量（文節）	比率
想像的テクスト	2,194,406	21.7%
体験的記述	754,000	7.4%
報道・解説	1,625,713	16.0%
雑誌	1,012,017	10.0%
情報	4,544,227	44.9%
合計	10,130,363	100.0%

上の表によると，written（文語）には想像的テクストの割合が 21.7%と，非想像的なテクストより低いことがわかる．

次に spoken（口語）のジャンル配分は次の通りである：

表 4. spoken（口語）のジャンル分布

範疇	資料の量（文節）	比率
演説・講義	246,117	30.5%
即興的独白	123,111	15.3%
討論・会議	39,675	4.9%
放送劇・映画	13,559	1.7%
合計	805,646	100.0%

spoken（口語）はコーパスの全体に占める割合が 8%であり，written（文語）に比べ非常に低い．テクストの種類ごとに，研究結果が異なる可能性があることから，今後は spoken（口語）の用例をより多く収集し，written（文語）と spoken（口語）のそれぞれについて，あるいは，テクストの種類ごとに分析が行われる必要がある．名詞と動詞の連体形との共起頻度について言えば，例えば，「後」を表す名詞のうち，written（文語）では뒤（後）がもっとも高い頻度で現われたのに対し，spoken（口語）では다음（後）がもっとも高い頻度で現われた．[21] 本稿は資料的な限界もあり，今回は全体から用例を抽出・分析をし，テクストの種類による特徴が見られる名詞については，必要な箇所で言及するに留めることにする．

本稿では上に示したコーパスから，完全名詞を修飾する하는，한，할の用例を抽出した．抽出した用例は単純動詞（simple verb）の하는 84,687 例(40.9%)，한 91,591 例(44.2%)，할 30,826 例(14.9%)，総 207,104 例と，派生動詞(derivative verb)の하는 33,918 例(42.7%)，한 32,019 例(40.3%)，할 13,539 例(17.0%)，総 79,476 例で，合計 286,580 例である．抽出

21) spoken（口語）では，다음（後）の他に말（言葉，話），애（子供），얘기（話），부분（部分）などが連体形との共起頻度において上位を占めている：

난 얘처럼 폼잡구 치는 애 첨 봤어. ＜5CT_0023＞
私はこの子のように格好つけて打つ子ははじめて見た.
그니까 그~ 남성 중심적인:: 세계관이라고 이렇<phon>이릏</phon>게 비판 받는 부분도 있잖아. ＜6CT_0022＞
その～男性中心的な世界観だと，こうやって非難を受ける部分もあるじゃない.

した用例には，「내가 사랑하는 나라와 민족」（私が愛する国と民族），「내가 좋아하는 친구의 집」（私の好きな友達の家），「우리가 중요시 하는 사랑, 평화…」（我々が重視する愛，平和…）のように，被修飾名詞が単一の名詞ではない場合や被修飾名詞がない場合も含まれているが，これらの用例は考察の対象としていない．

引用の例文は，例文末尾に出典を示す．引用した用例は“＜…＞”の記号を用いて部分的に省略する場合もある．出典のない用例は作例である．先行研究について述べる中で，先行研究の用例を再引用する際には，出典は省略する．

特別な言及がない限り，動詞や名詞の語彙的意味に関する記述は국립국어연구원(1999)『표준국어대사전』に拠るものとする．動詞の例を挙げる際には，必要に応じ，目的語または補語とともに句単位で示すことにする．

하는，한，할連体修飾構造において共通して分析する項目は，①連体形をとる動詞とそれに先行する要素の性格，②被修飾名詞の分布，③連体節と被修飾名詞の関係の 3 つである．そのほか，上位節の述語の種類や形式，共起する副詞，連体形をとる動作の主体など，様々な問題を分析しなければならないものの，議論の出発点として，本稿では하는，한については①～③を中心に述べ，할については①～③に加え，上位節の述語についても考察することにする．[22)]

1.4. 本稿の構成

本研究はこれまで述べてきたような問題意識を，次のような順序で展開してゆくことにする．

第 2 章では，言語資料の調査に基づき，いかなる動詞が連体形をとりやすいのか，そしていかなる名詞が動詞の連体形の被修飾名詞になりやすいのかについて調査・分析を行う．言語資料に基づき，本稿における動詞分類と名詞分類を行う．そして連体節と被修飾名詞の関係についても本稿の分類基準を示す．

第 3 章では，動詞の連体形のうち，하는について，하는と被修飾名詞の関係，하는をとる動詞とそれに先行する要素，하는と高い頻度で共起する被修飾名詞など，構造的特徴について分析を行う．そして하는の構造的特徴が하는の表す意味といかに関わっているのかについても考察を行うことにする．

第 4 章では，한を対象に，하는について行った分析と同様な分析を行う．

第 5 章では，할を対象に，하는について行った分析と同様な分析を行う．ただし，할については上位節の用言の種類，および否定表現との共起にも注目する．

最後に，第 6 章の結論では，第 2 章から第 5 章での考察を踏まえ，動詞の連体修飾構造についての考察から明らかになったことをまとめ，今後の課題と展望について述べる．

22）前野敬美(1997:10)は「上位節の用言が否定形であるか，あるいは否定の意味をもつ場合，할は「可能性」を表していることが多い」と述べている．村田寛(2000:94)にも할が否定的な表現に繋がりやすいという指摘が見られる．

第2章 動詞による連体修飾構造の特徴

本章では，하는，한，할それぞれと高い頻度で現れる被修飾名詞について考察を行う前に，言語資料を基に，いかなる動詞が連体形をとりやすいのか，そしていかなる名詞が動詞の連体形の被修飾名詞になりやすいのかについて調査を行うことにする．そして連体節と被修飾名詞がいかなる関係で現れるのかについても考察する．このような作業は動詞連体修飾構造の全体像を把握する上で重要である．

2.1. 連体形をとる頻度の高い動詞

理論的には，あらゆる動詞が連体形をとりうるわけであるが，実際にいかなる動詞が連体形をとりやすいのかについては，殆ど明らかになっていない．ここでは，言語資料を用いて，いかなる動詞が連体形をとりやすいのかについて考察する．言語資料において連体形をとっている動詞（単純動詞）は総 3,135 種であった．連体形をとる頻度の高い上位 10 位までの動詞を示すと，次の通りである．動詞の横の数字は連体形をとる頻度である：

> 하다（する）15,057／대하다（対する）13,681／되다（なる）6,300／보다（見る）3,937／위하다（ためだ）3,903／받다（もらう）3,171／가다（行く）2,894／지나다（過ぎ去る）2,621／관하다（関する）2,194／나오다（出る）2,189

上の動詞を見ると，動詞のうち，하다（する），되다（なる），보다（見る），받다（もらう）のような使用頻度の高い動詞が連体形をとる頻度でも上位を占めていることがわかる．その他に，主に「-에 대한」（…に対する），「-에 관한」（…に関する）のような後置詞として用いられる動詞が上位にあることがわかる．[23)]

上の表の調査結果を韓国の国立国語院が調査した「現代国語使用頻度調査」における動詞全体の計量と比較してみると，それらの動詞の殆どが「現代国語使用頻度調査」における動詞全体の計量でも上位を占めていることがわかる．しかし上の表において 10 位の관하다（関する），29 位の남다（残る）は「現代国語使用頻度調査」では 50 位にも入っておらず，連体形をとる頻度が相対的に高い動詞として取り上げることができる．

一方，韓国の国立国語院が調査した「現代国語使用頻度調査」における動詞全体の計量で上位 50 位内にランクされている動詞のうち，그러다（そうする），의하다（よる），앉다（座る），서다（立つ）は本稿で調査した連体形をとる頻度では 500 位にも入っていなかった．言語資料によると，그러다（そうする）は그래도（そうしても），그러다가（そうしながら），의하다（よる）は의해（よって），앉다（座る）は앉아（座って）のように，接続形として用いられる傾向が見られた．このことは，動詞はそれが結合する語尾に偏りを見せることを示唆するもので，今後動詞とそれが結合する語尾の種類についても注目していく必要がある．

もともと使用頻度の高い動詞が連体形をとる頻度でも上位にある可能性があることから，次は言語資料における総頻度のうち，連体形をとる頻度の分布を示すと，次の通りである：

---

23) 菅野裕臣他(1988:1017)では，대한，관한を「後置詞」として扱っている．菅野裕臣他(1988:1009)は「後置詞」について「体言や用言の直後に付く付属的な単語．副詞的なものと冠形詞的なものとがあり，前者には一部のとりたて語尾が付き得る」と定義している．

表 5．動詞の連体形をとる頻度別分布

連体形をとる頻度	動詞の数	動詞の例
60%以上 70%未満	2 種	비다（空く），적히다（書かれる）
50%以上 60%未満	6 種	어리다（漂う），우거지다（茂る）
40%以上 50%未満	15 種	이름나다（名が知られる），늙다（老ける），일그러지다（歪む）
30%以上 40%未満	40 種	썩다（腐る），타오르다（燃え立つ），덮이다（覆われる）
20%以上 30%未満	161 種	질리다（あきあきする），결정짓다（決め付ける），깔리다（しかれる）
10%以上 20%未満	538 種	키우다（育てる），속하다（属する），사용되다（使用される）
0%以上 10%未満	326 種	시키다（させる），드리다（差し上げる），벗어나다（抜ける）

上の表によると，10%～20%の割合で連体形をとる動詞がもっとも多く，動詞全体の 49.4%を占めている．その次が 0%～10%の割合で連体形をとる動詞であり，両者を合わせると，全体の 79.3%を占める．要するに，動詞の約 80%が 20%未満の頻度で連体形をとって現れるということである．そうすると，60%以上の頻度で連体形をとる動詞は，非常に特殊であると言える．

一方，連体形をとる頻度が非常に低い動詞には次のようなものがあった：

> 덩달다（尻馬に乗る），번갈다（順番を変える），비집다（こじ開ける），서슴다（躊躇する），통틀다（ひっくるめる），데리다（引き連れる），더불다（一緒にする），어떡하다（どのようにする），비하다（比べる）など

上の動詞のうち，덩달다（尻馬に乗る），더불다（一緒にする），번갈다（順番を変える）は接続形でしか使われない．このように，動詞は特定の形式に偏って現われる傾向がある．

次に，言語資料における総頻度 100 回以上の動詞のうち，総頻度に対する連体形をとる頻度が高い上位 50 位までの動詞を示すと，次の通りである：

表 6. 言語資料における連体形をとる頻度の高い動詞

順位	動詞	連体形をとる頻度		総頻度	順位	動詞	連体形をとる頻度		総頻度
		頻度	比率				頻度	比率	
1	비다（空く）	754	69.4%	1086	26	묵다（泊まる）	177	39.1%	453
2	적히다（書かれる）	116	63.7%	182	27	덮이다（覆われる）	74	39.0%	190
3	어리다（涙ぐむ）	204	57.6%	354	28	시집오다（嫁入りする）	42	38.2%	110
4	우거지다（茂る）	61	57.6%	106	29	흐트러지다（散る）	55	37.9%	145
5	끓다（沸く）	127	55.0%	231	30	놓이다（置かれる）	364	37.3%	976
6	지나오다（過ぎって来る）	53	51.0%	104	31	소문나다（うわさになる）	49	36.8%	133
7	잠자다（寝る）	127	50.4%	252	32	벌거벗다（裸になる）	70	36.7%	191
8	담기다（盛られる）	302	50.2%	602	33	얽히다（縛られる）	117	36.5%	321
9	이름나다（名が知られる）	52	49.5%	105	34	빛나다（光る）	210	36.4%	577
10	늙다（老ける）	430	45.1%	953	35	딸리다（付く）	69	36.3%	190
11	일그러지다（ゆがむ）	70	44.0%	159	36	맺히다（結ばれる）	80	36.2%	221
12	찌들다（古くなって汚れる）	50	43.5%	115	37	대하다（対する）	13084	35.5%	36814
13	마르다（乾く）	370	43.2%	856	38	잘리다（切れる）	47	35.3%	133
14	병들다（病む）	117	43.2%	271	39	떠나오다（離れて来る）	45	35.2%	128
15	식다（さめる）	73	42.2%	173	40	굶주리다（飢える）	59	35.1%	168
16	관하다（関する）	2194	42.1%	5215	41	뚫리다（空く）	66	35.1%	188
17	주어지다（与えられる）	390	41.4%	943	42	삶다（煮る）	79	33.9%	233
18	들뜨다（そわつく）	88	41.3%	213	43	고이다（たまる）	48	33.8%	142
19	타고나다（生まれつく）	120	41.2%	291	44	늘어서다（ならぶ）	57	33.7%	169
20	섞이다（混ざる）	223	41.1%	543	45	반짝이다（きらめく）	80	33.1%	242
21	젖다（ぬれる）	293	41.0%	714	46	얼어붙다（凍りつく）	71	32.9%	216
22	닫히다（閉まる）	93	40.6%	229	47	몰아치다（吹き付ける）	34	32.7%	104
23	서리다（くもる）	45	40.2%	112	48	시집가다（嫁ぐ）	56	32.6%	172
24	썩다（腐る）	156	39.9%	391	49	둘러싸다（囲む）	299	32.5%	919
25	타오르다（燃え立つ）	66	39.5%	167	50	디디다（踏む）	38	32.5%	117

まず，上の表の動詞の形態論的特徴に注目すると，적히다（書かれる），담기다（盛られる），섞이다（混ざる），닫히다（閉まる）など，-이-，-히-，-리-，-기-といったヴォ

イス接尾辞を持つ受身動詞[24]が上位にあることが特徴的である．受身動詞の中でも빨리다（吸われる）は，連体形をとる頻度がわずか 1%に過ぎず，受動動詞のすべてが連体形をとりやすいとはいえない．受動動詞は普通「해 있다」をとるのに対し，빨리다（吸われる）は「해 있다」をとりえない．従って「해 있다」をとるという動詞の特徴が連体形のとりやすさとなんらかの関係がある可能性がある．

次に，上の表の動詞について動詞の自他の観点から言えば，50 個の動詞中 45 個，約 90%の動詞が自動詞である．自動詞の中でも，次のような特徴を持つ動詞が連体形をとる頻度が高い：

「状態変化」を表す動詞
이름나다（名が知られる），타고나다（生まれつく），벌거벗다（裸になる），찌들다（古くなって汚れる），늙다（年をとる），병들다（病む），담기다（盛られる），일그러지다（歪む），など

「関係」を表す動詞
관하다（関する），대하다（対する）など

「自然現象」を表す動詞
끓다（沸く），빛나다（光る），번쩍이다（光る）など

しかし上の 3 つの種類に該当する動詞の中でも連体形をとる頻度が低い動詞がある．例えば，줄어들다（次第に減る）と줄다（減る）はいずれも「状態変化」を表す動詞であるにも関わらず，連体形をとる頻度はそれぞれ 33.6%，3.1%と異なる．類義語でありながらも，それぞれがとる形式には偏りを見せることがあり，連体形をとる様相についてはいろいろな側面からの考察が必要である．

2.2. 動詞の連体形との共起頻度が高い名詞

ここでは，動詞の連体形と高い頻度で共起する被修飾名詞にはいかなるものがあるのかについて考察する．まず，動詞の連体形との共起頻度が高い上位 10 位までの名詞は，次の通りである：

때（時）18,616／사람（人）10, 312／일（仕事）9, 857／경우（場合）5, 518／뒤（後）4, 873／곳（所）3,420／말（言葉）3, 267／후（後）2,800／길（道）2, 608／소리（音）／2, 311

때（時），뒤（後），후（後）のように，連体形とともに分析的な形として用いられる名詞が連体形との共起頻度において上位を占めていることが見て取れる．そして名詞の中でも，사람（人），생각（考え），모습（姿），시간（時間）のように，一般的に多く使われる名詞が上位にランクされている．これは，名詞を限定し，より具体的な事柄を表すという連体形の機能と関連すると思われる．

言語資料における総頻度の高い名詞が，動詞の連体形との共起頻度でも上位を占める可能性があるため，次は，言語資料において 100 回以上出現した名詞を対象に，名詞の総頻度に対する動詞の連体形との共起頻度を示す：

---

24) 菅野裕臣他(1988:1033)によると,「自動詞のうち動作の主体が-에，-에게，-에게서，-로부터/-으로부터，-에 의하여等で表わし得るもの，可能の意味を表わし得るもの」を「受身形」と呼ぶ.

表 7. 動詞の連体形との共起頻度が高い名詞（相対頻度）

順位	名詞	動詞の連体形との共起頻度	比率	総頻度	順位	名詞	動詞の連体形との共起頻度	比率	総頻度
1	시늉（ふり）	153	66.8%	229	26	버릇（癖）	171	31.1%	550
2	예정（予定）	1225	59.4%	2061	27	길（道）	2608	30.2%	8628
3	확률（確率）	151	55.1%	274	28	습성(習性)	34	30.4%	112
4	방도（方途）	57	50.4%	113	29	일（仕事）	9857	29.1%	33903
5	길목（道の要所）	74	44.6%	166	30	순간（瞬間）	1163	29.3%	3969
6	기색（顔色）	149	44.0%	339	31	한（限り）	548	29.4%	1864
7	때（時）	18616	42.6%	43663	32	조짐（兆候）	86	29.2%	295
8	뒤（後）	4873	40.1%	12158	33	태세（態勢）	51	29.0%	176
9	형국（形勢）	43	38.7%	111	34	원동력（原動力）	45	29.4%	153
10	지름길（近道）	39	38.6%	101	35	의구심（ぎくの念）	39	29.1%	134
11	엄두（思い）	81	37.5%	216	36	꼴（姿）	262	28.1%	932
12	경향（傾向）	509	36.2%	1407	37	직후（直後）	183	27.6%	663
13	곳（所）	3420	34.9%	9806	38	도리（道理）	161	28.0%	576
14	까닭（わけ）	581	34.8%	1668	39	이점（利点）	41	28.3%	145
15	기미（けはい）	85	35.4%	240	40	권리（権利）	330	26.7%	1235
16	공로（功労）	35	34.7%	101	41	대목（題目）	218	26.8%	812
17	방안（法案）	603	33.6%	1796	42	작정（つもり）	191	27.2%	702
18	셈（つもり）	78	33.8%	231	43	모양（模様）	1049	26.4%	3967
19	경우（場合）	5518	33.1%	16675	44	틈（すき）	269	26.3%	1022
20	후（後）	2800	32.6%	8581	45	도중（途中）	118	25.9%	455
21	소지（可能性）	104	33.2%	313	46	습속（習俗）	34	25.8%	132
22	방편（方便）	55	32.7%	168	47	장면（場面）	465	25.0%	1859
23	기회（機会）	729	32.1%	2271	48	혐의（嫌疑）	412	24.8%	1659
24	반면（反面）	601	32.1%	1871	49	광경（光景）	100	24.9%	401
25	방침（方針）	497	32.5%	1530	50	처사（仕打ち）	55	25.1%	219

上の表を見ると，動詞の連体形との相対頻度が高い名詞には，名詞句補文の修飾を受けるいわゆる「補文名詞」が多いことがわかる．

次に名詞の意味に注目すると，시늉（ふり）のように「行為」を表す名詞や，방법（方法），과정（過程）のように，行為や事態を間接的に指示する名詞が，動詞の連体形と高い頻度で現れている．動詞の連体形との共起頻度がもっとも高い名詞は시늉（ふり）であり，コーパスにおける総頻度 229 回に対し，動詞の連体形と共起する頻度が 153 回，66.8%を占めている．続く예정（予定），확률（確率），방도（方途）もコーパスにおける総頻度のうち動詞の連体形をとる頻度がそれぞれ 59.4%，55.1%，50.4%と高いことが見て取れる．コーパスにおける総頻度が 200～300 回の名詞を対象に，動詞の連体形との共起頻度を調査した結果の一部を図示すると，次の通りである：

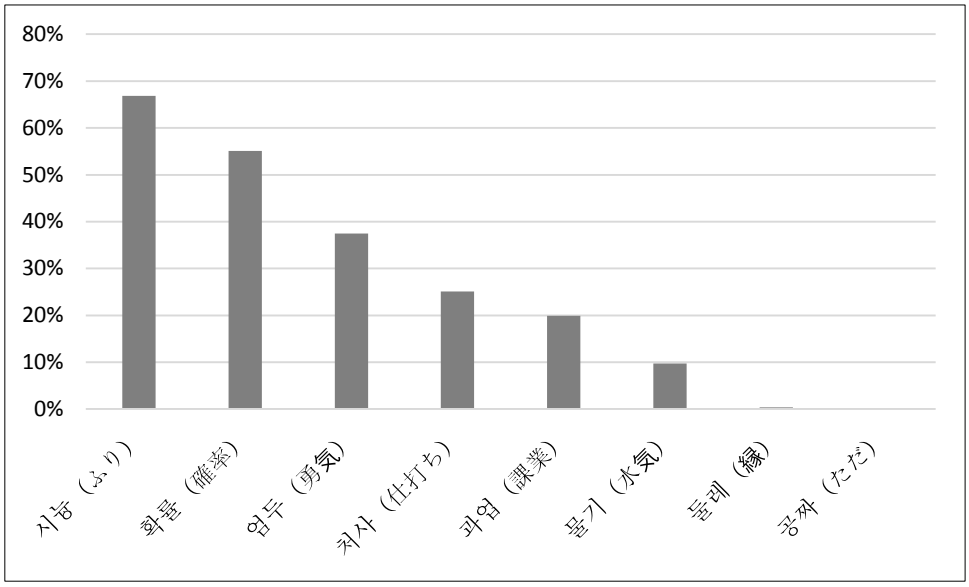

図 1. 名詞別動詞の連体形との共起頻度

上の図を見ると，시늉（ふり）が動詞の連体形ともっとも高い頻度で現われている．そして확률（確率），엄두（勇気），처사（仕打ち），과업（課業）が続く．물기（水気）は約10%の頻度で動詞の連体形と現われている．それに対し，둘레（縁）は 0.1%，공짜（ただ）は動詞の連体形と現われていない．

コーパスにおける総頻度 100 回以上の名詞 7,686 個を対象に動詞の連体形との共起頻度を調査した結果，名詞の 95.3%が動詞の連体形と 10%未満の頻度で共起した．この調査結果から考えると，시늉（ふり），확률（確率）などは動詞の連体形との共起頻度が非常に高い名詞であると言える．

시늉（ふり）は「어떤 모양이나 움직임을 흉내 내어 꾸미는 짓」（ある模様や動きを真似すること」という意を表し，具体的にどのような行為を真似するのかという情報が必要となる名詞である．「行為」を表す名詞の中でも，구경（見物），시작（初め）などは，それがどのような行為や現象と関連するのかという情報が必要とならず，動詞の連体形との共起頻度はそれぞれ 0.4%，0.1%と非常に低い．

さらに，시늉（ふり）のように動詞の連体形との共起頻度が高い名詞は，修飾語なしには文の成分として用いられにくい特性を持ち，不完全名詞的な性格が濃い．

一方，コーパスの調査の結果，動詞の連体形との共起頻度が非常に低い名詞には次のような名詞があった：

(24) 動詞の連体形との共起頻度が非常に低い名詞
- a. 밖（外），밑（底），안（中）など
- b. 공짜（ただ），마찬가지（同じこと），처음（始め）など
- c. 다양（多様），동일（同一）など
- d. 완성（完成），구경（見物），결합（結合）など
- e. 이하（以下），이전（以前），전（前）など
- f. 구체（具体），적극（積極），객관（客観）など
- g. 만일（万一），나중（後），당장（すぐ）など

上の名詞のうち a の「位置名詞」は，前に名詞が来て，その名詞を場所化することが多い．완성（完成），구경（見物），다양（多様），동일（同一）などのいわゆる「叙述性名

詞」は，修飾語をとらず，主に-하다がついて述語として機能する．[25] 마찬가지（同じこと），처음（始め）は로（で）または-이다（…だ）がついて副詞語や述語として用いられる．

以上の 2.1 と 2.2 の調査結果から，動詞の中では，状態変化を表す動詞が連体形をとりやすいことがわかった．そして名詞の中では，시늉（ふり），방도（方途），기색（顔色）のように，それらが示す事柄がいかなる行為と関連するのか，という情報を必要とする名詞や，「時間的・論理的前後関係」を表す名詞が連体形をとりやすいことが確認できた．次の 2.3 では，動詞の連体節と被修飾名詞がいかなる関係で現れるのかについて考察することにする．

2.3. 連体節と被修飾名詞の関係

先行研究でも取り上げた通り，韓国語の連体節と被修飾名詞の係わり方には，大まかに言って 2 種類が存在する．李翊燮・任洪彬(1983:270-285)によれば，(25)a のような構造は「関係化」，(25)b のような構造は「名詞句補文化」に相当する．両者は被修飾名詞が連体節の一成分になるかどうかによって区別される：

(25) a. 선생님이 찍은 사진 先生が撮った写真

→선생님이 사진을 찍었다. 先生が写真を撮った.

b. 선생님과 아이들이 공을 차는 사진 先生と子供たちがボールを蹴る写真
→선생님과 아이들이 공을 찬다. 사진
先生と子供たちがボールを蹴っている. 写真

(25)a の「사진」（写真）は「사진을 찍다」（写真をとる）のようになり，連体節内部の成分になる．しかし(25)b の「사진」（写真）は連体節の内部成分にならない．

寺村秀夫(1980)によると，韓国語の「関係化」に相当する(26)a のような構造は「内の関係」，韓国語の「名詞句補文化」に相当する(26)b のような構造は「外の関係」である：

(26) a . サンマを焼く男　…「内の関係」
b. サンマを焼く匂い　…「外の関係」

本稿では，寺村秀夫(1980)に倣い，(25)a のような連体修飾構造を「内の関係」，(25)b のような構造を「外の関係」と呼ぶことにする．以下，整理しておく：

「内の関係」（付加的修飾）：被修飾名詞が連体節内部の一成分になるような構造（または，連体節の述語動詞と被修飾名詞との間に格関係が認められる場合）

「外の関係」（内容補充的修飾）：被修飾名詞が連体節内部の一成分にならないような構造（または，連体節の述語動詞と被修飾名詞との間に格関係が認められない場合）

---

25) 남기심・고영근(1985:72)では，입학（入学），독립（独立），합류（合流）のような名詞を「動作性」の意味が把握される名詞と見て，これらの名詞は-이다（…だ），아니다（…ではない）の前の位置で使われることはまれで，その殆どが하다（する）とともに動詞として機能すると述べている．

(なお,「-에 대한」（…に対する），「-에 관한」（…に関する）も「外の関係」として分類することにする）

実際の用例を考察すると，殆どの用例はこの 2 種類の構造のいずれかに該当するが，どちらにも分類しにくいものもある．例えば，「집을 나간 이유」（家を出た理由）は「(어떤)이유로 집을 나가다」（（ある）理由で家を出る）のように組み替えることができ，被修飾名詞に「로」（…で）をつければ，連体節の内部成分になりうる．この種の連体修飾については被修飾名詞が連体節の必須成分ではないと考え，本稿では「外の関係」と分類している．しかし「内の関係」「外の関係」の分類は再考の余地がある．[26]
次に，「内の関係」と「外の関係」の詳細について述べることにする．

2.3.1.「内の関係」

言語資料の調査したところ，「内の関係」には，大きく次のような種類があった．【】内は，被修飾名詞が連体節で示される動作・状態に対して，何を表しているかを示す：

(27)「内の関係」の種類

a. 타오르는 태양【誰/何が】
燃える太陽
b. 만든 작품【誰/何を】
作った作品
c. 음식을 담은 그릇【どこに】
食べ物を盛る皿
d. 마음을 나눌 친구【誰と】[27]
心を分け合う友達
e. 국물을 뜬 수저【何で】
スープを掬ったスプーン
f. 들어가는 입구【どこへ】
入っていく入り口
소리가 나는 곳【どこから】
音がする所
아이들이 노는 운동장【どこで】
子供たちが遊ぶ運動場
g. 수업이 마치는 시간【いつ】

---

26) 寺村秀夫(1980:263-264)は，日本語における「内の関係」「外の関係」という分類が必ずしもクリアカットなものではないとし，例えば，「出家した動機」「人が価値をはかる目盛り」「百万長者と結婚する方法」のような，主名詞に「デ」をつければ修飾部に入れられぬこともないものがあると述べている．そして「節による修飾は，細かく類型化しやすいようだけれども，接続詞を使っての文や句や語の連結に比べると，本質的には両者の意味関係は，それぞれの意味特徴を手がかりにしての聞き手の類推に任せられるという性質のものである」としている．

27) 被修飾名詞が連体節の述語に対して，「誰と」を表す例：

믿을 만한 사람 찾기가 어렵고 내 마음 내어놓고 함께 나눌 사람 없는 것이 외로움 아닙니까. ＜5CT_0033＞
信頼できる人が見つからず，自分の気持ちを包み隠さずに分かち合う人がいないというのが，孤独じゃないですか.

授業が終わる時間

h. 허리가 굽은 할머니【部分—全体】
腰が曲がったおばあさん

(27)h は連体節の主語を表す N1 が被修飾名詞の N2 の部分・属性である．「할머니는 허리가 굽었다」のようにも解釈でき，被修飾名詞할머니（おばあさん）を主題（topic）と見ることもできる.[28]

(27)の a～e では被修飾名詞が連体節内部の必須的な要素であり，連体節の述語動詞との結びつきが強い．それに対し，(27)の f～h では被修飾名詞が連体節内部の状況語となる要素であり，連体節の述語動詞との結びつきが相対的に弱い．

次に，上のそれぞれの種類別に被修飾名詞の種類について調査した結果，殆どの名詞が a, b の構造をとることがわかった．しかし，뒤（後），한편（一方），이유（理由），까닭（わけ）など，時間的・論理的前後関係を表す名詞は a と b のいずれの構造もとりにくい．

이유（理由），까닭（わけ）は「이유를 말해 봐」（理由を話してみて），「까닭이 밝혀졌다」（わけが明らかになった）のように，文の主語もしくは目的語として用いられるものの，「그가 말한 이유」（彼が話した理由），「밝혀진 까닭」（明らかになったわけ）のように，a や b の構造で現れる例は見られない．このように，連体修飾構造における連体節の述語動詞と被修飾名詞の関係は文の場合と異なる様相を呈することに注意しなければならない．

なお，(28)のように動詞を述語としたときに，名詞がその動詞と格関係を持たない例も，(27)のいずれかに解釈できれば，「内の関係」として分類することにする：

(28) a. 내가 묻는 질문에 대답해 봐.
私の質問に（lit. 私が聞く質問に）答えてみて
→*질문을 묻다（*質問を聞く）

b. 나는 그저 지나가는 말로 그에게 말했다.
私はただ軽い気持ちで（lit. 通り過ぎる言葉で）彼に言った.
→*말이 지나가다（*言葉が通り過ぎる）

(28)a の묻다（聞く）は「질문을 묻다」（質問を聞く）とはならない．질문（質問）の場合は「질문을 하다」（質問をする）のように使われるのが普通である．(28)b の지나가다（通り過ぎる）も「말이 지나가다」（言葉が通り過ぎる）とはならない．「지나가는 말」は「話のついでに軽い気持ちで」を表し，このときの지나가다は「사람이 지나가다」（人が通り過ぎる）の지나가다（通り過ぎる）とは意味が異なる．[29] このよう

---

28) 김선효(2002:130-131)は「가방이 좋은 철수」（かばんが良いチョルス）のような例において，철수(チョルス)が가방(かばん)の冠形格として実現されたのか，主格重出文の NP1 なのか明確ではないとし，‘head noun’が基底構造において topic になると考え，この種の連体節を「주제관계관형사절」（主題関係冠形詞節）と呼んでいる．

29) 남기심・고영근(1985)は「새빨간 거짓말」（lit. 真っ赤な嘘），「무거운 침묵」（lit. 重い沈黙）における새빨간（真っ赤な），무거운（重い）のような連体形を，連体節ではなく，連体句と見ている．김선효(2002:130-131)は「새빨간 거짓말」のような構成を「연어 구성」（連語構成）と呼び，「연어 구성」（連語構成）では，N が「연어핵」（連語の核）になるため，N の属性を表す用言を修飾語として持つと述べている． それに対し，「거짓말이 새빨갛다」（嘘が真っ赤である）が成立できないのは，述語の「새빨갛다」（真っ赤だ）の意味属性によって主語の語彙範疇が決められるためであると述べている．김선효(2002:130-131)は「새빨간 거짓말」（lit. 真っ赤な嘘）のような連体修飾節を「제약적 관계관형사절」（制

に，「内の関係」の例には，被修飾名詞が連体形をとっている動詞と格関係を結ばない場合もしばしば見られる．

この種の連体形の処理については議論の余地があるが，[30] 連体節の述語と主格の関係にある名詞句が連体節内に存在しないため，本稿ではこの種の連体修飾構造も条件つきで「内の関係」として分類することにする．

また，「内の関係」には被修飾名詞の意味が抽象的であるため，そのままでは連体節内の成分になりえない場合もある．次の例の금액（金額）と존재（存在）は，何らかの修飾語を付けないと，連体節内の成分になりえない：

(29) a. 받을 금액 もらう金額
→*금액을 받다. 金額をもらう.
→(정해진) 금액을 받다. （決められた）金額をもらう.

b. 나를 괴롭히는 존재 私を苦しめる存在
→*존재가 나를 괴롭힌다. 存在が私を苦しめる.
→(어떤) 존재가 나를 괴롭힌다.（ある）存在が私を苦しめている.

なお，被修飾名詞が連体節の内部の成分ではない例の中には，連体節の内部に被修飾名詞と格関係にあるはずの動詞を想定しうる，「短絡の構文」に相当する例が多く見られる．[31] 例えば，(30)の합친（合わせた）は「합쳐서 만든」（合わせて作った）に言い換えられ，被修飾名詞の개념（概念）は만들다（作る）と対格（를格）の関係にある．(31)の「염두에 둔」（念頭においた），(32)の저버린（捨てた），(33)の걸친（掛けた）はそれぞれ「염두에 두고 한」（念頭においてした），「저버리고 한」（捨ててした），「걸쳐서 한」（掛けてした）に言い換えうる：

(30) 우리나라에서는 박물관과 미술관이 구분되어 있지만 서양에서의 <박물관 Museum>은 두 가지를 합친 개념이다. ＜BTHO0371＞
わが国では博物館と美術館が区別されているが，西洋での＜博物館 Museum＞は 2 つを合わせた概念である.

(31) 정치를 염두에 둔 발언
政治を念頭においた発言

(32) 기본적인 양심마저 저버린 행동

約的関係冠形詞節）と呼び，「제약적 관계관형사절」（制約的関係冠形詞節）は連体節の動詞の形の変化ができず，連体形語尾の前に先語末語尾が来ることができないとしている．また，被修飾名詞と連体形をとる動詞は制限的であり，あらゆる名詞と動詞が結合するわけではないと述べている．

30) 남경완(2007)は形容詞の「굳은 활용형」（固定された活用形）のうち，「-ㄴ」と結合する連体形を対象に，それらの特徴と類型について考察し，それらをいかに処理するかについて述べている．남경완(2007:34-35)は「그는 자기 일 밖의 다른 일에는 관심이 없다.」（彼は自分のこと以外の他のことについては関心がない）における다른（他の）は「나이가 드니까 몸이 예전과 다르다」（年をとると，体の調子が以前と異なる）の다르다（異なる）と意味が異なるため，다른（他の）のような連体形は「冠形詞」と処理する可能性があると述べている．

31) 「短絡の構文」について中島仁(2012:300)は「主名詞と特定の格関係を結ぶはずの連体節の述語が欠落する現象のことである」と述べている．

基本的な良心まで捨てた行動

(33) 이 문제들은 서로 얽혀 있기 때문에 그 동안 몇 년간에 걸친 노력이 보여 주듯이 국부적인 해결책은 답이 될 수 없다. ＜BTAE0195＞
この問題は，お互いに絡み合っているので，その数年間に渡る努力が示しているように，局部的な解決策は答えにならない.

この種の連体修飾構造は，意味的に「内の関係」に近いものと考えられ，本稿では「内の関係」として分類した．韓国語での関係化の可能性は文法的な関係のみならず，意味的・語用論的な要素によって決定される場合も多く，議論の余地がある.

2.3.2. **「外の関係」**

本稿の言語資料の分析によると，「外の関係」は連体節と被修飾名詞の関係により，大きく 2 種類に分けることができる：

(34) 그가 회사를 나간 사실
彼が会社を辞めた事実

(35) a. 그가 회사를 나간 이유
彼が会社を辞めた理由
b. 그가 회사를 나간 뒤
彼が会社を辞めた後

(34)では「그가 회사를 나간」（彼が会社を辞めた）が사실（事実）の内容そのものを表す．既存の研究において，(34)のような連体節は「内容節」または「同格内容節」と呼ばれる．[32] この構造の被修飾名詞には，모습（様子），버릇（癖），상태（状態），시늉（ふり），작업（作業）などが来る．そしてこの構造をもっともとりやすいのは하는である．このような現象は行為を表す様々な名詞につき，その名詞の示す行為が具体的にどのような行為であるかを表すという하는の機能と関連すると考えられる．本稿では(34)のような構造を＜同一内容関係＞と呼ぶことにする.

＜同一内容関係＞の例：

(36) 이 문제를 해결하는 방안은 취득세율과 등록세율을 낮추는 방법밖에 없다. ＜BTAC0183＞
この問題を解決する方案は，取得税率と登録税率を下げる方法しかない.

(37) 우리가 어렸을 때는 가위바위보를 하기 전에 손을 이상하게 꼬아가지고 꼬아진 손과 손 사이를 들여다보는 습관이 있었다.＜BTEO0289＞
私たちが子供の頃は，じゃんけんをする前に，手を変な格好によじって，その手のすきまをのぞく習慣があった.

32) 김선효(2002:143-151)は(34)のような構造を「내용 명사구 보문」（内容名詞句補文），(35)a，b のような構造を「한정 명사구 보문」（限定名詞句補文）と呼んでいる．日本語でも韓国語の(34)，(35)と平行する構造が存在し，寺村秀夫(1982)では(34)のような構造は「普通の内容補完」，(35)a，b のような構造は「相対的内容補完」と呼ばれる.

それに対し，(35)では「그가 회사를 나간」（彼が会社を辞めた）が이유（理由），뒤（後）の内容そのものを表すわけではない．(35)a では「그가 회사를 나간」（彼が会社を辞めた）が이유（理由）と相対的な関係にある名詞の内容を表し，(35)b では，「그가 회사를 나간」（彼が会社を辞めた）は뒤（後）とともに接続節のように機能する．本稿では，(35)a，b のような連体修飾構造を＜状況的内容関係＞と呼ぶことにする．

「外の関係」においては，被修飾名詞の語彙的特徴が重要である．すなわち，＜同一内容関係＞では被修飾名詞が「行為」や「現象」を直接・間接的に表すという「事柄性」という意味特性を持っており，＜状況的内容関係＞では，被修飾名詞が「相対性」という意味特徴を持っている場合が多い．(35)a のような構造の被修飾名詞には，결과（結果），이유（理由）のような，いわゆる「相対性」を持つ名詞や방법（方法），과정（過程）などの行為や現象の状況を表すような名詞が来る．(35)b のような構造の被修飾名詞には，뒤（後），후（後），순간（瞬間），한편（一方）などの「時間的・論理的前後関係」を表す名詞が来る．

＜状況的内容関係＞の例：

(38) 사건을 조사한 결과, 범인은 피해자의 친구였다.
事件を調査した結果，犯人は被害者の友達であった．

(39) 수업이 끝난 뒤 우리는 모두 운동장에 모였다.
授業が終わった後，私たちは全員運動場に集まった．

なお，(35)a における連体節と被修飾名詞の間の意味関係は多様である．以下に整理しておく：

(40) A 類：原因（どうして）
사고가 일어난 원인（事故が起こった原因）
プロセス（どのように）
사고가 일어난 경위（事故が起こった経緯）（＝どのように事故が起こったか）

方法（どうやって）
문제를 해결하는 방법（問題を解決する方法）（＝どうやって問題を解決するか）

B 類：…するだけの
진실을 말할 용기（真実を言う勇気）（＝真実を言うだけの勇気）

C 類：…する時の，「…するときに出る／感じる」
창문 열리는 소리（窓を開ける音）（＝窓を開けるときに出る音）

D 類：結果
조사한 결과（調査した結果）
…した後の
방을 들른 흔적（部屋に寄った痕跡）（＝部屋に寄った後の痕跡）

E 類：…に対する
노인을 도와준 대가（老人を助けた代価）（老人を助けたことに対する対価）

上に挙げた 5 つの関係のうち，A 類～C 類は원인（原因），과정（過程），소리（音）など，被修飾名詞の指し示す事柄が連体節の表す事柄の状況を指し示すため，「内の関係」に

近い「外の関係」であると言える．それに対し，D 類と E 類は被修飾名詞が連体節の表す事柄の結果を表し，「内の関係」から遠い「外の関係」であると言える．さらに，上の 5 つの関係は特定の連体形の構造的特徴を表す．例えば，B 類は할，C 類は하는，D 類は한，E 類は한の構造として現われる傾向がある．そして A 類は하는，한，할のいずれの構造としても現われる．

2.4. 本稿における名詞分類

本稿では，主に名詞の語彙的意味及び動詞の連体形との共起様相に注目して，名詞の分類を行った．3 章から 5 章にわたって하는，한，할それぞれの構造に関する記述はこの分類に基づいて行うことにする．

大分類は次の通りである：

（A）実体：사람（人），나라（国），비（雨），자동차（車）など
（B）場所：장소（場所），공간（空間），방（部屋）など
（C）時間：시기（時期），시간（時間），날（日）など
（D）事柄：시늉（ふり），장면（場面），방법（方法）など
（E）状態：가난（貧しさ），상태（状態）など
（F）抽象：비중（比重），어휘（語彙），개념（概念）など

上の名詞のうち，＜実体＞＜場所＞＜時間＞＜抽象＞は連体節と主に「内の関係」で現われる．しかし，次のような名詞は「外の関係」としても現われる：

＜実体＞のうち，
「イメージ」を表す名詞：사진（写真），그림（絵），영화（映画）など
「テクスト」を表す名詞：신문（新聞），편지（手紙）など
「身体」を表す名詞：몸（体），얼굴（顔）など
＜抽象＞のうち，
「力」を表す名詞：힘（力），원동력（原動力）など
「程度」を表す名詞：정도（程度），가능성（可能性）など

なお，殆どの名詞が連体節と「内の関係」として現れるのに対し，次のような名詞は「内の関係」としては現れない：

뒤（後），후（後），한편（一方），반면（反面），도중（途中），대신（代わり），끝（末），가운데（中），이후（以後），작정（つもり），직후（直後）など

上の名詞は時間的・論理的前後関係を表すとともに「副詞性」を持っている．[33)]

次に連体節と主に「外の関係」として現われる名詞について述べる．

＜事柄＞は事態や現象を直接・間接的に指示する名詞を言う．例えば，사건（事件）は事態を直接指示するが，방법（方法）は事態を表すわけではなく，「그 일을 이루기 위한 방법은 ～하는 것이다」（そのことを成し遂げるための方法は…することである）のように，事態や現象を間接的に指示することができる．本稿では，事態や現象を直接・間接的に指示する名詞の属性を「事柄性」と呼び，そのような属性を持つ名詞を＜事柄名詞＞として分類する．

＜事柄＞は具体的に次のような種類がある：

＜行為＞시늉（ふり），행위（行為），몸짓（身振り），작업（作業）など
（시작（始まり），금지（禁止），일치（一致），구입（購入）など）

---

33) 菅野裕臣(1995:9)は用言の後ろにしかあらわれない名詞（지경（状況，有様））を「規定名詞」，そのような制約がない名詞を「非規定名詞」と規定している．そして「主語名詞，連用名詞，副詞的名詞，接尾辞的名詞，位置名詞の中には規定名詞がかなり存在する」と述べている．

＜様子＞장면（場面），광경（光景），모습（様子），표정（表情）
＜方法＞방법（方法），수단（手段）など
＜過程＞과정（過程），절차（手続き），경위（経緯）など
＜状況＞정황（状況），상황（状況），경우（場合）など
＜感覚＞느낌（感じ），재미（楽しみ）など
＜思考＞생각（考え），마음（心）など
＜仕組み＞제도（制度），문화（文化），역사（歴史），구조（構造）など
＜現象＞소리（音），냄새（匂い）など
…
※（）の中の名詞は動詞の連体形との頻度が非常に低い．

なお，動詞の連体形と共起しない名詞には次のようなものがある：

＜状態＞のうち，마찬가지（同じこと），처음（始め），동일（同一）など
＜時間＞のうち，이전（以前），전（前），나중（後），당장（すぐ）など
＜抽象＞のうち，만일（万一），이하（以下）など

2.5. 本稿における動詞分類

ここでは，動詞の連体形をとる様相に注目し，動詞の分類を行う．この分類は記述の容易のために，하는，한，할をとる動詞の分析の結果を先に示したもので，それぞれの分類の詳細については 3 章～5 章にかけて論述する．

言語資料の調査によると，하는，한，할をとる動詞の分布には一定の傾向が見られる．하는をとる動詞については一定時間継続する動作か否かという動作の「継続性」が，한をとる動詞については，「動作の成立が内的に持つ時間的限界があるかどうか」という動作の「限界性」が重要である．そして할をとる動詞については，主に動作の「意志性」が関わってくる．

本稿では，まず動詞のテンス・アスペクト的な特徴から次のように分類した：

表 8. 本稿における動詞分類の概略

大分類	下位分類	時間の中での展開性	継続性	限界性	한が「現在」を表す	語例
内的限界動詞（telic verb）	結果継続動詞	○	○	○	○	입다（着る）
	状態変化動詞	○	×	○	○	비다（空く）
非内的限界動詞（atelic verb）	動作継続動詞	○	○	×	×	놀다（遊ぶ）
	内的認知動詞	○	×	×	×	보이다（見える）
	関係規定動詞	×	×	×	×	해당되다（該当する）
	属性動詞	×	×	×	○	생기다（生ずる）

＜動作継続動詞＞は「하고 있다」をとり，単一主体の単一動作の「動作継続」を表す動詞である．

＜結果継続動詞＞は「하고 있다」をとり，単一主体の単一動作の「動作継続」を表すとともに，한をとり，主体や客体の現在の状態を表す動詞である．[34]

＜状態変化動詞＞は「하고 있다」をとり，単一主体の単一動作の「動作継続」を表すことができない動詞である．この動詞が「하고 있다」をとると，複数主体の動作を表す場合が多い．한をとると，「現在の状態」を表す．

本稿では動作の限界性に注目する場合は，工藤真由美(1995:57-58)に倣い，＜内的限界動詞＞(telic verb)と＜非内的限界動詞＞(atelic verb)という分類を用いる．[35] 本稿の動詞分類のうち，＜結果継続動詞＞と＜状態変化動詞＞は＜内的限界動詞＞(telic verb)に相当し，＜動作継続動詞＞は＜非内的限界動詞＞(atelic verb)に相当する．

一方，連体形をとる動詞には「生起～終了」の局面がはっきりしない，＜内的認知動詞＞がある．보이다（見える）は前に-처럼などの副詞的な要素を従えて，「これこれのように見える」という意味で用いられるときは，継続性も限界性も持たない．この種の動詞は主に하는をとって現われ，「現在」を表す傾向が強い．[36]

次に時間の中での展開性がない動詞について述べる．

まず，＜関係規定動詞＞は具体的な時間の中で現象する事柄ではない，関係や概念を表す動詞である．一般に「하고 있다」をとりことができず，하는をとる傾向が強い．

＜属性動詞＞は具体的な時間の中で現象する事柄ではない，属性を表す動詞である．一般に한をとり，主体の現在の状態を表す．

これまでに述べた本稿での動詞分類に＜意志動詞＞か否かという観点を加味した全体像を示すと，次の通りである：

---

34) 浜之上幸(1991)の「主体変化動詞」におおむね相当する．浜之上幸(1991)では，「하고 있다」を持つものを「動作動詞」，「하고 있다」をもたないものを「状態動詞」と分類している．そして「動作動詞」を「하고 있다」が表す局面の明確性によって，局面を特定しうるものを「動作性動作動詞」，局面を特定できないものを「状態性動作動詞」と区別している．「動作性動作動詞」はさらに「主体変化動詞」と「主体非変化動詞」に分類される．本稿の言語資料の調査によると，「하고 있다」の表す局面がはっきりしない「状態性動作動詞」や「하고 있다」をとりえない「状態動詞」の中でも，特定の形式をとって，なんらかの「状態変化」を表す動詞が多い．例えば，自動詞の남다（残る）は，「하고 있다」をとりえないが，「남아 있다」（残っている）で，状態変化を表す．そして他動詞の「状態動詞」である「(시험을）포기하다」（（試験を）諦める）は했다や한の形式で，状態変化を表す．先行研究では，「하고 있다」をとりえない動詞については相対的に消極的な扱いをしてきているが，한をとって表す意味に注目すると，「状態変化」を表すという動詞の特徴が明確に見えてくる．

35) 工藤真由美(1995:57-58)は＜内的限界動詞＞(telic verb)と＜非内的限界動詞＞(atelic verb)を次のように定義している：

「内的限界動詞」(telic verb)：動詞の語彙的意味の中に運動が必然的に尽きる内的時間的限界という意味特徴をとりだすことができる動詞
例）切る，折る，切れる，折れるなど

「非内的限界動詞」(atelic verb)：動詞の語彙的意味の中に運動が必然的に尽きる内的時間的限界という意味特徴をとりだすことができない動詞
例）叩く，回すなど

36) 浜之上幸(1991:64)は들리다（聞こえる），보이다（見える）のような知覚作用を表す動詞について，「하고있다」と한다の言い換えが可能であり，アスペクト的な意味において特徴を持っていると指摘している．

(A)時間のなかでの展開性のある動詞

（A・1）内的限界動詞

結果継続動詞

他動詞—意志：접다（折る）

無意志：なし

自動詞—意志：학교에 가다（学校に行く）

無意志：나뭇잎이 떨어지다（葉が落ちる）

状態変化動詞

他動詞—意志：남기다（残す）

無意志：잃다（失う）

自動詞—意志：결혼하다（結婚する）

無意志：비다（空く）

（A・2）非内的限界動詞

動作継続動詞

他動詞—意志：돕다（手伝う）

無意志：혐의를 받다（嫌疑をうける）

自動詞—意志：놀다（遊ぶ）

無意志：끓다（沸く）

内的認知動詞

他動詞—意志：なし

無意志：なし

自動詞—意志：なし

無意志：보이다（見える）

（B）時間のなかでの展開性のない動詞（非内的限界動詞）

関係規定動詞

他動詞—의미를 나타내다（意味を表す）

自動詞—해당되다（該当する）

属性動詞

他動詞—색깔을 띠다（色を帯びる）

自動詞—헐벗다（ぼろを着る）

以上の他に，動詞の意味的・統辞論的種類について述べることがある．動詞の意味的・統辞論的種類全体を対象に하는，한，할をとる様相を調査・分析するのが望ましいが，今回はいくつかの特徴がある動詞を取り上げるに留めることにする．

2.6. 第 2 章の結び

第 2 章では，動詞の連体修飾構造の全体像をつかむために，いかなる動詞が連体形をとりやすいのか，そしていかなる名詞が動詞連体形の被修飾名詞になりやすいのかについて調査した．また，連体節と被修飾名詞がいかなる関係で現れるのかについても考察を行った．その結果，他動詞より自動詞の方が連体形をとる頻度が高く，自動詞の中でも，「状態変化」，「関係」，「自然現象」を表す動詞が連体形をとる頻度が高いことを確認した：

「状態変化」を表す動詞：

늙다（年をとる），마르다（やせる），병들다（病む）など

「関係」を表す動詞:
상응하다（つりあう），버금가다（次ぐ），관련되다（関連する）など
「自然現象」を表す動詞：
타오르다（燃えあがる），생동하다（いぶく），내리쬐다（照り付ける）など

上の動詞はすべて＜無意志動詞＞であり，「自然現象」を表す動詞を除いては「하고있다」をとりにくいという特徴がある．「状態変化」を表す動詞は가장（もっとも）のような程度副詞の修飾もうけることができ，形容詞に近い動詞であると言える．一般の動詞は多くの接続形をとり，動作の先行，理由，様態などを表すのに用いられるのに対し，上の動詞は連体形や終止形をとることが多く，主に動作や状態の描写に用いられる傾向が見られる．しかし，上の 3 つの動詞類に該当する動詞の中でも連体形をとる頻度が低い動詞があり，動詞の連体形をとる様相についてはいろいろな側面からの考察が必要である．

次に，動詞の連体形との共起頻度が高い被修飾名詞には，시늉（ふり），방법（方法），과정（過程）のように，それらが示す事柄がいかなる行為と関連するのか，という情報を必要とする名詞や，때（時），뒤（後）のような時間名詞が連体形をとりやすいことが確認できた．動詞の連体形との共起頻度が高い名詞の中には，修飾語なしに文の成分として用いられにくい特性を持ち，不完全名詞的な性格が濃いものと見られる．

最後に，被修飾名詞が連体節で示される動作・状態に対して，何を表しているかについて調査を行った．連体節と被修飾名詞の関係は，被修飾名詞が連体節内部の一成分になるような構造を「内の関係」，そのようにならない構造を「外の関係」として分類した．
殆どの用例は「内の関係」と「外の関係」の 2 種類の構造のいずれかに該当するのに対し，いずれにも分類しにくい場合もあることを述べた．そして被修飾名詞が連体節の内部の成分ではないが，連体節の内部に被修飾名詞と格関係にある動詞を想定しうる，いわゆる「短絡」の例も多く見られる．
「内の関係」は被修飾名詞が連体節で示される動作・状態に対して，何を表すのかによって大きく 8 種類の関係が確認された．殆どの名詞が「主体」や「客体」の関係として現われるのに対し，뒤（後），한편（一方）のような名詞はそのような関係にならないことを確認した．そして비（雨）のような「自然現象」を表す名詞や행인（行人），주체（主体）は連体節の動作に対し「主体」として現われる傾向が強いなど，名詞は連体節との関係において偏りを見せることがわかった．
「外の関係」は連体節が表す事柄と被修飾名詞が表す対象が同一の事柄を表す＜同一内容関係＞と，被修飾名詞が連体節の表す事柄の原因，方法などの状況を表す＜状況的内容関係＞に分類した．＜同一内容関係＞は하는構造の大きい割合を占める．
＜状況的内容関係＞は連体節との繋がりで被修飾名詞が表す意味によって分類され，例えば，被修飾名詞 N が「…するだけの N」のように解釈される構造は할の構造的特徴であるなど，それぞれの種類と連体形との間にも一定の関連性が認められる．
하는，한，할はいかなる動詞をとり，いなかる被修飾名詞といなかる構造で現れるのだろうか．これについては各章で論じることにする．

第3章 하는による連体修飾構造の特徴

この章では，現代韓国語の動詞の連体形のうち，いわゆる「現在」を表す連体形である하는による連体修飾構造の特徴について分析・考察することにする．考察に当たっては，하는をとる動詞とそれに先行する要素，被修飾名詞，하는と被修飾名詞の関係などに重点をおいて分析を行うことにする．さらに，하는連体修飾構造と하는の表す意味との関連性についても考察する．

なお，これ以降，하는，한，할をとる総頻度のうち，하는との共起頻度が一番高い名詞を＜하는志向名詞＞と呼ぶことにする．한，할についても同様である．

そして動詞についても同様に，하는，한，할をとる総頻度のうち，하는をとる頻度が一番高い動詞を＜하는志向動詞＞と呼ぶことにする．한，할についても同様である．

まず，3.1 では하는の意味機能に関する従来の研究をまとめ，하는の意味用法について規定する．そして 3.2 では言語資料を用いた計量作業を行い，하는をとる頻度の高い動詞を抽出し，それらの動詞の語彙的・文法的特徴について分析を行う．その後，3.3 では，言語資料を用いた計量作業を行い，하는と共起する頻度の高い被修飾名詞を抽出し，その種類について述べる．その後 3.4 と 3.5 では하는の構造を「内の関係」「外の関係」に分類し，それぞれの特徴について分析を行う．そして最後の 3.6 では，＜하는志向名詞＞が한や할と共起する際の特徴について述べる．

3.1. 하는の意味用法について

ここでは하는の意味用法についての従来の研究をまとめ，하는の意味用法について考察することにする．

하는の意味に関する先行研究には，第一に，하는をテンスと見る立場と，第二に，アスペクトあるいはムードと見る立場，第三に，テンスとアスペクトあるいはムードを併せ持っていると見る立場がある．

まず，하는がテンスを表すとしているものは，하는を「現在」あるいは「非過去」を表すと見ている．菅野裕臣(1986)は하는を「非過去」を表す形式であるとし，具体的に「現在」，「習慣的動作」，「未来」，「一般的な事柄」を表すと述べている．

연세대학교 언어정보개발연구원 편(1998:413)は「언어는 사람들을 결속시키는 힘을 가지고 있다（言語は人々を結束させる力を持っている）」のような用例を挙げ，하는が「구체적인 시간을 떠나서 일반적인 행동이나 상태 그 자체만을 나타냄（具体的な時間と離れた，一般的な行動や状態そのものを表す）」と述べている．

次に，하는がアスペクトを表すとしているものには南基心(1978)がある．南基心(1978)は하는について完了相，未定相，断続相以外のものと規定している．

そして，하는がテンスとアスペクトの両者を表すという立場をとったものとしては，서정수(1996)，野間秀樹(1997a)などがある．野間秀樹(1997a)では하는が「動詞と存在詞にのみ用いられ，ある設定された時に，そういう状態にある，既にそういうことになっているということを表すことが多く，時制的な性格が濃い」とすると共に，「目の前で起こっている事実であれ，習慣的や反復的な動作であれ，これから先に起こることであれ，どれをとっても，いわば「既然」的な性格が濃い形である」とし，하는を「既然形」と呼んでいる．

最後に하는がムードを表すと見ているものには，배진영(2001)，中西恭子(2002)がある．배진영(2001)は-는を-ㄴ-と-ㄴの結合形と見て，目の前に起こりつつある状況を叙述するのが，-ㄴ-のもっとも基本的な意味であり，話し手が事態を確定的なものと判断するか否かによって，冠形節標識の-ㄴまたは-ㄹが選択されると述べている．

一方，中西恭子(2002)は野間秀樹(1997a)で挙げている하는の意味のうち，「既にそういうことになっている」に対し，「厳密にいえば，「既にそういうことになっているものとする」となろう」とし，하는の法性について述べている．

中西恭子(2002)は하는を할との使い分けとの観点から，하는の表す意味について研究を行った．同稿はまず，하는の意味機能を「有限的進行」「非有限的進行」「非進行」「補完的説明」「付加的説明」「形式的修飾」に分け，(41)～(44)のような「非進行」および「形式的修飾」の一部で，「할との境界が曖昧で，その使い分けには発話者が当該事態をどのようにみなしているか――すなわち法性――が大きくかかわっていることは否定できない」と述べている：

(41) （略）…30 일부터 미국 시애틀에서 시작되는 세계무역기구(WTO)뉴라운드 협상에 임하는 기본방침을 정리했다.
30 日からアメリカ・シアトルで始まる世界貿易機構(WTO)ニューラウンド協商に臨む基本方針をまとめた．

(42) “선혜 씨가 이 다음 찾는 별은 어느 별일까 생각했습니다.”
「ソネさんが次に求める星はどんな星だろうかと考えていました」

(43) 그러나 저녁 전에 올 수 있을지 없을지는 일단 나가봐야 아는 일이었다.
しかし夕飯前に戻れるかどうかは，ともかく出かけてみてこそわかる＜出かけてみなければわからない＞ことだった．

(44) 때문에 당장은 북쪽에선 북한돈을，남쪽에선 한국돈을 쓰는 일이 벌어질지도 모른다.
そのため当面は，北側では朝鮮民主主義人民共和国の金を，南側では大韓民国の金 を使うということが起こるかもしれない．

中西恭子(2002:28-29)は「ある事態に向けられる発話者の態度」を「法性」と規定し，「事態を所与として提示する」という態度も，当然その範疇に含まれるだろうと述べ，하는の法性について，「事態に対する実現可能性の判断は保留したまま，それをとりあえず所与として提示する態度である」と規定している．

以上の先行研究を総合的に考えると，하는はある基準時点以前の事柄について述べることはない点で，テンス的には「非過去」[37]を表す．しかし実際の用例を見ると，하는は具体的な時間から離れた一般的・恒常的な事柄を表す用例が圧倒的に多い．

次に，アスペクト的な観点から하는を規定すれば，하는は「終わっていない事柄」を表す点で，アスペクト的に「未完了」を表す．

最後に，하는はある事柄を既存の事実として客観的な態度で述べる点で，ムード的に「直説法」を表す．

37) 伊藤英人(1989)は非過去形の基本的なテンスの意味は，「未来」と「現在」を表すとし，「現在には，発話時をまたぐ特定の時間に成立することがらを表すアクチュアルな現在と，発話時をまたいで過去と未来に大きく広げられた時間帯に，動詞の示すことがらが潜在的に存在することを示す非アクチュアルな現在とが含まれる」と述べている．伊藤英人(1989:8)は「非過去」を表す終止形한다が「未来」を表す用例は「なんらかのムード的なニュアンスが多かれ少なかれつきまとうことが多い」と述べているのに対し，連体形하는には「意志」「予期」といったムード的なニュアンスがつきまとう例は見られない．

続く 3.2，3.3 では，하는をとる動詞と被修飾名詞について調査し，하는の実現する意味との関連についても考察することにする．分析の基準となる하는の意味用法を次のように整理しておく：

①「現在」:
하는が基準時点を中心としたひとつの特定の時間に行われる事柄[38]を表す．
（基準時点に動詞の示す事柄がまさに起こっているものから，基準時点をまたいで前後にひろがった時間帯において事柄を起こるものもある）[39]

(45) 그 소리는 멈추었다가는 또 들리고 멈추었다가는 또 들리고 했습니다. 어디서 나는 소리일까. ＜BTGO0343＞
その音は止まってはまた聞こえ，止まってはまた聞こえたりしました．どこから聞こえてくる音だろう．

(46) 새로울 것도 진부할 것도 없는, 요즘 유행하는 스타일이었다. ＜BTBF0252＞
新しいところも古いところもない，最近流行しているスタイルであった．

②「超時」[40]: 하는が基準時点を中心としたひとつの特定の時間に行われる事柄ではない，一般的・恒常的な事柄を表す．

(47) 여성을 대상으로 하는 방송 프로그램의 사회자들이 가장 많이 하는 질문이 있다. ＜BTHO0395＞
女性を対象とする放送番組の司会者がもっとも多くする質問がある．

---

38) 「時間的局在限定性」があるとも言う．時間的局在限定性とは，「ある事象が時間の流れの中における相対的に短い時間に存在する“特定の場面”に存在しているかどうかということに関する時間的，空間的な概念」（浜之上幸(1992：10))である．
伊藤英人(1989:7)は現在を「アクチュアルな現在」と「非アクチュアルな現在」に二分している．「アクチュアルな現在」とは「発話時をまたぐ，もしくは発話時のなかにおさまるある特定の時間にことがらがなりたつものであり，「非アクチュアルな現在」とは，「発話時を含む時間帯に動詞によってしめされる事柄が潜在的に存在しているようなものである」と述べている．そして「前者は時間的局在性を含み，後者は動詞の示すことがらが主体や対象の質的側面などとしてとりたてられているという意味において時間的非局在性を含む」と述べている．
39) 伊藤英人(1989)における「アクチュアルな現在」の意味定義を引用した．
40) 山岡正紀(2000:209)は超時制時を「特定時間との関係づけができない一般化された時制意味」と定義している．山岡正紀(2000:208)では「叙述」という文機能によって必然的にもたらされる時制意味が超時である」とし，「非過去時制辞に対応する時制意味を現在と解釈すると，発話時という特定時間に限定されるため，＜叙述＞という文機能になじまない．そのため，現在とは異なる超時の時制意味解釈が必要である」と述べている．
남기심・고영근(1985:304-305)は現在時制の用法として時間に関係ない普遍的な事実を叙述する用法があると述べている：

사람은 만물의 영장이다. 人は万物の霊長である．

そしてこのような現在時制の用法は時制の特性である指示性と関係ないため，時制とは関係ないが，一般的に時制の領域で扱っていると述べている．

上の規定のほかに하는が「反復」や「未来」を表す例も見られる：

하는が「反復」を表す例：

(48) 주인공으로 자주 등장하는 곤충들인데 그 중에서 잠자리가 가장 많이 등장한다. ＜BTBF0267＞
主人公としてよく登場する昆虫であり，その中でもとんぼがもっともよく登場する．

하는が「未来」を表す例：

(49) 시의회는 다음 달 열리는 임시회에서 시의 기념일 제정 대신 정부에서 기념일로 제정할 것을 요구하는 건의안을 마련, ＜…＞＜BTAB0180＞
市議員会は来月開かれる臨時会で市の記念日制定の代わりに，政府で記念日を定めるように要求する建議案を用意，＜…＞

하는が表す意味のうち「反復」と「未来」は，時間や頻度を表す副詞によって表される傾向が見られる．

3.2. 하는をとる動詞の語彙的・文法的特徴

ここでは，言語資料に基づいた計量作業により，하는をとる動詞について分析を行うことにする．分析に際しては，動詞の自他及び動詞のアスペクト的な特徴に注目する．

3.2.1. 하는をとる頻度の高い動詞

하는連体修飾構造を分析するための最初の作業として，ここでは하는をとる動詞の語彙的・文法的特徴について分析を行うことにする．言語資料における하는をとる動詞は異なり語数 2,985 種（単純動詞）であり，総 151,415 例である．頻度順に上位 10 位（累積比 28% 以上）までを提示すると，次の通りである．数字は하는をとる頻度である：

하다（する）7,953／되다（なる）2,458／살다（住む）1,450／가다（行く）1,446／보다（見る）1,342／받다（もらう）1,124／보이다（見える）1,076／알다（知る）984／모르다（知らない）962／나오다（出る）916

하는をとる頻度のもっとも高い動詞は하다（する）であり，その次に，되다（なる），살다（住む）が続く．これらの動詞は，言語資料における総頻度でも上位を占めており，하다（する）が 1 位，되다（なる）が 3 位，살다（住む）が 20 位となっている．

まず，하다（する）について見ると，하는をとる하다（する）は次の例から見て取れるように，「継続的な動作」や「一般的・恒常的な事柄」を表す例が殆どである：

(50) 구걸 행각을 하는 사람 袖乞いをする人

(51) 노력을 하는 사람 努力をする人

(52) 그들이 필요로 하는 정보 彼らが必要とする情報

(53) 영리를 목적으로 하는 기업 営利を目的とする企業

さらに，引用の機能を果たす하는も多く見られる：

(54) ‘쏴아’ 하는 소리「ひゅう」という音

次に되다（なる）について見ると，되다（なる）は「数的到達」を表す場合が多い：

(55) 19 개나 되는 거점 19 個にもなる拠点

(56) 평균 수명이 110 세나 되는 지방 平均寿命が 110 歳もなる地方

하다（する），되다（なる）が한をとるときは，하는をとる場合と明確に異なる様相を見せる．次の例における한は，主体の状態や素材を表す：

(57) 분장을 한 사나이 扮装をした男

(58) 나무로 된 목탑 木でできた木塔

このように，単独の動詞ではなく，動詞が他の要素とともに表す意味が重要であり，今後はこうした観点からの分析が必要である．

次に，総頻度に対する하는をとる頻度の比率が高い動詞を調査した．その結果，하는との絶対頻度で 1 位の하다（する），2 位の되다（なる）が，하는との相対頻度ではそれぞれ，5.7%，3.3%と低い結果を示した．

コーパスにおける総頻度 100 例以上の動詞について，総頻度に対する하는をとる頻度の比率が高い上位 10 位までの動詞を示すと，次の通りである．括弧内は総頻度に対する하는をとる頻度の比率を示す：

끓다（沸く）(51.1%)／타오르다（燃え上がる）(34.7%)／빛나다（光る）(33.1%)／잠자다（寝る）(31.7%)／반짝이다（きらきらする）(31.0%)／떨리다（震える）(26.6%)／넘치다（あふれる）(26.1%)／결정짓다（決定する）(25.0%)／불타다（燃える）(23.4%)／잘살다（豊かな暮らしをする）(22.3%)

上の動詞のうち，결정짓다（決定する）を除くすべでの動詞が自動詞であり，[41] ＜無意志動詞＞である．さらに，これらの動詞は「継続的・反復的な動き」を表し，内的時間的限界を持たない＜非内的限界動詞＞である．

결정짓다（決定する）は「抽象的な事柄」を主体や客体にとり，抽象的な動作を表す傾向が見られる．次の例における결정짓다（決定する）は脱時間的な関係概念を表す＜関係規定動詞＞に近づいている：

41) 中西恭子(2002:12)では，自動詞の頻度は하는「内の関係」において特に高いとしている．本稿で調査した하는をとる頻度 10 位までの自動詞も，主に「内の関係」で現れる特徴が見られた．

(59) 언어가 인식의 수단인 동시에 인식 가능성의 방향을 결정짓는 수단이기도 하기 때문이다. ＜BTHO0395＞
言語が認識の手段であると同時に，認識可能性の方向を決定する手段でもあるためである．

「継続的な動作」を表す動詞や「脱時間的・一般的事柄」を表す動詞が하는をとる頻度において上位を占めるという現象は，하는がテンス的に「現在」または「非過去」を表すばかりではなく，動作の在り方の観点から，「終わっていない動作」を表すということに対する根拠となりうる．

さらに，「脱時間的・一般的事柄」を表す動詞が하는をとる動詞の多くを占めるという現象は「脱時間的・一般的事柄」を表すという意味機能が하는の重要な意味機能の一つであることを示すほかならない．

それでは，하는，한，할と共起した総頻度のうち，하는との共起頻度がもっとも高い動詞（＝＜하는志向動詞＞）について，自他別に見ることにする．まず，自動詞の＜하는志向動詞＞には次のようなものがあった：

表 9. 自動詞の＜하는志向動詞＞

順位	動詞	하는		한		할		合計
		頻度	比率	頻度	比率	頻度	比率	
1	떨리다（震える）	180	96.8%	0	0.0%	6	3.2%	186
2	끓다（沸く）	118	95.9%	2	1.6%	3	2.4%	123
3	빛나다（光る）	191	94.6%	2	1.0%	9	4.5%	202
4	어울리다（似合う）	140	89.2%	4	2.5%	13	8.3%	157
5	넘치다（あふれる）	172	88.2%	21	10.8%	2	1.0%	195
6	울다（泣く）	202	85.2%	7	3.0%	28	11.8%	237
8	흔들리다（ゆれる）	111	83.5%	3	2.3%	19	14.3%	133
9	들려오다（聞こえる）	92	80.7%	18	15.8%	4	3.5%	114
10	쏟아지다（こぼれる）	122	78.7%	24	15.5%	9	5.8%	155
11	웃다（笑う）	241	78.5%	4	1.3%	62	20.2%	307
12	달하다（達する）	94	77.7%	17	14.0%	10	8.3%	121
13	놀다（遊ぶ）	157	74.4%	4	1.9%	50	23.7%	211
14	뛰다（走る）	94	71.2%	13	9.8%	25	18.9%	132
15	흘러나오다（流れ出る）	77	70.6%	27	24.8%	5	4.6%	109
16	잠자다（寝る）	80	68.4%	2	1.7%	35	29.9%	117
17	이어지다（つながる）	202	65.8%	74	24.1%	31	10.1%	307
18	들리다（聞こえる）	128	63.7%	33	16.4%	40	19.9%	201
19	모자라다（足りない）	73	63.5%	30	26.1%	12	10.4%	115
20	자다（寝る）	116	62.7%	25	13.5%	44	23.8%	185

21	닿다（及ぶ）	126	62.7%	33	16.4%	42	20.9%	201
22	다가오다（近付く）	96	55.5%	30	17.3%	47	27.2%	173
23	싸우다（喧嘩する）	110	55.0%	36	18.0%	54	27.0%	200
24	머물다（留まる）	63	54.8%	21	18.3%	31	27.0%	115
25	떠오르다（浮かび上がる）	133	53.4%	84	33.7%	32	12.9%	249
26	속하다（属する）	125	52.5%	111	46.6%	2	0.8%	238
27	가다（行く）	1446	50.0%	570	19.7%	878	30.3%	2894
28	변하다（変わる）	74	50.0%	53	35.8%	21	14.2%	148

上の表の自動詞に見られる第一の特徴は，「一定時間継続する動き」を表すことである．하는，한，할のうち，하는との頻度がもっとも高い動詞は반짝이다（光る）である．そして빛나다（光る），떨리다（震える）が続く．総頻度が 200 回～300 回の動詞のうち끓다（沸く），잠자다（寝る），맺히다（結ばれる），들뜨다（そわつく）の하는，한，할をとる頻度を図示すると，次のようになる：

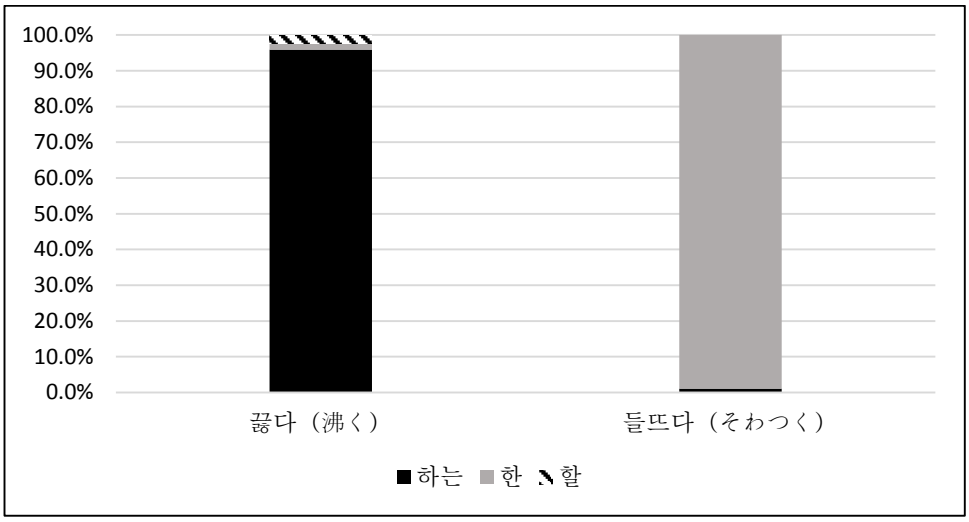

図 2. 끓다（沸く），들뜨다（そわつく）の하는，한，할をとる頻度

上に示した＜하는志向動詞＞は(60)～(62)に見られるように，하는「内の関係」の構造で現れ，基準となる時点において「継続する動作」を表すことが多い．そして動作の主体には，가슴（胸），손（手）のような「身体」，물（水），별（星）のような「自然物」，소리（音），불빛（光）のような「現象」を表す名詞が来ることが多い．버스（バス），차（車）のよう「交通手段」を表す名詞も달리다（走る）のような「移動」を表す動詞の하는とよく現われる：

(60) 수혜는 떨리는 가슴을 진정시키며 천천히 포장지를 뜯었다. ＜BTEO0329＞
スヘは，震える胸を落ち着かせ，ゆっくりと包装紙を開けた．

(61) 흔들리는 불꽃 따라 아이들의 얼굴도 발갛게 흔들리고 있었다. ＜BTHO0103＞
揺れる炎と共に，子供たちの顔も赤く揺れていた．

(62) 나는 그만 달리는 버스 안에서 문을 박차고 나가버리고 싶은 심정이 되었다. ＜BTEO0306＞

私は思わず走っているバスの中から，バスのドアを蹴飛ばし，飛び出したい心情になった.

そして，하는をとる自動詞に見られる第二の特徴は，次の例から見て取れるように，動的な事象ではなく関係概念を表すような＜関係規定動詞＞が多いことである．これらの動詞は一般に「하고 있다」を取ることができず，対象と対象の関係を表す：[42]

(-한테) 어울리다（(…に) 似合う），(-에) 달하다（(…に) 達する），
(-에) 이르다(（…に) 達する)，(-와) 맞먹다（(…に) 匹敵する），
(-에) 준하다（(…に) 準ずる），(-에) 버금가다（(…に) 次ぐ），
(-에) 맞다（(…に) 合う，正しい）など

(63) 정말이지, 당신은 영화배우가 어울리는 사람이었어. ＜BTEO0293＞
本当に，あなたは映画俳優が似合う人であった.

(64) 다른 스포츠나 바둑 등도 마찬가지겠지만 결국 최고 정점에 달하는 수준은 마음을 비운 상태에서 가능하다. ＜BTHO0369＞
他のスポーツや囲碁などでも同様であろうが，結局最高頂点に達するレベルは，心を空にした状態で可能である.

(65) ＜…＞그가 10 여 명에 이르는 여성에게 사기를 쳤던 것이다. ＜BTHO0376＞
＜…＞彼が 10 人に及ぶ女性に詐欺を働いたのだ.

(66) ＜…＞5000 자가 조금 넘는 분량이며, 각 장은 대개 짤막한 운문체 문장으로 되어 있습니다. ＜BTHO0125＞
＜…＞5000 字をやや超える分量で，各章は大体短い韻文の文章になっています.

(67) 그 속성들 중 어떤 것은 그 개체가 속하는 집단에 보편적으로 나타나는 것일 수 있고, ＜…＞＜BTHO0105＞
その属性の中のあるものは，その固体が属する集団に普遍的に現れるものでもありえ，＜…＞

(64)の「최고 정점에 달하는 수준」（最高頂点に達するレベル）は「최고 수준」（最高の水準），(65)の「10 여 명에 이르는 여성」（10 人あまりに及ぶ女性））は「10 여 명의 여성」（10 人あまりの女性）など，名詞と名詞の構成に言い換えることができる.

なお，自動詞の＜하는志向動詞＞が한や할をとるときは，「-ㄴ 뒤」（…した後），「-ㄴ 다음」（…した後），「-ㄹ 때」（…する時），「-ㄹ 정도로」（…するほどに）のような分析的な形式として用いられる傾向があった：

42) ＜関係規定動詞＞は日本語学でいう，いわゆる「関係動詞」と重なる意味特徴を持つ.「関係動詞」はル形とテイル形の意味がほぼ変わらない動詞として日本語学の先行研究で言及されてきた範疇である. 山岡政紀(2000:249)は「関係動詞とは，客観世界あるいは概念世界に別個に存在している複数の名詞的概念（具象的であれ，抽象的であれ）どうしを発話者自身が照合することによって，客観世界の中にない「名詞的概念間の関係」を描き出し，叙述する動詞である」という. そして関係動詞の意味的特徴は「複数の名詞的概念の静的な関係を話者自身が責任を有する照合行為を経て叙述することを語彙的意味とする動詞」と述べている.

(68) 놀 만큼 논 다음 집으로 돌아가려고 지하도를 빠져나오려는 순간, ＜…＞＜BTEO0314＞
遊ぶだけ遊んだ後，家に帰ろうと地下道を抜け出そうとした瞬間，＜…＞

(69) 운전대를 잡은 손이 덜덜 떨릴 정도로 공포에 질려 있었다. ＜BTBA0233＞
ハンドルを握った手がぶるぶる震えるほどに恐怖におびえていた.

次に他動詞の＜하는志向動詞＞について見る．하는をとる他動詞中の第 1 位は갖다（持つ）で하는をとる頻度が 100%であった．갖다（持つ）は가지다（持つ）の縮約形であり，形態論的に갖는のみをとる．갖다（持つ）を除いた動詞の中で，하는をとる頻度がもっとも高い動詞は좋아하다（好む）であり，その次に싫어하다（嫌う），바라다（望む）が続く．他動詞の＜하는志向動詞＞を頻度順に上位 50 位まで示すと次の通りである：

表 10. 他動詞の＜하는志向動詞＞

順位	動詞	하는		한		할		合計
		頻度	比率	頻度	比率	頻度	比率	
1	갖다（持つ）	410	100.0%	0	0.0%	0	0.0%	410
2	좋아하다（好む）	440	94.0%	12	2.6%	16	3.4%	468
3	싫어하다（嫌う）	110	94.0%	1	0.9%	6	5.1%	117
4	바라다（願う）	204	93.2%	4	1.8%	11	5.0%	219
5	가리키다（指し示す）	121	82.3%	19	12.9%	7	4.8%	147
6	알리다（知らせる）	199	81.9%	15	6.2%	29	11.9%	243
7	믿다（信じる）	180	80.7%	19	8.5%	24	10.8%	223
8	즐기다（楽しむ）	175	80.6%	13	6.0%	29	13.4%	217
9	돕다（助ける）	106	77.4%	12	8.8%	19	13.9%	137
10	끌다（引きずる）	107	77.0%	19	13.7%	13	9.4%	139
11	알다（知る）	984	76.8%	68	5.3%	230	17.9%	1282
12	외치다（叫ぶ）	82	76.6%	16	15.0%	9	8.4%	107
13	여기다（思う）	156	76.1%	34	16.6%	15	7.3%	205
14	오가다（行き来する）	85	75.9%	16	14.3%	11	9.8%	112
15	기다리다（待つ）	244	75.3%	35	10.8%	45	13.9%	324
16	나타내다（示す）	201	75.0%	41	15.3%	26	9.7%	268
17	전하다（伝える）	93	73.8%	15	11.9%	18	14.3%	126
18	살리다（生かす）	83	72.8%	22	19.3%	9	7.9%	114
19	높이다（高める）	101	72.1%	25	17.9%	14	10.0%	140
20	지키다（守る）	157	72.0%	28	12.8%	33	15.1%	218
21	찾다（探す）	444	71.2%	88	14.1%	92	14.7%	624
22	바라보다（見つめる）	261	70.9%	40	10.9%	67	18.2%	368
23	가르치다（教える）	159	70.4%	28	12.4%	39	17.3%	226

24	팔다（売る）	344	68.9%	68	13.6%	87	17.4%	499
25	잇다（つなぐ）	112	68.7%	32	19.6%	19	11.7%	163
26	이끌다（導く）	85	68.5%	21	16.9%	18	14.5%	124
27	줄이다（減らす）	85	68.5%	24	19.4%	15	12.1%	124
28	부르다（呼ぶ）	389	67.4%	100	17.3%	88	15.3%	577
29	때리다（殴る）	75	66.4%	27	23.9%	11	9.7%	113
30	주고받다（取り交わす）	92	65.2%	33	23.4%	16	11.3%	141
31	드러내다（現す）	116	65.2%	42	23.6%	20	11.2%	178
32	주다（あげる）	721	63.8%	245	21.7%	164	14.5%	1130
33	피우다（吸う）	82	63.1%	28	21.5%	20	15.4%	130
34	짓다（立てる）	281	62.9%	7	1.6%	159	35.6%	447
35	따지다（問い詰める）	77	62.6%	4	3.3%	42	34.1%	123
36	모르다（知らない）	962	62.4%	5	0.3%	574	37.2%	1541
37	지켜보다（見つめる）	66	61.1%	26	24.1%	16	14.8%	108
38	일으키다（起こす）	196	59.8%	89	27.1%	43	13.1%	328
39	구하다（求める）	89	59.7%	29	19.5%	31	20.8%	149
40	부리다（使う）	72	59.5%	20	16.5%	29	24.0%	121
41	삼다（…にする）	133	59.1%	54	24.0%	38	16.9%	225
42	행하다（行う）	98	58.3%	61	36.3%	9	5.4%	168
43	닦다（磨く）	67	57.3%	31	26.5%	19	16.2%	117
44	치다（打つ）	261	56.9%	109	23.7%	89	19.4%	459
45	이루다（成す）	220	56.8%	131	33.9%	36	9.3%	387
46	느끼다（感じる）	313	56.7%	119	21.6%	120	21.7%	552
47	기르다（養う）	106	56.7%	67	35.8%	14	7.5%	187
48	키우다（育てる）	106	55.2%	59	30.7%	27	14.1%	192
49	막다（防ぐ）	77	54.2%	14	9.9%	51	35.9%	142
50	하다（する）	7953	52.8%	3281	21.8%	3823	25.4%	15057

他動詞の＜하는志向動詞＞にも自動詞の＜하는志向動詞＞と同様，「一定時間継続する動作」を表す＜動作継続動詞＞が多い．意味的には具体的な動作を表す動詞より，抽象的な動作を表す動詞が多く，とりわけ「心理」を表す動詞が多い．例えば，「心理」を表す動詞の좋아하다（好む）は 468 例中 440 例，94%が하는をとって現れた．「心理」を表す動詞のリストと例を以下に示す：

「心理」を表す動詞のリスト：[43)]

43）野間秀樹(1993:141)は対象が主体の外にあっても，動作自体は専ら主体内での作用が主となっているグループのうち，「客体的対象＋-를　精神活動を表す動詞」のグループを「精神動詞」と呼ぶ．そして野間秀樹(1993:142-143)は「精神動詞」と似ているが，-를格で表される対象が主体のうちにある場合の動詞は「心理動詞」として分類している．
「心理動詞」には「고민을 하다」（悩む），「겁을 먹다」（怖がる）が含まれる．言語資料の調査によると，「고민을 하다」（悩む）は하는を，「겁을 먹다」（怖がる）は한をと

좋아하다（好む），싫어하다（嫌う），바라다（願う），알다（知る），여기다（思う），모르다（知らない）など

(70) 찡그린 얼굴이나 무표정한 얼굴을 좋아하는 사람은 없다. ＜BTHO0376＞
しかめっ面や無表情な顔が好きな人はいない.

(71) 호랑이는 88 서울 올림픽의 공식 마스코트로 사용되었을 만큼 우리나라 국민들이 가장 친근하게 여기는 동물이다. ＜BTHO0425＞
虎は 1988 ソウルオリンピックの公式マスコットとして使用されたほど，韓国の国民が最も身近に思う動物である.

(72) 자신이 거주하는 지역의 시장이나 구청장 후보가 누구인지 모르는 사람이 대부분이다. ＜BTAB0172＞
自分が住んでいる地域の市長候補や区庁長の候補が誰なのか，知らない人がほとんどである.

(73) 갓난아기가 가장 좋아하는 일은, 엄마와의 접촉이다. 따라서 갓난아기가 태어나서 바로 엄마와 접촉하게 하는 것이 가장 훌륭한 육아의 첫걸음이다. ＜BTHO0429＞
生まれたての赤ん坊のもっとも喜ぶことは，母親との接触である．したがって，赤ちゃんが生まれてすぐに，母親と接触するようにすることが，最も優れた育児の第一歩である.

(74) 공문을 발송하고 다시 회의 당일에 참석을 바라는 전화를 걸었다. 그러나 그는 거절했다. ＜BTHO0432＞
公文書を発送して，再度会議当日に出席を求める電話をかけた．しかし，彼は拒否した.

(75) 대학 따지는 나라는 정말 별로 없는 거 같더라구요, ＜7CT_0007＞
どの大学を出たかを重要に思う国（lit. 大学を問い詰める国）はあまりないようだったよ.

また，他動詞の＜하는志向動詞＞には，次のような「言語活動」を表す動詞も多い：

들먹이다（言い立てる），외치다（叫ぶ），부르다（呼ぶ），따지다（問い詰める）など

(76) 사용하기 편리한 우리말을 놔두고 아무 때나 외국어를 들먹이는 사람을 보면 똑똑하다는 인상보다는 역겨운 기분을 숨길 수가 없다. ＜BTHO0376＞
使用しやすいわが国の言葉をさし置いて，どんな時でも限りなく外国語で言い立てる人を見ると賢いという印象より，むかつく気持ちを隠せない.

(77) 하나뿐인 지구를 질병으로부터 구하자고 외치는 세상이다. ＜BTHO0392＞
一つしかない地球を病から救おうと叫ぶ世の中である.

る傾向が見られる．同じ範疇に属する動詞であっても，「一時的な気の動き」を表すのか，「継続的な気の動き」を表すのかによって，連体形の取り方が異なるのが分かる.

次に，를格に来る名詞に注目すると，他動詞の＜하는志向動詞＞には，를格に＜事柄名詞＞や＜抽象名詞＞をとり，抽象的な事柄を表す動詞も多く見られる：

(78) 인센티브제가 정착되지 않은 것도 펀드매니저의 도덕적 불감증을 부르는 요인 중 하나다. ＜BTBA0230＞
インセンティブ制度が定着されていないことも，ファンドマネージャーの道徳的不感症を呼ぶ要因の一つである.

(79) 특히 김 대통령의 연설가운데 우리의 눈길을 끄는 대목은 깨끗한 정치, 돈 안 드는 선거를 강조한 점이다. ＜BTAF0217＞
特に金大統領の演説の中で私たちの目を引くところは綺麗な政治，お金のかからない選挙を強調したところである.

(80) 부디 믿음을 주는 정책을 펼쳐주기 바란다. ＜BTAF0217＞
どうか信頼を与える政策を繰り広げてくれることを望んでいる.

さらに，하는をとる他動詞には가리키다（指し示す），일컫다（称する）のような＜関係規定動詞＞も見られる：

(81) 말이라는 것은 모양을 가리키는 개념이고 희다는 것은 빛깔을 가리키는 개념이다. ＜BTHO0125＞
「馬」というのは，形を指し示す概念であり，「白い」というのは，色を指し示す概念である.

以上，하는をとる他動詞の語彙的・文法的特徴について考察した．要するに，하는をとる頻度が高い他動詞には「心理」を表す動詞や「言語活動」を表す動詞など，抽象的な事柄を表す動詞が多い．他動詞は主体が客体に働きかけ，客体に何らかの変化をもたらす特徴を持っており，ヴォイスやアスペクト対立を持つのが一般的であるが，하는をとる他動詞にはそのような対立を持たないものが多い.

ここまで述べた＜하는志向動詞＞の語彙的・文法的特徴を以下に要約する.

＜하는志向動詞＞には動作の時間的長さの観点から，「一定時間継続する動き」を表す動詞が多い．そのような動詞には，먹다（食べる）のような動作の開始から終了までの一連の過程を想定しうる動詞や，흐르다（流れる）のような連続的な動きを表す動詞などが含まれる．さらに，時間の中での展開性のあるかどうかに注目すると，＜하는志向動詞＞には「（개념을）나타내다」（（概念を）表す）のように，脱時間的な関係概念を表す動詞が多く見られる.

하는が「終わっていない事柄」を表すため，좋아하다（好む），돕다（手伝う）のような「一定時間継続する動き」を表す動詞が하는を好んでとるという現象が現われると思われる.

時間と関わる＜하는志向動詞＞の特徴をより体系的に考察するために，次の 3.2.2 では＜하는志向動詞＞についてアスペクト的な観点から考察することにする.

3.2.2. ＜하는志向動詞＞のテンス・アスペクト的特徴

3.2.1 での考察において，하는をとる動詞には「一定時間継続する動作」を表す動詞が多いなど，動詞の分布に一定の傾向があることを明らかにした．一般的に使用頻度が高い動詞である하다（する），되다（なる）は，하는をとる頻度では低いという結果をみせた．

ここでは하는や한及び「하고 있다」[44] や「해 있다」をとる様相に注目し，＜하는志向動詞＞について考察することにする．

まず，＜하는志向動詞＞の第一の特徴は「하고 있다」をとり，単一主体の単一動作の「動作の継続」を表す＜動作継続動詞＞が多いことである．「하고 있다」や「해 있다」のうち「하고 있다」のみをとる自動詞と，「하고 있다」をとり，「動作の継続」のみを表す他動詞がここに入る．これらの動詞は「限界性」の有無の観点から見ると，すべてが＜非内的限界動詞＞である．

＜하는志向動詞＞の第一の特徴：＜動作継続動詞＞（継続性＋，限界性－）

言語資料における하는をとる動詞のうち，標本として 8,655 例を調査した結果，하는をとる自動詞 4,526 例中 3,122 例，69%，他動詞 4,258 例中 4,129 例，91.2%が＜動作継続動詞＞であった．次に하는をとる自動詞の＜動作継続動詞＞の例を示す：

(82) 어머니가 땡땡 언 오징어 한마리를 펄펄 끓는 물에 푹 담갔다. ＜BTEO0295＞
母がかちかちに凍ったイカ一匹をぐらぐらと沸騰するお湯に深く入れた.

(83) 영화 속에서 쫓기는 사람이 하는 것처럼, 그는 무의식적으로 택시를 따라오는 차들을 살폈다. ＜BTEO0286＞
映画の中で追われる人がするように，彼は無意識のうちにタクシーを追ってくる車を見た.

(84) 뒤쪽에서부터 자꾸 바퀴 굴러가는 소리가 들려오지 않는가. ＜BTHO0115＞
後ろからどんどん車輪がまわる音が聞こえてくるのではないか.

上の例の動詞は「끓고 있다」（沸いている），「쫓기고 있다」（追われている），「굴러가고 있다」（転がっている）のように「하고 있다」をとり，単一主体の単一動作の「動作継続」を表す.

次は하는をとる他動詞の＜動作継続動詞＞の例である:

(85) 외부로부터 속박을 받는 사람일수록 순수성을 상실하고 그 성격은 이지러지게 마련이다. ＜BTGO0349＞

---

44)「하고 있다」をとるか否かによって動詞を分類する際には，動詞が「하고 있다」をとって表す意味に注目する必要がある．例えば，먹다（食べる）は開始～終了といった一連の過程を持つ動作の継続を表し，살다（住む），다니다（通う）のような動詞は「하고 있다」をとり，長期にわたる持続的な動作を表す．また，돌다（回る），흐르다（流れる）のような動詞は「하고 있다」をとり，反復的な動作を表す．それに対し，결혼하다（結婚する）のような動詞は「하고 있다」をとると，複数主体の動作を表す．「그가 지금 결혼하고 있다」（彼は今結婚しつつある）は不自然であるのに対し，複数主体の動作を表す「많은 미혼 여성들이 서둘러 결혼하고 있다」（多くの未婚女性があわてて結婚している）のような文は自然である.

外部からの束縛を受けている人であるほど，純粋性を失い，その性格には何かが欠けることである．

(86) 프랑스에선 5 년 전께부터 가족이나 부부, 또는 혼자 수도원에 들어가 수도사처럼 생활하는 독특한 휴가를 보내는 사람이 많아졌다. ＜BTAE0200＞
フランスでは 5 年前ごろから，家族や夫婦，または一人で修道院に入り，修道士のように生活する独特な休暇を過ごす人が多くなってきた．

(87) 선우는 어깨를 한번 으쓱하더니 그를 부르는 사람들이 있는 곳으로 뛰어갔다. ＜BTEO0303＞
ソヌは肩を一度すくめてから，彼を呼ぶ人たちがいる所に走って行った．

(88) 언제 크리스천이 되었길래 카드를 보내고 파티를 열고 부산을 떠느냐고 비웃는 사람도 있다. ＜BTGO0345＞
クリスチャンになっていくらも経たないくせに，なぜカードを送ったり，パーティーを開いたりして，騒いでいるのかとあざける人もいる．

＜하는志向動詞＞の第二の特徴は，「継続性」「限界性」ともに持たない，＜内的認知動詞＞が多いことである．これらの動詞は「하고있다」をとりえない：

＜하는志向動詞＞の第二の特徴：＜内的認知動詞＞（継続性―，限界性―）

(89) 이어 그 사내보다 좀 젊어 보이는 여인이 나왔다. ＜BTEO0286＞
続いてその男よりやや若く見える女性が出てきた．

(90) 어느 날, 양복을 고르던 한 중년 신사가 마음에 드는 옷을 골라 포장해 달라고 했다. ＜BTBF0257＞
ある日，背広を選んでいた一人の中年紳士が気に入る服を選んで包装してほしいと要求した．

上のような＜内的認知動詞＞は하는をとり，「一時的状態の現在」を表す傾向が強い．[45]
＜하는志向動詞＞の第三の特徴は脱時間的な関係概念を表す＜関係規定動詞＞が多いことである．これらの動詞は「関係」，「数量的到達」などを表す：

＜하는志向動詞＞の第三の特徴：＜関係規定動詞＞（時間の中での展開性―，継続性―，限界性―）

(91) 매해 천만 명이 넘는 사람들이 라스베이거스를 다녀간다. ＜BTEO0297＞
毎年千万人を超える人々がラスベガスを訪れる．

(92) 물론 고급 문화 일반이 그러하듯이 우리의 양반 문화도 그것을 창조한 주인공이 반드시 양반 계층에 속하는 사람들만은 아니었다. ＜BTHO0106＞

45) 伊藤英人(1989:19-20)は보이다（見える），들리다（聞こえる），「기가 막히다」（あきれる）のような「内的状態」や「知覚」を表す動詞が一時的状態の現在をあらわす例が多いようであると述べている．

もちろん，高度な文化が一般的にそうであるように，私たちの両班文化もそれを創造した主人公が，必ずしも両班層に属する人々だけではなかった.

(93) 그들은 자신의 능력에 맞는 직업을 선택했으며 뛰어난 분석 재능은 없더라도 창조적이고 허식이 없다. ＜BTBF0260＞
彼らは自分の能力に合う職業を選択し，優れた分析才能はなくても，創造的であり，見せかけがない.

(94) 동생 되는 사람의 아내와 아들도 나왔는데 아들은 조그만해서 아내 되는 사람이 업고 나왔었다. ＜BTHO0102＞
弟にあたる人の妻と息子も出てきてのだが，息子は小さく，妻に負ぶわれて出てきた.

(95) 비싼 옷보다는 분위기에 어울리는 옷차림이 중요하다. ＜BTBF0256＞
高価な服よりは，雰囲気に似合う服装が重要である.

なお，言語資料の調査の結果，「（천 명이）넘다」（（千人を）超える），「（100 명에）달하다」（（100 人に）達する），「（50 명이）되다」（（50 人に）なる）のような動詞が「数」や「量」を表す際には，一般に하는をとることがわかった：

(96) 교통사고로 인해 하루 30 여 명이 목숨을 잃고 있고 100 여 명에 달하는 사람들이 다치며 그 가운데 상당수가 불구자로 여생을 살아간다. ＜BTHO0373＞
交通事故で 1 日に 30 人余りが命を落としており，100 人に達する人々が怪我をし，そのうちの相当数が不具者として余生を生きていく.

上のような＜関係規定動詞＞が하는をとると，特定の時間と関係ない一般化された時制意味，つまり「超時」を表す．そして＜関係規定動詞＞は한をとりづらく，もし한をとったとしても，하는をとる場合との意味が殆ど変わらない.

なお，＜하는志向動詞＞には높이다（高める）のような＜結果継続動詞＞と見られる他動詞も見られた．これらの動詞は하는と「外の関係」として現われる場合が多い．他動詞には連体形をとり「内の関係」の構造を実現しやすいものと，「外の関係」の構造を実現しやすいものがあるようで，他動詞については，構造の観点からさらなる調査が必要であると思われる.

以上，하는をとる動詞についてテンス・アスペクト的な観点から考察を行った．その結果，하는をとる動詞には「하고 있다」をとって「動作継続」を表す＜動作継続動詞＞が非常に多いことがわかった．さらに하는をとる動詞には脱時間的な関係概念を表す＜関係規定動詞＞が多いことも確認できた．これらの動詞はいずれも「限界性」を持っていない＜非内的限界動詞＞である共通点を持つ．コーパスにおける総頻度の高い動詞には，죽다（死ぬ），받다（もらう）など，多くの＜状態変化動詞＞が含まれていることから考えると，＜動作継続動詞＞と＜関係規定動詞＞は하는をとる典型的な動詞群として認めることができる.

하는をとる際の意味に注目すると，＜動作継続動詞＞の하는は文脈によって「現在継続」も「超時」も表すのに対し，＜関係規定動詞＞の하는は常に「超時」を表す.

この節では하는をとる動詞の調査を通じ，＜動作継続動詞＞や＜関係規定動詞＞などの＜非内的限界動詞＞が하는をとりやすいということがわかった．このような現象から，하는は「現在継続している動作」から「一般的・恒常的な事柄」に至るまで，かなり広い範囲で「終わっていない事柄」つまり動作や現象自体を表す形式であることがわかる．それでは，これらの動詞はいかなる被修飾名詞とともに하는連体修飾構造を構成しているのであろうか.

次の 3.3 では, いかなる名詞が하는連体修飾構造に現れやすいのかについて分析を行うことにする.

3.3. 하는との頻度が高い名詞＝＜하는志向名詞＞

ここでは言語資料において，하는，한，할のうち，하는ともっとも高い頻度で現れる名詞（＝＜하는志向名詞＞）には，いかなる名詞があるのかについて考察する．動詞の連体形と100 回以上共起した名詞（293 種）のうち，137 種（46.8%）が，＜하는志向名詞＞である．하는ともっとも高い頻度で現れた名詞は한편（一方）で，515 例中 512 例，99.4%が하는と現れた．도중（途中）は한と共起した例が 1 例のみあったが，不自然さがある例であり，[46] 100%하는と共起すると見られる．そして，第 3 位は경향（傾向），第 4 位は비중（比重），第 5 位は방식（方式）であった．하는との共起頻度が高い上位 50 位までの名詞を示すと，次の表の通りである：

表 11. ＜하는志向名詞＞

順位	名詞	하는		한		할		計
		頻度	比率	頻度	比率	頻度	比率	
1	한편（一方）	512	99.4%	3	0.6%	0	0.0%	515
2	도중（途中）	101	99.0%	1	1.0%	0	0.0%	102
3	경향（傾向）	499	98.2%	6	1.2%	3	0.6%	508
4	비중（比重）	177	95.7%	8	4.3%	0	0.0%	185
5	방식（方式）	543	95.3%	26	4.6%	1	0.2%	570
6	시늉（ふり）	145	94.8%	8	5.2%	0	0.0%	153
7	동안（間）	1355	93.9%	31	2.1%	57	4.0%	1443
8	동시（同時）	165	93.8%	10	5.7%	1	0.6%	176
9	버릇（癖）	145	94.2%	8	5.2%	1	0.6%	154
10	재미（楽しみ）	138	93.9%	4	2.7%	5	3.4%	147
11	과정（過程）	1030	92.7%	81	7.3%	0	0.0%	1111
12	추세（趨勢）	108	93.1%	5	4.3%	3	2.6%	116
13	소리（音）	2073	90.6%	164	7.2%	51	2.2%	2288
14	장면（場面）	411	90.9%	38	8.4%	3	0.7%	452
15	습관（習慣）	96	90.6%	10	9.4%	0	0.0%	106
16	법（方法）	368	90.0%	38	9.3%	3	0.7%	409

46) 도중（途中）は한と共起した例が 1 例のみあった．次の例における「1 개월여에 걸친 도중」（一ヶ月にかけた途中）は「1 개월여에 걸친（여정의）도중」（一ヶ月にかけた（旅程の）途中）のような意味として解釈される：

연구소에 따르면 현실감을 살리기 위해 김대건 신부와 일행을 인형으로 만들어 라파엘호에 배치하는 등 1 개월여에 걸친 도중 풍랑을 만나 표류하던 당시 상황을 그대로 재현하는데 중점을 둘 계획이다. ＜BTAZ0222＞
研究所によると，現実感を出すためには，金大健神父一行の人形を作り，ラファエル号に配置するなど，一ヶ月に渡る（旅程の）途中，波風に遭い漂流した当時の状況をそのまま再現することに重点を置く計画である．

17	눈치（様子）	160	89.9%	12	6.7%	6	3.4%	178
18	대신（代わり）	341	89.0%	41	10.7%	1	0.3%	383
19	방안（方案）	527	87.4%	65	10.8%	11	1.8%	603
20	역할（役割）	334	87.0%	42	10.9%	8	2.1%	384
21	방법（方法）	1385	86.5%	116	7.2%	101	6.3%	1602
22	작업（作業）	399	85.6%	62	13.3%	5	1.1%	466
23	방향（方向）	308	85.8%	31	8.6%	20	5.6%	359
24	행위（行為）	425	84.5%	71	14.1%	7	1.4%	503
25	현상（現象）	344	83.7%	64	15.6%	3	0.7%	411
26	기능（機能）	166	83.8%	30	15.2%	2	1.0%	198
27	효과（効果）	152	83.1%	31	16.9%	0	0.0%	183
28	냄새（匂い）	93	80.9%	22	19.1%	0	0.0%	115
29	요소（要素）	103	79.2%	19	14.6%	8	6.2%	130
30	심정（心情）	85	78.7%	19	17.6%	4	3.7%	108
31	절차（手続き）	84	78.5%	22	20.6%	1	0.9%	107
32	순간（瞬間）	893	78.2%	246	21.5%	3	0.3%	1142
33	계기（契機）	269	77.5%	64	18.4%	14	4.0%	347
34	세상（世の中）	248	77.5%	69	21.6%	3	0.9%	320
35	형식（形式）	118	78.1%	32	21.2%	1	0.7%	151
36	바람（風）	160	76.6%	48	23.0%	1	0.5%	209
37	수준（水準）	150	76.9%	32	16.4%	13	6.7%	195
38	사태（事態）	96	77.4%	19	15.3%	9	7.3%	124
39	특징（特徴）	79	76.0%	24	23.1%	1	1.0%	104
40	지혜（知恵）	82	73.9%	25	22.5%	4	3.6%	111
41	모습（姿）	1011	72.7%	375	27.0%	4	0.3%	1390
42	요인（要因）	122	73.5%	32	19.3%	12	7.2%	166
43	비율（比率）	99	73.3%	35	25.9%	1	0.7%	135
44	단계（段階）	134	71.7%	24	12.8%	29	15.5%	187
45	기색（気色）	107	72.3%	29	19.6%	12	8.1%	148
46	지점（地点）	79	72.5%	29	26.6%	1	0.9%	109
47	제도（制度）	168	71.5%	63	26.8%	4	1.7%	235
48	사이（間）	490	69.6%	156	22.2%	58	8.2%	704
49	능력（能力）	324	70.4%	29	6.3%	107	23.3%	460
50	분위기（雰囲気）	156	70.3%	56	25.2%	10	4.5%	222

*법（法，方法），바람（風）の例には，「-는 법이다（…するものである）」，「-는 바람에（…する拍子に）」のように，形式名詞的に用いられる例も含まれている．

まず，名詞の意味に注目すると，＜하는志向名詞＞の殆どは抽象的な概念を表す名詞である．これらの中で，特に注目すべき点がいくつかある．

第一に，도중（途中），동안（間），동시（同時），대신（代わり），한편（一方）など，時間的・論理的前後関係を表す名詞が多い．これらの名詞は「副詞性」を持っており，하는とともに接続節として機能する特徴がある．

第二に，방식（方式），시늉（ふり）などの＜事柄名詞＞が多い．＜하는志向名詞＞のうち，＜事柄名詞＞の種類を示すと，次の通りである：

＜行為＞
시늉（ふり），버릇（癖），연습（練習），놀이（遊び），행위（行為），
동작（動作），훈련（訓練），게임（ゲーム），춤（踊り），운동（運動），
행동（行動），행사（行事），생활（生活）など
＜方法＞
방식（方式），방안（方案），방법（方法），수법（手法），요령（要領），
비결（秘訣），길（方法），지름길（近道）など
＜様子＞
모습（様子），양상（様相），태도（態度），형태（形態），말투（口振り），자세（姿勢），풍경（風景），광경（光景），장면（場面）など
＜状況＞
실정（実情），상황（状況），현실（現実）など
＜仕組み＞
구조（構造），제도（制度），장치（装置），시스템（システム）など
＜特性＞
장점（長点），이점（利点），특성（特性），스타일（スタイル）など
＜原理＞
이치（理至），원리（原理）など
＜過程＞
과정（過程），여정（旅程），순서（順序）など
＜現象＞
소리（音），기척（気配），냄새（匂い）など
…

2.3 でも述べたように，＜事柄名詞＞は事態や現象を直接・間接的に指示する名詞であり，連体節と主に「外の関係」で現れる構文上の特徴がある．＜事柄名詞＞の中でも，＜行為＞，＜方法＞，＜様子＞，＜状況＞，＜仕組み＞，＜特性＞を表す名詞は，하는と＜同一内容関係＞を実現する構文上の特徴を持ち，하는との頻度も高い．

なお，＜方法＞，＜様子＞，＜過程＞は로格をとる際に，修飾語なしには用いられにくい傾向が見られる：

(97) a. 또한 카운티마다 점포를 두는 방법으로 주요 도시의 다른 대형 소매업체와 정면 충돌하지 않고서도 전국에 1,000 여개의 점포를 열 수 있었다. ＜BTHO0405＞
また各カウンターに店舗を置く方法で，重要都市の他の大型小売店と正面衝突しないで，全国に 1,000 個あまりの店舗を開くことができた．

b. *또한 방법으로 주요 도시의 다른 대형 소매업체와 정면 충돌하지 않고서도 전국에 1,000 여개의 점포를 열 수 있었다.
*また方法で，重要都市の他の大型小売店と正面衝突しないで，全国に 1000 個あまりの店舗を開くことができた．

第三に，비중（比重），요소（要素）のような＜抽象名詞＞が見られる．비중（比重）は主に「-가 차지하는 비중」（…が占める比重）のように，차지하다（占める）の客体として現れる．요소（要素）は「-를 이루는 요소」（…を成す要素）のように，이루다（成す）の主体として現れ，関係概念を表すことが多い．(98)の「교육의 영역에서 학교교육이 차지하는 비중」（教育の分野で学校教育が占める割合）は，「교육에서 학교 교육의 비중」（教育における学校教育の割合）のように，의（の）で連体節の主語にあたる학교교육（学校教育）と被修飾名詞の비중（比重）を繋ぐことができる．そして(99)における「한 편의 글을 이루는 요소들」（一編の文章を構成する要素）も，「한 편의 글의 요소들」（一編の文章の要素）のように書き換えることができる：

(98) 교육의 영역에서 학교교육이 차지하는 비중은 아무리 강조해도 지나치지 않다. ＜BTHO0116＞
教育の分野での学校教育が占める割合は，いくら強調してもしすぎることはない．

(99) 한 편의 글을 이루는 요소들끼리 분리됨이 없이 긴밀하게 잘 짜여져야 좋은 글이 됨은 틀림없다. ＜BTHO0375＞
一編の文章を構成する要素がお互いに離れることなく，密に組み合わさることで，間違いなく良い文章になる．

本稿では，テクストごとに頻度調査を行ったわけではないため，被修飾名詞の種類とテクストの種類との関係については議論することができない．ここで参考までに小説類を対象に，하는と高い頻度で現れる被修飾名詞を調査した金民(2009) [47]の調査結果を見ると，한편（一方），비중（比重）のような名詞は現れず，소리（音），기척（気配）のような＜現象名詞＞や길（道）のような「通路」を表す名詞が上位に現れている．このことは，主題やジャンルといったテクストの特性によって，하는と共起する名詞の種類が異なりうることを示す．[48] 今後は，テクストの種類，文体による連体形と被修飾名詞の共起様相についても注意深く見る必要がある．

この節では，하는と高い頻度で共起する被修飾名詞について見た．考察の結果，하는と高い頻度で共起する名詞も하는の表す意味と関連する名詞が特徴的に現われることがわかった．例えば，소리（音）のような＜現象名詞＞は「行われつつある行為」と関連し，습관（習慣），경향（傾向）のような＜行為名詞＞は「反復的に行われる行為」と関連する．そして방법（方法），구조（仕組み），특성（特性），이치（道理）などの名詞は繰り返されることにより，一般化した事柄を表し，「一般性」を持つ名詞として規定しうる．

---

47) 金民(2009)は written（文語）の imaginer のうち，7 つの小説から抽出した動詞の連体形하는，한，할と完全名詞が含まれている 2,543 例を対象に，하는との共起頻度が高い名詞 27 種の名詞を抽出した．そして調査の対象を written（文語）の imaginer 全体へと拡大し，それらの名詞が動詞の連体形といかなる共起様相を示すのかについて調査した．金民(2009)の＜하는志向名詞＞には次のような自然物を表す名詞や現象名詞があった：

태양（太陽），불길（炎），강물（川水），불빛（光），빛（光）

48) 南潤珍(2007:614)は，コーパスでの使用頻度を共起関係の指標として利用する場合に，気をつけなければならない点として，コーパスのテクストとしての特性を十分に考慮することを挙げている．
また，Conrad, S. (2000:549-552)はコーパスの分析を通じて，however，therefore，in other words のような‘linking adverbials’（接続副詞）がテクストの種類によって，その頻度，およびその使用が異なることを示している．

次にこれまで論じた＜하는志向名詞＞がいかなる構造で現われるのかに注目すると，＜하는志向名詞＞の殆どが하는と主に「外の関係」（内容補充的関係）を実現して現れる．このような現象から，하는は「먹는 시늉」（食べるふり），「먹는 행위」（食べる行為），「먹는 연습」（食べる練習），「먹는 문화」（食べる文化）などのように，被修飾名詞の示す対象が具体的にどのような行為や現象を表すのかを補充する機能を果たす傾向が非常に強いことがわかる．

一方，불길（炎），햇살（太陽の光）のような「自然物」を表す名詞や요소（要素），비중（比重）のような＜抽象名詞＞は하는と「内の関係」として現われる．

それでは，これまで明らかになった하는をとる動詞と被修飾名詞がいかなる構造で現われるのかについて具体的に見ていくことにする．次の 3.4 では，「内の関係」の하는連体修飾構造について論じ，3.5 では，「外の関係」の하는連体修飾構造について論じることにする．考察に際しては，構造と하는が表す意味との関連性についても注目する．

3.4. 하는連体修飾構造Ｉ—「内の関係」（意味的格関係）

「内の関係」の하는連体修飾構造では，하는をとる動詞に＜하는志向動詞＞が非常に多く現われている．

하는「内の関係」の第一の特徴は，하는と被修飾名詞が一定時間継続する動作や現象を表すことである．動詞には主に＜動作継続動詞＞が来る．次は＜動作継続動詞＞の表す動作・現象に対し，主体を表す例である：

(100) 승강이를 벌이는 바람에 들고 있던 우산이 옆으로 기울어졌고, 그 바람에 둘은 쏟아지는 비를 고스란히 맞을 수밖에 없었다. ＜BTEO0093＞
論争を繰り広げていたせいで，持っていた傘が横に傾き，その勢いで二人は降り注ぐ雨にそのまま濡れるしかなかった．

(101) 은은하게 부는 바람이 꽃향기를 날리고 있었습니다. ＜BTGO0342＞
ほのかに吹く風が花の香りを放っていました．

(102) 그것은 B 의 방에서 들려오는 음악이었다. ＜BTEO0298＞
それは B の部屋から聞こえてくる音楽であった．

(103) 어디까지가 사실인지는 몰라도 미국측은 서울 한복판을 지나가는 자동차 중에서 미국차 대수를 계산하기까지 했다고 한다. ＜BTAA0162＞
どこまでが事実なのか分からないが，アメリカ側はソウルの真ん中を通りかかる車の中で，アメリカ車の台数の計算までしたという．

(104) 여기 있을 리 없는 줄 알면서도, 비슷한 옷을 입고 지나가는 사람에게 나도 모르게 계속 시선이 가고. ＜BTIO0142＞
ここにいるはずがないとわかっていながら，似た服を着て通りすぎる人につい目が行って．

(105) 급변하는 세상에 체력이 약한 사원을 좋아할 회사는 없다. ＜BTHO0390＞
急速に変化する世界に体力がない社員を好む会社はない．

＜動作継続動詞＞の表す動作・現象に対し，主体の関係として現われる名詞には사람（人間），강아지（子犬）のような有情物の他に次のようなものが見られた：

＜実体＞のうち，교통（交通），연（凧），강물（川水），강（川）など

＜事柄＞のうち，광택（光沢），광선（光線），소리（音），감정（感情）など

次は被修飾名詞が＜動作継続動詞＞の表す動作が行われる場所を表す場合である：

(106) 우리가 사는 세상의 중심이 여기래요. ＜BTEO0304＞
私たちの生きる世界の中心がここだそうです.

(107) 시장을 가 보면 비슷한 물건을 파는 가게가 참 많다. ＜BTHO0437＞
市場に行ってみると似たような品物を売っている店が本当に多い.

動作が行われる場所を表す被修飾名詞には세상（世の中），사회（社会），현실（現実）など，「場所」を表す名詞の中でも抽象的な対象を表す名詞が多く現われている.
被修飾名詞が＜動作継続動詞＞の表す動作の「出どころ」を表す場合である：

(108) 헤어지기 전에 그는 내 귀에 냄새 나는 입을 바짝 대고 비밀스럽게 말했다. ＜BTEO0297＞
分かれる前に，彼は私の耳に臭い匂いがする口を近づけ，ひそかに話した.

次は被修飾名詞が＜動作継続動詞＞が表す動作の行われる時間を表す場合である：

(109) 바야흐로 세계는 지구촌에서 서로의 문화를 경쟁하며, 인류의 행복한 미래를 추구하는 시대를 맞이하고 있는 것이다. ＜BTHO0381＞
今や世界は地球村でお互いの文化を競争し，人類の幸せな未来を追求する時代を迎えているのである.

次は被修飾名詞が動詞の表す動作の客体を表す例である：

(110) 시장에서 사고 파는 물건이 얼마나 많은가. ＜BTHO0372＞
市場で買ったり，売ったりするものがどんなに多いのか.

(111) 우리가 쓰는 말 가운데 선생님이란 호칭만큼 좋은 말도 드물다. ＜BTHO0125＞
私たちが使っている言葉の中で先生という呼称ほど良い言葉も珍しい.

なお，被修飾名詞が動詞の表す動作の客体を表す構造には，「言語活動」を表す動詞や「授受」を表す動詞，後で述べる「心理」を表す動詞が多く現われる.
하는「内の関係」の第二の特徴は，하는と被修飾名詞が知覚や感情という人の内的事象を表すことである．하는をとる動詞には＜内的認知動詞＞が来る：

(112) 지하철과 버스를 두 번씩 갈아탄 뒤에 우리는 호텔이 멀리 보이는 큰길에 도착했다. ＜BTEO0308＞
地下鉄とバスを 2 回ずつ乗り換えた後，私たちはホテルが遠くに見える大通りについた.

하는「内の関係」の第三の特徴は，하는と被修飾名詞が「数的到達」，「概念規定」など，動的な事象ではなく関係概念を表すことである．하는をとる動詞には，脱時間的な関係概念

を表す＜関係規定動詞＞が中心となっている．[49] そして名詞の中でも비중（比重），개념（概念）のような＜抽象名詞＞が＜関係規定動詞＞と共に現れる傾向が強い：

(113) 산문은 시와 대조되는 개념이다. ＜BTHO0128＞
散文は詩と対照される概念である.

(114) 그가 말한 仁義라는 것도 현대적 시각에서 재해석하면 <공동선과 공공적 이익을 떠받쳐 주는 正義의 원리>에 해당하는 개념이다. ＜BTIO0144＞
彼が言った「仁義」というのも，現代的視覚で再解釈すると，＜共同善と公共的利益を支えてくれる正義の原理＞に該当する概念である.

(115) 수학에서 점이란, 두 선이 만나는 지점에 생기는 것으로, 위치만 있고, 면적은 없는 것입니다. ＜6CT_0003＞
数学でいう点とは，2 つの線が出会う地点に現れるものであり，位置だけあり，面積はないものです.

(116) 즉, NGO 란 비정부·비정파·비영리 결사체로서, 시민들의 자발적이고 능동적인 참여로 이루어지고 주로 자원활동에 의거하여 회원의 직접적인 수혜와 관계없이 공익추구를 목적으로 하는 단체를 말한다. ＜BTHO0379＞
つまり，NGO とは，非政府・非党派・非営利結社であり，市民の自発的で，能動的な参加により，主にボランティア活動に基づいて会員の直接的な恩恵に関係なく，公益の追求を目的とする団体をいう.

なお，(116)で見られるように，하다（する）は「～를 목적으로／기초로 하는」（…を目的と／基礎とする）の構成で現われ，하는構造では，＜関係規定動詞＞として用いられる傾向が強い．(116)の「공익추구를 목적으로 하는」（公益の追求を目的とする）は「공익추구를 목적으로 한」（公益の追求を目的とした）に置き換えうる．そしてこの構造の하는の意味に注目すると，＜関係規定動詞＞の하는は主に「超時」を表す.

以上，하는「内の関係」の構造の主な構造的特徴を見た．ここで하는をとる頻度が低い＜状態変化動詞＞が하는「内の関係」の構造で現われる様相について見ると，次の用例に見られるように，＜状態変化動詞＞の하는は「超時」を表す傾向が非常に強い：

(117) 기도로 하루를 시작하고 기도로 하루를 마치는 사람에게는 참된 평화가 찾아온다. ＜BTBF0253＞
祈りで一日を始め，祈りで一日を終える人には真の平和が訪れる.

(118) 현역 세대가 손에 쥐는 수입은 거의 늘지 않는 반면, ＜BTHO0403＞
現役世代が手にする収入は殆ど増えない反面,

(119) 한 해 동안 자동차 사고로 목숨을 잃는 사람은 5 만 명 가량 된다. ＜BTGO0349＞
一年の間で車の事故で命を失う人は 5 万人ほどになる.

49)「関係規定動詞」は日本語学でいう，いわゆる「関係動詞」と似ている.「関係動詞」はル形とテイル形の意味がほぼ変わらない動詞として日本語学の先行研究で言及されてきた範疇である.

3.4 での議論を整理すると，하는「内の関係」は「一定時間継続する事柄」や「脱時間的な関係概念」を表す特徴がある．つまり，継続的であれ，一般的であれ，하는構造は主に「終わっていない事柄」を表す．

하는「内の関係」にはすべての動詞が均等な分布で現われるのではなく，＜動作継続動詞＞や＜関係規定動詞＞が頻繁に現われる．そして被修飾名詞はそれらの動詞と主格の関係で現れる傾向が強い．このような現象から，하는は単なるテンス形式ではなく，「まだ終わっていない事柄」を表すアスペクト形式としての性格を濃厚に持っていることがわかる．

하는をとる動詞と하는が表す意味との間にも一定の関連性があり，「知覚」を表す動詞や「心理」を表す動詞の하는は「現在」を表す傾向が強い反面，＜関係規定動詞＞の하는は「超時」を表す傾向が強い．なお，＜結果継続動詞＞や＜状態変化動詞＞は「빵을 만드는 기계」（パンを作る機械），「접는 칼」（ポケットナイフ）（lit.折りたたむナイフ）のように，하는構造では，「用途」，「機能」など，「一般的・恒常的な事柄」を表す傾向が強い．

3.5. 하는連体修飾構造Ⅱ—「外の関係」（内容補充的関係）

「内の関係」の하는連体修飾構造は하는と被修飾名詞が共に一つの文を成すような構成であった．「外の関係」の하는連体修飾構造は，하는と被修飾名詞が一つの文を成すような構成ではなく，하는が被修飾名詞の内容を表す構造である．

하는と「外の関係」の連体修飾構造を実現する被修飾名詞は抽象的な事柄を表す名詞が多く，具体的には次のような種類が典型的に見られた：

＜事柄名詞＞：
＜行為＞
시늉（ふり），버릇（癖），연습（練習），놀이（遊び），행위（行為），동작（動作），훈련（訓練），게임（ゲーム），춤（踊り），운동（運動），행동（行動），행사（行事），생활（生活）など
＜方法＞
방식（方式），방안（方案），방법（方法），수법（手法），요령（要領），비결（秘訣），길（方法），지름길（近道）など
＜様子＞
모습（様子），양상（様相），태도（態度），형태（形態），말투（口振り），자세（姿勢），풍경（風景），광경（光景），장면（場面）など
＜状況＞
실정（実情），상황（状況）など
＜仕組み＞
구조（構造），제도（制度），장치（装置），시스템（システム）など
＜特性＞
장점（長点），이점（利点），특성（特性），스타일（スタイル）など
＜原理＞
이치（理至），원리（原理）など
＜感覚・感情＞
감각（感覚），감정（感情）など
＜過程＞
과정（過程），여정（旅程），순서（順序）など
…

＜時間名詞＞：즉시（即時），순간（瞬間）など

＜하는志向名詞＞のうち，次の名詞は하는と共起する用例の 100%が하는と「外の関係」で現れた：

즉시（即時），시늉（真似），과정（過程），기척（気配），순간（瞬間），기색（顔色）

そして버릇（癖），습관（習慣），역할（役割）は用例の約 80%以上が하는と「外の関係」の構造で現れた．

「外の関係」の하는連体修飾構造は，하는と被修飾名詞が＜同一内容関係＞を実現する場合と，하는と被修飾名詞が＜状況的内容関係＞を実現する場合がある．

하는と＜同一内容関係＞を実現する被修飾名詞には，＜行為＞，＜方法＞，＜様子＞，＜仕組み＞＜特性＞などがあり，하는と＜状況的内容関係＞を実現する被修飾名詞には，＜現象＞，＜感覚＞，＜方法＞などがある．

一方，「外の関係」を実現する名詞の中で，동시（同時），순간（瞬間），한편（一方）は하는とともに接続形のように用いられ，上位節と하는が表す事柄が時間的・論理的に「同時」であることを表す．それぞれの構造について順次見ていくことにする．

まず，次の 3.5.1 では，＜同一内容関係＞の하는連体修飾構造について，考察することにする．考察に際しては，被修飾名詞の種類，하는をとる動詞及び하는の意味に注目する．

3.5.1. 하는＜同一内容関係＞

하는と＜同一内容関係＞を実現する被修飾名詞には，＜様子＞，＜行為＞，＜方法＞などがある．以下，いくつかの種類をとりあげ，하는をとる動詞，하는の実現する意味について考察することにする．

3.5.1.1. 하는＋＜様子名詞＞

＜様子名詞＞には「外的様子」を表す名詞と「内的様子」を表す場合があり，それぞれの実現様相が異なる．まず，모습（様子），장면（場面）のような「外的様子」を表す名詞の場合を取り上げる．次は하는が「外的様子」を表す名詞と共起する例である：

(120) 똑같은 사람인데도 걷는 모습과 운전을 하고 있는 모습은 사뭇 달랐다. ＜BTEO0329＞
同じ人なのに歩く姿と運転をしている姿は全く違った．

(121) 발을 크게 내디딜 적마다 깜짝 놀라서 반대편으로 허둥지둥 방향을 바꾸는 꼴이 볼 만했다. ＜BTEO0300＞
足を大きく踏み出すたびに，びっくりして反対側にあわてて方向を変える姿は見ものであった．

장면（場面），광경（光景）も「事柄の現れる様子」を表す点で，このグループで論じることができる：

(122) (은행나무침대)의 옥상에서 떨어지는 장면은 CG 의 도움으로 했지만 (쉬리)에선 진짜 사람이 떨어지는 작업을 한 것이다. ＜BTBF0252＞
「銀杏のベッド」の屋上から落ちる場面は CG の助けでやったが，「シュリ」では本当に人が落ちる作業をしたのである．

(123) 이어 남학생이 성명서를 읽는 장면이 나왔다. ＜CE00020＞
続けて，男子学生が声明書を読む場面が出てきた.

(124) 아침태양이 나일강 위로 붉게 떠오르는 광경은 이집트 여행에서 결코 놓칠 수 없는 아름다운 모습이죠. ＜BTGO0347＞
朝の太陽がナイル川の上に赤く浮かび上がる光景は，エジプトの旅行で決して見逃すことのできない美しい姿です.

「外的様子」を表す名詞を修飾する動詞には＜動作継続動詞＞や(122)，(124)のような＜結果継続動詞＞など，「一定時間継続する動き」を表す動詞が多く現われている.

하는が表す意味に注目すると，上の例のうち，(121)と(123)は「現在継続」を表し，その他の例は「超時」を表す.

次に，하는が기색（顔色），눈치（様子），빛（様子）のような「心的様子」を表す名詞と共起する例について見る：

(125) 피디는 고민하는 빛이 역력했다. ＜BTEO0283＞
PD は悩んでいる様子がありありと見えた.

(126) 엄마는 걸음을 조금씩 더디게 걸으면서 망설이는 눈치더니 못 이기는 체 흥정을 시작했다. ＜BTEO0279＞
母はすこしゆっくり歩きながら，躊躇う様子であったが，仕方がないというふうに交渉を始めた.

(127) 남편은 육지로 내려갈 맘이 있는지 자꾸만 배 밑을 보며 물 빠지기를 기다리는 눈치다. ＜BTHO0418＞
夫は陸地に降りようとしているのか繰り返し船の下を見ながら，水がなくなるのを待っている様子である.

上の例を見ると，「心的様子」を表す名詞を修飾する動詞には，고민하다（悩む），두려워하다（怖がる）のような動作の主体の心的様子を表す動詞が多い．そして하는が表す意味に注目すると，「心的様子」を表す名詞を修飾する하는は用例のすべてが「現在」を表す．このような現象から，하는の表す「時」が上位節の「時」や発話時から独立し，被修飾名詞によって決められる場合があることがわかる.

3.5.1.2. 하는＋＜行為名詞＞

ここでは，하는と＜同一内容関係＞で現れる名詞として，＜行為名詞＞について見る．＜行為名詞＞の中でも，より抽象的な意味を持つ名詞が하는と頻繁に現われる．例えば，연락（連絡）よりは행동（行動）の方が하는と＜同一内容関係＞として現われやすい.

＜行為名詞＞を修飾する動詞には，＜動作継続動詞＞や＜結果継続動詞＞のような「一定時間継続する動作」を表す動詞が多い：

(128) 그녀는 양손을 들어 핸들 돌리는 시늉을 해 보였다. ＜CE000030＞
彼女は両手を挙げ，ハンドルを回すふりをした.

(129) 그녀는 짐짓 춥다는 듯 어깨를 떠는 시늉을 했다. ＜BTHO0407＞
彼女はわざと寒いといわんばかりに，肩を震わせるふりをした.

(130) 희수는 무릎을 꿇고 엎드린 자세로 두 손으로 싹싹 비는 시늉을 한다. ＜BTEO0301＞
ヒスはひざまずき，身を伏せた姿勢で，両手で必死に許しを乞うふりをしている.

(131) 그 엄청난 프로그램들을 좀더 효율적인 현대언어로 바꾸는 작업이 그렇게 어려운 작업은 아닐지라도 위험한 일이 될 수 있다. ＜BTHO0118＞
その驚異的なプログラムをもっと効率的な現代の言語に変える作業が，それほど難しい作業ではないにしても，危険な仕事になる可能性はある.

(132) 많은 채식주의자들이 고집하는 채식의 이유는 대개 자연 상태든 사육했든 살아있는 동물을 죽이고 그 고기를 먹는 행위를 혐오하기 때문이다. ＜BTGO0344＞
多くの菜食主義者たちが固執する菜食の理由は大概自然状態のものであれ，飼育したものであれ，生きている動物を殺し，その肉を食べる行為を嫌悪するからである.

(133) 사실대로 말하자면 영우의 진학에 나는 앞장서지만 않았지 부추기는 역할은 했다. ＜CE000023＞
本当を言うと，私はヨンウの進学について先頭には立たなかったものの，後押しする役割はした.

(134) 소설 쓰는 작업에 《백과사전》은 필수라는 것도 잊어서는 안 된다. ＜BTHO0402＞
小説を書く作業に「百科事典」は必須ということも忘れてはならない.

(135) 그녀의 시선을 피한 채 말없이 잔을 들어 조금 마시는 시늉만 하고 그는 도로 잔을 내려놓았다. ＜BTEO0093＞
彼女の視線を避けたまま無言で杯を取り，少し飲むふりだけして，彼は再び杯を下に置いた.

하는が表す意味に注目すると，＜行為名詞＞のうち，시늉（ふり）は，하는 145 例中 25 例，17.2%が「現在」を表す．それに対し，他の＜行為名詞＞は「超時」を表す用例が圧倒的に多い．このように同じ種類に属する被修飾名詞であってもそれを修飾する하는の意味に偏りを見せる場合がある.

버릇（癖），습관（習慣），경향（傾向），추세（趨勢）など，繰り返し行われる行為を表す名詞類もこのグループに入る：

(136) 언제부터인가 그는 조금이라도 인기가 있는 영화라서 자리가 모자라 서서 봐야 할 정도로 관객이 많이 들 가능성만 있으면 일부러 사람이 가장 몰리는 시간에 극장으로 가서 구경하는 버릇이 생겼다. ＜CE000021＞
いつからか彼は少しでも人気のある映画で，席が足りなくて立って見なければいけないほど観客が入る可能性さえあれば，わざと人が一番集まる時間に映画館にいく癖ができた.

(137) 따라서 국어의 정서법에 관심을 갖고, 맞춤법에 의문이 생길 때마다 사전을 찾아보는 습관이 필요하다. ＜BTHO0375＞
従って，国語の正書法に関心を持ち，正書法に疑問が生じるたびに辞書を引く習慣が必要である.

(138) 내일부터 당장 일찍 일어나는 습관을 들여 보면 어떨까. ＜BTBF0261＞
明日からすぐに早く起きる習慣を見につけてみてはどうだろうか.

なお，성격（性格），성향（性向），특징（特徴）も，繰り返し行われる行為によって形成される事柄を表すため，ここで論じることができる：

(139) 복잡한 것을 무조건 싫어하는 성격인 것 같았다. ＜BTEO0307＞
複雑なことはなんでも嫌う性格のようだった.

「反復行為」を表す名詞を修飾する하는は，一般に「超時」を表す.

3.5.1.3. 하는＋＜方法名詞＞
방법（方法），방식（方式），방안（方案）のような＜方法名詞＞がここに入る：

(140) 나이에 관계없이 배운 것을 정리하는 데는 남에게 가르치는 방법만큼 좋은 것은 없다 . ＜BEXX0001＞
年齢に関係なく，学んだことを整理するには，他人に教える方法が最も効果的である.

(141) 입장료를 받고 출연자들이 이 수익금을 기금으로 내놓는 방식도 좋다. ＜BTBF0250＞
入場料をもらい，出演者らがこの収益金を基金として出す方式も良い.

＜方法名詞＞を修飾する動詞の殆どは＜意志動詞＞である．하는と＜同一内容関係＞を実現する방법（方法）の例を調査すると，標本として 300 例を調査した結果，300 例中 295 例が＜意志動詞＞であった.
次に하는の意味に注目すると，＜方法名詞＞と＜同一内容関係＞を実現する하는は常に「超時」を表す．＜方法名詞＞は事態を取り巻く状況も表しうる特徴から，次の節で取り上げる＜状況的内容関係＞としても現れる.
以上述べた名詞のほかに，＜能力＞，＜過程＞，＜仕組み＞，＜状況＞を表す名詞も하는と＜同一内容関係＞で現われる.

(142) 특히, 최근 환율이 급락하고 있는 만큼 해외여행의 경우 반드시 신용카드 사용을 통해 여행경비를 한 푼이라도 더 절약하는 지혜가 필요하다. ＜BTAA0159＞
特に，最近の為替レートが急落しているだけに，海外旅行の場合は，必ずクレジットカードを使用して，旅費を一銭でも多く節約する知恵が必要である.

(143) 상상력이란 무엇보다 이미지를 낳는 힘이다. ＜BTHO0392＞
想像力とは何よりイメージを産む力である.

(144) 진정한 민주화를 이루는 정당이 되려면 그 당 구성원들이 민주적으로 의견을 모으는 절차가 필요하고, 그 의견 수렴은 국민 대중의 뜻을 가능한 한 반영해야 한다. ＜BTAE0196＞
真の民主化をなす政党になるためには，その政党の構成員が民主的に意見を集める手続きが必要であり，その意見の集約には，国民大衆の意志を可能な限り，反映しなければならない.

(145) 첫째 종래의 현실과 꿈을 넘나드는 구조를 시뮬레이션 게임이라는 포스트모던한 문제틀로 재구성한 점이 참신했고 의욕적이었다. ＜BTHO0123＞
第一に従来の現実と夢を行き来する構造をシミュレーションゲームというポストモダンな枠で再構成した点が斬新で意欲的であった.

以上，하는＜同一内容関係＞の構造的特徴について考察した．하는は＜行為＞＜様子＞＜方法＞＜仕組み＞など，多様な＜事柄名詞＞と共起し，その名詞が具体的にどのような動作や現象を表すのかを示す機能を果たす傾向が強い．例えば，먹다（食べる）の하는と한の例を見ると，하는の場合は「먹는 꿈」（食べる夢），「먹는 행위」（食べる行為），「먹는 습성」（食べる習性）など，様々な＜事柄名詞＞とともに現われ，被修飾名詞が指し示す動作が具体的にどのような動作であるかを表す．それに対し，한の場合は「먹은 사람」（食べた人），「먹은 음식」（食べたもの），「먹은 뒤」（食べた後）のような例が殆どであり，被修飾名詞が具体的にどのような動作を表すのかを表す例は見られない.

하는が「継続する事柄」であっても，「反復する事柄」であっても，「動作や現象」自体を表しうるため，様々な＜事柄名詞＞と＜同一内容関係＞で現れ，それらの名詞の意味を規定することができると考えられる.

最後に，하는＜同一内容関係＞の構造における하는が表す意味について言うと，하는＜同一内容関係＞の構造では，被修飾名詞が눈치（様子）である場合は하는が「現在」を表し，被修飾名詞が방법（方法）である場合は「超時」を表すなど，하는の表す意味が被修飾名詞によって決められる現象が見られる.

3.5.2. 하는＜状況的内容関係＞

하는の「外の関係」のうち，하는と被修飾名詞が＜状況的内容関係＞で現れる場合について考察する．ここで取り上げる하는と被修飾名詞（N）は「…するときに出る／感じる N」のように解釈される.

3.5.2.1. 하는＋＜現象名詞＞

＜하는志向名詞＞のうち，소리（音），[50] 기척（気配）のような＜現象名詞＞は，その語彙的な特性上，하는との頻度が非常に高い．言語外的な事実として，音は音を伴いうる動作が行われると同時に人の耳に入ってくることであるため，連体節の事柄が基準時点と同時であることを示す하는と共起しやすいと思われる：[51]

---

50) 名詞소리（音）が한と共起した用例の殆どは「목이 잠긴 소리（しゃがれた声）」「술 취한 소리（酔っ払ったような声）」のように，「声」の意を表している．よって，소리が「音」の意で用いられるときは，하는, 한, 할のうち，ほぼ 100%하는と共起すると見ることができる.

51) 朴長庚(1987:87)は感覚を表す「声」，「音」，「煙」，「情景」などのような名詞を修飾する節が，この感覚名詞の内容を叙述する内容節である場合，修飾する動詞は「ル」形または「テイル」形になると述べている：

(146) 수화기를 통해 창문 열리는 소리가 들린다. ＜CE000030＞
受話器を通して，窓を開ける音がする.

(147) 톡 톡 톡 누군가가 현관문을 두드리는 기척이 있을 뿐이었다. ＜BEXX0017＞
トントントン誰かが玄関のドアを叩く音がするだけだった.

これら名詞を修飾する하는をとる動詞には＜動作継続動詞＞が多い．例えば，소리（音）は用例の約 74%が(148)の「（슬리퍼를）끌다」（（スリッパを）引きずる）ような＜動作継続動詞＞であった：

(148) 슈퍼에서 아이스크림이며 스낵을 사 들고 나오는 아이들의 슬리퍼 끄는 소리도 들렸다. ＜BTEO0339＞
スーパーでアイスクリームやスナックを買って出てくる子供たちの，スリッパを引きずる音も聞こえた.

一方，(149)の깨지다（割れる）のような＜状態変化動詞＞の例も見られる：

(149) 잠을 깨운 건 유리 깨지는 소리였다. ＜BTEO0296＞
目を覚ましたのは，ガラスの割れる音であった.

＜現象名詞＞を修飾する하는は「現在」を表す場合が多い．特に기척（気配）は用例の100%が現在における動作を表す.

3.5.2.2. 하는＋＜感覚名詞＞

次に，재미（楽しみ），즐거움（楽しみ），고통（苦痛）のような＜感覚名詞＞も，하는と＜状況的内容関係＞で現れる.

(150) 오로지 돈 버는 재미에 싱그러운 젊음이 망가져가는 줄도 모르고 살아온 다희. ＜BTEO0329＞
唯一お金を稼ぐことを楽しみにして，清清しい若さが壊れていくことも知らずに生きてきたタヒ.

以上のような名詞の他に，하는と＜状況的な内容関係＞で現われる被修飾名詞には，＜過程＞，＜方法＞がある：

どのグループからも，「キャアー！」とか，「わあーい」とか「いやだなあ」とか，笑う声がしていた.
そこで焼く煙は村のほうへひろがらないので，昔からそこが焼場に使われて来たものらしい.

また，「声」は笑うときに，「煙」は何かを燃やすときに出る一種の生産物であるとし，感覚の対象（感覚名詞）の存在は感覚を把握する感覚主の感覚作用と同時でなければならないと述べている.

(151) 6 대째 가업을 잇고 있는 시바타시의 이치시마 주조에서 술 만드는 과정을 둘러볼 수 있다. ＜BTAE0207＞
6 代目に家業を継いでいる柴田市の市島酒造で，お酒を作る過程を見ることができる．

このグループの名詞を修飾する動詞には＜動作継続動詞＞が多いが，＜結果継続動詞＞も散見される．하는の意味に注目すると，＜過程＞や＜能力＞を修飾する하는は「超時」を表す．

3.5.2.3.「하는＋名詞（助詞）」が接続形のように機能する名詞

＜하는志向名詞＞の中で，한편（一方），도중（途中），순간（瞬間）などは，하는と繋がり，副詞節として機能している．

(152) 실내에 들어서는 순간 수혜는 신선한 충격을 받았다. ＜BEXX0001＞
室内に入った瞬間，スヘは新鮮な衝撃を受けた．

(153) 전체 부원들이 사무실을 나서는 순간 '따르릉' 전화벨이 울렸다. ＜BTHO0425＞
すべての部員が事務室を出る瞬間，‘リリーン’と電話がなった．

例）도중（途中），대신（代わり），동시（同時），사이（間），
한편（一方），순간（瞬間）など

上記の名詞は名詞単独で，あるいは助詞を伴って，「하는＋名詞（助詞）」が全体として接続形のように機能することが多い．한편（一方），즉시（即時）は，言語資料におけるすべての用例が，순간（瞬間）は，하는と共起する 893 例のうち 240 例を調査した結果，240 例中 211 例，87.9%が하는とともに接続形のように機能する．

これらの名詞は하는と結合し，하는が表す事柄と上位節の事柄の時間的前後関係を示す機能を果たす点で，複数の事態を時間順に配列する時，どこに位置するか（先行，同時，後行）という文法概念であるタクシス的な機能を果たしている．[52] 例えば，도중（途中），동시（同時），순간（瞬間）は連体節の表す事柄と上位節の事柄が同時に行われることを表す機能を果たしている：

(154) 그날 집으로 가는 도중 접촉 사고가 일어났다. ＜BTEO0287＞
その日，家に帰る途中で接触事故が起こった．

(155) 수분이나 염분의 부족은, 아기의 건강을 해치는 동시에 조급하고도 멍청한 사람이 되도록 만든다. ＜BTHO0429＞

52) 노마히데키[野間秀樹](1993)は，韓国語のⅠ-다가，Ⅱ-면서のような接続形，およびⅡ-때，「Ⅱ-ㄴ 뒤에」，「Ⅰ-는 도중에」のような分析的な形もタクシス的な機能を持っていると述べている．
工藤真由美(1995:221-222)は「学校に行く時けがをした」「寝る前に歯をみがきなさい」のような文を〈複数の出来事間の時間関係〉の様々を表し分けるために発達している「時間の従属複文」であるとし，時間の従属複文の骨組を構成するのは，〈継起性－共起性〉というタクシスであると述べている．さらに，時間巾の観点から，「トキ，マエ，アト」のような〈時期限定〉的なものと「アイダ，マデ，カラ」のような〈期間限定〉的なものに分かれるとしている．

水分や塩分の不足は，赤ちゃんの健康を損なうと同時に（lit. 損なう同時に），せっかちで愚かな人になるようにする．

(156) 이런 현실을 개선하려면 변호사시험을 통해 법조인의 양적 증가를 꾀하는 한편으로, 일정기간의 변론 실적과 덕망이 검증된 변호사를 판·검사로 임용해야 한다. ＜BTAE0199＞
このような現実を改善するには，弁護士試験を通じて，法曹人の量的増加を図る一方で，一定期間の弁論実績と人望が検証された弁護士を判事や検事に任用しなければならない．

즉시（即時）は，それを修飾する連体節の指し示す事柄との時間差が殆どない状態で，上位節の指し示す事柄が起こることを表す：

(157) 특히 이번 사건과 같은 경우 그 성격상 검찰은 진상이 밝혀지는 즉시 우선적으로 국민에게 알릴 의무가 있다. ＜BTAB0176＞
特に今回の事件のような場合，その性格上，検察は真相が明らかになるや直ちに（lit. 真相が明らかになる即時），優先的に国民に知らせる義務がある．

なお，길は意味が抽象化し，「途中」の意を表す場合は하는のみと共起する：[53]

(158) 그녀는 가는 길에 반드시 자기 집에 들러 달라고 나에게 짤막하게 말하고 눈길을 걸어 돌아갔다. ＜BTEO0298＞
彼女は行く途中で必ず自分の家に寄ってもらうように，私に短く言って雪の積もった道を帰って行った．

하는とともに接続形のように機能する＜하는志向名詞＞には，하는との結合が非常に強いものがあり，そのリストを示す：

하는 길에（…する途中で）
하는 도중에（…する途中で）
하는 한편（…する一方）
하는 한（…する限り）[54]

하는と名詞が接続形のように機能する場合，例えば，도중（途中），사이（間）を修飾する하는の＜動作継続動詞＞の頻度が，한편（一方），순간（瞬間）を修飾する하는の＜動作継続動詞＞の頻度より高い．하는と名詞が「～する間／途中」を表す場合は，하는をとる動詞に一定時間継続する＜動作継続動詞＞が好まれるようである．

以上，하는＜状況的内容関係＞の構造的特徴について考察した．하는「外の関係」のうち，＜状況的内容関係＞の特徴について言うと，被修飾名詞に소리（音），느낌（感じ）などが来て，被修飾名詞（N）は하는との繋がりで「…するときの N」のように解釈される．하는

53) 안효경(2001:58)は「가는 길이다」（行くところである）における길（道）が依存名詞（不完全名詞）として特徴を持っているものの，補文の動詞として오다（来る），가다（行く）のみをとることから，具体的・空間的な「道」の意味が維持されていると見て，自立名詞（完全名詞）と見るのが妥当であると述べている．
54) 言語資料によると，한（限り）が한と共起する場合は，その殆どの例において「-에 관한 한」（…に関する限り）のように使われている．

をとる動詞には，＜動作継続動詞＞がもっとも多いが，＜結果継続動詞＞＜状態変化動詞＞も見られる．

最後に，하는と共に接続形のように機能する名詞には，순간（瞬間），동시（同時），한편（一方）などがあった．これらの名詞は하는で表される事柄と上位節の事柄が同時に行われることを表す．

3.6. ＜하는志向名詞＞が한や할と共起する場合

3.6.1. ＜하는志向名詞＞が한と共起する場合

3.4 でも見たように，＜하는志向名詞＞が하는と「内の関係」の構造で現れる場合は，하는をとる動詞が基本的に＜動作継続動詞＞であった．言語資料の調査の結果，＜하는志向名詞＞が한と共起する場合は，連体形をとる動詞の種類や，連体形との関係において하는と共起する場合と非常に異なる様相を見せていることがわかった．＜하는志向名詞＞が한と共起する場合，한をとる動詞は基本的に＜結果継続動詞＞や＜状態変化動詞＞である．そして被修飾名詞は動作の及ぶ場所を表す場合が多い：

(159) 모래와 눈이 섞인 바람이 불어왔다. ＜BTEO0289＞
砂と雪が混ざった風が吹いてきた.

(160) ＜…＞사제가 유혹과 독소들로 가득찬 세상에서 순결하고 결백한 마음을 갖도록 기도를 도와야 한다. ＜BTAZ0221＞
＜…＞司祭が誘惑と毒素で満ちた世の中で純粋で潔白な心を持つように祈りを助けないといけない.

(161) 진우는 수혜를 태운 버스가 시야에서 사라지고서도 그 자리에 한동안 더 서 있었다. ＜BTEO0329＞
チヌはスヘを乗せたバスが視野からなくなってからも，その場で暫く立っていた.

(162) 우유에는 영양소는 있지만, 항체라고 하는, 이른바 병에 대한 강력한 저항력을 지닌 요소는 없다. ＜BTHO0429＞
牛乳には栄養素はあるが，抗体という，いわゆる病気に対する強力な抵抗力を持つ要素はない.

つまり，同じ被修飾名詞であっても，하는と한はそれぞれが成す連体修飾構造自体が非常に異なっており，하는は「달리는 버스」（走るバス）のように，被修飾名詞の動的な側面を表し，한は「수혜를 태운 버스」（スヘを乗せたバス）のように，被修飾名詞の静的な側面を表す.

一方，하는と「外の関係」の構造で現れた버릇（癖），행위（行為）のような＜事柄名詞＞は한と次の 3 つのパターンで現われた：

① 생기다（生じる）のような＜状態変化動詞＞の한と「内の関係」の構造で現れる.
② 「-에 대한」（…に対する），「-를 위한」（…のための），「-에 따른」（…による）のような後置詞に用いられる한と共起して現れる.
③ 「短絡」の한と現れる.[55]

(163) 혼자 살며 생긴 버릇이야. ＜BTEO0302＞

55) 2.3.2 参照.

一人暮らしでできた癖だ.

(164) 즉 일을 대하는 태도와 일에 대한 습관이 바탕이 된 상태에서 그에 필요한 지식과 지혜 및 기술들을 조화롭게 연마해나간다는 자세가 필요하며<…>
＜BTHO0400＞
つまり仕事に対する態度と仕事に対する習慣が基礎になった状態で，それに必要な知識と知恵，技術を調和的に磨いていくという姿勢が必要であり＜…＞

(165) 목숨을 건/목적의식을 가진/격식을 갖춘 행위
命を懸けた／目的意識を持った／格式を備えた行為

버릇（癖），행위（行為）のような＜行為名詞＞は，하는と＜同一内容関係＞で現れ，名詞の示す事柄が具体的にどのような事柄であるかを하는から知ることができる．それに対し，＜行為名詞＞が한と共起する場合は，＜行為名詞＞の具体的な内容は分からない．[56] 以上のことから，＜同一内容関係＞を実現する「하는+＜行為名詞＞，＜方法名詞＞…」は하는の典型的な構造の一つであるということがわかる．[57]

3.6.2. ＜하는志向名詞＞が할と共起する場合

＜하는志向名詞＞が할と共起する場合は，「할 지도 모를」（…するかもしれない），「해야 할」（…すべきな）のような動詞の分析的な形が할として現れている例が多い：

(166) 어떻게 불지 모를 바람, 온 신경을 세워 일기예보를 들어야 하는데<…>＜BTEO0314＞
どのように吹いてくるか分からない風，全神経を使って天気予報を聞かないといけないのに＜…＞

(167) 사람이 되기 위해선 무엇보다 자기가 살아가야 할 세상을 제대로 알아야 한다. ＜BTBF0259＞
人になるためには何より自分が生きていかなければならない世の中についてきちんと知らなければならない.

上の例における할は被修飾名詞の指し示す対象に対する話し手の「判断」や「評価」を述べるようなニュアンスが強く感じられる．それに対し，하는は「부는 바람」（吹いてくる風），「방으로 들어오는 바람」（部屋に入ってくる風）のように，話し手が被修飾名詞の指し示す対象の様相をありのまま叙述・規定するようなニュアンスが強い.

56）과정（過程）は「교도서에 오게 된 과정」（刑務所に来ることになった過程），「그들이 고향을 떠난 과정」（彼らが故郷を離れた過程）のように한と「外の関係」で現れる．しかし한をとる動詞はすべて＜状態変化動詞＞であり，この際，과정（過程）は경위（経緯）の意を表すと見られる.

57）＜様子名詞＞は한と「外の関係」で現れる場合がある．その際，한をとる動詞は＜状態変化動詞＞である：

긴장한/(갈 곳이) 마련된/(뭔가를) 알아낸 눈치
緊張した／(行く所が)用意された／(何かを)分かった 様子

さらに，＜하는志向名詞＞が할と共起する場合には，上位節に곧（すなわち），아마도（おそらく）のような副詞や，「할 수 있을 것이다」（…する可能性があるだろう），「하기 쉽다」（…しやすい）などの「予測」や「心配」を表す形式が多く現われる：

(168) 그칠 비가 아닌 것 같아. ＜BTEO0312＞
やむような雨ではなさそう.

(169) 우리나라에서 긍정적인 효과로 작용할 요인은 아마도 서비스와 유통부문의 효율 향상을 들 수 있을 것이다. ＜BTBA0230＞
わが国に肯定的な効果として作用する要因としては，おそらくサービスと流通部門の効率向上を挙げられる.

(170) 그러나 이번 전경련 사태는 정부의 개입을 정당화할 요소가 별로 없어 보인다. ＜BTAA0154＞
しかし今回の全国経済連盟の事件は政府の介入を正当化する要素があまりないようである.

(171) 하지만 급속히 발전하고 있는 국내 네트워크 환경과 고객을 위한 다양한 서비스를 개발한다면 발전할 요소는 충분히 가지고 있다고 보인다. ＜BTBA0227＞
しかし急速に発展している国内のネットワーク環境と顧客のための多様なサービスを開発すれば，発展する要素は十分あると思われる.

(172) 그러나 통일이 이루어질 단계에서는 예기치 않던 사태가 밀어닥칠까 염려된다. ＜BTHO0124＞
しかし統一が実現される段階では，予期しなかった事態が起こるか心配である.

以上，＜하는志向名詞＞が한と共起する場合や할と共起する場合の特徴を見た．＜하는志向名詞＞が한と共起する場合は，主に動詞の種類や한との関係が異なっていることが確認できた．そして＜하는志向名詞＞が할と共起する場合は，할をとる動詞に，「할 지도 모를」（…するかもしれない）のような，分析的な形が할として現れる場合が多く，上位節には「予測」や「心配」を表す形式が現れる特徴が見られた.

3.7. 第 3 章の結び

第 3 章では，言語資料の頻度調査により，動詞の中には하는をとる頻度が非常に高い動詞や하는と非常に高い頻度で現れる被修飾名詞があることを示した．そして하는連体修飾構造を成す動詞と被修飾名詞の特性を明らかにした.

＜하는志向名詞＞には，하는と主に「内の関係」で現れる名詞と，主に「外の関係」で現れる名詞がある.

まず，3.7.1 では，하는をとる動詞の語彙的・文法的特徴について述べ，3.7.2 では，하는「内の関係」について述べ，3.7.3 では，하는「外の関係」について考察した結果を示すことにする.

3.7.1. 하는をとる動詞に見られる特徴

＜하는志向動詞＞には動作の時間的長さに注目すると，一定時間継続する動きを表す動詞が多い．これらの動詞は，アスペクト的な特徴に注目すると，「하고 있다」をとり，「動作継続」のみを表す＜動作継続動詞＞（떨리다（震える），웃다（笑う））である．＜動作

継続動詞＞の中でも，떨리다（震える），내리다（降る）のような無意志的な自動詞が特に하는をとる頻度が高い．

また，具体的な動作であろうが，抽象的な動作であろうが，＜하는志向動詞＞は＜非内的限界動詞＞(atelic verb)である特徴がある．＜非内的限界動詞＞(atelic verb)とは，動詞の語彙的意味の中に「運動が必然的に尽きる内的時間的限界」という意味特徴をとりだすことができない動詞である．

さらに，時間の中で現象する動作か否かに注目すると，＜하는志向動詞＞には時間の中で現象する動作ではない関係，程度などを表す＜関係規定動詞＞が多い．この種の動詞は하는をとり，「超時」を表す．

最後に，動詞の語彙的意味に注目すると，＜하는志向動詞＞には，「知覚」や「心理」といった「内的活動」を表す動詞が多い．これらの動詞は「（…처럼）보이다（（…のように）見える）」，「마음에 들다」（気に入る）のように「하고 있다」をとりえない．これらの動詞は하는をとり，「現在」を表す場合が多い．

本稿の動詞分類別の하는をとる頻度を示すと，次の通りである：

表 12．動詞分類別の하는をとる頻度

大分類	下位分類	時間の中での展開性	継続性	限界性	한が「現在」を表す	하는をとる頻度
内的限界動詞（telic verb）	結果継続動詞	○	○	○	○	
	状態変化動詞	○	×	○	○	
非内的限界動詞（atelic verb）	動作継続動詞	○	○	×	×	
	内的認知動詞	○	×	×	×	
	関係規定動詞	×	×	×	×	
	属性動詞	×	×	×	○	

※■ 하는をとる頻度が高い．■ 하는をとる頻度が低い．□ 하는をとる頻度が非常に低い．
□一般に하는をとりにくい．

一方，＜結果継続動詞＞や＜状態変化動詞＞は하는をとる頻度が低く，하는をとる場合は一般に「超時」を表す．

3.7.2. 하는「内の関係」に見られる特徴

하는は一定時間継続する動作や反復的な動作，または具体的な時間から離れた一般的な事柄を表す形式である．하는「内の関係」の用例を調査した結果，あらゆる動詞が하는を均等にとるわけではなく，「一定時間継続する動作」や「脱時間的な関係や概念」を表す動詞が하는をとる傾向が強いことが確認された．本稿の動詞分類によると，＜動作継続動詞＞＜内的認知動詞＞など，＜非内的限界動詞＞が하는をとる頻度が高い．

次に被修飾名詞が하는の表す動作や状態に対して何を表すのかについて調査した結果，被修飾名詞が하는に対し，「主体」を表す場合がもっとも多く，その他に「動作が行われる場所」，「時間」，「客体」を表す場合が見られた．

1) 하는＋主体
＜動作継続動詞＞＋「自然物」「人間」など
쏟아지는 비 降り注ぐ雨
지나가는 자동차 通り過ぎる車
뛰어가는 아이 走っていく子供
꿈을 꾸는 여자 夢を見る女
도시를 살아가는 사람들 都市を生きていく人たち

＜内的認知動詞＞＋「場所」「もの」など
멀리 보이는 큰길 遠くに見える大通り
수수하게 보이는 드레스 地味に見えるドレス
그의 이름을 모르는 학생 彼の名前を知らない学生

＜関係規定動詞＞＋「抽象」「もの」など
천만 명이 넘는 사람들 千万人を超える人たち
나에게 어울리는 색깔 私に似合う色
14 살 차이가 나는 동생 14 歳の差がある弟
거리를 나타내는 표지판 距離を表す表示版

2) 하는＋動作が行われる場所（または出どころ）

＜動作継続動詞＞＋「場所」「もの」など
우리가 사는 세상 私たちが住んでいる世界
물이 새는 천장 水が漏れる天井
냄새 나는 입 臭い匂いがする口

3) 하는＋動作が行われる時間
＜動作継続動詞＞＋「時間」
비 오는 수요일 雨の降る水曜日
쉬는 시간 休む時間
대표들이 서울에 머무는 기간 代表たちがソウルに滞在する期間

4) 하는＋客体
＜動作継続動詞＞＋「もの」「事柄」など
아이들이 하는 놀이 子供たちがする遊び
파는 물건 売っているもの

＜内的認知動詞＞＋「抽象」「事柄」など
고객이 원하는 가치 顧客が求める価値
싫어하는 노래 嫌いな歌

＜関係規定動詞＞＋「抽象」など
자동차가 차지하는 비중 自動車が占める比重

次に하는の表す意味について述べる．하는は文脈その他によって多様な意味を表すが，動詞によって하는の意味に偏りを見せる傾向が見られる．例えば，＜内的認知動詞＞の하는は「現在」を表す傾向が強く，＜関係規定動詞＞の하는は「超時」を表す．

なお，＜結果継続動詞＞，＜状態変化動詞＞は「빵을 만드는 기계」（パンを作る機械），「접는 칼」（ポケットナイフ）（lit.折りたたむナイフ）のように用いられ，하는構造で，「用途」，「機能」など，「一般的・恒常的な事柄」を表す．

このような分析結果から，하는が表す意味はそれをとる動詞の種類と一定の関連性を持つことがわかる．

3.7.3. 하는「外の関係」に見られる特徴

ここでは，하는「外の関係」の構造的特徴と하는の表す意味について述べることにする．まず，하는「外の関係」のうち，＜同一内容関係＞の特徴について述べる．하는は＜行為＞，＜様子＞，＜方法＞など，様々な＜事柄名詞＞と＜同一内容関係＞を実現することで，被修飾名詞が表す行為や現象が具体的にどのようなことを表すのかを補充する働きをする．하는が「終わっていない事柄」，つまり「動作」や「現象」自体を表すため，＜行為＞，＜様子＞，＜方法＞など，様々な＜事柄名詞＞の内容を補充することが可能であると思われる．

抽象的行為	具体的行為
하는（動作）＋시늉（ふり） ➡	먹는 시늉（食べるふり） 자는 시늉（寝るふり） 노는 시늉（遊ぶふり）

次に하는「外の関係」のうち，＜状況的内容関係＞の特徴について言うと，被修飾名詞（N）は하는との繋がりで「…するときに出る／感じる N」のように解釈される場合があり，被修飾名詞には主に소리（音），냄새（匂い）のような＜現象名詞＞，느낌（感じ），재미（楽しみ）のような＜感覚名詞＞が来る．

なお，하는と共に接続形のように機能する名詞には，순간（瞬間），동시（同時），대신（代わり），한편（一方）などがあった．これらの名詞は하는で表される事柄と上位節の事柄が「同時」に行われることを表す．

次に，하는「外の関係」における하는を動詞について述べると，「外の関係」では被修飾名詞によって하는をとる動詞に偏り見せることがわかった．例えば，被修飾名詞が눈치（様子），빛（様子）のような「心的様子」を表す名詞である場合は，하는をとる動詞に「心理」を表す動詞が多く見られる．一方，被修飾名詞が순간（瞬間）を修飾する場合は，하는をとる動詞に넘어지다（倒れる）のような＜状態変化動詞＞が多い．

そして하는の意味に注目すると，被修飾名詞が「音」や「匂い」，「様子」を表す場合，하는は主に「現在」を表す．とりわけ기척（気配），눈치（様子），빛（様子）と共起する하는は「現在」を表す傾向が非常に強い．「外の関係」において하는の表す意味が被修飾名詞によって決まるという現象から，하는の表す意味が上位節からも，発話時からも独立して決まる場合があることがわかる．

最後に，＜하는志向名詞＞が한と共起する場合を調査したところ，＜하는志向名詞＞が한と共起する場合は，＜状態変化動詞＞の한と「内の関係」で現われるほか，「-에 대한」（…に対する），「-를 위한」（…のための）のような後置詞として用いられる한と共起することがわかった．

一方，＜하는志向名詞＞が할と共起する場合は，「할 지도 모를」（するかもしれない）のような分析的な形が할として現れる例が多く，上位節に話し手の「予測」や「心配」を表す形式が現われる特徴が見られた．このような調査を通じて，하는構造はそれを構成する要素や要素間の関係において，한や할の構造と大きく異なっていることがわかる．例えば,被修飾名詞が행동（行動）である場合，하는構造では「다리를 꼬는 행동」（足を組む行動）

のようになり，행동（行動）の具体的内容を表し，한の構造では「버릇이 된 행동」（癖になった行動）のようになり，행동（行動）の属性を表し，할の構造では「비난 받을 행동」（非難を受けるような行動）のようになり，행동（行動）に対する話し手の評価を表す．同じ被修飾名詞であっても，하는，한，할それぞれの構造は非常に異なる様子を見せるのである．

第4章 한による連体修飾構造の特徴

この章では，現代韓国語の動詞の連体形のうち，いわゆる「過去」を表す連体形である한による連体修飾構造について分析・考察することにする．考察に当たっては，한をとる動詞の語彙的・文法的特徴，被修飾名詞の語彙的・文法的特徴，そして한と被修飾名詞の関係などについて分析を行うことにする．また한連体修飾構造の特徴と한の表す意味との関連性についても考察する．

4.1 では한の意味用法についての従来の研究をまとめ，4.2 では，言語資料に基づき，한をとる動詞の語彙的・文法的特徴について分析を行う．その後，4.3 では，한と共起する被修飾名詞の特徴について述べ，4.4～4.6 では，한の構造を「内の関係」「外の関係」に分類し，それぞれの特徴について分析を行う．最後の 4.7 では，＜한志向名詞＞が하는や할と共起する場合の様相について考察する．

4.1. 한の意味用法について

まず，時制の観点から，한を「過去」を表すと見る研究には，李翊燮・任洪彬(1983)，남기심・고영근(1985)，菅野裕臣(1986)などがある．

남기심・고영근(1985)は한が普通「過去」を表すが，動詞の意味が結果性を持っていると完了的な用法を表すこともあると述べている．

菅野裕臣(1986)は한が「過去」を表すとし，「（一部の動作で）現在の状態」を表すと述べている．

中島仁(2002)は한の表す意味を動詞のアスペクト的クラス(浜之上幸(1991))と関連付けて考察し，한が「現在と切り離された過去の事柄」を表す場合にのみ，한をとる動詞に制限がないとし，한を「過去」を表すテンス形式と規定している．

次に，アスペクトの観点から，한を「完了」を表すと見る研究がある．

南基心(1978)は한を「過去」だと規定すると，どの時点を基準とするかというのが不明であり，言語外的な状況によって不規則的に決定されもすると述べている：

(173) 읽은 책도 다시 읽겠다.
読んだ本も再び読む.

また，上の例の읽은（読んだ）は動詞が表す動作がいつ起こったことなのかについては何も語っていないため，「-ㄴ」は時制以外のものであり，「完了の相を見せるというのがもっとも妥当な解釈であるだろう」と述べている．

金倉燮(1987)は한の表す状況が現在や未来にあり，その意味を絶対時制としても，相対時制としても解釈できない例文が存在するとし，[58] 動詞に結合した한は相対時制や絶対時制による過去を表すわけではなく，動詞の語幹が指し示す状況が完全に成立した，またはその成立の結果が持続することを表すと述べている：

(174) 나는 내년에 이 빈터 위에 우리 집이 지어진 모습을 상상하고 있어.
私は来年この空き地に私の家が建てられた姿を想像している.

野間秀樹(1997a:125)は「「過去形」と呼ばれる한は，終止形の-았/었-，つまり，했다形と平行するもののように論じられることが多い．しかし終止形においては＜하고

58) 発話時を基準としても，上位節の時を基準としても，基準時点以前の事柄として解釈できない例は，(174)のように話し手が한で表される状況を想像する場面や具体的な時間と離れた「単なる状態」を表す場面に限られるようである．

있었다＞というアスペクト形式との承接が多用されるのに対し，連体形においては＜하고 있은＞という承接がきわめて稀である点で，両者は著しい差を見せていることに注目したい．実は한自体がそもそも相当に「完了」や「結果」とでもいうべきアスペクト的性格が濃いために「進行」や「持続」的な＜하고 있다＞とは承接に齟齬をきたすのかもしれない」と述べている．

吳充淵(2012)は「-ㄴ」は基本的に「静態性」を基盤としていると仮定し，「-ㄴ」が静態動詞（形容詞）と結合する場合は，原型的な冠形語句になるが，それが動詞性のある動詞と結合する場合は，「完了」または「完了後の結果状態」を表し，[59]「静態性」を表すようになると述べている．

以上の先行研究を参考しつつ，한の用例を考察すると，한はアスペクト的な性格が濃い形式であるということがわかる．その根拠は次の通りである：

1) アスペクト形式との承接が難しい．
2) 動詞の示す事柄が終わり，現在に持続的に関与していることを表す場合は했던や하던との置き換えが不可能である．
3) 明確に「過去」を表す한は했던に置きかえうる．
4) 「천진해 보이다」（無邪気に見える）の보이다（見える）のような＜内的認知動詞＞の過去形は보였던（見えた）となるのが一般的であり，보인（見えた）になるのは極めて稀である．한を「過去」を表す形式と規定すると，動詞によって連体形のテンス体系が異なる結果となる．

以上のような根拠から，한は吳充淵(2012)が述べているように，「完了」または「完了後の結果状態」を表し，「静態性」を表す形式であると見ることができる．한はある基準時点以前のことについて述べる点で，点としての事態の前後関係を問題にするテンスの観点からは「過去」を表すと言える．しかし，한の用例を見ると，한は基準時点より以前の事柄の成立よりも，むしろその結果としての現在の状態を表す場合や，複数の動作のうち先行する動作を表す場合が圧倒的に多い．

例えば，「창 가로 온 엄마가 나에게 손짓했다」（窓際に来た母が私に手を振った）における「창 가로 오다」（窓際に来る）という動作は，손짓하다（手を振る）という出来事の時点より先行し，2 つの動作は共に「現在」の領域に納まっていると考えられる．온（来た）を왔던（来ていた）に言い換えることができないのは，왔던（来た）になると，明らかに過去の動作を表すため，손짓하다（手を振る）という動作に繋がらないからである．このように考えると，한はテンスの観点から,「現在の過去」のように規定することもできる．

さらにムード的な観点から言えば，한は하는と同様，話し手が動詞の表す事態を既存の事実として客観的な態度で述べるという機能を持つ形式である：

한：動詞の表す事態が完全に終わり，その状態が基準時点においても有効であることを表す形式

한は文脈によって次のような意味を表す：

---

59) 吳充淵(2012)は「-은」が，形容詞を除いたすべての動詞に「完了性」を与えるとしている．しかし，本稿の言語資料の調査によると，例えば，서성거리다（うろつく）のような＜動作継続動詞＞は「-은」との結合する自体で「完了」を表すというより，主に「서성거린 끝에」（うろついていたすえに），「서성거린 적이 있다」（うろついたことがある），「서성거린 뒤」（うろついた後）のように，끝（末），적（時），뒤（後）のような被修飾名詞とともに使われることで，「完了」を表すようになる傾向が見られる．

① 「過去」：動詞の表す事態が終わり，現在の状況に関与していない．했던に置き換えうる．

(175) 조용히, 아무 마찰 없이 떠난 사람들은 예전에 마을에 함께 살 때도 조용히 사는 걸 좋아한 사람들이었다. ＜BTEO0295＞
静かに，何の争いもなく離れた人たちは，昔，町に一緒に住んでいた時も静かに暮らすのが好きな人たち（lit. 静かに住むのを好んだ人たち）であった．

(176) ＜…＞단어 한마디를 가지고 오랜 시간 머리를 싸매고 고민한 학자들의 일화가 적지 않다. ＜BTGO0345＞
＜…＞単語１つで長い時間頭を抱えて悩んだ学者たちの逸話が少なくない．

② 「完了」[60]：動詞の表す事態が終わり，現在の状況に関与していることが文脈上明確な場合．基準時点において行われる複数の動作のうち先行する動作を表す場合がある．

(177) 새로 만든 둥지에서는 다른 텃새들이 열심히 제 삶을 살았답니다. ＜BTGO0097＞
新しく作った巣では他の留鳥たちが一所懸命それぞれの一生を生きましたよ．

(178) 농부는 놀란 마음으로 조심스레 그곳을 파헤쳐 보았습니다. ＜BTGO0362＞
農夫は驚いた状態で（lit. 驚いた心で）注意深くそこを掘り返してみました．

③ 「現在の状態」：動詞の表す事態が終わり，その結果が現在の状態として存在していることが文脈上明確な場合．「해 있는」，「하고 있는」と置き換えうる場合がある．ある状態をその起源をまったく含意せずに表す．

---

60) Comrie, B.(1976:52)は完了(perfect)を次のように規定している：

> The perfect is rather different from these aspects, since it tells us nothing directly about situation in itself, but rather relates some state to a preceding situation.（中略）
> More generally, the perfect indicates the continuing present relevance of a past situation. This difference between the perfect and the other aspects has led many linguists to doubt whether the perfect should be considered an aspect at all.
>
> （「完了」はこれらのアスペクトとは多少異なる．なぜなら，これはわれわれに状況自体については何も直接に言及せず，ある状況をそれに先行する状況と関連させる．（中略）一般的に，「完了」は過去の状況の現在への持続的な関与を表す．このような「完了」と他のアスペクトとの相違は，言語学者らが「完了」をアスペクトとして考えるべきかどうかについて疑念を抱かせる）（日本語訳は本稿筆者による）

亀井孝・河野六郎・千野栄一編著(1996:9)によると，「完了」とは「自己の内的・抽象的限界に達した動作」を表す．そしてこの定義はロシアで知られている２つの完了体の定義のうち，ヴェノグサトーフの見解であるとし，そこでいう「限界」とは，「あるポイントに達したとき動作がなすべきことをなして中止されなければならない，そのポイントを意味する」と述べている．

(179) 차가 폭 파인 길에 빠질 때마다 계속해서 운전자를 바꿔야 했어. ＜BTEO0315＞
車が深くへこんだ道に入るたびに続けて運転する人を変えなければならなかったよ.

(180) 나는 ＜…＞이상하게 생긴 벌레와 눈이 마주쳤다. ＜BTEO0282＞
私は＜…＞奇妙な形の虫（lit. 奇妙な形をした虫）と目が合った.

この節では，한の表す意味について考察した．한をとる動詞や被修飾名詞など，한の構造は한の意味といかなる関係があるのか，順次究明していきたい．한の本質的な意味を明らかにする上でも，한の構造の分析は重要な道程となると思われる．次の 4.2 では，한をとる動詞には，いかなる特徴があるのかについて考察することにする.

4.2. 한をとる動詞の語彙的・文法的特徴

ここでは，한をとる動詞について，動詞の自他，および動詞のアスペクト的な観点から分析を行うことにする.

4.2.1. 한をとる頻度の高い動詞

まず，한をとる動詞にはいかなるものが多いのかについて見ることにする．言語資料における한をとる動詞は異なり語数 2,419 種（単純動詞）であり，総 189,622 例である．頻度順に上位 10 位（累積比 35%以上）までを提示すると，次の通りである．数字は한をとる頻度である：

대하다（対する）21, 563／지나다（過ぎる）8, 258／하다（する）8, 026／위하다（ためだ）7, 515／되다（なる）7, 171／관하다（関する）3, 754／받다（もらう）3, 100／가지다（持つ）2,951／나오다（出る）2, 344／보다（見る）2,292

言語資料の調査の結果，한をとる頻度が高い動詞には，第一に，「-에 대한」「-에 관한」の대하다，관하다のように後置詞に用いられる動詞が多い．そのような動詞には，대하다（対する），위하다（ためだ），관하다（関する），의하다（因る），따르다（従う）などがある.

第二に，비다（空く），빠지다（落ちる），담기다（盛られる）のような主体の「状態変化」を表す動詞が多い.

最後に，오다（来る），들어가다（入っていく）のような主体の位置変化を表す動詞が多い．하는をとる頻度が高い動詞には가다（行く）が 4 位，오다（来る）が 11 位になっているのに対し，한の場合は，오다（来る）が 11 位，가다（行く）が 16 位になっており，오다（来る）の頻度が가다（行く）を上回っている.

次に，上記の動詞の言語資料における総頻度に対する한をとる頻度を調査した．その結果，한をとる頻度で 13 位であった비다（空く）が 68.2%と 1 位となり，3 位であった하다（する）は 2.4%で，48 位になった．ここでコーパスにおける総頻度 100 例以上の動詞について，総頻度のうち，한をとる頻度を調査した．上位 10 位までの動詞は次のようなものがあった．括弧内は総頻度に対する한をとる頻度の比率を示す：

비다（空く）(68.2%)／적히다（書かれる）(63.2%)／어리다（涙ぐむ）(55.4%)／담기다（盛られる）(49.0%)／늙다（老いる）(44.4%)／관하다（関する）(42.1%)／병들다（痛む）(41.7%)／타고나다(41.2%)／젖다(39.8%)／섞이다（混ざる）(38.9%)

관하다（関する）を除くと，上の動詞のすべてが＜内的限界動詞＞（telic verb）である．これらの動詞は한をとることで主体や客体の状態を表す特徴がある．한は「動詞の表す事態が完全に終わり，その状態が基準時点においても有効であることを表す形式」であるため，必然的に尽きる時間的内的限界を持つ＜内的限界動詞＞（telic verb）と馴染みやすいのではないだろうか．

次に，하는，한，할のうち，한との共起頻度がもっとも高い動詞（＝＜한志向動詞＞）を自他別に見ることにする．まず，自動詞の＜한志向動詞＞には次のようなものがあった：

表 13. 自動詞の＜한志向動詞＞

順位	動詞	하는		한		할		合計
		頻度	比率	頻度	比率	頻度	比率	
1	관하다（関する）	0	0.0%	2194	100.0%	0	0.0%	2194
2	의하다（因る）	2	0.2%	974	99.8%	0	0.0%	976
3	인하다（因る）	0	0.0%	458	99.8%	1	0.2%	459
4	적히다（書かれる）	1	0.9%	115	99.1%	0	0.0%	116
5	늙다（劣る）	4	0.9%	423	98.4%	3	0.7%	430
6	비다（空く）	7	0.9%	741	98.3%	6	0.8%	754
7	담기다（盛られる）	2	0.7%	295	98.0%	4	1.3%	301
8	젖다（濡れる）	3	1.0%	284	96.9%	6	2.0%	293
9	병들다（病む）	1	0.9%	113	96.6%	3	2.6%	117
10	어리다（こもる）	7	3.4%	196	96.6%	0	0.0%	203
11	얽히다（からむ）	2	1.7%	112	95.7%	3	2.6%	117
12	섞이다（まざる）	6	2.7%	211	94.6%	6	2.7%	223
13	마르다（乾く）	9	2.4%	347	93.8%	14	3.8%	370
14	놓이다（置かれる）	14	3.9%	337	93.1%	11	3.0%	362
15	지치다（疲れる）	3	1.7%	168	92.8%	10	5.5%	181
16	처하다（置かれる）	3	2.5%	109	92.4%	6	5.1%	118
17	박히다（差し込まれる）	8	7.0%	106	92.2%	1	0.9%	115
18	틀리다（間違う）	11	8.5%	116	89.2%	3	2.3%	130
19	묵다（泊まる）	5	2.9%	153	87.9%	16	9.2%	174
20	실리다（乗せられる）	9	6.1%	130	87.8%	9	6.1%	148
21	쌓이다（積もる）	18	10.3%	152	86.9%	5	2.9%	175
22	숨다（隠れる）	9	7.4%	101	82.8%	12	9.8%	122
23	붙다（つく）	43	14.7%	231	78.8%	19	6.5%	293
24	잠들다（眠る）	11	7.6%	112	77.2%	22	15.2%	145
25	앉다（座る）	43	10.4%	319	77.2%	51	12.3%	413
26	썩다（腐る）	32	20.5%	118	75.6%	6	3.8%	156
27	남다（残る）	152	17.7%	645	75.3%	60	7.0%	857
28	빠지다（溺れる）	80	19.3%	295	71.1%	40	9.6%	415

29	끝나다（終わる）	129	15.9%	558	68.9%	123	15.2%	810
30	생기다（生じる）	190	23.9%	524	66.0%	80	10.1%	794
31	잡히다（取られる）	45	24.5%	121	65.8%	18	9.8%	184
32	눕다（横になる）	12	10.7%	73	65.2%	27	24.1%	112
33	생겨나다（出来てくる）	23	22.3%	66	64.1%	14	13.6%	103
34	태어나다（生まれる）	57	11.9%	307	63.8%	117	24.3%	481
35	쓰러지다（倒れる）	22	20.6%	68	63.6%	17	15.9%	107
36	어쩌다（いかにする）	1	0.8%	75	62.5%	44	36.7%	120
37	죽다（死ぬ）	196	13.4%	909	62.1%	359	24.5%	1464
38	달라지다（変わる）	34	28.8%	73	61.9%	11	9.3%	118
39	떨어지다（落ちる）	270	29.5%	564	61.6%	81	8.9%	915
40	매달리다（つられる）	36	34.0%	65	61.3%	5	4.7%	106
41	열리다（開かれる）	229	28.2%	493	60.8%	89	11.0%	811
42	자라다（育つ）	89	29.6%	182	60.5%	30	10.0%	301
43	사라지다（消える）	56	20.7%	163	60.1%	52	19.2%	271
44	피다（咲く）	75	28.2%	109	60.1%	16	8.0%	200
45	터지다（割れる）	47	38.3%	70	60.1%	22	11.0%	139
46	모이다（集まる）	80	38.3%	119	56.9%	10	4.8%	209
47	펼쳐지다（広がる）	40	33.9%	65	55.1%	13	11.0%	118
48	헤어지다（分かれる）	23	13.7%	90	53.6%	55	32.7%	168
49	깨지다（割れる）	38	35.5%	57	53.3%	12	11.2%	107
50	무너지다（倒れる）	57	43.2%	65	49.2%	10	7.6%	132

まず，한をとる自動詞には，적히다（書かれる），담기다（盛られる）など，-이-，-히-，-리-，-기-といったヴォイス接尾辞や-지다，-되다がついた受動動詞が多い．

次に，動詞がとる格に注目すると，한をとる自動詞には，붙여지다（貼られる），놓이다（置かれる），담기다（盛られる）のような「에格」をとる自動詞が多い．そして動詞のアスペクト的な特徴に注目すると，한をとる自動詞には늙다（年をとる），병들다（病む），비다（空く），틀리다（間違う）のような動作の過程を想定しにくい，[61] 主体の単なる状態変化を表すような動詞が多い．[62]

61）これらの動詞も録画した画面をゆっくり再生する場合など，時間を長くとれば，動作の過程を表すことができる．

62）한송화(2002)は自動詞を主語の意味役割が「行為主」である場合を「行為性自動詞」，主語の意味役割が行為主以外である場合を「非行為性自動詞」と分類している．それによると，한をとる自動詞の殆どは「非行為性自動詞」である．한송화(2002:81-82)は，主語の意味役割が対象である自動詞は，主語の意味役が対象である形容詞と統辞論的・意味的に共通性を持っており，それが-었-，-(으)ㄴと結合すると，動詞の完了形と言うより，形容詞のように，現在の状態を表すようにも認識されると述べている．

一方，日本語にも同様の指摘があり，朴長庚(1987:90)は例えば，「沈む」という動詞は，「気持ちの晴れない状態におちこむ」の意味として使われる場合，名詞を修飾する連体修飾形になると，「沈んだ気持ち」のように「タ」形に固定されると述べ，このような意味を日本語の形容詞，形容動詞で表すと，「暗い気持ち」「沈鬱な気持ち」と表すことができると述べている．そして韓国語ではこのような意味は形容詞のみが対応しているとし，「沈む」

次に，한をとる他動詞にはいかなる特徴があるのかについて見ることにする．한をとる頻度が高い他動詞には次のようなものがあった：

表 14．他動詞の＜한志向動詞＞

順位	動詞	하는		한		할		合計
		頻度	比率	頻度	比率	頻度	比率	
1	앞두다（控える）	0	0.0%	119	100.0%	0	0.0%	119
2	닮다（似る）	1	1.0%	99	99.0%	0	0.0%	100
3	위하다（ためだ）	39	1.0%	3890	99.0%	1	0.0%	3930
4	타고나다（生まれつく）	0	0.0%	120	98.4%	2	1.6%	122
5	둘러싸다（囲む）	5	1.7%	294	98.3%	0	0.0%	299
6	마치다（終える）	12	4.5%	230	87.1%	22	8.3%	264
7	갖추다（整える）	22	7.9%	241	86.4%	16	5.7%	279
8	지니다（持つ）	58	11.9%	418	85.8%	11	2.3%	487
9	남기다（残す）	24	10.4%	194	84.0%	13	5.6%	231
10	가지다（持つ）	138	8.5%	1357	83.4%	132	8.1%	1627
11	쥐다（握る）	12	12.0%	82	82.0%	6	6.0%	100
12	잃다（失う）	41	12.6%	260	79.8%	25	7.7%	326
13	띠다（帯びる）	23	17.7%	101	77.7%	6	4.6%	130
14	저지르다（犯す）	24	15.5%	116	74.8%	15	9.7%	155
15	맡다（引き受ける）	41	13.9%	217	73.6%	37	12.5%	295
16	거치다（経る）	41	27.0%	105	69.1%	6	3.9%	152
17	모으다（集める）	51	23.7%	148	68.8%	16	7.4%	215
18	담다（盛る）	64	19.8%	220	68.1%	39	12.1%	323
19	두다（置く）	101	20.0%	339	67.1%	65	12.9%	505
20	얻다（もらう）	138	26.8%	342	66.5%	34	6.6%	514
21	정하다（定める）	52	24.2%	139	64.7%	24	11.2%	215
22	거두다（成し遂げる）	29	23.2%	80	64.0%	16	12.8%	125
23	끝내다（終える）	18	12.2%	94	63.9%	35	23.8%	147
24	입다（着る）	185	27.0%	432	63.0%	69	10.1%	686
25	벗다（脱ぐ）	36	28.8%	78	62.4%	11	8.8%	125
26	가져오다（持ってくる）	48	23.9%	121	60.2%	32	15.9%	201
27	찍다（撮る）	53	23.0%	135	58.7%	42	18.3%	230
28	그리다（描く）	104	28.4%	208	56.8%	54	14.8%	366
29	내놓다（出す）	55	26.6%	116	56.0%	36	17.4%	207

のような動詞について，動詞の動的事象の内部的展開様相，例えば，完了か未完了か，持続か瞬間か，開始か終結かのような相の意味を表すのではなく，他者と比較し，その性質や状態的特徴を表す，あたかも形容詞のような機能をする形容詞的動詞と見ることができると述べている．

30	넣다（入れる）	120	44.8%	147	54.9%	1	0.4%	268
31	만들다（作る）	754	34.7%	1177	54.1%	244	11.2%	2175
32	빼다（引く）	46	39.0%	63	53.4%	9	7.6%	118
33	넘어서다（越す）	43	32.3%	71	53.4%	19	14.3%	133
34	겪다（経験する）	131	40.3%	173	53.2%	21	6.5%	325
35	잡다（握る）	175	33.7%	275	53.0%	69	13.3%	519
36	내밀다（差し出す）	61	40.7%	79	52.7%	10	6.7%	150
37	세우다（立てる）	79	27.0%	154	52.6%	60	20.5%	293
38	버리다（捨てる）	60	32.8%	96	52.5%	27	14.8%	183
39	보내다（送る）	260	32.9%	409	51.8%	121	15.3%	790
40	던지다（投げる）	95	43.4%	113	51.6%	11	5.0%	219
41	밝히다（明かす）	98	35.5%	142	51.4%	36	13.0%	276
42	받다（もらう）	1124	35.4%	1541	48.6%	506	16.0%	3171
43	넘기다（過ぎる）	70	35.5%	91	46.2%	36	18.3%	197
44	맡기다（預ける）	29	28.4%	47	46.1%	26	25.5%	102
45	바치다（あげる）	51	41.5%	55	44.7%	17	13.8%	123
46	올리다（あげる）	158	35.5%	198	44.5%	89	20.0%	445
47	이기다（勝つ）	30	28.6%	44	41.9%	31	29.5%	105
48	배우다（学ぶ）	136	36.3%	156	41.6%	83	22.1%	375
49	심다（植える）	36	34.6%	43	41.3%	25	24.0%	104
50	내다（出す）	301	37.8%	312	39.2%	183	23.0%	796

한をとる頻度の高い他動詞の第一の特徴は，앞두다（控える），지니다（持つ）のような，動作の過程を想定することのできない<状態変化動詞>が上位を占めていることである．ここで，他動詞のうち，남기다（残す）と기다리다（待つ）をとりあげ，하는，한，할をとる頻度を示すと，次の通りである：

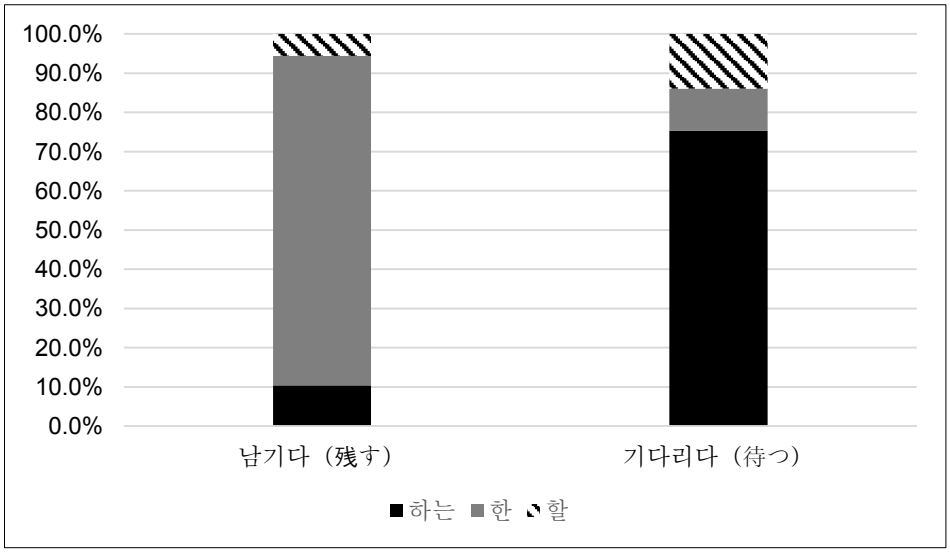

図 3. 남기다（残す）と기다리다（待つ）の하는，한，할をとる頻度

＜状態変化動詞＞の남기다（残す）は한をとる頻度がもっとも高く，＜動作継続動詞＞の기다리다（待つ）は하는をとる頻度がもっとも高いことが見て取れる．この調査結果から，動作の過程を表すのか，状態変化を表すのかという動詞の語彙的特性が連体形のとり方と強い関連性を持っていることがわかる．

한をとる他動詞の第二の特徴は，만들다（作る），그리다（描く）のように，「生産」を表す動詞が多く見られることである．これらの他動詞は한をとることで，新たな状態の発生を表すことができる：[63]

(181) 그 아이가 처음으로 아빠를 면회하러 갔을 때, 크레용으로 그린 그림을 선물로 가져갔습니다. ＜BTEO0286＞
あの子が初めて父に面会に行った時，クレヨンで描いた絵をプレゼントに持って行きました．

さらに，「授受」，「所有」，「喪失」，「着用」など，主体に変化をもたらすような動詞も見られる：

(182) 그는 뇌물을 받은 혐의로 구속됐다.
彼は賄賂を受け取った疑いで拘束された．

(183) '해리포터'의 작가 조앤 롤링도 "낯선 모험으로 가득찬, 저항할 수 없는 매력을 지닌 작품"이라며 "일단 책을 손에 잡으면 곧 다음 편을 갈망하게 만든다"는 찬사를 바쳤다. ＜BTAA0157＞
「ハリー・ポッター」の作家，ジョアン・ローリングも「見知らぬ冒険に満ちた，抵抗できない魅力を持った作品」とし，「一度本を手にとると，すぐに次編を渇望させる」という賛辞を捧げた．

(184) 성인이 된 후로 몸에 걸친 옷 때문에 이처럼 남 앞에서 초라하게 느끼긴 처음이었다. ＜BTEO0308＞
成人になった以後，身に付けた服のせいで，こんなに人の前でみすぼらしく感じたのは初めてだった．

(185) 하늘거리는 노란색 유니폼을 입은 여자들이 전시장 안으로 우리를 안내했다. ＜BTEO0306＞
ひらひらする黄色いユニフォームを着た女性たちが展示場の中へわれわれを案内した．

次に，動詞がとる格に注目すると，한をとる他動詞には，남기다（残す），두다（置く），붙이다（付ける）のような「動作の及ぶ場所」を表す「에格」をとる動詞が多い．「에格」をとる動詞が多い点は自動詞の場合と共通している．次に「에格」をとる他動詞の例を示す：

63) 例えば，「그가 만든 술」（彼が作ったお酒）は，「お酒を作る」という動作がある基準時点以前に行われたことだけを示すのではなく，お酒を造るまでのプロセスが終わり，お酒が完成した新たな状態をともに表す．それに対し，「그가 휘두른 칼」（彼が振り回した刃物）は「刃物を振り回す」という行為がある基準時点以前に行われたことを表すだけで，新たな状態を表してはいない．

(186) 설령 내가 '민담' 혹은 '전설'이라고 이름을 붙인 글을 써낸다 해도 사람들은 그것을 민담이나 전설로 보지 않는다. ＜BTEO0288＞
たとえ私が「民話」あるいは「伝説」と名前を付けた文章を書いたとしても，人々はそれを民話や伝説と見ない.

(187) 대입을 눈앞에 둔 지금은 그때를 생각하면 마음이 포근해진다. ＜BTBF0260＞
大学の入学を目前に控えた今，その頃のことを考えると心が穏やかになる.

(188) 8 월 개봉 예정인 '굿바이 마이 프랜드'는 점차 확산되고 있는 에이즈의 심각성을 고발하고 두 어린이의 참된 우정을 담은 작품. ＜BTAZ0223＞
8 月に公開予定の「グッバイ・マイフレンド」は徐々に広がっているエイズの深刻さを告発し，二人の子供の真の友情を描いた作品（lit. 二人の子供の真の友情を収めた作品）

(189) 그러한 배경을 모르는 우리 학자들 중에는 때때로 유럽인 또는 일본인들이 남긴 기록을 전혀 검토하지도 않고 인용하는 경우가 있어 당혹감을 갖게 한다. ＜BTHO0106＞
そのような背景を知らない私たち学者の中には，時々，ヨーロッパの人や日本人が残した記録を全く検討もせずに，引用する場合があり，当惑される.

以上の調査結果から，動詞の中でも，動作の過程を想定しにくい動詞や動作の結果を残すような動詞が한をとりやすいことがわかった．このような動詞の特徴はアスペクトと関連しており，次の 4.2.2 では，한をとる動詞についてアスペクト的な観点から考察することにする.

4.2.2. ＜한志向動詞＞のテンス・アスペクト的特徴

한をとる動詞をアスペクト的な観点から考察すると，한をとる動詞は基本的に「運動が必然的に尽きる内的時間的限界」という意味特徴をとりだすことができる＜内的限界動詞＞（telic verb）である．以下，具体的に見ていく.

まず，한をとる動詞には，「하고 있다」をとり，単一主体の単一動作の「動作の継続」を表すことができない＜状態変化動詞＞が多い．＜状態変化動詞＞が「하고 있다」をとると，複数主体の動作を表すようになる．[64]

---

64) ＜状態変化動詞＞は「하고 있다」をとると，比較的長い時間における複数主体の動作を表すようである：

?그 사람이 지금 목숨을 잃고 있다.
その人は今命を失いつつある.
전쟁으로 많은 사람들이 목숨을 잃고 있다.
戦争で多くの人が命を失っている.

これらの動詞が単一主体の一回の動作を表す場合は，新聞の写真説明(caption)のように，動作の場面を停止させ，その場面について説明する場合や画面をゆっくり再生させるような場合などの特殊な場面に限られるようである.

自動詞の場合は가다（行く），오다（来る）などの「移動動詞」や，화장하다（化粧する），상영되다（上映される）などの一部の分離動詞を除けば，その殆どが＜状態変化動詞＞であった：

自動詞の＜状態変化動詞＞の例：

(190) 지친 목소리로 아내는 그만 전화를 끊었으면 한다고 말했다. ＜BTEO028＞
疲れた声で，妻はもう電話を切りたいと言った.

(191) 축 처진 어깨로 버스에 오르는 이들의 뒷모습에는 쓸쓸함이 진하게 배어 있었다. ＜BTAE0210＞
疲れて元気がない肩(lit. ぐったりと落ちた肩)でバスに乗る人の後姿には，寂しさが色濃く滲んでいた.

このことは하는をとる自動詞に対照される（対照される），「（수가 ～에）이르다」（（数が…に）至る）のような＜関係規定動詞＞が多いことと対照的である.

次に，한をとる他動詞の＜状態変化動詞＞についていうと，他動詞の＜状態変化動詞＞には시작하다（始める），끝내다（終える）のような「開始」や「終了」を表す動詞が多い：

他動詞の＜状態変化動詞＞の例：

(192) 1 년 과정을 마친 후 중국어실력을 테스트해 일정수준에 오른 학생에 한해서는 2 학년으로의 진학을 허용한다는 것이다. ＜BTBB023＞
1 年の課程を終えた後，中国語能力をテストし，一定のレベルに到達した学生に限って，2 年生へ進学することを認めるというものである.

(193) 나보다 식사를 일찍 끝낸 친구는 벽을 기대고 있었다. ＜BTHO041＞
私より先に食事を済ませた友達は壁にもたれていた.

(194) 전쟁으로 자식을 잃은 엄마의 슬픈 노래를 대신 불러 주는 듯도 했습니다. ＜BTAZ0220＞
戦争で子供を失った母の悲しい歌を代わりに歌ってくれているようでした.

한は「動詞の表す事態が完全に終わっていること」を表す形式であるため，「終了」，「開始」といった限界性のある動詞と呼応しやすいと考えられる．このことは，하는をとる他動詞に，限界性がない，가리키다（指し示す），이르다（称する）のような動詞が多いことと対照的である.

次に，한をとる動詞を動作の結果の継続を表す形式との関連性から考えると，한をとる動詞には自動詞では「해 있다」，他動詞では「하고 있다」をとり，動作の結果の継続を表す動詞が多い．(196)の입다（着る）は動作の過程を想定することができるが，その他の例は動作の過程を想定しにくい：

(195) 시작 단계의 작은 실패 때문에 그들은 남은 인생을 포기하는 어리석음을 범했다. ＜BTHO0375＞
始める頃の小さい失敗によって，彼らは残った人生を諦める愚かなことをしてしまった.

(196) 보라색 원피스를 입은 엄마와 엄마 곁에 앉은 아버지, 그 두 사람 뒤에 강이와 내가 어깨를 맞대고 서 있었다. ＜BTEO0306＞
紫色のワンピースを着た母とその隣に座っている父，その 2 人の後ろにカンイと私が肩を並べて立っていた.

(197) 여차하면 주먹다짐이라도 불사하겠다는 의지는 그의 부릅뜬 눈빛에 분명히 서려 있었다. ＜BTEO0093＞
いざとなったら喧嘩でもしようとする意志は，彼のひん剥いた目にはっきり現われていた.

(198) 그들 중에는 단발머리에 두꺼운 안경을 쓴 여자도 끼여있었다. ＜BTEO0332＞
彼らの中にはおかっぱ頭に，厚いメガネをかけた女もいた.

(199) 비록 성은 다르지만 전에 똑같은 이름을 가진 여자를 만난 적이 있었던 것이다. ＜BTEO0287＞
たとえ名字は異なっても，以前同じ名前を持った女に会ったことがある.

上の動詞のうち，입다（着る）は＜結果継続動詞＞，その他の動詞は＜状態変化動詞＞に分類しうる．これらの動詞はいずれも動詞の語彙的意味の中に「運動が必然的に尽きる内的時間的限界」という意味特徴をとりだすことができる＜内的限界動詞＞（telic verb）である.

一方，＜動作継続動詞＞が한をとる場合は，波線で表しているような，回数を表す副詞や名詞句などで動詞の表す事態の限界を作り出す傾向が見られる：

(200) 그래서 그녀는 아이들을 한번 노려본 다음 그 개를 안고서 걷기 시작했습니다. ＜BTEO0286＞
それで彼女は子供たちを一度睨んだ後，その犬を抱いて歩き始めた.

(201) 이렇게 두 바퀴 돈 다음 그가 멈춘 곳은 넓은 마당 같은 곳이었다. ＜BTBA0233＞
このように二回りした後，彼が止まった所は広い庭のような所であった.

最後に，한をとる動詞には，時間の中での展開性がない動詞のうち，主体の属性を表す＜属性動詞＞が特徴的に現れている：

(202) 칠순이 넘은 지금도 고향을 떠난 이 아들에게 손수 담근 고추장, 간장, 된장을 일일이 챙겨 주시는 어머니 덕분에, ＜…＞ ＜BTBF0261＞
70 歳を過ぎた今も，家を離れたこの息子に，直接こしらえた醤油や味噌などを送ってくれる母のおかげで，＜…＞

(203) 마침내 이십 년간에 걸친 내란에 종지부를 찍는 협정이 이루어졌다. ＜연세＞
いよいよ 20 年間にわたる内乱に終止符を打つ協約が交わされた.

上の例の「칠순이 넘은」（70 歳を過ぎた）は主体である어머니（母）の現在の状態を表す．[65]

要するに，これまで見てきた＜한志向動詞＞は，動作の過程を表すか否かに関係なく，「運動が必然的に尽きる内的時間的限界」という意味特徴をとりだすことのできる＜内的限界動詞＞（telic verb）である特徴を持っている．これらの動詞は한の形で新たな状態の発生を表しうる．4.1 で規定しているように，한を「動詞の表す事態が局面を分かつ境界を超え，完全に終わっていることを表す形式」であるため，＜内的限界動詞＞との親和性が良いのではないだろうか．

最後に，言語資料の調査の結果，한のみをとって現れた動詞とその例を以下に示しておく．次のような動詞は時間の中での展開性を持たない動詞のうち，主体の属性を表す＜属性動詞＞である：[66]

헐벗다（ぼろを着る），벌거벗다（裸になる），돼먹다（できている），（～살）나다（（…歳）になる），（～살）먹다（（…歳）になる）

(204) 눈이 오고 찬바람이 불어올 때 헐벗은 매미는 개미의 문을 노크한다. ＜BTGO0345＞
雪が降り，冷たい風が吹いてきるとき，ぼろを着たセミはアリの家のドアをノックする．

(205) 눈이 시리도록 파란 하늘 아래 벌거벗은 나무들이 쓸쓸해 보였다. ＜BTEO0303＞
目がしびれるほどの青い空の下の裸の木がさびしそうに見えた．

(206) 넌 어떻게 돼먹은 아이길래 그만한 농담도 못 하니. ＜BTEO0093＞
お前は本当に駄目な子で，だからその程度の冗談も言えないの．

(207) 그들은 이혼수속을 시작했고, 메리는 우연히 다섯 살 난 아들로부터 에디에게 다른 여자가 생겼다는 사실을 알게 되었다. ＜BTEO0303＞
彼らは離婚の手続きを始め，メリーは偶然 5 歳の息子からエディーに他の女性ができたという事実を知ることになった．

(208) 지나가는 버스에다 총질을 해서 팔십 먹은 노인부터, 다섯살 먹은 애까지 죽었대. ＜BTEO0313＞
通りかかるバスに銃撃をし，80 歳の老人から，5 歳の子まで死んだそうだ．

---

65) 넘다（超える）が単なる数的到達を表す場合には，＜関係規定動詞＞となり，「칠순이 넘은 나이」（70 歳を超えた年）と「칠순이 넘는 나이」（70 歳を超える年）の意味の差が殆どなくなる．

66) 한송화(2002:82)は状態変化を表す自動詞のうち，-는다，-는としては活用せず，-었-，(으)ㄴとしてのみ活用する自動詞として次のような動詞を挙げている：

헐벗다（ぼろを着る），겉늙다（年のわりにふける），골비다（頭が空っぽだ），
그릇되다（あやまる）など

한しかとらない上のような動詞は辞書には動詞として分類されていても，他者と区別される主体の属性を表す点で形容詞的な性質を持っていると言える．

以上，한をとる動詞について，動詞の自他及びテンス・アスペクト的な観点から考察した．これまで論じた한をとる動詞の特徴をまとめると，次の通りである：

① 한をとる動詞には単一主体の一回の動作の場合，「하고 있다」をとりにくい＜状態変化動詞＞（지치다（疲れる），잃다（失う））が多い．
② 한をとる動詞を動作の結果の継続を表す形式との関連性から考えると，한をとる動詞には「해 있다」や「하고 있다」をとり，動作の結果の継続を表すような動詞（남다（残る），입다（着る））が多い．
③ 한をとる動詞は基本的に「運動が必然的に尽きる内的時間的限界」という意味特徴をとりだすことができる＜内的限界動詞＞（telic verb）である．（둘러싸다（囲む），접다（折る））

上に示した①～③の動詞は한の形で主体や客体の現在の状態を表すことができる点で共通している．

以上，한をとる動詞について語彙的・文法的な観点から考察を行った．＜한志向動詞＞は様々な被修飾名詞と多様な意味関係で，한連体修飾構造を成しているわけである．한との共起頻度が高い名詞については，次の 4.3 で論じることにする．

4.3. 한との共起頻度が高い名詞＝＜한志向名詞＞

ここでは，言語資料を調査した結果，動詞連体形のうち，한と高い頻度で共起した被修飾名詞について考察することにする．

動詞の連体形との総共起頻度が 100 回以上の 293 種の名詞のうち，129 種（44.0%）が＜한志向名詞＞である．한と 100%の頻度で現れた名詞は，뒤（後），후（後），다음（後），이후（以後），끝（末），직후（直後）である．その次に，혐의（嫌疑），나머지（あまり），기억（記憶），탓（せい）が続く．한との共起頻度が高い名詞を示すと，次の表の通りである．なお，＜한志向名詞＞のうち，主に「-에 대한」（…に対する），「-에 관한」（…に関する）のような後置詞に用いられる한の修飾をうける名詞は別の表に示す：

表 15. ＜한志向名詞＞

順位	名詞	하는		한		할		合計
		頻度	比率	頻度	比率	頻度	比率	
1	뒤（後）	0	0.0%	4806	100.0%	0	0.0%	4806
2	후（後）	0	0.0%	2769	100.0%	0	0.0%	2769
7	다음（次）	0	0.0%	1720	100.0%	0	0.0%	1720
5	이후（以後）	0	0.0%	650	100.0%	0	0.0%	650
6	끝（末）	0	0.0%	284	100.0%	0	0.0%	284
3	직후（直後）	0	0.0%	178	100.0%	0	0.0%	178
4	혐의（嫌疑）	1	0.2%	411	99.8%	0	0.0%	412
8	나머지（余り）	7	2.4%	280	97.6%	0	0.0%	287
9	기억（記憶）	15	6.3%	220	92.8%	2	0.8%	237
10	탓（せい）	44	11.5%	333	86.7%	7	1.8%	384
11	상태（状態）	169	16.9%	821	82.3%	8	0.8%	998
14	머리（頭）	22	16.4%	110	82.1%	2	1.5%	134
12	죄（罪）	8	5.8%	113	81.9%	17	12.3%	138
13	지금（今）	42	18.4%	186	81.6%	0	0.0%	228
15	사실（事実）	168	18.8%	720	80.5%	6	0.7%	894
16	몸（体）	56	18.9%	237	80.1%	3	1.0%	296
17	경험（経験）	44	19.1%	185	80.4%	1	0.4%	230
18	사진（写真）	34	19.4%	138	78.9%	3	1.7%	175
19	자금（資金）	23	17.0%	106	78.5%	6	4.4%	135
20	배경（背景）	22	18.8%	93	79.5%	2	1.7%	117
21	편지（手紙）	50	22.3%	173	77.2%	1	0.4%	224
22	결과（結果）	322	23.4%	1053	76.4%	3	0.2%	1378
23	돌（石）	24	22.9%	80	76.2%	1	1.0%	105
24	책（本）	122	24.2%	366	72.6%	16	3.2%	504
25	자식（子）	26	19.1%	98	72.1%	12	8.8%	136
26	얼굴（顔）	231	28.7%	572	71.1%	2	0.2%	805

＜한志向名詞＞には，후（後），끝（末），다음（次）のように，時間的に「後」，「末」を表す名詞，기억（記憶），혐의（嫌疑）など，「既に終わっている事柄を前提に何事かを言うような名詞」[67] が多いことが見て取れる．

そして몸（体），사진（写真）のような「もの」を表す名詞や머리（頭），몸（体），얼굴（顔）のような「身体」を表す名詞も한をとる頻度が高く，全 129 種の＜한志向名詞＞のうち，62 種，48.1%が具体的な実体を表す名詞である．例えば，돌（石）は「이끼 낀 돌」（苔の生えた石），「손에 쥔 돌」（手に持っている石）のように，「状態変化」や「所有」を表す動詞の한の修飾を受けることによって，位置や形状など，状態的な特徴が示される傾向が強い．

＜한志向名詞＞には，이해（理解），인식（認識）のような「精神的な活動」を表す名詞が多く，これらの名詞は主に「-에 대한」（…に対する），「-에 관한」（…に関する）のような後置詞に用いられる한の修飾をうけやすい傾向が見られる．

67) 박장경(1996:97)は「記憶」，「覚え」，「過去」などの主名詞の内在的語彙の特質が「過去，完了性」であるため，それを修飾する動詞が必然的に「タ」形に固定される場合があると述べている．

なお，「지난 여름」（昨年の夏）の지난（lit. 過ぎた）との共起頻度が高い＜한志向名詞＞には，해（時），달（月），여름（夏）があった．지난해（昨年），지난달（先月）は辞書において一つの名詞として記載されている．

＜한志向名詞＞の種類（特徴）を整理すると，次の通りである：

＜実体名詞＞：사진（写真），자금（資金），몸（体）など
＜事柄名詞＞：혐의（嫌疑），사실（事実），경험（経験）など
＜状態名詞＞：상태（状態）
＜抽象名詞＞：기억（記憶），나머지（残り），흔적（痕跡）など
＜時間名詞＞：후（後），끝（末），다음（次）など

上に示した＜実体名詞＞は静態的に描かれることが多いという点で，「静態性」の濃い名詞として分類できる．そして한との共起頻度が高い＜事柄名詞＞＜抽象名詞＞は「既に終わった事柄を前提に何事かをいう」という性質を持っているため，「完了性」の濃い名詞として分類できる．

ここで本稿の 2.3 で示した動詞の連体節と被修飾名詞の関係に注目すると，＜한志向名詞＞には，한と主に「内の関係」として現れるものと，主に「外の関係」で現れるものがある：

한と主に「内の関係」を実現する＜한志向名詞＞：
자식（子），집단（集団），도시（都市）など
한と主に「外の関係」を実現する＜한志向名詞＞：
상태（状態），다음（後），혐의（嫌疑）など

主に「内の関係」を実現する名詞のうち，사진（写真）のような「イメージ」を表す名詞や책（本）のような「テクスト」を表す名詞，そして몸（体），얼굴（顔）のような「身体」を表す名詞は，次の例に見られるように，「外の関係」を実現する場合がある：

(209) 집안에는 아빠의 군복 입은 사진과 지휘봉들, 군용담요 등 군인 냄새를 물씬 풍기는 것들이 여기 저기 있다. ＜BTIO0141＞
家の中には父の軍服を着た写真と指揮棒，軍用毛布など，軍人の香りがするものがあちこちにある．

(210) 겨울의 추위를 염려한 편지를 화창한 봄날에 받는 일도 종종 있었다. ＜BTHO0418＞
冬の寒さを心配した手紙を春に受け取ることも度々ある．

(211) 다음 글은 정거장 때문에 주인공의 운명이 빗나간 소설로 그 적절한 예가 된다. ＜BTHO0392＞
次の文章は停留所のせいで，主人公の運命が狂う小説で，その適切な例である．

(212) 화가 이중섭(1916-1956)의 삶과 예술 세계를 뛰어난 연극성으로 무대화한 작품이다. ＜BTHO0123＞
画家である李仲燮(1916-1956)の生と芸術の世界を，優れた演劇性で舞台化した作品である．

(213) 왜? 돌아보자 그는 꿈에서 깨어난 얼굴로 말했다. ＜BTEO0293＞
何と振り向くと彼は夢から目覚めたような顔で話した.

(214) 임금님이 벌거벗은 몸으로 말을 타고 거리를 돌아다닐 때, 오직 한 어린이만이 임금님은 옷을 입지 않았다고 잘라 말했으며, ＜…＞＜BTHO0375＞
王様が裸で（lit. 裸になった体）馬に乗って街を練り歩くとき，ただ一人の子供だけが王様は服を着ていないとはっきり言い，＜…＞

なお，言語資料の調査によると，殆どの＜한志向名詞＞が「内の関係」を実現しているのに対し，次の＜한志向名詞＞は「内の関係」の例が現れなかった：

뒤（後），다음（後），직후（直後），탓（せい），지금（今），반면（反面），가운데（中），조사（調査），평가（評価），흔적（痕跡），비판（批判），인식（認識）など 15 種

上の名詞のうち，조사（調査），평가（評価），흔적（痕跡），비판（批判），인식（認識）は「이번에 실시한 조사」（今回実施した調査），「그가 남긴 흔적」（彼が残した痕跡）のような「内の関係」の用例を作ることができる．それに対し，뒤（後），다음（後），직후（直後），탓（せい），반면（反面），가운데（中）は「内の関係」の用例を作りにくい．叙述形では「뒤를 생각해서」（後のことを考えて）や「다음을 기약하자」（次を規約しよう）のような例が可能であるのに対し，連体修飾構造では「생각하는 뒤」（考える後），「기약하는 다음」（規約する次）とはなりにくい．連体節と主に「外の関係」として現われるという特徴も名詞の特性を論じる上で重要であろう．

次の 4.4 では，「内の関係」の한連体修飾構造について考察し，4.5 では，「外の関係」の한連体修飾構造について考察することにする．

4.4. 한連体修飾構造Ⅰ—「内の関係」（意味的格関係）

「内の関係」の한連体修飾構造については主に，한を構成する動詞やそれに先行する要素，及び被修飾名詞について見ることにする．「内の関係」の한連体修飾構造には次の 3 つの特徴が見られる．

まず，第一に，한をとることで新しい状態を表す＜状態変化動詞＞が多く現れている．自動詞には受動動詞が多く，他動詞には「所有」を表す動詞や「再帰動詞」[68] が特徴的に現われているこの構造の被修飾名詞には，＜実体名詞＞が多い．特に，사진（写真），작품（作品）のような「もの」を表す名詞や몸（体），얼굴（顔）のような「身体」を表す名詞が多く現われている．：

(215) 이것은 일단 지배적 위치를 점유한 집단 내에서 특히 그렇다. ＜BTHO0099＞
これは一旦支配的地位を占めている集団内で特にそうだ.

(216) 한눈에도 이상적인 비례를 가진 몸이었다. ＜BTEO0294＞
一目で見ても理想的なバランスの体（lit. 理想的な人体比例を持った体）であった.

68) 亀井孝・河野六郎・千野栄一編著(1996:598)によると，「再帰動詞」とは「動詞の表す行為がその行為を起こす行為者（agent）から出発して，その行為者に戻ってくる場合」をいう.

(217) 잔뜩 웅크린 몸 전체가 어느새 차가워져 있었다. ＜BTEO0315＞
ぎゅっと身をすくめた体全体がいつの間にか冷たくなっていた.

(218) 온통 붉은 바위로 이루어진 도시입니다. ＜BTGO0347＞
すべてが赤い岩でできた都市です.

(219) 시민 토론단은 공공의 문제에 관한 토론을 목적으로, 일반 시민들 가운데 인구학적 속성에 따라 선정된 자원자들로 구성된 집단이다. ＜BTHO0433＞
市民の議論団は，公共の問題に関する議論を目的とし，一般市民の中で人口学的特性に基づいて選定されたボランティアで構成された集団である.

(220) 비늘로 뒤덮인 몸은 얼마나 아름답니. ＜BTEO0302＞
うろこで覆われた体は，どんなに美しいか.

(221) 어머니의 움켜쥔 손에서 고통으로 구겨진 사진을 보았다. ＜BTEO0303＞
母の握った手の中で苦しみでしわだらけになった写真を見た.

(222) 그러나 자료실이나 도서실(관)에 갖추어진 자료는 찾기에 용이하지 않고 따라서 대부분은 기사작성에 적절히 참고되지 못한다. ＜BTHO0433＞
しかし資料室や図書館に揃った資料は，探すのが容易ではないため，大体記事の作成の参考にならない.

(223) 니오베는 찢어지는 슬픔에 후회를 거듭했지만, 그렇다고 죽은 자식들이 살아 돌아올 수는 없었어. ＜BTHO0391＞
ニオベは破り裂けるくらいの悲しみに後悔を重ねたが，だからといって死んだ子が生きて戻ってくることはなかった.

(224) 그러나 광장 주변의 가게는 폭동이 재발할 것을 우려해 대부분 문을 닫았으며, 문을 연 곳도 알루니늄 깡통에 든 술만 판매가 허용됐다. ＜BTAE0201＞
しかし広場周辺の店は暴動が再発することを恐れ，殆どの店が休んでおり，店を開けている所も，アルミ缶に入った酒の販売のみが許可された.

한と被修飾名詞の関係に注目すると，上の例のうち(216)は被修飾名詞が한が表す動作の結果が存在する場所，(217)は한が表す動作の客体を表す．その他の例は被修飾名詞が한が表す動作の主体を表す．しかし하는の構造では，連体節と被修飾名詞が能動的な動作と主体の関係であったのに対し，한の構造では，「완성된 작품」（完成した作品）（→작품이 완성되다）（作品が完成される）のように，連体節と被修飾名詞が「受動的な動作＋主体」の関係にある．上の例におけるすべての自動詞はそれに対応する他動詞を持っており，動詞を他動詞に変えると，自動詞の動作の主体は他動詞の客体となる.

한「内の関係」では，連体節の成分である N1 が被修飾名詞の N2 の部分・属性などを表す場合も見られた．(225)の「머리가 벗겨진 남자」は「남자의 머리가 벗겨지다」（男の頭がはげた）のように組み替えることができる．また，(226)の「줄리아 로버츠가 제작에 참여한 작품」（ジュリア・ロバーツが製作に参加した作品）は「줄리아 로버츠가 작품의

제작에 참여했다」（ジュリア・ロバーツが作品の製作に参加した）のように組み替えることができる：

(225) 머리 벗겨진 남자가 나타났다. ＜BTEO0095＞
はげた頭（lit. 頭がはげている）男が現れた.

(226) '스텝맘'은 ＜…＞줄리아 로버츠가 제작에 참여한 작품이다. ＜BTBF0251＞
「ステップマム」は，＜…＞ジュリア・ロバーツが製作に参加した作品である.

한「内の関係」は한で示される動作・状態に対し，被修飾名詞が「客体」，「動作の結果が存在する場所」，「動作の結果物」を表す特徴がある．それに対し，하는「内の関係」の場合は被修飾名詞が「主体」，「動作が行われる場所」を表す特徴がある．このように連体節と被修飾名詞の関係も，連体形によって異なる様相を示しており，今後より詳しく調べる必要がある.

第二に，「内の関係」の한連体修飾構造には，客体に働きかけ，客体に変化をもたらすような＜結果継続動詞＞が多い．そして被修飾名詞はその動詞が表す動作に対し，「客体」を表す．ここで言う「変化」とは，「生成」，「消滅」，「位置変化」，「状態変化」などを表す．これらの他動詞は，한をとることで「新しい状態の発生」を表しうる：

(227) 커다랗게 확대한 사진들이 흰 벽면을 가득 채우고 있었다. ＜BTEO0306＞
大きく拡大した写真が白い壁を覆っていた.

(228) 그는 들고 온 신문을 두 사람 앞에 내밀었다. ＜BTHO0437＞
彼は持ってきた新聞を二人の前に出した.

(229) '비잔스'란 사람이 설계하여 만든 도시라서 붙여진 이름입니다. ＜BTGO0347＞
ビザンスという人が設計して作った都市なので付けられた名前です.

(230) 이분들이 모두 내가 쓴 시에 흥감을 가지고 있는 것 같다. ＜BTGO0350＞
これらの方々はすべて，私が書いた詩に興味を持っている人たちである.

(231) 제가 낳은 자식을 제 손으로 칼을 휘둘러 죽이다니＜…＞ ＜BTHO0369＞
自分が産んだ子を自分の手でナイフを振り回し殺すなんて＜…＞

(232) 20 일 서울시가 국회에 제출한 자료에 따르면＜…＞ ＜BTAE0208＞
20 日ソウル市が国会に提出した資料によれば＜…＞

(233) 그가 그녀에게서 가져간 돈은 자그마치 2 천만원이었다. ＜BTEO0315＞
彼が彼女から取ったお金は 2 千万ウォンにもなる.

上の例は「내가 쓴 시」（私が書いた詩）（→내가 시를 쓰다）（私が詩を書く）のように，被修飾名詞が連体節が表す動作・状態に対し，「客体」を表すとともに，한との繋がりで，「動作の結果物」を表す.

次に한の表す意味に注目すると，上の例における한は「動作が完全に終わり，現在に持続的に関与していること」を表す．上の例における波線の部分から，한によって示される動作が現在に持続的に関与していることがわかる．(233)の가져간（取った）は「お金を取った」状態が現在の状態として解釈されるのに対し，가져간（取った）を가져갔던（取っていた）に変えてみると，「お金を取った」ことが明らかに過去の事柄のように解釈される．

その他，被修飾名詞が한をとる動詞に対し，「出どころ」として現れる例も見られる:

(234) 이념과 사상을 배제한 교육이란 건 존재하지 않는다. ＜BTBZ0274＞
理念と思想を排除した教育というのは存在しない.

上の例の「이념과 사상을 배제한 교육」は「교육에서 이념과 사상을 배제하다」（教育から理念と思想を排除する）のように組み替えられ，被修飾名詞の교육（教育）は連体節の動詞「배제하다」（排除する）に対し，「出どころ」を表すとともに「理念と思想を排除した後の結果物」としての「教育」を表す．つまり，한と被修飾名詞（N）が「動作」と「その動作の結果を帯びるN」という関係を結ぶことが한「内の関係」の特徴の1つである．

そして次の例は被修飾名詞が한で示される動作の手段を表すとともに，한との繋がりで，「動作の結果が存在する場所」を表す例である：

(235) 다리를 감싼 손과 앙상한 어깨는 사시나무 떨듯 떨고 있었다. ＜BTEO0279＞
膝を抱えた手と骨ばった肩は激しく震えていた.

第三に，「内の関係」の한連体修飾構造には，「動作の及ぶ場所」を表す「에格」をとる動詞が多く見られる．そして被修飾名詞は한との繋がりで，「動作が及ぶ場所」を表すとともに「動作の結果が存在する場所」を表す．例えば，(240)の「수건을 두른 머리」（タオルを巻いた頭）は「머리에 수건을 두르다」（頭にタオルを巻く）のように組み替えることができ，머리（頭）は수건을 두르다（タオルを巻く）という動作に対し，「動作の及ぶ場所」や「動作の結果が存在する場所」を表す：

(236) 물 묻은 몸으로 밖에 나오니, 벌써 해가 서쪽으로 기울어져 있었습니다. ＜BTGO0357＞
水にぬれた体で外に出てみると，もう日が西に暮れていた.

(237) 그는 물기가 남은 손으로 녀석의 머리를 쓰다듬었다. ＜BTEO0312＞
彼は水気が残っている手でやつの頭を撫でた.

(238) 눈물은 마치 흉터처럼 그녀의 짙게 화장한 얼굴에 줄을 만들며 그녀의 입꼬리로 흘러 들어갔다. ＜BTEO0302＞
涙はまるで傷跡のように彼女の厚化粧顔（lit. 濃く化粧した顔）に跡を残し，彼女の口に流れ入った.

(239) 오전 내내 아이의 사진을 보고 또 보았지만 아이의 얼굴이 선명하게 나온 사진은 찾을 수 없었다. ＜BTEO0296＞
午前中にずっと子供の写真を繰り返し見たが，子供の顔が鮮明に写った写真は見つけることができなかった.

(240) 수건을 두른 머리에는 온통 나뭇잎 부스러기가 붙어 있었다. ＜BTBF0260＞

タオルを巻いた頭には，木の葉だらけだった.

(241) 옛날 집 전경을 담은 사진과 그의 가족사진을 보았습니다. ＜BTGO0347＞
昔の家の全景を撮った写真と彼の家族写真を見ました.

言語資料の調査によると，＜実体名詞＞のうち，「もの」や「身体」を表す名詞が한をとる動詞と에格の関係で現れる傾向が強い.[69]

上の(236)～(241)における한は「現在の状態」を表す．例えば，(240)について言えば，話し手は「タオル」をいつ「頭」にかけたのかについては無関心であり，単に主体の「現在の状態」を表すために한を用いているように読み取れる.

ここまで述べたことを要約すると：

> 한「内の関係」の構造における한をとる動詞は，基本的に＜結果継続動詞＞や＜状態変化動詞＞など，한をとることで状態を表すという特徴がある．被修飾名詞は한が表す動作に対し，「主体」や「動作が及ぶ場所」である傾向が強い.

4.5. 한連体修飾構造Ⅱ—「外の関係」（内容補充的関係）

4.3 で示したように，한と「外の関係」を実現する＜한志向名詞＞には，기억（記憶），혐의（嫌疑）のような「既に終わった事柄を前提に何事かをいう」という性質である「完了性」を持っている名詞が多い．そして時間的に「後」を表す名詞も多く見られる．하는と「外の関係」を実現する名詞は「非完了性」の＜事柄名詞＞であり，その種類も多様であるのに対し，한「外の関係」の被修飾名詞の種類は相対的に少ない.

한「外の関係」には，한と被修飾名詞が主に＜同一内容関係＞にある場合と，＜状況的内容関係＞にある場合がある.

4.5.1. 한＜同一内容関係＞

한と＜同一内容関係＞を実現する名詞には，혐의（嫌疑），사건（事件），사실（事実），상태（状態），죄（罪），역사（歴史）などの＜事柄名詞＞がある：

(242) 그는 뇌물을 받은 혐의로 구속됐다.
彼は賄賂を受け取った疑いで拘束された.

(243) 특수조사팀이 조사하는 과정에서 그가 31 만달러만이 아니라 90 만달러를 외국 기업으로부터 받은 사실이 드러났다는 것이다. ＜BTBA0227＞
特殊調査チームが調査する過程で，彼が 31 万ドルだけではなく，90 万ドルを外国企業から受け取った事実が明らかになったのである.

(244) 한 번 집을 나간 죄 때문에 주눅이 든 탓이었다. ＜BTGO0359＞
一回家を出た罪で気が引けたせいであった.

(245) 분명 그의 목소리를 어렴풋이 들은 기억이 났다. ＜BTEO0290＞

---

69) 두르다（巻く），묻다（付く），화장하다（化粧する）は動作の場所的終点を示す-에格をとる動詞という点において，共通している．趙義成(1996:17-18)はこの種の-에格について，「動作の終了と関連づけられており，動詞のアスペクト形Ⅲ있다をとるときは存在場所の意味との混淆になる」と述べており，この意味を表す名詞には場所を表す名詞の他に，「具体物を示す名詞（具体名詞・身体名詞）の比率が高い」と指摘している.

確かに彼の声をかすかに聞いたのを思い出した．（lit. 聞いた覚えがある）

(246) 성장과정에서 부모에게 성차별을 받은 경험(매우와 약간 포함)이 있는 응답자는 46%로 나타났다. ＜BTHO0382＞
成長の過程で親に性差別を受けた経験（非常に，または若干を含む）がある回答者は 46%であった.

ここで한が表す意味に注目すると，(243)，(245)，(246)は한を했던に置き換えることができ，「過去」を表す．(242)，(244)は한を했던に置きかえることができず，「完了」を表す．そして한が表す事態と上位節の事態は「原因」と「結果」という関係にある．一方，상태（状態）と共起する한は「現在の状態」を表す傾向が強い：

(247) 그는 잿빛 제복을 입은 상태였다. ＜BTEO0290＞
彼は灰色の制服を着た状態であった.

ここでの議論を整理すると，한＜同一内容関係＞においては，被修飾名詞によって한が表す意味が異なる傾向が見られる．被修飾名詞が사실（事実），기억（記憶），역사（歴史），경험（経験）であれば，한は「過去の出来事」を表し，혐의（嫌疑），죄（罪）であれば，한は「完了」を表す．そして被修飾名詞が상태（状態）であれば，한は「現在の状態」を表す傾向が強い.

4.5.2. 한＜状況的内容関係＞

한と＜状況的内容関係＞で現れる名詞には，흔적（痕跡），상처（負傷），결과（結果）などがあり，＜状況的内容関係＞における한と被修飾名詞（N）は「…した後の N」のように解釈される：

(248) 관사 자체는 도회지 양옥집의 축소판처럼 아담하게 지어진 건물이었으나 언제 봐도 꾸미고 가꾼 흔적이 눈에 띄지 않았다. ＜BTEO0300＞
官舎自体は都会の洋館のミニチュア版のように，こぢんまりした建物であったが，いつ見ても飾ったり，手入れをした痕跡がない.

(249) 아프리카문학의 총괄적인 이해를 통해서 제 3 세계 학문의 마땅한 길을 찾기 위해 애쓴 성과가 훨씬 뚜렷하다. ＜BTHO0124＞
アフリカ文学の総括的な理解を通し，第三世界の学問の適切な方法を見つけるために努めた成果がはるかに顕著である.

ここで한が表す意味に注目すると，上の例における가꾼（手入れをした）と애쓴（努めた）は文脈上，その行為の結果が現在の状況に影響を及ぼしていることがはっきり現われているため，「完了」を表すと見ることができる.

次の 4.5.3 では，「밥 먹은 뒤」（ご飯を食べた後），「열심히 노력한 결과」（一生懸命努力した結果）のように，한と名詞があたかも接続形の機能をする名詞について見ることにする.

4.5.3. ＜한＋名詞（助詞）＞が接続形のように機能する名詞

＜한志向名詞＞には，名詞単独で，あるいは助詞を伴って，＜한＋名詞（助詞）＞が接続形のように機能する名詞がある．この種の名詞には次のような名詞がある：

끝（末），나머지（余り），다음（次），뒤（後），

이상（以上），이후（以後），탓（せい），후（後）など

이상（以上）と뒤（後）は한の用例の 100%が，결과（結果）は한の用例 1,053 例中 684 例，65.0%が接続形の機能をする例である．

これらの名詞は한と結合し，한が表す事柄と上位節の事柄の時間的前後関係を示す機能を果たすと見られる．

＜한＋名詞（助詞）＞が接続形のように機能する名詞について，한をとる動詞を見ると，例えば，다음（後），후（後）は＜内的限界動詞＞の頻度が高い：

(250) 일본의 풍토 조건은 일찍부터 가족 단위 이상의 조직을 필요로 했고 그것이 형성된 후 곧 엄한 계급 사회가 만들어 졌다. ＜BTHO0126＞
日本の風土条件はかつてから家族単位以上の組織を必要とし，それが形成されてすぐ（lit. 形成された後すぐ），厳格な階級社会が作られた．

(251) 시민들은 경기가 끝난 뒤 불꽃축제를 즐겼다. ＜BTAB0171＞
市民らは競技が終わった後，花火を楽しんだ．

(252) 나는 일단 그곳에 도착한 다음 결정하기로 마음먹었다. ＜BTEO0313＞
私は一旦そこに着いた後に，決定することにした．

「한+뒤／후（後）」において，한をとる動詞が＜動作継続動詞＞である場合は，副詞句などにより，連体節の表す事態が限界づけられるという傾向が見られた．次の例の달리다（走る）は＜非内的限界動詞＞であるが，30 여분（30 分余り）を入れることによって，動作が限界づけられると言える：

(253) 버스를 타고 30 여분 달린 다음 산길을 2 킬로미터 정도 걸어 들어가니 외할머니가 사는 동네가 나왔다. ＜BTBF0256＞
バスに乗って 30 分くらい走った後，山道を 2 キロほど歩いて行くと，祖母が住んでいる町が現れた．

다음（後），후（後）を修飾する動詞に＜内的限界動詞＞の頻度が高いのに対し，나머지（余り）の＜内的限界動詞＞の頻度は 209 例中 98 例，46.9 %，끝（末）の＜内的限界動詞＞の頻度は한の用例 262 例中 17 例，わずか 6.5 %である．나머지（余り），끝（末）を修飾する動詞には次の例に見られるように＜動作継続動詞＞が多い：

(254) 아버지는 나를 무척이나 아낀 나머지 어느때는 너무 지나치게 엄격했다. ＜BTHO0416＞
父は私を愛する余り，ときには度を越して厳格だった．

(255) 그렇게 얼마를 걸은 끝에 찌꾸는 도미의 할아버지를 만날 수 있었습니다. ＜BTGO0097＞
そうやって暫く歩いた末に，チクはドミのおじいさんに会うことができました．

3.5.2 でも示しているように，하는の場合も同様に，하는と名詞が「～する間／途中」を表す場合，하는をとる動詞に一定時間継続する動作を表す動詞が好まれる傾向が見られた．

このようなことから，連体節と名詞（助詞）が表す「時間的な幅」は連体節の述語動詞の種類と一定の関連性を持つことがわかる．
ここまで述べたことを要約すると：

> 한＜外の関係＞の構造には，既に終わっている事柄を前提に何事かを言うような名詞が被修飾名詞として現れる．この際，한の意味は被修飾名詞の種類と一定の関連性を持つ．

4.6. 主に後置詞に用いられる한と共起する＜한志向名詞＞

ここで述べる名詞は，後置詞に用いられる「-에 대한」（…に対する），「-에 관한」（…に関する）と高い頻度で現れた．

表 16. 後置詞に用いられる한と共起頻度が高い名詞

順位	名詞	하는		한		할		合計
		頻度	比率	頻度	比率	頻度	比率	
1	이해（理解）	7	3.7%	182	96.3%	0	0.0%	189
2	관심（関心）	22	6.0%	343	94.0%	0	0.0%	365
3	비판（批判）	13	7.6%	157	92.4%	0	0.0%	170
4	지원（支援）	9	8.0%	104	92.0%	0	0.0%	113
5	평가（評価）	15	8.2%	169	91.8%	0	0.0%	184
6	조사（調査）	12	7.7%	142	91.6%	1	0.6%	155
7	투자（投資）	13	9.0%	132	91.0%	0	0.0%	145
8	기록（記録）	17	10.2%	150	89.8%	0	0.0%	167
9	인식（認識）	27	10.8%	224	89.2%	0	0.0%	251
10	논의（論議）	32	12.8%	218	87.2%	0	0.0%	250
11	요구（要求）	13	13.0%	86	86.0%	1	1.0%	100
12	설명（説明）	20	14.2%	120	85.1%	1	0.7%	141
13	법률（法律）	19	16.7%	95	83.3%	0	0.0%	114
14	대책（対策）	18	15.0%	97	80.8%	5	4.2%	120
15	연구（研究）	80	17.7%	366	80.8%	7	1.5%	453
16	책임（責任）	12	6.1%	156	79.2%	29	14.7%	197
17	자료（資料）	65	21.5%	231	76.2%	7	2.3%	303
18	정보（情報）	130	28.2%	325	70.5%	6	1.3%	461
19	반응（反応）	29	28.4%	71	69.6%	2	2.0%	102
20	지식（知識）	71	29.2%	169	69.5%	3	1.2%	243

後置詞に用いられる한と高い頻度で現れる名詞には，이해（理解），인식（認識），조사（調査），평가（評価），비판（批判）など，「精神的活動」「言語活動」など「認知的活動」を表す名詞が多い．さらに，지식（知識），정보（情報）のような「精神的活動の産物」を表す名詞も主に後置詞に用いられる한と共起する．これらの名詞は動作を表す連体節の修飾を受けることは殆どなく，主に後置詞に用いられる한の修飾をうけ，「それがいかなる対象に向かっているのか」という程度の規定しか受けない．

なお，高橋太郎(1979:113-114,119)は日本語の「哲学に関係する表現として」のような種の連体修飾について，「動詞が動詞性をうしなって，両方の名詞を関係づけるはたらきしかしないが，動詞句全体としては，動詞句をうける名詞の状態的な特徴をしめすはたらきをしているのである」（下線は本稿筆者による）と述べている．

4.7. ＜한志向名詞＞が하는や할と共起する場合

4.7.1. ＜한志向名詞＞が하는と共起する場合

＜한志向名詞＞が하는をとる場合は，하는をとる動詞に＜動作継続動詞＞が多く，＜한志向名詞＞はそれと主に主体の関係で現れる：

(256) 떨리는/가랑거리는/기어드는 목소리（震える／つっかえるような／消え入るような）声

(257) 근질거리는/유연하게 움직이는 몸（むずむずする／しなやかに動く）体

(258) 부모 모시는/돈버느라 애쓰는/속 썩이는 자식（親を養う／稼ぐために努力する／親泣かせの子（lit. 心を痛める子））

(259) 번역을 기다리는 자료（翻訳を待っている）資料

そして，＜한志向名詞＞が하는と共起する場合は，하는をとる動詞に，넘다（超える），되다（なる）のような＜関係規定動詞＞や나오다（（出版物に）出ている）のような「存在」を表す動詞が多い：

(260) 1 억이 넘는 돈　1 億を超えるお金
(261) 교과서에 나오는 그림　教科書に出てくる絵画

さらに，次の例のように，副詞などとともに比較的長い時間にわたる動作を表す動詞も見られた：

(262) 잘 팔리는 책 よく売れている本

なお，그림（絵），사진（写真）のような「イメージ」を表す名詞は＜動作継続動詞＞の하는と＜同一内容関係＞で現れる傾向が見られた：

(263) 파티하는/소리치는 사진　パーティーをする／叫ぶ写真

＜한志向名詞＞のうち，경험（経験），결과（結果），상태（状態）も하는と主に＜同一内容関係＞で現れた：

(264) 잊었던 옛 기억들이 되살아나는 경험을 했습니다. ＜BTHO0392＞
忘れた昔の記憶がよみがえる経験をしました.

(265) 이렇게 되면 노령인구에 대한 사회부담은 커지는 반면 경제활동인구는 더욱 줄어드는 결과를 낳게 된다. ＜BTAF0217＞
こうなると，高齢人口に対する社会負担は大きくなる反面，経済活動人口は一層減少する結果を生むようになる.

(266) 이에 전체 의료비는 전년(1999 년) 대비 4.3% 줄어드는 성과를 올렸지만<…><BTHO0403>
これに全体の医療費は前年(1999 年)対比，4.3%減少する成果を上げたが，<…>

(267) 국내은행들은 대금업 진출 준비를 마친 뒤 금융당국의 결정을 기다리는 상태다.
国内銀行は代金業の進出準備を終わらせた後，金融当局の決定を待っている状態である．<BTAD0188>

以上の例から見て取れるように，한構造は連体形をとる動詞や連体節と被修飾名詞の関係において，하는と非常に異なる様相を見せている．被修飾名詞が同じ몸（体）であっても，한の場合は，「웅크린 몸」（ぎゅっと身をすくめた体）のように静的に描かれるのに対し，하는の場合は「유연하게 움직이는 몸」（しなやかに動く体）のように動的に描かれる．

4.7.2. **<한志向名詞>が할と共起する場合**

次に<한志向名詞>が할と共起する場合について考察することにする．「한+<한志向名詞>」における한は<無意志動詞>の例が圧倒的に多かったのに対し，「할+<한志向名詞>」における할をとる動詞には，주다（あげる），사다（買う）のような<意志動詞>が多く見られた．そして被修飾名詞は할で示される動作の「手段」と解釈される場合が多い：

(268) 오토바이 살 돈
バイクを買うお金

(269) 금전적 이득을 얻을 시
金銭的利益を得る詩

さらに，할をとる動詞には，「右に出る」の意の「오른쪽에 나서다」，「…に勝てる」の意の당하다，「…の水準に及ぶ」の意の따라오다のような動詞（句）が見られる：

(270) 부랑근로자의 속성을 전형적으로 드러낸 작품으로 [객지] 오른쪽에 나설 작품은 거의 없다. <BTHO0121>
浮浪勤労者の属性を典型的に表した作品で「客地」の右に出る作品は殆どない．

(271) 레슬링으로 그를 당할 청년이 없었다고 한다. <BTHO0431>
レスリングで彼の右に出る青年がいなかったという．

(272) 이 세상 천지를 뒤져 봐도 우리 어머니를 따라올 어머니는 없을 것이다. <BTHO0102>
この世を全部探してみても，私の母の右に出る母はいないだろう．

これらの動詞（句）は主に連体形として現れ，할のみをとる特徴を持つ．比較に基づいた話し手の判断を表す動詞を「比較動詞」と規定することも可能であろう．一般の動詞は할をとり，「意志」「予定」など，様々な意味を表すのに対し，これら動詞は할をとり「可能」を表す．

한が被修飾名詞の指し示す対象の静的属性を描写・限定するのに対し，할は被修飾名詞の指し示す対象に対する話し手の評価を表すようなニュアンスが感じられる．次の例に見られる「예술성을 논할」（芸術性を論じる）や「한번쯤은 돌아볼」（一回くらいは振り向いて

見そうな）はそれを裏付ける客観的な根拠を持たない，話し手の主観に基づいた評価を表すと見ることができる：

(273) (드래곤볼)은 예술성을 논할 작품은 아니지만 현대식으로 적용된 무협지구조는 고전적인 무협지 형식을 뼈대는 살리면서 요즘 독자들 구미에 맞게 변용하는 데 성공，<…>（略）<BTBF0249>
「ドラゴンボール」は芸術性を論じる作品ではないが，現代式に適用された武俠誌構造は古典的な武俠誌形式の骨組みは生かしつつ，最近の読者の趣味に合うように変容するのに成功，<…>

(274) 지나가던 사람이 한번쯤은 돌아볼 얼굴이다. <BTEO0293>
通り過ぎる人が一回くらいは振り向いて見そうな顔である.

「評価」を表す할は，할の前後に来る要素によってより明確になる．例えば，할の前には감히（よくも），마땅히（当然に）のような副詞が来る場合が多く，上位節には反語的な表現が来る場合が多い傾向が見られる．

次に한と「外の関係」で現れる名詞が할と共起する例について見ると，例えば，결과（結果），기억（記憶）は할と「外の関係」としては現れず，「内の関係」で現れる傾向が見られた：

(275) 행위의 목적，다시 말하면 각 행위가 가져올 결과를 살피는 일이다. <BTHO0105>
行為の目的，言い換えると，各行為がもたらす結果を察することである.

(276) 다음 세상으로 지니고 갈 기억이 선연해야 되지 않겠어요. <BTEO0286>
次の世界に持っていく記憶が鮮明でないといけないでしょう.

(277) 고분고분한 사람들이 세상에 남길 흔적은 없다. <BTHO0390>
おとなしい人々が世界に残す痕跡がない.

一方，상태（状態），사실（事実）は할とも主に「外の関係」で現れる．この際，할は「할지도 모르다」（…するかもしれない）のような分析的な形が할をとている場合が多い：

(278) 혹여 전생을 들키게 될까 봐，그 전생 속에 함께했던 얼굴을 이번 생의 그 장소에서 확인하게 될지도 모를 사실이 두려웠기 때문에. <BTEO0306>
もしかして前世がばれるのではないか，その前世の中で一緒であった顔を現在の生のその場所で確認するようになるかも知れないという事実が怖かったから.

<한志向名詞>の中でも사실（事実），상태（状態）は하는，할とも「外の関係」で現われる．このことから기억（記憶），결과（結果），흔적（痕跡）が사실（事実）や상태（状態）より「完了性」が濃い名詞であることがわかる．

以上を整理すると，한と「内の関係」として現われる<한志向名詞>が할と共起する場合は，할が話し手の主観的な評価を表す例が多い特徴が見られた．한と「外の関係」として現われる<한志向名詞>のうち，기억（記憶），결과（結果），흔적（痕跡）のように「完了性」が濃い名詞は할と「外の関係」としては現われず，「内の関係」として現われる傾向が見られた.

4.8. 第 4 章の結び

第 4 章では，言語資料の頻度調査により，한をとる頻度が高い動詞，한と高い頻度で現れる被修飾名詞があることを示し，한連体修飾構造を成す動詞と被修飾名詞の特性を明らかにした．

まず，4.8.1 では，한をとる動詞の特徴について述べ，4.8.2 では，한「内の関係」に見られる語彙的・文法的特徴をまとめる．その後，4.8.3 では，한「外の関係」に見られる語彙的・文法的特徴についてまとめることにする．

4.8.1. 한をとる動詞に見られる特徴

具体的に動詞の特徴をいうと，한をとる自動詞には，-이-，-히-，-리-，-기-といったヴォイス接尾辞や-지다，-되다がついた受動動詞が多い．[70] そして한をとる他動詞には，만들다（作る），받다（もらう），붙이다（貼る）や，가지다（持つ），입다（着る）などの動作の主体や対象に何らかの変化をもたらす他動詞が多い．これらの動詞は主体や対象の何らかの変化を表すという点において共通している．

次に한をとる動詞をアスペクト的な観点から考察すると，한をとる動詞には，①単一主体の一回の動作の場合，「하고 있다」をとることができず，単なる「状態変化」を表す＜状態変化動詞＞（지치다（疲れる），잃다（無くす））が多い．そして②「하고 있다」，「해 있다」などをとって「動作の結果の継続」を表す＜結果継続動詞＞（접다（折る），입다（着る））が多い．①と②の動詞は「運動が必然的に尽きる内的限界」という意味特徴を取り出すことができる＜内的限界動詞＞（telic verb）である．これらの動詞は한をとることで主体や客体の状態を表しうる．한が「動詞の表す事態が完全に終わり，その状態が基準時点においても有効であることを表す形式」であるため，＜内的限界動詞＞（telic verb）と馴染みやすいと考えられる．

なお，달리다（走る）のような＜動作継続動詞＞が한をとる際には，動作の程度や頻度を制限する副詞(句)や名詞句とともに使われ，節全体が限界点のある事態を表す傾向が見られる．本稿の動詞分類別の한をとる頻度を示すと，次の通りである：

70) 受動動詞の中でも，팔리다（売れる），쫓기다（追われる）は한より하는をとる頻度が高い．팔리다（売れる）は「잘 팔리는 책」（よく売れる本）のように使われ，比較的長い時間にわたって行われる動作を表すことが多い．

表 17．動詞分類別の한をとる頻度

大分類	下位分類	時間の中での展開性	継続性	限界性	한が「現在」を表す	한をとる頻度
内的限界動詞（telic verb）	結果継続動詞	○	○	○	○	■
	状態変化動詞	○	×	○	○	■
非内的限界動詞（atelic verb）	動作継続動詞	○	○	×	×	▩
	内的認知動詞	○	×	×	×	□
	関係規定動詞	×	×	×	×	□
	属性動詞	×	×	×	○	■

※■ 한をとる頻度が高い．　▩ 한をとる頻度が低い．□ 一般に한をとりにくい．

4.8.2. 한「内の関係」に見られる特徴

한「内の関係」における한をとる動詞は基本的に主体や客体に何らかの変化をもたらす動詞である．本稿のテンス・アスペクト的動詞分類によると，＜結果継続動詞＞と＜状態変化動詞＞が多い．

한「内の関係」の被修飾名詞には＜実体名詞＞の中でも，「もの」や「身体」を表す名詞が多い．そして被修飾名詞は한の表す動作の主体や客体，及び「動作の及ぶ場所」を表し，한との繋がりで，「動作の結果物」や「動作の結果が存在する場所」を表す．

① 한＋主体
＜状態変化動詞＞＋「もの」「人間」…
새로 뽑힌 기자（新しく選ばれた記者），부서진 집들（壊れた家），태어난 자식（生まれた子），주어진 시간（与えられた時間），갈등 속에 인생을 마친 인물（葛藤の中で人生を終えた人物）

② 한＋客体
＜結果継続動詞＞＜状態変化動詞＞（生産，加工，授受…）＋「もの」…
우리가 세운 무대（私たちが立てた舞台），내가 끓인 김치찌개（私が作ったキムチ鍋）

③ 한＋動作が及ぶ場所（または動作の結果が存在する場所）
＜状態変化動詞＞＋「身体」「場所」…
안개가 낀 산（霧が立ち込めた山），수건을 두른 머리（タオルをかけた頭）

④ 部分―全体
＜結果継続動詞＞＜状態変化動詞＞＋＜事柄＞＜抽象＞…
난이도를 높인 시험（難易度を高めた試験）

次に한の表す意味に注目すると，한は文脈その他によって多様な意味を表すが，動詞によって한の意味に偏りを見せる傾向が見られる．例えば，＜状態変化動詞＞や＜結果継続動詞＞の한は主体や客体の「現在の状態」を表す傾向が強い．これらの動詞の한はある動作や変化の成立自体を表すというより，動作や変化の結果としての状態を表す．それゆえ，いつ한で示される動作や変化が成立したのかについては関心を示さない．

一方，＜動作継続動詞＞は「온종일 혼자 논 아이에게는 가장 심심한 시간이다」(一日中一人で遊んだ子供にはもっともつまらない時間である）のように用いられ，한構造で，「過去の出来事」を表す傾向が強い．

4.8.3. 한「外の関係」に見られる特徴

한「外の関係」の構造で現れやすい名詞には，時間的に「後」を表す名詞及び「既に終わっている事柄を前提に何事かを言うような」名詞がある．

「外の関係」を実現する한と＜한志向名詞＞の構造上の特徴は，次の 3 点である．

第一に，한と＜同一内容関係＞を実現する名詞には，혐의（嫌疑），사건（事件），사실（事実），죄（罪）などの＜事柄名詞＞や기록（記録），작품（作品）のような名詞がある．これらの名詞は「既に終わっている事柄を前提に何事かを言う」という「完了性」を持っていると言える．

次に，한が表す意味に注目すると，한＜同一内容関係＞においては，被修飾名詞によって한の表す意味が異なる傾向が見られる．例えば，被修飾名詞が기억（記憶），역사（歴史），경험（経験）であれば，한は「過去の出来事」を表す傾向が強い．これらの名詞を修飾する한は했던に置きかえうる場合が多い．それに対し，被修飾名詞が혐의（嫌疑），죄（罪）であれば，한は「完了」を表し，被修飾名詞が상태（状態）であれば，한は「現在の状態」を表す傾向が強い．

第二に，한と＜状況的内容関係＞で現れる名詞には，흔적（痕跡），상처（負傷），결과（結果）のように「既に終わった事柄を前提に何事かを言う」という性質でるる「完了性」を持っている名詞が多い．被修飾名詞 N は，한との繋がりで「…した後の N」に解釈される．この構造における한は「過去の出来事」や「完了」を表す傾向が強い．被修飾名詞が상처（負傷），결과（結果）であると，한は「完了」を表し，被修飾名詞が흔적（痕跡）であると，「過去の出来事」として解釈される場合が多い．被修飾名詞が「병 조각에 찔린 상처」（ビンの破片に刺さった傷）のように，한の直接的な結果を表す場合，한は「完了」を表す．それに対し，被修飾名詞が「누군가가 다녀간 흔적」（誰かが訪れた痕跡）のように，한の直接的な結果を表すとは思えない場合，한は「過去の出来事」を表す傾向が強い．

第三に，名詞単独で，あるいは助詞を伴って，「한＋名詞（助詞）」が接続形のように機能する名詞がある．この種の名詞には次のような名詞がある：

> 끝（末），나머지（余り），다음（次），뒤（後），이상（以上），이후（以後），탓（せい），후（後）など

한をとる動詞に注目すると，「한+뒤（後）」の場合には，한をとる動詞に＜内的限界動詞＞が多いのに対し，「한+끝（末）（에）」の場合には，한をとる動詞に＜非内的限界動詞＞が多い．끝（末）は「오래 고민한 끝에」（長く悩んだすえに）に見られるように，「ある事柄が行われていて，その結果」の意で用いられるため，ある程度時間的な幅を持つ動詞と呼応しやすいと思われる．「連体節＋被修飾名詞（助詞）」の構成が表す意味と連体節の述語動詞の意味との間には一定の関連性がある．

4.8.4. 主に後置詞に用いられる한と被修飾名詞

「-에 대한」（…に対する），「-에 관한」（…に関する）のように，後置詞に用いられる한と高い頻度で現れる名詞がある．이해（理解），인식（認識），조사（調査），평가（評価），비판（批判）など，「精神的活動」「言語活動」を表す名詞が多い．

さらに，관심（関心），지식（知識），정보（情報）などのような「精神的活動の産物」を表す名詞も主に後置詞に用いられる한と共起する．これらの名詞は動作を表す連体節の修飾を受けることは殆どなく，主に後置詞に用いられる한の修飾をうけ，「それがいかなる対象に向かっているのか」という程度の規定しか受けない．

この 4 章では，動詞の連体形한を対象に，한をとる動詞，被修飾名詞，한と被修飾名詞の関係を分析し，한の構造上の特徴を明らかにした．あわせて한の構造上の特徴が한の表す意味と一定の関連性を持つことを示した．

한と被修飾名詞との間に何らかの格関係が認められる「内の関係」では，한が主に＜状態変化動詞＞，＜結果継続動詞＞のような＜内的限界動詞＞をとるという特徴があり，被修飾名詞は한で示される動作に対し，「主体」や「客体」，「動作の結果が存在する場所」を表す傾向が強い．この構造の被修飾名詞には具体的なものを表す名詞が来ることが多い．

一方，한と被修飾名詞が格関係を結ばない場合は，被修飾名詞に「すでに終わった事柄を前提に何事かを表す」という「完了性」を持つ名詞が来る．そして被修飾名詞によって한の意味が決まるという現象が見られる．

第5章 할による連体修飾構造の特徴

この章では，現代韓国語の動詞の連体形のうち，いわゆる「未来」を表す連体形である할による連体修飾構造の特徴について考察することにする．考察に当たっては，할をとる動詞の語彙的・文法的特徴，被修飾名詞の語彙的・文法的特徴，そして할と被修飾名詞の関係などについて分析を行うことにする．

まず，5.1 では，할の表す意味について考察し，5.2 では할をとる動詞の語彙的・文法的特徴について考察する．その後，5.3～5.5 では，言語資料に基づき，할との共起頻度が高い名詞を抽出し，その種類について述べる．そして 5.4 할の構造上の特徴と할が表す意味との関連性について論じることにする．

5.1. 할の意味用法について

할は基準時点より先の事柄や同時の事柄を表す点で，時制的に「非過去」を表す形式であり，可能性，推測といったムード的な意味をともに表す点で，ムード形式でもある．

南基心(1978:41)は할を「未確認法」と呼び，単純に推測・推定された，未確認の事実を表すと述べている．また，할を-겠-と同じ名称で呼ぶのは不当だとし，-겠-は話し手の意志まで表明する点で，할と異なると述べている．[71]

野間秀樹(1997a)は할について「推量や蓋然，当為的なニュアンスを帯びることがしばしばで，法的な色彩が濃いが，時間的な観点から見ると，ある設定された時より前のことには用いないという特徴を持つ」と述べている．

前野敬美(1997)は할を「非過去・不確実」を表す形と見なし，実際の言語資料の分析に基づき，「話し手が「今ここ」と決めた点より過去にはみ出ない限りは，未来の事態であろうと「今ここ」の事態であろうと，話し手が「今ここ」の場に不在で事態を不確実だと判断すれば＜할＞を使用することができるのである」と述べている．

村田寛(2000:113)，박재연(2009)は할が「非現実」(irrealis) [72]を表すと見ている．

村田寛(2000:113)は＜-ㄹ＞は「意志」「当為」「予期」「可能・能力」「可能性」「推量」といったニュアンスを実現しうるモーダルな意味を持っているとし，そのモーダルな意味とは何かについて，次のように述べている（下線は本稿による）：

> ＜-ㄹ＞の用例を考察すると，話し手が現実に存在しているという認識がある事柄に対しては＜-ㄹ＞がつかわれていないことがわかる．例えば，話し手がいる発話の現場で実際に起きている事柄を＜-ㄹ＞で表した例はなかったし，実際そのような事柄を＜-ㄹ＞で表すことができない．このことから＜-ㄹ＞は「事柄が話し手の思い描く現実世界にまだ

---

71) 남기심・고영근(1985:311)は-ㄹは-겠-とは異なり，様態性が明確に現れないと述べている．言語資料の調査によると，할は생각（考え），의향（意向）などの被修飾名詞と共に様態性が明確に現れる傾向が見られた．

寺村秀夫(1993b:185-192)は「桜の花が咲く季節が再びやってきた」における修飾部の「いわば文性’」と「‘完全’な文」との違いについて考察している．「桜の花が咲く季節」の「咲く」は，文の「咲く」と素材概念，統叙，叙述内容という 3 つの要素を含む点では同じだが，「断定作用」という「陳述」を担うかわりに，連体形をとることによって，「叙述内容と後続する「季節」との間の関係概念を担い，したがって終止形における陳述の変わりに，素材「季節」に向かって再び展叙する職能を託される。」すなわち「再展叙」であって，それは「一つの叙述が統叙によって完了して一つの叙述内容が完備しているのに，それからより大規模な叙述をめざして再び展叙する職能である」と述べている．

72) 亀井孝・河野六郎・千野栄一編著(1996:220)は「現実」「非現実」の定義を明確に行わずに，「仮想形」の説明の中で，パラオ語の動詞の形と用法を示し，「現実法（realis），非現実法（irrealis）の対立の研究に興味深い示唆を与えるものである」と説明している．仮想形は「現実の(real)事柄や状態ではなく，実現されていない(unreal)か，仮定されている(supposed)か，想像されている(imagined)事柄あるいは状態を示す」動詞の形である．

存在していないことを表す」と言えるだろう．[73] つまり，<-ㄹ>は非現実の事柄を表すムード語尾（非現実形）と言える．

박재연(2009)は，할の表す「非現実」(irrealis)が-겠-の表す「推測」や「意図」とは異なるとし，-겠-は命題に対する話し手の判断を表すが，할は命題そのものの属性を表すと述べている．しかし「命題そのものの属性」についての説明がされておらず，「命題そのものの属性」とは何かが不明である．命題の内容は話し手によって捉えられるものであることを考えると，할にも命題に対する話し手の判断が当然反映されているのではないだろうかと考えられる．

一方，할の脱時間的な意味に注目した研究がある．菅野裕臣(1986:67)は할について，「まだ実現しない動作」と「現在」を表すと述べ，할が때（時），적（時），무렵（頃）など，一部の名詞につくと，「現在」を表すことがあると述べている．

남기심・고영근(1985:311)は할が때（時）と現れるときについて，その意味が不定的であり，特定な時制を表すと言いにくいと述べている．

유현경(2009)は時制的な意味がない할を「단순관형사형」（単純連体形）と呼び，次の3つの種類に分けている：

1) 을+시간명사: -ㄹ+때/적/무렵/즈음．後に来る名詞が総称的である場合
2) 을+의존명사: -ㄹ+따름/나름/바/수．「方法」，「手段」，「可能性」などの意味を表し，名詞の後に来る要素も制限され，「-ㄹ 따름이다」（…するだけだ），「-ㄹ 바가 아니다」（…することではない），「-ㄹ 줄 알다/모르다」（…することができる／できない）のような文法的なパターンを構成する．
3) 을+일반명사:「입을 옷이 없다」（着る服がない）における「입을 옷」（着る服）のような例．被修飾名詞が特定の意味を持たず，総称的意味を持つ．

유현경(2009)では，1)と2)の構成は文法的な語尾に準ずる統辞論的な機能を果たし，3)は語彙化の過程にある可能性があると述べている．

以上，할に関する先行研究を概観した．言語資料における할の用例を見ると，할は主に話し手が思い描く現実世界にまだ存在しないと判断する事柄を表すのに用いられる．しかし，「그러고도 남을 여자야」（彼女なら十分そうする）の例でわかるように，話し手が実にそうであると確信している現実の事柄を表すにも할を使うことができる．할はある事態を可能性として提示しようが，強い確信を持って提示しようが，「話し手が自らの意図を込めたいときに選択的に用いる形式」であると考えられる：

할：話し手が自らの意図を込めたいときに用いる形式

남기심・고영근(1985:311)が指摘しているように，할が때（時），적（時），무렵（頃）など，一部の名詞につくと，「現在」や「同時」を表し，ムード的な意味は明確に現われない場合がある．

할は文脈その他によって次のような意味を表す：

「予定」「可能性」「可能」「意志」「当為」「推量」…

73) 村田寛(2000:123)はここで言う「現実世界」について，「言語外現実としての客観的な現実世界ではない．あくまでも，話し手が思い描いている現実世界であって，話し手の現実世界が言語外現実としての現実世界と異なることも当然ありうる．話し手の現実世界においてはウサギがしゃべりながら餅をついても一向にかまわないのである」と述べている．

そして語用論的に話し手の対象に対する「評価」や「強調」を表す機能をする．[74]

この点，하는と한がある事態を既存の事実として述べるに留まる点と決定的に異なる．하는と한はある対象の状況を「描写」する働きをするのに対し，할はある対象に対する話し手の「評価」「強調」を表す働きをするようである．

할は文脈によって次のような意味を表す：

> 할：話し手が自らの意図を込めたいときに用いる形式であり，할は文脈によって，「予定」「可能性」「可能」「意志」「当為」などを表し，語用論的に対象に対する「評価」や「強調」を表す機能を果たす．

5.2. 할をとる動詞の語彙的・文法的特徴

ここでは，할をとる動詞にはいかなるものが多いのかについて考察することにする．할をとる動詞については，主に動詞の自他，および＜意志動詞＞か否かという点に注目することにする．

5.2.1. 할をとる頻度の高い動詞

言語資料における할をとる動詞は異なり語数 1,562 種（単純動詞）であり，総 30,511 例である．頻度順に上位 50 位までを示すと次の表の通りである．数字は할をとる頻度である：

> 하다（する）3, 823／보다（見る）1, 786／되다（なる）1,250／가다（行く）878／모르다（知らない）574／받다（もらう）506／오다（来る）374／죽다（死ぬ）359／나오다（出る）335／먹다（食べる）311

これらの動詞は意志動詞として用いられる場合が多い．하다（する）を例として取り上げると，하는と한の場合は「목적으로 하는」（目的とする），「모습을 한」（様子をした）のように，無意志動詞的に用いられる場合が多い．それのに対し，할の場合は次の例のように，意志動詞的に用いられる場合が多い：

> (279) 남편은 남편 대로 할 말이 있다. ＜BTHO0376＞
> 主人は主人なりに言うこと（lit. 言う話）がある．

なお，할をとる頻度が高い動詞はコーパスにおける総頻度でも非常に高い頻度を見せる動詞である．それに対し，コーパスにおける総頻度では 34 位である죽다（死ぬ）が할をとる頻度では 8 位であり，相対的に할と高い頻度で現れていることがわかる．それでは，コーパスにおける総頻度に対する할をとる頻度の割合が高い動詞上位 10 位までを示すと，次の通りである．括弧内は総頻度に対する할をとる頻度の比率を示す：

---

74) 中西恭子(2002:16)は할の用例のうち「어머닌 그때 형을 뒷바라지하느라 죽을 고생을 했던 거야」（母さんはそのとき，兄さんの面倒をみるのに死ぬ＜ほどの＞苦労をしていたんだ）という用例には，「及ばないことを前提とした「（程度の甚だしい）比較」を示す，いわば「程度の比程」とでも呼ぶべき機能がある」と述べている．中西恭子(2002:16)で引用している用例の「죽을」（死ぬ）は「苦労をした」ことを強調するために使われており，「죽을 고생」（死ぬ＜ほどの＞苦労）における죽을（死ぬ）も，「強調」の機能を果たしていると見ることができる．

디디다（踏む）(27.4%)／시집오다(嫁入りする）(16.4%)／시집가다（嫁ぐ）(15.7%)／지나치다（通り過ぎる）(13.9%)／잠자다（寝る）(13.9%)／눈여겨보다（注意深く見る）(12.9%)／떠나오다（離れて来る）(12.5%)／쉬다（休む）(11.8%)／논하다（論じる）(10.9%)／되돌아보다（振り返って見る）(10.9%)

上に示した할をとる動詞を하는や한をとる動詞と比較してみると，할をとりやすい動詞のすべてが人間の活動を表す動詞である特徴がある．なお，言語資料を調査した結果，할のみをとって現れる動詞（動詞句）には次のようなものがあった：

이렇다 하다（これという），염병하다（腸チフスにかかって苦しむべき）[75]

上の「이렇다 하다」（これという）は「話し手」を主体としてしか使われない現象が見られる．このような動詞が할のみをとるということは，할が「話し手が自らの意図を込めたいときに選択的に用いる形式」であるという本稿の主張の根拠となりうる．

それでは，하는，한，할のうち，할をとる頻度がもっとも高い動詞（＝＜할志向動詞＞）にはいかなる動詞があるのだろうか．

まず，自動詞の＜할志向動詞＞には，쉬다（休む），나아가다（進む），그러다（そうする）があった．쉬다（休む）は「쉴 때」（休むとき），「쉴 틈」（休む暇）のような構成でよく現れる傾向があった．그러다（そうする）も「그럴 때」のように，때（時）とよく現れた．

(280) 한국 사회가 나아갈 방향에 대해서도 3 당 대표들은 큰 줄기는 같으나 과정과 절차에 있어서는 시각 차이를 보였다. ＜BTAB0166＞
韓国社会が進む方向についても，3 党代表は大きな幹は同じであるが，プロセスと手順においては，視覚の違いを見せた．

なお，上の例に見られる나아갈（進む）は「当為」を表す用例が圧倒的に多く，連体形をとる動詞と할の意味の間には一定の関連性があることがわかる．

次に할をとる他動詞には살펴보다（（注意して）見る）のような「思考活動」を表す動詞が上位を占めている．「두루두루 따져서 생각하다」（あれこれ計りつつ考える）の意を表す살펴보다（（注意して）見る）は，「살펴볼 필요가 있다」（よく考える必要がある）のように필요（必要）と共起することが多い．次の例における볼（見る）は「考える」の意を表し，「이러한 정황으로 볼 때（このような状況から見る時）」のように，때（時）と共起することが多い：

(281) 특히 최근 수출 동향을 볼 때 우리 나라는 작년에 전년 대비 1 백 5%의 급격한 수출 증가율을 기록한 반면 미국과 일본은 각각 11%와 5%의 증가율을 기록, 수출 증가율이 둔화되는 추세를 보이고 있다. ＜BTAB0179＞
特に最近の輸出動向を見る時，わが国は昨年，前年比で 105%の急激な輸出増加率を記録した一方，米国と日本はそれぞれ 11%と 5%の増加率を記録し，輸出増加率が鈍化する傾向を見せている．

75）言語資料において，「염병하다」は「염병할」の形でしか用いられない．국립국어연구원(1999)では，염병할を「‘염병을 앓을’이라는 뜻으로, 매우 못마땅할 때 욕으로 하는 말（「腸チフスにかかって苦しむべき」の意で，気に食わない相手や事に対して使う悪口）とし，「冠形詞・感嘆詞」と見ている．

なお，할をとる頻度が高い動詞が少ないため，派生動詞のうち，할をとる頻度が高い動詞について調査した結果，할をとる頻度が高い動詞には次のような動詞が見られた．括弧内は할をとる頻度である：

주목하다（注目する）(80.6%)／고려하다（考慮する）(69.6%)／감안하다（考え合わせる）(51.5%)／비교하다（比較する）(50.8%)／얘기하다（話す）(45.4%)

上の動詞は때（時），필요（必要）のような被修飾名詞と主に共起して現れる特徴があった．例えば，주목하다（注目する）は「주목할 필요가 있다」（注目する必要がある）のように用いられることが多い：

(282) 3·1 운동은 민족이 위기를 맞을 때마다 그 극복의 원동력을 줄뿐만 아니라 민족의 미래에 대한 비전을 준다는 데도 새삼스레 주목할 필요가 있다. ＜BTAB0168＞
3・1 運動は民族が危機を迎えるたびに，その克服の原動力を与えるだけでなく，民族の未来に対するビジョンを与えてくれるという点にも，いまさらながら注目する必要がある．

(283) 사안의 민감성을 고려할 때 우리가 생각할 수 있는 정책 대안들을 모두 공개적으로 토의하기는 어렵다. ＜BTBA0233＞
ことの敏感性を考慮する時（lit. 事案の敏感性を考慮する時），私たちが考えうる政策代案のすべてを公に討議することは難しい．

さらに，4.7.2 でも述べているように，할をとる動詞には，「右に出る」の意の「오른쪽에 나서다」，「…に勝てる」の意の당하다，「…の水準に及ぶ」の意の따라오다のような動詞（句）が見られる．これらの動詞は言語資料において主に할の形で現れる．そして할をとり，「可能」を表す傾向が強い．

以上で見たように，할をとりやすい動詞はより高度な認知的活動を表す特徴があり，＜意志動詞＞が多い．살펴보다（（注意して）見る），따지다（問い詰める）は좋아하다（好む），믿다（信じる）のような動詞に比べると，より高度な認知活動を表すと言える．このような動詞の特徴も할の意味を規定する上で重要な手がかりとなると思われる．

5.2.2. 意志動詞・無意志動詞の観点から見た할をとる動詞

次に，意志動詞・無意志動詞の観点から할をとる動詞を考察すると，할をとる動詞には意志動詞が多い．[76] 意志用言については野間秀樹(2007:494)にて次のように定義している：

> 命令形や勧誘形を持つかどうかによって，用言は意志用言と無意志用言の 2 種類に分類しうる：
>
> 意志用言——命令形や勧誘形を持つ用言
> 「학교에 가다」（学校に行く）の가다（行く）
> 「집으로 오다」（家に来る）の오다（来る）など
>
> 無意志用言——命令形や勧誘形を持たない用言
> 「납득이 가다」（納得が行く）の가다（行く）
> 「비가 오다」（雨が降る）の오다（来る）など

さらに，野間秀樹(2007:494)では上のような分類は「意味の上から見ると，主体の意志で左右するような動作を表す用言が意志用言，左右できない動作を表す用言が無意志用言である」と述べている．

할をとる頻度が高い上位 50 位までの動詞について＜意志動詞＞か否かについて調査した結果，모르다（知らない），「생각이 나다」（思いつく）の나다（する），「생각이 들다」（だと思う）の들다（する），끝나다（終わる）以外のすべての動詞が＜意志動詞＞であった：

> 無意志動詞—모르다（知らない），（생각이）나다（（考え）がする），（생각이）들다（（考え）がする），끝나다（終わる）
> 意志動詞—上の動詞以外のすべての動詞

할をとる＜無意志動詞＞のうち，모르다（知らない），「（생각이）나다」（（考え）がする），「（생각이）들다」（（考え）がする）は人間の心理を表す動詞であり，4 章から 5 章にかけて論じた하는と한の＜無意志動詞＞とは性格が異なる．＜하는志向動詞＞の＜無意志動詞＞には떨리다（震える）のような「現象」を表す動詞が多く，＜한志向動詞＞の＜無意志動詞＞には비다（空く）のような「状態変化」を表す動詞が多い．このことから考えると，할をとりやすい動詞はいずれも人間の活動を表す動詞であるという特徴がある．

以上，할をとる動詞について考察した．＜할志向動詞＞は様々な被修飾名詞と多様な意味関係で，할連体修飾構造を成しているわけである．次の 5.3 では하는，한，할のうち，할ともっとも高い頻度で現れる被修飾名詞について分析・考察することにする．

5.3. 할との共起頻度が高い名詞＝＜할志向名詞＞

하는，한，할と共起した総用例が 100 例以上の 293 種の名詞を対象に，하는，한，할との共起頻度を調査した結果，293 種の名詞のうち，27 種（9.2%）が할ともっとも高い頻度で現れた．＜할志向名詞＞を本稿における名詞分類に従って分類すると，27 種の＜할志向名詞＞はすべて＜時間名詞＞＜抽象名詞＞＜事柄名詞＞のいずれかに属する．言語資料における할との共起頻度が高い被修飾名詞を示すと，次の表の通りである：

---

76) 村田寛(2000:89)，前野敬美(1997)参照．

表 18. ＜할志向名詞＞

順位	名詞	하는		한		할		合計
		頻度	比率	頻度	比率	頻度	比率	
1	예정（予定）	0	0.0%	1	0.1%	1285	99.9%	1286
2	필요（必要）	0	0.0%	3	0.1%	2281	99.9%	2284
3	작정（つもり）	0	0.0%	1	0.5%	190	99.5%	191
4	소지（可能性）	0	0.0%	1	1.0%	96	99.0%	97
5	방침（方針）	5	1.0%	7	1.4%	741	97.6%	497
6	때（時）	230	1.2%	260	1.4%	17925	97.3%	18415
7	계획（計画）	51	5.4%	32	3.4%	853	91.1%	936
8	전망（展望）	28	6.0%	14	3.0%	419	90.1%	465
9	당시（当時）	1	0.8%	15	11.3%	117	88.0%	133
10	확률（確率）	21	13.9%	1	0.7%	129	85.4%	151
11	자격（資格）	16	11.3%	6	4.2%	120	84.5%	142
12	정도（程度）	310	14.5%	54	2.5%	1773	83.0%	2137
13	염려（心配）	14	12.4%	7	6.2%	92	81.4%	113
14	준비（準備）	11	3.7%	59	19.7%	229	76.6%	299
15	틈（余裕）	44	16.4%	25	9.3%	200	74.3%	269
16	우려（おそれ）	37	11.7%	46	14.5%	234	73.8%	317
17	위험（危険）	48	22.2%	13	6.0%	155	71.8%	216
18	여유（余裕）	51	30.9%	2	1.2%	112	67.9%	165
19	도리（道理）	23	14.3%	30	18.6%	108	67.1%	161
20	권리（権利）	75	22.7%	40	12.1%	215	65.2%	330
21	용기（勇気）	44	31.0%	9	6.3%	89	62.7%	142
22	기회（機会）	284	39.0%	25	3.4%	420	57.6%	729
23	생각（考え）	635	36.0%	176	10.0%	952	54.0%	1763
24	성질（性質）	51	44.3%	4	3.5%	60	52.2%	115
25	나이（年齢）	42	25.0%	48	28.6%	78	46.4%	168
26	운명（運命）	18	16.5%	45	41.3%	46	42.2%	109

＜할志向名詞＞は＜時間名詞＞＜事柄名詞＞など，そのすべてが抽象的な事柄を表す名詞である．[77] 할が一部の＜時間名詞＞や＜事柄名詞＞と非常に偏って現れるのは，連体修飾の機能と関連があると考えられる．名詞の本来備えている固有の属性を限定するのが，連体修飾のもっとも基本的な機能である．この基本的な機能からすると，一般の名詞は話し手の対象に対する考えを表す形式である할より，ある事態を既存の事実として客観的な態度で述べる形式である하는や한の修飾を受けやすいと考えられる．

上の表の名詞のうち，필요（必要），예정（予定），작정（つもり）は할のみと共起すると言える．5.6にも取り上げるが，필요（必要）と共起した한は，「-에 대한」（…に対す

77）言語資料における할との絶対頻度が高い名詞のうち，上位 50 位の中にも実体を示す名詞は사람（人）（8 位），돈（お金）（28 位）の 2 種のみがあった．

る）のような後置詞に用いられる한であり，예정（予定），작정（つもり）はそれぞれ1例ずつ한と共起したが，不自然な例であった．

次に，＜할志向名詞＞の表す意味に注目すると，意味的に「蓋然性」，「当為」などのモーダルな意味と関わりをもつものや「未然の事態に対して何事かを言う」名詞が多い．このような＜할志向名詞＞は있다（ある），없다（ない），-이다（…だ）のような形式的な用言が後続し，全体が固定された一種の文型を形成する場合が多い：

(284) a. 할（권리 / 소지 / 자격）가 있다 / 없다.
する（権利／可能性／資格）がある／ない
b. 할（방침 / 태세 / 작정 / 예정）이다.
する（方針／態勢／つもり／予定）である

例えば，방침（方針）は할と共起する 741 例中 609 例，82.2%が上記の b のように，–이다（だ）と結合して現れた．(284)の名詞類は할と共起する殆どの用例において，名詞の実質的な意味が抽象化し，「할+名詞（助詞）＋上位節の述語動詞」全体で，話し手の心的態度を表すような働きをする．

＜할志向名詞＞は本稿の動詞分類によると，＜事柄名詞＞や＜抽象名詞＞に分類でき，할との繋がりで表す意味に注目して分類すると，おおむね次のようになる：

予定名詞：계획（計画），예정（予定）など
意志名詞：각오（覚悟），궁리（考え），엄두（思い）など
可能性名詞：염려（心配），우려（おそれ），확률（確率）など
要件名詞：권리（権利），능력（能力），도리（方法），자격（資格）など
当為名詞：의무（義務），책임（責任）

次に＜할志向名詞＞の実際の用例を，寺村秀夫(1980)の言う「内の関係」，「外の関係」の観点から見ると，＜할志向名詞＞のすべてが，할と主に「外の関係」を実現して現れている．そして＜할志向名詞＞を 2.3.2 で論じた，「外の関係」の種類の観点から考察すると，＜할志向名詞＞の殆どは할と＜状況的内容関係＞として現われる．

一方，＜할志向名詞＞は一般的な動詞の하는，한とはあまり共起しない．例えば，염려（心配），우려（おそれ）は할と共起するときは「권리（権利），기회（機会），용기（勇気）のような名詞を修飾する하는は，主に「可能」を表す「할 수 있는」である．そして염려（心配），우려（おそれ），생각（考え）のような名詞を修飾する하는は「하지 않을까 하는 염려」（…するのではないかという心配）の하는のように，主に「…という」に相当するものである．

次に우려（心配），염려（心配）のような名詞を修飾する한は，主に「-에 대한」（…に関する），「-에 관한」（…に関する），「-를 위한」（…をための）のような後置詞として用いられるものである．＜할志向名詞＞が하는や한と共起する様相については，5.6 にて詳述する．

5.4. 할連体修飾構造Ⅰ—「内の関係」（意味的格関係）

ここでは，「内の関係」の할連体修飾構造について考察する．5.3で論じた＜할志向名詞＞は主に할「外の関係」で現れる特徴があった．そのため，＜할志向名詞＞ではないが，할との共起において相対的に高い頻度を示した名詞を対象に，할「内の関係」について論じることにする．

할「内の関係」として現れた名詞のうち，相対的に할との共起頻度が高い名詞には，사항（事項），말씀（言葉），미래（未来），짓（行為），돈（お金）などがあった．

まず，할「内の関係」における할をとる動詞と할の意味との関連性について述べる．할「内の関係」では，할をとる動詞が＜意志動詞＞か否かによって，할の意味が異なるようである．例えば，次の例の a～c は＜意志動詞＞の例であり，할は「予定」「可能」「目的」といった意味を表す．それに対し，d は＜無意志動詞＞の例であり，할は「可能性」を表す:

(285) a. 이것은 파티에 쓸 그릇이다.
これはパーティーに使うお皿である.

b. 파티에 쓸 그릇을 사려고 백화점에 갔다.
パーティーに使うお皿を買うためにデパートに行った.

c. 파티에 쓸 그릇이 없다.
パーティーに使えるお皿がない.

d. 금방 깨질 그릇이다.
すぐに割れるお皿だ.

할はそれをとる動詞と被修飾名詞が同じであっても，文脈によって多様な意味を実現し，上の例の a は「파티에 쓸 예정인」（パーティーに使う予定の），b は「파티에 쓰기 위한」（パーティーに使うための），c は「파티에 쓸 수 있는」（パーティーに使える）のように解釈できる．

次に，被修飾名詞と할が表す意味との関連性について言うと，被修飾名詞によって，할が特定の意味を表しやすいという特徴が見られた．例えば，被修飾名詞が돈（お金），밑천（元手），차비（足代）である場合，할は「可能」や「目的」を表す場合が多い:

(286) 시집갈 밑천을 마련하겠다고 고향을 떠나 상경한 그녀의 꿈은 2 년만에 깨어졌다. ＜BTAA0162＞
嫁入りのための元手（lit. 嫁入りする元手）を用意しようと，故郷を離れ上京した彼女の夢は，2 年で破れた.

(287) 핸드백이 없으니 전화를 걸 수도 없었다. 집에 갈 차비도 걱정이었다. ＜BTEO0329＞
ハンドバッグがないから電話をかけることもできなかった．家に帰る交通費も心配だった.

そして，被修飾名詞が사항（事項）である場合，할は「当為」を表す場合が多く，被修飾名詞が말씀（言葉）である場合，할は「意志」や「可能」を表す場合が多い：

(288) 거기에는 임신부가 주의할 사항과 금기들이 기록되어 있다. ＜BTHO0429＞
そこには妊婦が注意すべき事項と禁忌事項が記録されている.

(289) “급하게 드릴 말씀이 있어요.” ＜BTEO0290＞
“今すぐ申し上げたいこと（lit. 申し上げたい言葉）があります. ”

(290) “무어라 드릴 말씀이 없군요. 안타깝습니다.”＜BTEO0309＞
“何とも申し上げる言葉がありません. 気の毒です. ”

そして，被修飾名詞が짓（行為）である場合，할は「可能」や「可能性」を表す例が多い：

(291) 십여 년 전 감옥 살 때에 단식 투쟁이란 걸 했는데 정말 사람이 할 짓이 아니었다. ＜BTHO0424＞
10 年余前監獄暮らしをしていたときに，断食闘争というのをしたのだが，本当に人のすることではなかった.

さらに，被修飾名詞が미래（未来）である場合，할は「予定」を表す例が多い：

(292) 다가올 미래는 과연 어떤 모습이며, 우리의 삶에 어떤 의미를 지니게 될까요. ＜BTBB0234＞
近づいてくる未来は果たしてどのような様子で，我々の生にどのような意味を持つのだろうか.

以上，할「内の関係」における할をとる動詞と被修飾名詞について考察した．할をとる動詞が＜意志動詞＞である場合は，할が文脈によって「意志」「可能」「予定」などの多様な意味を表すのに対し，할をとる動詞が＜無意志動詞＞である場合は，할が「可能性」「可能」「予定」を表し，「意志」や「当為」は表しにくいようである.

被修飾名詞について言えば，被修飾名詞によって，할が特定の意味を表しやすいという特徴が見られる．しかしいずれの場合も，「内の関係」における할の意味は，할をとる動詞と被修飾名詞のみならず，上位節の用言, 共起する副詞などの文脈条件によって最終的に決められると言える.

5.5. 할連体修飾構造Ⅱ—「外の関係」（内容補充的関係）

＜할志向名詞＞はある基準時点で「まだ起こっていない事柄について何事かを言う」ような名詞である．このような名詞の性質を「未然性」と呼ぶことができる.

하는と한については，「外の関係」を＜同一内容関係＞と＜状況的内容関係＞に分類したが，할「外の関係」の場合は，「할 생각이다」（するつもりである）のように，할と被修飾名詞と上位節の動詞が一種の文型のようになっており，할と被修飾名詞が＜同一内容関係＞なのか，＜状況的内容関係＞なのかの判断が難しい場合が多い．よって，할「外の関係」については，할が表す意味によって，いくつかの種類に分類し，分類されたグループごとに，할をとる動詞，할の実現する意味，上位節の用言の種類などについて考察することにする.

あわせて，할の他の形式への言い換えの可能性や否定的な表現との共起についてみていく．[78]

5.5.1. 할＋＜予定名詞＞（계획（計画）類）

계획（計画），방침（方針），예정（予定）などは「할＋名詞＋-이다（…だ）」全体で話し手の心的態度を表し，「할 것이다」（するつもりである）に言い換えることができる．このグループの名詞は，名詞の語彙的意味に「これから」，「前もって」といった意味が含まれており，[79] 할との繋がりで，「物事をする前にあらかじめすることやその内容」を表す．

まず，「할＋＜予定名詞＞」における할をとる動詞を意志動詞・無意志動詞の観点から見ると，全体的に＜意志動詞＞が多い傾向が見られた．例えば，계획（計画）の場合は할をとる動詞の 99%が＜意志動詞＞であった．

次に，「할＋＜予定名詞＞」における할の表す意味に注目すると，할が＜意志動詞＞である場合は「意志」を表し，할が＜無意志動詞＞である場合は「予定」を表す：

할が「意志」を表す例：

(293) SK 텔레콤은 앞으로 중국 일본 베트남 등지에도 수출을 늘릴 계획이다. ＜BTAB0170＞
SK テレコムは今後，中国，日本，ベトナムなどにも輸出を増やす計画である．

(294) 검찰은 17 일 진정서를 낸 재개발조합 관계자들을 불러 조사하는 것을 시작으로 관련자들에 대한 본격 조사에 들어갈 방침이다. ＜BTAB0171＞
検察は 17 日陳情書を出した再開発組合の関係者たちを呼んで調査することを皮切りに，関係者への本格的な調査に入る方針である．

할が「予定」を表す例：

(295) 도로는 보수작업을 위해 얼마 후면 장기간 폐쇄될 계획이었다. ＜BTEO0315＞
道路は，補修作業のために，まもなく長期間閉鎖される予定だった．

---

78) 中西恭子(2002:15)は「上位節に否定表現を伴うのは하는で全用例 1084 例中 109 例(10%)，할で全用例 523 例中 111 例(21%)であった」と述べた上で，「内の関係」「外の関係」別にみれば，「否定表現との共起は할「外の関係」で相対的に多いことがわかる」と述べている．
寺村秀夫(1993a)はムードに関わる助動詞や補助動詞について，否定化を許すか否かについて調査している．否定をムードの一種と見るならば，ムードを表す形式である할は否定になじみやすいと考えられる．

79) 계획（計画）‘앞으로 할 일의 절차, 방법, 규모 따위를 미리 헤아려 작정함. 또는 그 내용’（これからすることの順序，方法，規模などを前もって考えて決めること，またはその内容）
방침（方針）‘앞으로 일을 치러 나갈 방향과 계획’（これから物事を実行するための方向や計画）
예정（予定）‘미리 정하거나 예상함’（前もって決めること，またはその事柄）

(296) 이미 포화상태에 있는 MRI(자기공명영상장치) 등 고가(고가) 의료장비의 도입이 전면 자유화될 방침인 것으로 알려졌다. ＜BTAA0156＞
すでに飽和状態にある MRI（磁気共鳴画像装置）などの高価な（高価）医療機器の導入が全面自由化される方針であることがわかった.

예정（予定）は次の例のように「할 예정이다」（…する予定である）全体で固定化された一種の文型のように用いられる場合が多い：

(297) 11 월 초에 촬영을 마치고 2 개월의 후반작업을 거쳐 내년 설 극장에 걸릴 예정이다. ＜BTBF0268＞
11 月の初めに撮影を終え，2 ヶ月の後半作業を経て，来年の正月に上映される予定（lit. 劇場にかかる予定）である.

(298) 아키타 현으로 발령이 날 예정이었는데, 마침 모교인 중동학교의～교장으로부터 교사로 와 달라는 편지가 왔다. ＜BTBA0232＞
秋田県に辞令が出る予定であったが，母校である中東学校の～校長から教師に来てほしいという手紙が来た.

一方，계획（計画），방침（方針）が「計画案」「方針案」の意を表すときには，할을 하는に言い換えうる：[80]

(299) 미국 국방부는 이라크 주둔 미군을 내년부터 점진적으로 감축할 계획을 갖고 있다고 워싱턴 포스트가 보도했다. ＜BTAB0174＞
米国国防総省は，イラク駐留米軍を来年から段階的に削減する計画を持っているとワシントンポストが報じた.

이라크 주둔 미군을 내년부터 점진적으로 감축할 계획
イラク駐留米軍を来年から段階的に削減する計画
→이라크 주둔 미군을 내년부터 점진적으로 감축하는 계획
イラク駐留米軍を来年から段階的に削減する計画

감축할（削減する）の場合はその動作の主体が미국 국방부（米国国防総省）であり，意志のニュアンスが感じられるのに対し，감축하는（削減する）の場合はその動作の主体が特定しにくく，意志のニュアンスが感じられない.

5.5.2. 할＋＜意志名詞＞（작정（つもり）類）

각오（覚悟），생각（つもり），궁리（考え），용의（用意），의욕（意欲），요량（つもり）など名詞は，할との繋がりの中で「何かをしようとする思い」を表す．これらの名詞は語彙的意味に「何事かをしようとする」といった意味が含まれている場合が多い．[81]「할＋＜意志名詞＞」における할をとる動詞は，基本的に＜意志動詞＞である：

(300) 난 어떻게 하든 서울까지 갈 작정이야. ＜BTGO0359＞

---

80) 3.5.1 の하는と＜同一内容関係＞を実現する＜하는志向名詞＞を参照.

81) 각오（覚悟）‘앞으로 해야 할 일이나 겪을 일에 대한 마음의 준비’（これからすべきことや経験することに対する心の準備）
엄두（思い）‘감히 무엇을 하려는 마음을 먹음. 또는 그 마음’（何かをしようとする心）

私はどうにかして，ソウルまで行くつもりなんだ.

(301) 북쪽에는 아예 '회담'을 가질 마음이 없었다. ＜BTAA0162＞
北には最初から「会談」を開く気がなかった.

(302) 집으로 돌아온 저는 옷을 갈아입을 생각도 않고 침대에 누웠습니다. ＜BTEO0339＞
家に帰ってきた私は，着替えることも考えず（lit. 着替える考えもせず），ベッドに横になりました.

(303) 혼자서 아픔을 견딜 작정이었다. ＜BTEO0281＞
一人で痛みに耐えるつもりだった.

(304) "너 오늘 나한테 덜미 잡힌 거니까 도망갈 생각은 아예 말어. " ＜BTEO0329＞
お前今日私に悪事がばれたんだから，逃げること（lit. 逃げる考え）は最初から考えないで.

(305) 이태리제 프라다 가방은 값이 워낙 비싸 몇 년 전부터 갖고 싶어하는데도 아직 살 엄두를 못 내고 있었다. ＜BTEO0287＞
イタリア製のプラダのバッグは，値段があまりにも高くて，数年前から欲しがっているにも関わらずそれを買うこと（lit. 買う考え）を考えることすらできなかった.

(306) 아들이 급우들로부터 따돌림을 당하게 되자 그의 부친은 아들을 미국으로 보낼 결심을 하게 된다. ＜BTHO0377＞
息子が同級生からいじめられるようになり，彼の父親は彼をアメリカに送る決心をするようになる.

(307) 대부분 투자자들이 주식형 상품에 가입할 엄두를 내지 못하고 있다. ＜BTAA0159＞
大半の投資家らが株式型商品に加入することに気が進まないでいる.

(308)の계속되다（継続される）と(309)の끝나다（終わる）は＜無意志動詞＞であるが，작정（つもり）と共起すると，「意志」を表すようである：

(308) 언제까지 계속될 작정인 듯 쿵쿵 울리는 그 소리가, ＜…＞마구잡이로 왔다. ＜BTEO0300＞
いつまでも続くかのように（lit. いつまでも続くつもりであるように）どしんどしんと響く音が＜…＞襲いかかってきた.

(309) 전쟁은 끝날 생각을 하지도 않는데 군산 옥구의 건물들은 5 천 동 이상이 전파 혹은 반파되었다. ＜BTHO0416＞
戦争は終わりそうにもないのに（lit. 終わる考えもしないのに），群山玉鉤の建物の 5 千棟以上が全部または半分壊れた.

「할＋＜予定名詞＞」の場合は할をとる動詞が＜意志動詞＞である場合には「意志」を，＜無意志動詞＞である場合には「予定」を表したが，「할+＜意志名詞＞」の構造では，할が＜無意志動詞＞である場合も意志のニュアンスを帯びる場合がある．

上の例を見てわかるように，「할＋＜意志名詞＞」には否定的な表現が繋がりやすい場合がある．被修飾名詞が마음（心），엄두（勇気）である場合は基本的に없다（ない），「-지 않다」（…ではない）などの否定的な表現が後続する：

(310) 그러나 표정이 워낙 굳어 있어 쉽사리 물어볼 엄두가 나지 않았다. ＜BTEO0287＞
しかし表情があまりにも硬くなっていて，聞いてみる勇気が出なかった．

それに対し，被修飾名詞が용의（用意）であると，있다（ある）が後続することが多い：

(311) 우리 정부 역시 북한과 우리 우방들과의 관계개선을 적극 장려하고 지원할 용의가 있다는 의사를 오래 전부터 표명해 놓고 있다. ＜BTAB0168＞
韓国政府も北朝鮮と我々の友好国との関係改善を積極的に奨励し，支援を行う用意があることを以前から表明している．

村田寛(2000:94)は할が否定的な表現に繋がりやすいと指摘しているが，上記の用例を見ると，被修飾名詞によって肯定的な表現が繋がりやすい場合もあることが見て取れる．さらに意味が似ている名詞であっても，否定的な表現との共起においては異なる様相を見せる場合がある．

5.5.3. 할＋＜当為名詞＞（의무（義務）類）

의무（義務），책임（責任）は할との繋がりの中で，「当然なすべきこと」を表す：

(312) 따라서 기업도 사회문제를 인식하고 그 해결을 위하여 공헌하고 노력할 의무가 있다고 생각하는 것이다. ＜BTHO0404＞
従って，企業も社会問題を認識し，その解決のために，貢献し，努力する義務があると思うのである．

(313) 우리는 교사로서 학생들을 지도하고 보호할 책임이 있다. ＜국립국어연구원(1999)＞
我々は教師として学生を指導し，保護する責任がある．

このグループの名詞を修飾する動詞には全体的に＜意志動詞＞が多い．[82] 次は＜意志動詞＞の例である：

(314) 익명의 독자를 향하여 대화를 시작한 글쓴이는 자기의 글을 읽는 이들에게 자신의 의사를 분명하게 전할 의무가 있다. ＜BTHO0375＞
匿名の読者に向けて対話を開始した著者は，自分の文章を読む人たちに，自分の意思を明らかに伝える義務がある．

(315) 미술관이 소장 작품의 정확한 작자를 가려낼 의무는 있다. ＜BTHO0371＞
美術館が所蔵作品の正確な作者を選別する義務はある．

82) 村田寛(2000:96)は할が「当為的なニュアンスを帯びる場合」について，動作主体が当然なすべきことなので，用言は意志用言が多いと述べている．

(316) 그리고 조직사회의 조직들은 진정으로 사회적 문제를 조직의 기회(opportunity of organization)로 만들 책임이 있다. ＜BTHO0404＞
そして組織社会の組織は心から社会的問題を組織の機会（opportunity of organization）にする責任がある.

의무（義務），책임（責任）を修飾する할は「当為」を表す.
上記の名詞の他に，차례（順番），나이（年齢）も할との繋がりで，「何かをなすべき状況」などを表すことが多い：

(317) 다음은 지난 철학을 반성적으로 재검토할 차례이다. ＜BTHO0116＞
次はこれまでの哲学を反省的に再検討する番である.

(318) 나는 아직 장가를 들 나이가 아니었으나 순이는 이미 시집갈 나이를 지난 지 오래였다. ＜BTEO0284＞
私はまだ結婚する年ではなかったが，スニはもうとっくに嫁に行く年齢を過ぎて久しかった.

시간（時間）は할との繋がりで，「何かをすべき時間」を表すことが多い：

(319) 너도 나갈 시간 됐잖아. ＜BTEO0329＞
君も出て行く時間になったでしょう.

「할＋＜当為名詞＞」における할は「当為」を表す.

5.5.4. 할＋＜要件名詞＞（권리（権利）類）
권리（権利），능력（能力），도리（方法），자격（資格），용기（勇気）や，경황（景況），여유（余裕），여지（余地）のような名詞は，할との繋がりの中で，「ある事柄を可能にする要件」となる．これらの名詞は，語彙的意味に「何事かをするに必要な…」「何事かが出来る…」「…するだけの」といった意味が含まれている場合が多い．[83]
낯（面目），면목（面目），명분（名分），처지（立場），형편（状況）のような名詞も，할との繋がりの中で「何事かを可能にする状況や道理」などを表し，할との共起頻度が高い：

---

83) 권리（権利）「권세와 이익. 어떤 일을 행하거나 타인에 대하여 당연히 요구할 수 있는 힘이나 자격」（権勢と利益．ある行為をする際に，または他人に対して当然要求しうる力や資格）
능력（能力）「일을 감당해 낼 수 있는 힘」（事をやり遂げる力）
도리（方法）「어떤 일을 해 나갈 방도」（事をなしていく方法）
배짱（度胸）「조금도 굽히지 아니하고 버티어 나가는 성품이나 태도」（自らの意志や意見などを少しも曲げることなく押し通していく気性や態度）
자격（資格）「일정한 신분이나 지위를 가지거나 일정한 일을 하는 데 필요한 조건이나 능력」（一定の身分や地位を持つこと，または仕事をするのに必要な条件や能力）

(320) 트럭의 조수석은 이미 다른 승객들로 차 있어 짐칸을 이용할 수밖에는 없었지만 불평을 늘어놓을 처지는 아니었다. ＜BTEO0296＞
トラックの助手席はもう他の客で満員になっていて，荷台を利用するしかなかったが，文句を言える立場ではなかった.

(321) 물건 만드는 기술을 직접 개발하고 있는 공학자의 말이라, 복잡한 이유를 붙이거나 엉뚱한 소리를 하면서 반대할 명분이 약하다. ＜BTHO0124＞
ものづくりの技術を直接開発しているエンジニアの話だから，複雑な理由を付けたり，無茶なことを言って反対する名分が立ちにくい.

(322) "＜…＞아침엔 뵐 면목이 없어서 그냥 왔어요." ＜BTBF0263＞
「＜…＞朝は合わせる顔がなくて，何も言わずに着ました」

(323) 소설을 써서 책방에 내놓을 자격이 내겐 아직 없는 것처럼 느껴진다. ＜BTEO0339＞
小説を書いて本屋に出す資格が私にはまだないように感じられる.

(324) 담배를 끊을 용기가 도무지 나지 않는다. ＜BTEO0301＞
どうしてもタバコをやめる勇気がない.

上の例の할は「可能」や「価値」を表し，「할 수 있는」（することができる），「価値，可能」を表す「할 만한」（するほどの）に言い換えうる.
このグループの名詞を修飾する動詞には全体的に＜意志動詞＞が多い．しかし，次のような＜無意志動詞＞の例も少なからず見られる：

(325) 단지 여자라는 이유만으로 세상에 태어날 권리조차 박탈당하고＜…＞＜BTHO0115＞
女性だという理由だけで，世の中に生まれる権利さえ奪われ，＜…＞

ここで取り上げた名詞は，아니다（…ではない），없다（ない），약하다（弱い）のような否定的な表現が後続しやすい.
「할＋＜要件名詞＞」における할は「可能」を表す.

5.5.5. 할＋＜可能性名詞＞（염려（心配）類）
염려（心配），우려（憂慮），위험（危険）などは，할との繋がりの中で「…する恐れ」を表す．「本来の性質」の意を表す소지も，할との繋がりの中で，「…する恐れ／可能性」を表し，할との共起頻度が高い：

(326) 이 법은 악용될 소지가 있다.
この法律は悪用される恐れがある.

また「事柄が起こる確実性の程度」を表す확률（確率），공산（公算）も할との繋がりで，「…する可能性」を表し，このグループに分類しうる：

(327) 성공의 문턱에서 좌절한 사람은 더 큰 승부에서도 중도에 포기할 확률이 높다. ＜BTHO0390＞
成功の入り口で挫折した人は，より大きな勝負でも，途中で放棄する確率が高い.

(328) 지방은 주택공급이 과다할 정도로 충분한 데다 투자성이 없어 보합이나 값이 떨어질 공산이 크다. ＜BTAA0155＞
地方は住宅が供給過多なうえに投資性がなく，価格が横ばいまたは低下する公算が大きい.

＜할志向名詞＞は普通，＜意志動詞＞の할と共起するのに対し，「할＋＜可能性名詞＞」における할をとる動詞は＜無意志動詞＞である場合が多い．以下，＜無意志動詞＞の例を示す：

할をとる動詞が自動詞の場合の例：

(329) 땅의 형세로 보아 식량이 풍부하므로 굶주릴 염려가 없다. ＜BTHO0422＞
土地の形勢から見て食糧が豊富なので，飢える心配がない.

(330) 또 일광욕을 한 이불을 그대로 덮어 주면 감기에 걸릴 우려가 있다. ＜BTHO0429＞
また，日光浴をした布団をそのまま掛けると，風邪を引く恐れがある.

(331) 잘못 하면 그물이 스크루 안으로 휩쓸려 들어가 감길 염려가 있으므로 이 과정이 가장 어려운 것이다. ＜BTHO0418＞
ともすればネットがスクリューの中に巻き込まれ，巻きこまれる恐れがあるので，このプロセスが最も難しいものである.

他動詞は普通意志動詞的であるが，次の例で見て取れるように，これらの名詞を修飾する他動詞は無意志動詞的である：

할をとる動詞が他動詞の場合の例：

(332) 이 때문에 지난해 엄청난 수해를 입었던 서울시는 올해도 작년과 비슷한 수해 취약지에서 또 다시 물난리를 겪을 위험이 크다. ＜BTAF0214＞
このため，昨年膨大な水害を受けたソウル市は，今年も昨年と似たような水害に弱い地域で再び水害を受ける危険性が高い.

(333) 쌀의 단백질은 소화율이 좋고 콜레스테롤을 증가시킬 우려가 없다. ＜BTH00396＞
米のタンパク質は，消化率が良く，コレステロールを増加させる恐れがない.

(334) 한편 지나치게 긴 인용문은 논문의 주제나 당면 과제와 관련이 먼 사실이 언급될 수 있기 때문에 문제의 초점을 흐리게 만들 우려도 있다. ＜BTHO0375＞
一方，過度に長い引用文は，論文のテーマや当面の課題から関連性が弱い事柄が言及されることがあるので，問題の焦点をぼかしてしまう恐れもある.

(335) 오락성 문화는 인간의 심성을 황폐화시킬 우려가 있다. ＜BTHO0371＞
娯楽性の文化は，人間の心を荒廃させる恐れがある.

(336) 대부분의 병원들이 실내 금연과 흡연실 설치 의무를 지키고 있지 않아 공기 오염으로 인한 질병의 악화 등 오히려 환자의 건강을 해칠 우려가 있는 것으로 나타났다. ＜BTAE0192＞
殆どの病院が室内禁煙と喫煙室の設置義務を守っていないため，空気汚染による疾病の悪化など，むしろ患者の健康を害する恐れがあることがわかった.

(337) 일손이 없어서 모내기 적기를 놓칠 우려가 있다. ＜BTHO0372＞
人手がないので，田植えの適機を逃す恐れがある.

(338) 또 선거에서 후보자 선전광고가 성행하면 비싼 광고료를 부담할 수 있는 재력이 선거의 당락에 큰 영향을 미칠 우려가 있다. ＜BTHO0433＞
また，選挙で候補者の宣伝広告が盛んになる場合，高価な広告料を負担することができる財力が，選挙の当落に大きな影響を与える恐れがある.

「할＋＜可能性名詞＞」における할は「可能性」を表す．この際，할は「ある事態が起こりうる見込みがある」ことを示す「할 수 있는」や「할 지도 모를」に言い換えることができる.

なお，「할＋＜可能性名詞＞」には，肯定的な表現，否定的な表現ともに後続することが多いが，소지（可能性）は上位節に，있다（ある），「없지 않다」（なくはない），다분하다（多い），크다（大きい）など，肯定的な表現が後続しやすい.

(339) 그는 정치가가 될 소지가 다분하다.
彼は政治家になる可能性が十分である.

(340) 당시에는 아무런 문제제기를 하지 않다가 시간이 한참 지난 후 이를 폭로하는 것은 자신들의 이해관계 때문이라는 비난을 받을 소지가 크다. ＜BTAB0168＞
当時は何の問題提起もしないでおいて，時間が経った後でそれを暴露するのは，自分たちの利害関係のためだという非難を受ける可能性が大きい.

확률（確率）は上位節の述語に높다（高い），낮다（低い）が来ることが多く，공산（公算）は主に크다（大きい）が後続する.

以上，할「外の関係」については，被修飾名詞を할との繋がりで表す意味によっていくつかの種類に分類し，分類されたグループごとに，할をとる動詞，할の実現する意味，上位節の用言の種類などについて考察した．ここで取り上げた名詞の他にも，준비（準備），운명（運命）などが할「外の関係」としてよく現れる.

「할＋준비（準備）」における할は「하기 위한」（…するための）に言い換えられ，「目的」を表す．そして할をとる動詞は，基本的に＜意志動詞＞である.

一方，「할＋운명（運命）」における할は，「해야 할」（…するべき）や「할 지도 모를」（…するかもしれない）に言い換えられ，「当為」や「可能性」を表す.

할「外の関係」では，被修飾名詞と할をとる動詞との間に一定の関連性がある．例えば，「할＋＜意志名詞＞」では할をとる動詞が＜意志動詞＞であり，「할＋＜可能性名詞＞」では할をとる動詞が＜無意志動詞＞である．さらに，被修飾名詞と할が表す意味との間にも一定の関連性が認められる.

5.5.6.「할＋名詞（助詞）」が文法的な機能を果たす場合

＜할志向名詞＞には，「할＋名詞（助詞）」が文において果たす機能によって，①主に接続形の機能を担うもの，②主に-이다（…だ）と結合し，主に話し手の心的態度を表す働きをするもの，③主に強調の機能をするものがある．

5.5.6.1. 할＋방침（方針），계획（計画）など＋-이다（…だ）

방침（方針），계획（計画），예정（予定），작정（つもり），생각（考え）などの名詞は「할＋名詞＋-이다（…だ）」全体で話し手の心的態度を表し，「할 것이다」（するつもりである）に言い換えうる．

5.5.6.2. ＜할＋名詞（에)＞が接続形のように機能する名詞

＜할志向名詞＞のうち，때（時）は，「-ㄹ 때」（…するとき）の構成で，連体節が表す事柄と上位節が表す事柄の時間的前後関係を表す機能を果たす:[84]

(341) 경제성장의 측면에서 볼 때 미국의 금리인상은 환율의 변화를 통해 국내경제에 영향을 미칠 수 있다. ＜BTAA0155＞
経済成長という側面から見た時，アメリカの金利引上げは，為替レートの変化を通じて国内の経済に影響を及ぼす可能性がある．

(342) 쌀에 대한 국민 정서로 볼 때, 쌀 시장의 부분적인 개방은 충격이 아닐 수 없다. ＜BTAE0212＞
お米に対する国民の情緒から考えると（lit. お米に対する国民の情緒から見る時），お米の市場の部分的な開放は衝撃なことに違いない．

一方，때（時）が上の用例のような機能を果たす場合以外は，次のように他の連体形と共起する例も現れる：

(343) 당시는 일본의 학생운동이 도쿄 대학교를 중심으로 절정에 달한 때였다. ＜BTHO0403＞
当時は日本の学生運動が，東京大学を中心に頂点に達した時期であった．

때（時）以外に할と高い頻度で現れた「時間」を表す名詞としては당시（当時）があった．これらの名詞を修飾する할に，代って言い換えられる形式は特に見当たらない．

5.5.6.3.「할＋名詞（로，-이다）」が強調の機能を担う名詞：정도（程度）

정도（程度）が할と共起する際は，主に「할 정도로」（…するほど），「할 정도이다」（…するほどである）のように使われる：

(344) 한국의 발레수준이 세계 5 위 안에 꼽힐 정도로 눈부시게 발전했더군요. ＜BTAF0216＞
韓国バレエのレベルが世界 5 位以内に挙げられるほど，著しく発展しましたね．

---

84) 정희정(2000:217-244)は때（時）のように，意味が抽象化し，他の成分とともに文法的な機能を果たす名詞を‘문법소성 명사’（文法素性名詞）と呼んでいる．また，유현경(2009:63)は「-을+때/적/무렵/즈음」の構成を「시간 표현을 나타내는 유사 연결어미(준연결어미)」（時間表現を表す擬似連結語尾（準連結語尾））と見ている．

(345) 또한 긴 것에 대한 선호는 여자의 치마에서도 마찬가지여서 궁중의 왕비의 치마는 땅에 끌릴 정도였으며, 상류층의 여자의 치마도 조선 말기쯤에는 발밑에서 50cm 정도의 긴치마가 있었다. ＜BTHO0423＞
また，長いものに対する選好は，女性のスカートでも同様であり，宮中の王妃のスカートは地面にすれる程の長さであり，上流階級の女性のスカートも朝鮮末期頃には足元から 50cm 程度の長いスカートがあった.

(344)と(345)の할は，実際にそうである事柄を表しているように考えられる．例えば，(345)の「길이가 땅에 끌릴 정도」（長さが地面にすれる程）はスカートが地面に引きづられる状態であるように解釈され，この例での끌릴（すれる）は「非現実」を表すとは言いがたい．つまり，「할 정도이다」「…するほどである」，「할 정도로」（…するほど）はそれ全体で，「強調」の機能を果たしていると考えられる．

할と하는の言い換えの観点から言えば，ここで取り上げた3つの種類の機能を果たす할については하는との言い換えが難しいと考えられる．

5.6. ＜할志向名詞＞が하는や한と共起する場合

＜할志向名詞＞が하는と共起する場合は，話し手が客観的な事実として事柄を述べるようなニュアンスが強く感じられる：

(346) 영농 교육 교재를 옆에 놓고 떼부자가 되는 계획을 세우기 시작했다. ＜BTHO0424＞
営農教育教材を横に置き，大金持ちになる計画を立て始めた.

(347) 자질 있고 사명감 있는 인재를 양성하는 것, 이것이 바로 고령 사회를 맞는 준비다. ＜BTHO0403＞
資質があり，使命感のある人材を養成すること，これがまさに高齢社会を迎える準備である.

(348) 반면 국제적 투자은행 중에선 하반기에도 1200 원대가 유지될 것으로 보는 전망도 있다. ＜BTAA0159＞
反面，国際的投資銀行の中では，後半期には 1200 ウォン代が維持されると見る展望もある.

前述したように，할の場合は，動作の主体が上位節の主体と一致することが多く，「할＋被修飾名詞＋上位節の述語」全体が1つの述語として機能していることが多い．それに対し，上の例からわかるように，하는の場合は動作の主体が一般人であるという特徴がある．

その他，「하는＋＜할志向名詞＞」における하는は，「하게 될지도 모르는」（することになるかもしれない），「할 수 있는」（することができる）のように，「おそれ」や「可能性」を表す分析的な形の하는，「시험에 합격할 수 있을까 하는 염려로」（試験に合格できるかなという心配で）の「…という」に相当する「引用」の하는が殆どであり，一般的な하는ではない.

次に，한について言うと，「한＋＜할志向名詞＞」における한は「-에 대한」（…に対する），「-에 관한」（…に関する），「-에 따른」（…による）のような後置詞に用いられる한であったり，「희망 섞인 전망」（希望を込めた展望）のように使われ，한「内の関係」として現れる傾向が見られた.

＜할志向名詞＞の하는や한との共起様相を分析することにより，할は構造自体が하는や한と非常に異なっていることがわかった．할は「外の関係」に偏っており，「할 생각이다」（…するつもりである）のような決まった構成で用いられ，「할＋被修飾名詞＋上位節の述語」が1つの述語として機能する傾向が強い．

5.7. 第 5 章の結び

第 5 章では，할による連体修飾構造の特徴について分析・考察した．考察に当たっては，할をとる動詞とそれに先行する要素，被修飾名詞，할と被修飾名詞の関係などに重点をおいて分析を行った．

할をとる動詞には＜意志動詞＞が多い傾向が見られた．さらに，＜意志動詞＞か否かによって할が異なる意味を実現するという現象が見られた．

할の被修飾名詞には抽象的な事柄を表す名詞が多く，할と「外の関係」で現れる特徴があった．そして被修飾名詞が何かによって，할の実現する意味が異なるという特徴が見られた．

まず，5.7.1 では，「할＋＜할志向名詞＞」を機能の面から考察した結果を示す．次に 5.7.2 では，할が表す意味の観点から見た「할＋＜할志向名詞＞」の語彙的・文法的特徴について考察した結果を示す．

5.7.1. 機能の観点から見た「할＋＜할志向名詞＞」

＜할志向名詞＞は，名詞が持っている実質的な意味が薄れ，할節と，上位節の-이다（…だ）のような形式的な用言と一体化し，話し手の心的態度を表す働きをする傾向が強い．

「할＋＜할志向名詞＞」が文において果たす機能の観点から，①主に接続形の機能を担うもの，②主に-이다と結合し，主に話し手の心的態度を表す働きをするもの，③主に強調の機能をするものに分類できる：

① 接続形の機能：「할＋때（時），당시（当時）」これらの名詞は単独で，あるいは에と結合し，할とともに接続形のような働きをする．

② ムード形式の機能：「할＋방침（方針），계획（計画），예정（予定），작정（つもり），생각（考え）など」これらの名詞は「할＋名詞＋-이다（…だ）」全体で話し手の心的態度を表し，「할 것이다」（するつもりである）に言い換えうる．

③ 強調の機能：정도（程度）がある．主に「할 정도로」（…するほど），「할 정도이다」（…するほどである）のように使われる．このときの할は「한국의 발레수준이 세계 5 위 안에 꼽힐 정도로」（韓国のバレエのレベルが世界 5 位以内に挙げられるほど）でわかるように，話し手が既存の事実として認めている事柄を할で表す．

하는との言い換えについて言えば，할が「할＋被修飾名詞＋-이다/있다/없다（…だ/ある・いる/ない・いない）」全体で，「意志」，「当為」，「恐れ」といった意味を表す場合には，할を하는に言い換えるのが難しい．また「…するとき」「…するほどに」のように，「時間限定」，「強調」といった働きをする場合も，하는との言い換えが難しい．

5.7.2. 할が表す意味の観点から見た「할＋＜할志向名詞＞」

ここでは，할が表す意味の観点から見た「할＋＜할志向名詞＞」の語彙的・文法的特徴について考察した結果を示す：

1) 할+＜予定名詞＞（계획（計画）類）

このグループの名詞には，계획（計画），방침（方針），예정（予定），준비（準備）などがある．これらの名詞は語彙的意味に，「これから」「前もって」といった意味が含まれている場合が多い．これらの名詞を修飾する할は「意志」や「予定」を表す：

「할＋＜予定名詞＞」における할の意味：

「할＋계획（計画），방침（方針）」――「意志」／「予定」
「할＋예정（予定）」――「予定」

これらの名詞を修飾する動詞には＜意志動詞＞が多い．

2) 할＋＜意志名詞＞（작정（つもり）類）
このグループの名詞には，용의（用意），의욕（意欲），의향（意向）などがある．これらの名詞は語彙的意味に，「何事かをしようとする」といった意味が含まれている場合が多い．これらの名詞を修飾する할は「意志」や「欲望」を表す形式である，하려는（しようとする），「하고자 하는」（しようとする），하겠다는（しようとする）などに言い換えうる．
これらの名詞を修飾する할は「意志」に固定される．할をとってこれらの名詞を修飾する動詞には＜意志動詞＞が多い．

3) 할＋＜可能性名詞＞（염려（心配）類）
このグループの名詞には，염려（心配），우려（憂慮），위험（危険）などがある．これらの名詞は語彙的に，「心配」「危険性」といった意味を表す．これらの名詞を修飾する할は「ある事態が起こりうる見込みがある」ことを示す「할 수 있는」（する可能性がある）や，「할 지도 모를」（するかもしれない）に言い換えうる．上位節には主に있다（ある）が来て，「할＋名詞＋있다（ある）」全体で固定化された一種の文型を形成する．これらを修飾する動詞には＜無意志動詞＞が多い．これらの名詞を修飾する할は「可能性」を表す．

4) 할＋＜要件名詞＞（권리（権利）類）
「何かを可能にする要件」を表す名詞である．このグループの名詞には，권리（権利），기회（機会），자격（資格），경황（余裕），계제（階梯），여유（余裕），태세（態勢）などがある．
これらの名詞は語彙的な意味に「何事かをするに必要な…」「何事かが出来る…」といった意味が含まれている場合が多い．これらの名詞を修飾する할は「…することができる」を表す「할 수 있는」や「…するだけの」を表す「할 만한」に言い換えうる．このグループの名詞は上位節の述語の種類によって次のように分類しうる：

主に-이다（…だ）が後続する名詞：태세（態勢）
主に있다（ある/いる）が来る名詞：권리（権利），기회（機会），자격（資格）
主に없다（ない）が来る名詞：경황（余裕），여유（余裕）
主に아니다（…ではない）が来る名詞：계제（階梯）

これらの名詞を修飾する動詞には＜意志動詞＞が多い．そして할の意味は「可能」に固定される．

5) 할＋＜当為名詞＞（의무（義務）類）

「当然なすべきこと」を表す名詞である．このグループの名詞には，의무（義務）などがある．このとき할は「해야 할」（…するべき）に言い換えうる．차례（順番），나이（年齢）も할とともに「…すべき順番／年齢」の意でよく用いられる．これらを修飾する動詞には＜意志動詞＞が多い．そして할の意味は「当為」になる．

次に，＜할志向名詞＞の用例を「存在しない」または「程度が低い」などの否定的な表現との共起という観点から考察した結果をまとめると，次の通りである：

《主として，否定的な要素が後続する名詞》
용기（勇気），면목（面目），명분（名分），낯（面目），맘（思い）など

《主として，肯定的な要素が後続する名詞》
소지（可能性），용의（用意）など

次に，「할＋＜할志向名詞＞」における할をとる名詞を＜意志動詞＞・＜無意志動詞＞の観点から分類した結果を＜할志向名詞＞の種類ごとに整理すると次の通りである：

表 19. ＜할志向名詞＞と意志動詞／無意志動詞

＜予定＞	＜意志＞	＜当為＞	＜要件＞	정도（ほど）	때（時）	＜可能性＞
基本的に意志動詞				意志動詞／無意志動詞		無意志動詞

以上할による連体修飾構造について語彙的・文法的な観点から考察を行った．할「内の関係」について言えば，할をとる動詞が＜意志動詞＞である場合は，할が「意志」「可能」「予定」などの多様な意味を表すのに対し，할をとる動詞が＜無意志動詞＞である場合は，할が「可能性」「可能」「予定」を表し，「意志」や「当為」は表しにくい傾向が見られた．

할「内の関係」における被修飾名詞について言えば，被修飾名詞によって，할が特定の意味を表しやすいという傾向が見られた．しかし「内の関係」における할の意味は，할をとる動詞と被修飾名詞のみならず，上位節の用言，共起する副詞などの文脈条件によって最終的に決められる．

一方，할「外の関係」では，할の表す意味が，被修飾名詞の種類によって決められる場合があることを確認した．할「外の関係」における＜할志向名詞＞の共通の特徴は，つまり認定の基準は「意志」「可能性」「要件」などの「ある未然の事柄について何事かを言う」という「未然性」である．例外的に，この基準には合わないが，때（時），정도（程度）も確認された．

第6章 結論

本論文は現代韓国語の動詞連体形のうち，하는（V-는），한(V-은/ㄴ)，할(V-은/ㄹ)を対象に，それぞれの連体形が成す連体修飾構造に見られる，語彙論的・文法的特徴を明らかにすることを目的とし，大量のコーパスを用い，計量的調査及び分析を行った．各論は하는，한，할それぞれの連体形の構造上の特性と하는，한，할が表す意味との関連性を詳細に分析して論じた．とりわけこれまでの研究で相対的に周辺的な要素として扱われてきた被修飾名詞に注目することで，既存の研究とは異なる観点から連体修飾構造のあり方を分析しようと努めた．本章ではそれらの考察の結果を述べる．

まず 6.1 では，第 2 から第 5 章までに明らかになったことをそれぞれ整理して示し，6.2 で本論文の意義と課題について述べる．

6.1. 要約

本論文は現代韓国語の動詞の連体修飾構造に見られる，語彙論的・文法的特徴を明らかにすることを目的として，大量のコーパスを用い，計量的調査及び分析を行った．ここでは，全体的な流れと各論の成果を中心に述べたい．

第 2 章では，動詞の連体修飾構造の全体像をつかむために，いかなる動詞が連体形をとりやすいのか，そしていかなる名詞が動詞連体形の被修飾名詞になりやすいのかについて調査した．その結果，他動詞より自動詞の方が連体形をとる頻度が高く，自動詞の中でも，「状態変化」，「関係」，「自然現象」を表す動詞が連体形をとる頻度が高いことを確認した：

「状態変化」を表す動詞：
늙다（年をとる），마르다（やせる），병들다（病む）など
「関係」を表す動詞:
상응하다（つりあう），버금가다（次ぐ），관련되다（関連する）など
「自然現象」を表す動詞：
타오르다（燃えあがる），생동하다（いぶく），내리쬐다（照り付ける）など

上の動詞は＜無意志動詞＞である特徴がある．中でも「状態変化」を表す動詞は가장（もっとも）のような程度副詞の修飾をうける点で，形容詞に近いと言える．一般の動詞は多くの接続形をとり，動作の先行，理由，様態などを表すのに用いられるのに対し，上に示した動詞は連体形や終止形をとることが多く，動作や状態の描写によく用いられる傾向が見られる．

次に，被修飾名詞について言うと，시늉（ふり），예정（予定），방도（方途）のように，事態や現象を直接・間接的に指示する名詞や，때（時），뒤（後）のように，時間的前後関係を表す名詞が連体形をとりやすいことが明らかになった．動詞の連体形との共起頻度が高い名詞は，修飾語なしに文の成分として用いられにくい特性を持ち，不完全名詞的な性格が濃いものも見られる．

最後に，連体節と被修飾名詞の関係について考察した．本稿では寺村秀夫(1980)に倣い，次のように分類した：

「内の関係」：被修飾名詞が連体節内部の一成分になるような構造（または，連体節の述語動詞と被修飾名詞との間に何らかの格関係がある場合）

「外の関係」：被修飾名詞が連体節内部の一成分にならないような構造（または，連体節の述語動詞と被修飾名詞との間に格関係がない場合）

資料の分析を通して，名詞は一般に連体節との関係において偏りを見せることがわかった．例えば，비（雨），행인（行人），주체（主体）は連体節で示される動作や現象に対し「主体」として現われる傾向が強い．そして殆どの名詞が連体節で示される動作・状態に対し，「主体」や「客体」を表すのに対し，뒤（後），한편（一方）のような名詞はそのような関係にならないことも確認した．

「外の関係」はさらに，連体節が表す事柄と被修飾名詞が表す対象が同一の事柄を示す＜同一内容関係＞と，連体節が表す事柄と被修飾名詞が表す対象が同一の事柄を示さず，被修飾名詞が連体節の表す事柄の原因，方法などを表す＜状況的内容関係＞に分類した．

＜同一内容関係＞は，하는，한，할が被修飾名詞を修飾し，名詞が表す対象が具体的にいかなる動作や状態であるのかを表す．この構造の被修飾名詞には事態や現象を直接・間接的に指示する名詞が来ることが多く，하는，한，할の中でも하는がこの構造を実現する傾向がもっとも強い．

＜状況的内容関係＞は連体節と被修飾名詞が表す意味によって分類される．そして＜状況的内容関係＞の種類と連体形との間にも一定の関連性が認められる．例えば，連体節と被修飾名詞 N が「…するだけの N」のように解釈される構造は할の構造的特徴である．＜状況的内容関係＞の被修飾名詞には결과（結果），이유（理由）のような，いわゆる「相対性」を持つ名詞や방법（方法），과정（過程）のような，行為や現象の状況を表す名詞が来る．

本稿では，主に名詞の語彙的意味及び動詞の連体形との共起様相に注目して，名詞分類を行った．

まず，名詞を大きく，＜実体＞，＜場所＞，＜時間＞，＜事柄＞，＜状態＞，＜抽象＞に分類した．これらの名詞のうち，＜実体＞，＜場所＞，＜時間＞，＜抽象＞は連体節と主に「内の関係」で現われ，＜事柄＞と＜状態＞は連体節と主に「外の関係」として現われる特徴が見られた．ただし，＜実体＞のうち，사진（写真），그림（絵），편지（手紙）のような名詞は「外の関係」としても現われる特徴があった．

殆どの名詞が連体節と「内の関係」として現れるのに対し，次のような名詞は「内の関係」としては現れない：

뒤（後），후（後），한편（一方），반면（反面），도중（途中），대신（代わり），끝（末），가운데（中），이후（以後），작정（つもり），직후（直後）など

連体節と「外の関係」で現われる名詞には，사건（事件），시늉（ふり）など，事態や現象を直接・間接的に指示する特性を持つ名詞や뒤（後），한편（一方）など，「時間的・論理的前後関係」を表す名詞が典型的に現われた．このような現象から，連体修飾構造の色々な型は，被修飾名詞の語彙的特徴と緊密に結びついていることがわかる．

次に動詞について言うと，하는，한，할それぞれの連体形をとる動詞の様相が異なり，하는をとる動詞には「一定時間継続する動作」を表す動詞が多く，한をとる動詞には「状態変化」を表す動詞が多い．そして할をとる動詞には＜意志動詞＞が多い傾向が見られた．

本稿では，まず動詞をテンス・アスペクト的な特徴から次のように分類した：

表 8．本稿における動詞分類（表８の再引用）

大分類	下位分類	時間の中での展開性	継続性	限界性	한が「現在」を表す	語例
内的限界動詞（telic verb）	結果継続動詞	○	○	○	○	입다（着る）
	状態変化動詞	○	×	○	○	비다（空く）
非内的限界動詞（atelic verb）	動作継続動詞	○	○	×	×	놀다（遊ぶ）
	内的認知動詞	○	×	×	×	보이다（見える）
	関係規定動詞	×	×	×	×	해당되다（該当する）
	属性動詞	×	×	×	○	생기다（生ずる）

あらゆる動詞が하는，한，할を均等にとるわけではなく，하는，한，할はそれぞれの意味を表すのにもっとも適した動詞を好んでとるという現象があるわけである．そして하는，한，할をとる動詞はそれぞれの連体形が表す意味とも緊密に結びついている．

第 3 章では，言語資料から하는をとりやすい動詞と被修飾名詞を抽出し，それらが하는構造でいかに現われ，いかに하는の意味と関連しているのかについて考察した．その結果，하는，한，할のうち，하는をとる頻度がもっとも高い動詞（＝＜하는志向動詞＞）には，次のような種類の動詞が見られた：

＜動作継続動詞＞：떨리다（震える），끓다（沸く）など
＜内的認知動詞＞：보이다（見える），마음에 들다（気に入る）など
＜関係規定動詞＞：달하다（達する），맞먹다（匹敵する）など

上に示した動詞は，動詞の語彙的意味の中に「運動が必然的に尽きる内的時間的限界」という意味特徴をとりだすことができない＜非内的限界動詞＞(atelic verb)であるという特徴がある．このような하는をとる動詞に見られる偏りから，하는についてはテンスの観点からの規定のみならず，「不完了」「動作」といった規定が必要であることがわかる．

次に하는，한，할のうち하는との共起頻度がもっとも高い被修飾名詞（＝＜하는志向名詞＞）について調査した結果を述べる．하는が「継続的な動作や現象」，「習慣的・反復的な動作や現象」，「一般的・恒常的な事柄」を表すため，被修飾名詞にもこのような하는の表す意味と関連する名詞が特徴的に現われた．例えば，소리（音）は「行われつつある動作や現象」と関連し，습관（習慣），경향（傾向）は「反復的に行われる動作や現象」と関連する．そして개념（概念）は「一般的・恒常的な事柄」と関連し，방법（方法），구조（仕組み），특성（特性），이치（道理）などは繰り返されることにより，一般化した事柄を表す．

하는「内の関係」（意味的格関係）では，「一定時間継続する動作」や「脱時間的な関係概念」を表す＜하는志向動詞＞が典型的に現れた．被修飾名詞が하는に対して何を表すのかに注目すると，被修飾名詞が主体を表す場合がもっとも多いことを確認した．

하는「内の関係」における하는の意味に注目すると，하는をとる動詞が「心理」や「知覚」を表す場合，하는は「現在」を表す傾向が強い．それに対し，動詞が＜関係規定動詞＞である場合，하는が「一般的・恒常的な事柄」を表す．なお，하는をとる頻度の低い＜結果継続

動詞＞＜状態変化動詞＞は「접는 칼」（ポケットナイフ）（lit.折りたたむナイフ）のように，하는構造では「用途」や「機能」など，「一般的・恒常的な事柄」を表す傾向が強い．

次に，하는連体修飾構造のうち，「外の関係」の構造について分析した結果を述べる．하는は＜行為＞，＜様子＞，＜方法＞など，様々な＜事柄名詞＞と＜同一内容関係＞を実現することで，被修飾名詞が表す行為や現象が具体的にどのようなことを表すのかを補充する働きをする．하는が一時的であろうと，ひろげられた現在に持続することであろうと，「終わっていない事柄」，つまり「動作や現象」自体を表すため，시늉（ふり），방법（方法）など，動作や現象を直接・間接的に示す名詞の内容を補充することが可能であると思われる．

하는「外の関係」（内容補充的関係）では，次のような名詞が典型的に現われた：

＜事柄名詞＞：
＜行為＞
시늉（ふり），버릇（癖），연습（練習），놀이（遊び），행위（行為）
＜方法＞
방식（方式），방안（方案），방법（方法），수법（手法），요령（要領）
＜様子＞
모습（様子），양상（様相），태도（態度），형태（形態）
＜状況＞
실정（実情），상황（状況），현실（現実）
＜仕組み＞
구조（構造），제도（制度），장치（装置），시스템（システム）
＜特性＞
장점（長点），이점（利点），특성（特性），스타일（スタイル）
＜原理＞
이치（理至），원리（原理）
＜感覚・感情＞
재미（楽しみ），즐거움（楽しみ），고통（苦痛）
＜過程＞
과정（過程），여정（旅程），순서（順序）
＜現象＞
기척（気配），냄새（匂い），소리（音）
…

＜時間名詞＞：즉시（即時），순간（瞬間）
＜抽象名詞＞：원동력（原動力），지혜（知恵）

上の名詞のうち，＜行為＞＜様子＞＜状況＞＜仕組み＞＜特性＞は하는と主に＜同一内容関係＞で現われる特徴がある．（例：핸들 돌리는 시늉（ハンドルを回すふり），걷는 모습（歩く姿））

そして＜現象＞＜感覚・感情＞＜過程＞などは，하는と主に＜状況的内容関係＞で現われる特徴がある．하는＜状況的内容関係＞では，被修飾名詞（N）が하는との繋がりで「…するときに出る／感じるN」のように解釈される場合が多い．

「外の関係」の構造における하는の意味に注目すると，被修飾名詞が＜現象＞や＜様子＞であると，하는は「現在」を表す場合が多く，とりわけ기척（気配），눈치（様子），빛（様子）と共起する하는は「現在」を表す傾向が非常に強いことを確認した．一方，被修飾名詞が방법（方法），이치（道理）など，「一般性」を持つ＜事柄名詞＞である場合は，

하는は「超時」を表す傾向が見られた．「外の関係」において하는の表す意味が被修飾名詞によって決まるという現象は，連体節の「時」が上位節の「時」や発話時から独立して決まる場合があることを示唆するものである．被修飾名詞は하는の意味が実現されるにさいしての強力な条件となる．

第 4 章では，한をとりやすい動詞と被修飾名詞を抽出し，하는と同様の分析を行った．まず，한をとる動詞について言うと，하는，한，할のうち，한をとる頻度がもっとも高い動詞（＝＜한志向動詞＞）には，次のような種類の動詞が見られた：

＜状態変化動詞＞：지치다（疲れる），잃다（無くす）など
＜結果継続動詞＞：접다（折る），입다（着る）など
＜属性動詞＞：헐벗다（ぼろを着る），(-게) 생기다（（…のように）見える）など

要するに，＜한志向動詞＞は動作の過程を表すか否かに関係なく，「運動が必然的に尽きる内的時間的限界」という意味特徴をとりだすことのできる＜内的限界動詞＞（telic verb）である特徴を持っている．これらの動詞は한の形で新たな状態の発生を表しうる．
＜状態動詞＞は時間の中での展開性を持たず，主体の性質を表す形容詞に近いものと考えられる．한をとる動詞の様相から한の意味を考えると，-ㄴが動詞についた形である한は，動詞の表す動作が終わっていることを表すことで，形容詞の한とともに主体の状態（静態的な側面）を表すようになると考えられる．

한との共起頻度が高い名詞（＝＜한志向名詞＞）には「既に終わっている事柄を前提に何事かをいう」という「完了性」を持つ名詞が高い頻度で現われることが確認された．具体的には，후（後），끝（末），다음（次）のように，時間的に「後」，「末」を表す名詞や기억（記憶），혐의（嫌疑）などがある．
さらに사진（写真），몸（体）のような「具体的なもの」を表す名詞も한をとる頻度が高い．
なお，＜한志向名詞＞には，이해（理解），인식（認識）のように，主に「-에 대한」（…に対する），「-에 관한」（…に関する）のような後置詞に用いられる한の修飾をうけやすい名詞も見られる．

한「内の関係」は，＜結果継続動詞＞と＜状態変化動詞＞などの＜한志向動詞＞が典型的に現れた．被修飾名詞は한に対して主に「主体」，「客体」，「動作の及ぶ場所」を表す．한の場合は「완성된 작품」（完成した作品）（→작품이 완성되다）（作品が完成される）のように，連体節と被修飾名詞が「受動的な動作と主体」という関係にある．
한「内の関係」における한が表す意味について言うと，動詞が＜結果継続動詞＞（입다（着る））や＜状態変化動詞＞（다치다（怪我をする））であると，한は「現在の状態」を表す傾向が強い．それに対し，한をとる頻度の低い＜動作継続動詞＞が한をとると，한は「過去」を表す傾向が強い．
한は「動詞の表す事態が完全に終わり，その状態が基準時点においても有効であること」を表す形式である．＜内的限界動詞＞は必然的に尽きる内的限界がある動詞であるため，한をとることで「状態」や「動作後の結果」を表しやすいと考えられる．それに対し，＜非内的限界動詞＞は必然的に尽きる内的限界がないため，期間を表す副詞など，何らかの文脈的な助けがないと，限界を超えた状態や結果を表しにくいと思われる．そしてこのような現象は動詞と被修飾名詞の結びつきが強い「内の関係」において著しいということが言える．

次に「外の関係」を実現する한の構造上の特徴について述べる．

まず，한と＜同一内容関係＞を実現する名詞には，「既に終わっている事柄を前提に何事かを言う」という「完了性」を持っている名詞が来る．

（例：뇌물을 받은 혐의（賄賂を受け取った嫌疑），집을 나간 죄（家を出た罪））

次に，한は動作の結果を表すような名詞と主に＜状況的内容関係＞で現われる特徴が見られた．被修飾名詞Nは한との繋がりで，「…した後のN」のように解釈される．

（例：가꾼 흔적（手入れをした痕跡），열심히 노력한 결과（一生懸命努力した結果））

さらに，이상（以上）と뒤（後）のような名詞は，名詞単独で，あるいは助詞を伴って，＜한＋名詞（助詞）＞が接続形のように機能する傾向が見られた．

「外の関係」の構造における한をとる動詞にも全体的に＜内的限界動詞＞が多いものの，「内の関係」の構造ほど激しい偏りは見られず，被修飾名詞の種類によって，＜動作継続動詞＞の頻度が高い場合も見られる．例えば，「한 끝에」（…したすえに）のように，한と被修飾名詞が一定の時間的幅を表す構成である場合は，한をとる動詞に＜動作継続動詞＞の頻度が高い傾向が見られる．

「外の関係」の構造における한の意味に注目すると，被修飾名詞の種類によって한の意味が異なる傾向が見られた．例えば，被修飾名詞が기억（記憶），경험（経験）である場合，한は「過去の経験」を表し，상태（状態）であれば，「現在の状態」を表す傾向が強い．そして被修飾名詞が혐의（嫌疑），죄（罪）である場合，한は「完了」を表す．

하는の場合と同様に，한「外の関係」においても，한の意味の実現に被修飾名詞が重要な役割を果たすということがわかる．

第 5 章では，할連体修飾構造について，할をとる動詞の語彙的・文法的特徴，被修飾名詞の語彙的・文法的特徴，そして할と被修飾名詞の関係などについて分析を行った．

할は用例の殆どが「外の関係」の構造で現れ，上位節に있다（ある），없다（ない），-이다（…だ）のような形式的な用言が後続し，全体が固定された一種の文型を形成する傾向が見られた．

할をとりやすい動詞は，テンス・アスペクト的な特徴は特に見られず，既存の研究で指摘があった通り，＜意志動詞＞が多い傾向が見られた．しかし被修飾名詞の種類によって＜無意志動詞＞が多い場合も見られた．

하는，한，할のうち，할をとる頻度がもっとも高い動詞（＝＜할志向動詞＞）には，살펴보다（（注意して）見る），「考える」の意の보다，주목하다（注目する）のような「思考」を表す動詞や，「~의 오른쪽에 나설 작품이 없다」（…の右に出る作品はない）の「오른쪽에 나서다」（右に出る）のような，比較に基づいた話し手の評価を表す動詞も見られた．また「이렇다 할 이유도 없이」（これといった理由もなく）の「이렇다 하다」（これという）は할のみをとって現われる．＜할志向動詞＞の様相から考えると，할は対象に対する話し手の「評価」を表す性格が濃い形式であることがわかる．

＜할志向名詞＞は，＜時間名詞＞＜事柄名詞＞など，そのすべてが抽象的な事柄を表す名詞であり，「ある未然の事柄について何事かを言う」という「未然性」を合わせ持っている．

まず，할「内の関係」について言うと，할「内の関係」では할をとる動詞が＜意志動詞＞か否かによって할の実現する意味が異なる傾向が見られた．할をとる動詞が＜意志動詞＞であれば，할は文脈によって「意志」，「当為」，「可能」，「予定」などの多様な意味を表すのに対し，할をとる動詞が＜無意志動詞＞である場合は，할が「可能性」，「可能」，「予定」を表し，「意志」や「当為」は表しにくいようである．

次に，할「外の関係」では，被修飾名詞が何かによって할の実現する意味が異なる傾向が見られた．例えば，被修飾名詞が생각（つもり），궁리（考え）であれば，할は「意志」を表し，할をとる動詞も基本的に＜意志動詞＞である特徴があった．

さらに，할の用例を「存在しない」または「程度が低い」などの否定的な表現との共起という観点から考察した結果，被修飾名詞によって，否定的な表現が後続しやすい場合と，肯定的な表現が後続しやすい場合があることが確認された．

以上，本稿で明らかにした動詞の連体修飾構造の語彙的・文法的特徴について考察した結果を要約した．次の表に本稿での議論を簡単に示すことにする：

表 20. 하는, 한, 할の意味用法と語彙論的・文法的特徴

<table>
<tr><th></th><th>하는（V-는）</th><th>한（V-ㄴ/-은）</th><th>할（V-ㄹ/-을）</th></tr>
<tr><td rowspan="6">主な意味用法</td><td>非過去（現在，未来，一般的・恒常的な事柄）</td><td>過去，現在の過去，現在</td><td>非過去（現在，未来）</td></tr>
<tr><td colspan="2">既然</td><td>未然</td></tr>
<tr><td>終わっていない動作や現象（動作や現象）</td><td>終わっている動作や現象（状態）</td><td>まだ起こっていない動作</td></tr>
<tr><td colspan="2">客観的な態度</td><td>主観的な態度</td></tr>
<tr><td>対象の動態的な側面の規定</td><td>対象の静態的な側面の規定</td><td>推測，強調，非難など</td></tr>
<tr><td></td><td></td><td></td></tr>
<tr><td>結合しやすい動詞</td><td>非内的限界動詞・無意志動詞：떨리다（震える），끓다（沸く），버금가다（次ぐ）など</td><td>内的限界動詞・無意志動詞：지치다（疲れる），잃다（無くす），헐벗다（ぼろを着る）など</td><td>意志動詞：
살펴보다（（注意して）見る），주목하다（注目する）など</td></tr>
<tr><td rowspan="3">共起しやすい被修飾名詞</td><td>「未完了性」の事柄名詞：방식（方式），시늉（ふり），버릇（癖），재미（楽しみ），과정（過程），소리（音）など</td><td>「完了性」の事柄名詞：혐의（嫌疑），사실（事実），죄（罪），경험（経験），배경（背景），결과（結果）など</td><td>「未然性」の事柄名詞：작정（つもり），준비（準備），권리（権利），의무（義務）など</td></tr>
<tr><td>「未完了性」の時間名詞：도중（途中），동안（間），동시（同時）など</td><td>「完了性」の時間名詞：뒤（後），후（後），끝（末）など</td><td>時間名詞：
때（時），당시（当時）</td></tr>
<tr><td>「未完了性」の抽象名詞：비중（比重），요소（要素），방향（方向），수준（水準）など</td><td>「完了性」の抽象名詞：기억（記憶），나머지（残り）など</td><td>「未然性」の抽象名詞：필요（必要），확률（確率），소지（可能性），틈（余裕），우려（おそれ）など</td></tr>
<tr><td rowspan="2">連体節と被修飾名詞の主な関係</td><td>「内の関係」：主体（能動的な動作の主体），動作が行われる場所</td><td>「内の関係」：主体（受動的な動作の主体），客体，動作の及ぶ場所</td><td>「内の関係」：客体</td></tr>
<tr><td>「外の関係」：…する時のN</td><td>「外の関係」：…した後のN</td><td>「外の関係」：…するだけのN</td></tr>
</table>

本稿は実際のテクストに基づいた頻度情報を用いることで，各々の動詞連体形がなす構造を具体的に記述することができた．そして文法形式が表す意味を，構造と関連づけて論じることにより，理論的な研究では見ることができなかった言語の側面を見ることができたと思う．とりわけ，被修飾名詞に注目したことで，それぞれの連体形の主な構造について効果的に記述することができ，被修飾名詞と連体形が表す意味との関連性も見出すことができた．

さらに，하는，한，할それぞれの固有の構造的特徴を明らかにすることにより，하는，한，할が対等な 3 項対立ではないことを明確に示した．

まず，하는と한について言うと，하는構造は「춤추는 아이」（踊っている子供）で見られるような＜非内的限界動詞＞が多い割合を占め，한構造は「몸에 걸친 옷」（体にかけた服）で見られるような＜内的限界動詞＞が多い割合を占めている傾向が見られた．＜非内的限界動詞＞は動作が必然的に尽きる限界がないため，「動作」を表すのに用いられやすいし，＜内的限界動詞＞は動作が必然的に尽きる限界があるため，その限界を乗り越えた「状態」を表すのに用いられやすいと考えられる．하는と한は「現在」「過去」といったテンス的機能を有するように言われてきたが，それだけの規定では不十分であり，하는は被修飾名詞の動態的な側面を規定し，한は被修飾名詞の静態的な側面を規定するという機能を持っていると見ることができる．

次に，할について言うと，既存の研究において할は「推測」，「非現実」，「未実現」を表す形式と呼ばれてきたが，本稿の用例分析によると，現実の事柄でも話し手が「強調」や「非難」などの意図を込めて言うときに，할を用いることが確認された．（例：「세계 1 위를 할 정도로」（世界 1 位になるくらい））

結局，하는と한は事柄を既存の事実として客観的な態度で述べる形式である点において，할とムード的に対立しているし，하는と한は局面を分かつ境界を越えているかどうかで，アスペクト的に対立していると見ることができる．

連体形語尾の認定については-ㄴ，-는，-ㄹの 3 者を認める立場と，-ㄴと-ㄹのみを認め，-는は-ㄴ-に-ㄴが結合したと見る立場がある．本稿の考察の結果から考えると，連体形語尾は「既然」なのか「未然」なのか，あるいは「客観的な態度」なのか「主観的な態度」なのかで一次的に-ㄴと-ㄹを認め，-는は-ㄴ-と-ㄴの複合形式であると考えうる．-ㄴは「静態性」を表し，-는は-ㄴ-に-ㄴが結合し，「動態性」を表すようになるのである．

6.2. 意義と今後の課題

本研究は実際のテクストに基づき，動詞の連体形が実際に用いられる様相を分析し，動詞の連体形の構造と意味を解明するために始まった．このような目的と関連し，本稿が持つ意義は次のように要約しうる．

1) 被修飾名詞が連体節で示される動作・状態に対して，何を表すのかという連体節の構造と被修飾名詞の語彙的特徴との間に一定の関連性があることを示した．例えば，事態や現象を直接・間接的に指示するという「事柄性」を持つ名詞（사건（事件），시늉（ふり））は連体節と「外の関係」で現われる．

2) 連体節の「時」が上位節の「時」や発話時によって決められる場合もあるが，連体形をとる動詞や被修飾名詞によって決められる場合があることを示した．例えば，動詞が해당되다（該当される）のような＜関係規定動詞＞であると，하는は「超時」を表す．そして被修飾名詞が기색（顔色），기척（気配）であれば，それを修飾する하는は「現在」を表す．

3) 動詞の連体形との共起様相という観点から，名詞，動詞の語彙論に新たな知見を提示した．本稿は語彙の分類を目的とするものではなかったものの，新たな動詞分類，名詞分類の

範疇化を行わざるを得なかった．これは既存の韓国語研究では十分注目されてこなかった語類が相当に存在したことに起因する．

まず，名詞について述べると，連体節と主に「外の関係」の構造で現れ，事態や現象を直接・間接的に指示する名詞を＜事柄名詞＞として分類した．例えば，시늉（ふり），연습（練習）のような名詞は行為や状態を直接示し，방법（方法），모습（様子）のような名詞は行為や状態を間接的に指し示す．

＜事柄名詞＞はさらに하는，한，할との共起様相によって，＜一般性事柄名詞＞，＜完了性事柄名詞＞など，さらなる分類が可能である．

＜事柄名詞＞は「外の関係」という連体修飾構造をとるという文法的な特徴があるだけでなく，連体形が表す意味と緊密な関連を持つ点で，その範疇的意義がある．

次に動詞について述べると，하는や한をとる様相の観点から新たな分類を試みた．

例えば，해당되다（該当される）と「목숨을 잃다」（命を失う）は，意味特徴における相違があるにも関わらず，「-고 있다」をとりえないという共通性のためか，その区別が従来論じられてこなかった．しかし，動詞の連体形をとる様相に注目すると，両者の差が明確に見えてくる．前者の해당되다（該当される）は脱時間的な概念を表し，하는をとる頻度が高い．それに対し，後者の「목숨을 잃다」（命を失う）は主体のなんらかの変化を表し，한をとる頻度が高い．本稿では前者のような動詞を＜関係規定動詞＞，後者のような動詞を＜状態変化動詞＞として分類した．

さらに，本稿では보이다（見える），기뻐하다（喜ぶ）のような「内的活動」を表す動詞は，一般に하는をとりやすく，基本的に하는をとって「現在における状態の持続」を表す．

最後に，残された課題を記述しておく．

第一に，今回はそれぞれの連体形をとる頻度が高い動詞や被修飾名詞を中心に分析を行ったため，하는，한，할それぞれの連体修飾構造の典型的な種類については明らかにすることができたが，少数でありながらも特殊な用法については十分な分析が行われなかった．今後は全体の様相を細かく分析・記述するための研究方法を工夫する必要がある．特に할「内の関係」は用例が少なく，十分な分析が行われなかった．今後の課題にしたい．

第二に，連体節と被修飾名詞との関係が連体形の種類によって異なる様相を見せることを一部確認した．例えば，하는の場合は被修飾名詞が하는に対し「主体」を表す場合が多く，한の場合は「客体」や「動作の及ぶ所」を表す場合が多いという現象がある．今後は連体形ごとに連体節と被修飾名詞との関係を詳細に分類し，それぞれの連体形が連体節と被修飾名詞との関係において，いかなる共通点や相違点を持つのかについて分析する必要がある．

第三に，連体修飾構造に関する分析単位の拡大である．「이곳에 사는 사람들」（ここに住んでいる人々），「가지고 온 음식」（持ってきた食べ物）における「이곳에 사는」「가지고 온」は，動詞が連体形を取っているように見えるが，実は動詞とそれに伴う語句全体，つまり修飾部分全体が連体形を取っていると見るのが穏当なところである．そのため，動詞の連体形，および連体修飾構造の研究では，動詞のみならず，動詞にかかる他の要素（格，副詞など）についても体系的に考察する必要がある．[85] さらに，動詞の連体形が表

85) 吳充淵(2012)は「바닥에 흐른 물을 보았다」（底に流れた水を見た）は成立するが，「강어귀를 흐른 물을 보았다」（河口を流れた水を見た）は成立しないとし，「바닥에 흐른 물」（底に流れた水）の場合，바닥（底）が到達点を表し，結果状態を表しうるのに対し，「강어귀를 흐른 물」（河口を流れた水）の場合，강어귀（河口）が経路を表すため，「강어귀를 흐른」（河口を流れた）では「完了」を表せないと述べている．そして関係節の相と関連する文法現象を説明する際に，「‘-은’，‘-는’은 내포문의 논항을 포함하여

す意味は，上位節，またはそれを含む文全体の様相とも深い関連性があるため，今後，被修飾名詞がとる格や上位節の動詞など，調査の単位を拡大していく必要がある．

第四に，今回は하는，한，할の 3 種類しか対象としていないため，これらの形式が連体形の諸形式といかに対立しているのかについては位置づけができかった．今後は하던をはじめ，했던，했을などの複合形式や，「하고 있는」，「해 있는」などの補助動詞から成る形式も含め，研究の対象を拡大していく必要がある．さらに，韓国語のアスペクト，テンス，ムード，タクシスに関する体系的な考察も行わなければならない．

第五に，今回はそれぞれの動詞連体形をとりやすい動詞と共起しやすい被修飾名詞を抽出し，いくつかのグループに範疇化した．今後は連体修飾構造の観点から，韓国語の名詞と動詞はいかに分類できるのかについて考察を深めていかなければならない．そして形容詞の連体形，指定詞の連体形，補助動詞の連体形（「해 가는」（していく），「해야 할」（しなければならない））にまで研究が拡大すれば，名詞分類と動詞分類の全体的な枠組みについてより精密に記述できると思われる．

第六に，3.3 でも示したように，動詞の連体形と被修飾名詞の共起様相がテクスト類型に影響されることはないかについても考察する必要がある．今回は文語の比率が高い言語資料を使用したため，口語テクストについては更なる調査が必要である．

最後に，連体形と被修飾名詞の制限的な分布に関しても考察を深める必要がある．言語資料を調査すると，「-ㄴ 뒤」（…した後）のように，常に特定の連体形と共起する名詞もあれば，「-는 과정에서」（…する過程で），「-ㄹ 목적으로」（…する目的で）のように，名詞が特定の格をとる際に，特定の連体形のみと共起する場合が見られた．さらに，「外の関係」において，連体形の形が特定の連体形に制限される場合もあった．今後はこうした現象についても体系的に取り上げる必要がある．

내포문 전체를 이끄는 상이다」（「-은」，「-는」は内包文の論項を含め，内包文全体を統合する相である」ということを考慮する必要があると述べている．

参考文献

(1) 韓国語で書かれた文献

강범모(1983) '보문명사 구문의 의미 특성' 語學研究 19-1 서울: 서울대학교 어학연구소

강범모(2003) '컴퓨터를 이용한 국어연구의 실제' "언어, 컴퓨터, 코퍼언어학" 서울: 고려대학교출판부

高永根(1982) '叙述性語尾와 冠形詞語尾의 關聯性研究' "冠嶽語文研究" 서울: 塔出版社

高永根(1989) "国語形態論研究" 서울: 서울大学校出版部

고영근・남기심(1983) "국어의 통사・의미론" 서울: 탑출판사

고영근(2004) "한국어의 시제 서법 동작상" 서울: 태학사

과학・백과사전출판사(1979) "조선문화어문법" 평양: 과학, 백과사전 출판사

과학원 언어 문학 연구소 사전 연구실(1962) "조선말사전" 평양: 과학원출판사

과학원 언어 문학 연구소(1963) "조선어문법 2" 평양: 과학원출판사

국립국어연구원(1999) "표준국어대사전" 서울: 두산동아

권용경(2001) '국어 사이시옷에 대한 통시적 연구' 서울대학교 대학원 박사학위논문

권재일(1980) '현대 국어의 관형화 내포문연구' "한글" 제 167 호 서울: 한글학회

권재일(1985) "국어의 복합문 구성 연구" 서울: 집문당

권혁승(2008) '코퍼스 언어학의 실제 및 응용' "응용언어학" 제 24 권 3 호 서울: 한국응용언어학회

김봉모(1978) '매김말의 기능' "한글" 제 162 호 서울: 한글학회

김선효(2002) '현대 국어의 관형어 연구' 서울대학교 대학원 박사학위논문

김수태(2014) '관형사형 어미 '-을'에 대하여' "언어과학" 제 21 권 2 호 서울: 언어과학회

김수태(2016) '관형사형 어미 '-는'에 대하여' "언어과학" 제 23 권 1 호 서울: 언어과학회

김지은(2002)'관형절의 한 유형에 대한 연구' 애산학보 27 집 서울: 애산학회

김차균(1990) '관형절의 시제와 상위문 속에서의 연산' "한글" 제 207 호 서울: 한글학회

金倉燮(1987) '國語 冠形節의 過去時制: '-(았)던'을 중심으로' 어학 14 전주: 전북대학교 어학연구소

남경완(2007) '굳은 관형사형의 유형별 처리 방안 연구' "한국어 의미학" 제 22 호 서울: 한국어의미학회

南基心(1973) "國語完形補文法研究" 대구: 啓明大學出版部

南基心(1978) "國語文法의 時制問題에 關한 研究" 서울: 塔出版社

남기심(1996) "국어문법의 탐구" 서울: 태학사

남기심・고영근(1985) "표준국어문법론" 서울: 塔出版社

남윤진(2000) "현대국어의 조사에 대한 계량언어학적 연구" 서울: 태학사

남윤진(2002) '국어 연구와 빈도 정보' "한국어와 정보화" 서울: 태학사

남윤진(2005) '현대국어 조사 '-은/는' 의 분포와 기능-초등학교 국어 교과서를 중심으로-' "우리말 연구 서른 아홉 마당" 임홍빈(외) 서울: 태학사

노마히데키[野間秀樹](1993)「現代朝鮮語의 <-다가>에 대하여——aspect・taxis・用言分類——」『朝鮮学報』 第 149 輯 天理: 朝鮮学会

노마히데키[野間秀樹] (1994)「현대한국어의 連體形<하던>과 <했던>에 대하여」PACKS 제 2 차 한국학 환태평양 국제회의 발표요지

노마히데키[野間秀樹] (2001) '한국어 단어결합론의 심화를 위하여' "國語學" 第 39 輯

노마히데키[野間秀樹] (2002a) “한국어 어휘와 문법의 상관구조” 서울: 태학사
노마히데키[野間秀樹] (2002b) ‘한국어 문법교육의 새로운 전개를 위하여——특히 일본어 모어화자를 위하여——’ “외국어로서의 한국어교육” 제 27 집 서울: 연세대학교 언어연구교육원
羅鎭錫(1978) “우리말의 때매김 연구” 서울: 과학사
문숙영(2005) ‘한국어 시제 범주 연구’ 서울대학교 대학원 박사학위논문
문숙영(2012)‘유형론적 관점에서 본 한국어 관계절의 몇 문제’ 開新語文硏究 第 35 輯 청주: 開新語文學會
민현식(1999) “국어문법연구” 서울: 圖書出版亦楽
박장경(1996)‘内容節의 連体修飾構文에 있어서의 主名詞「考え」에 對한 硏究’ 日本語文學 第 2 輯 서울: 한국일본어문학회
朴長庚(1987)‘日本語의 連體修飾構文에 있어서의 動詞形態의 形式化, 固定化와 그 類型’ 日本學報 第 19 輯 서울: 한국일본학회
박재연(2009) ‘한국어 관형사형 어미의 의미 기능과 그 문법 범주’ 한국어학 제 43 호 서울: 한국어학회
박진호(2010) ‘언어학에서의 범주와 유형’ 인문학연구 제 17 호 서울: 경희대학교 인문학연구원
배진영(2001) ‘국어 관형절의 시제에 대하여’ “이중언어학회” 제 18 호 서울: 이중언어학회
서상규외(2004) “외국인을 위한 한국어 학습 사전” 서울: 신원프라임
서울大學校 大學院 國語硏究會 編(1990) “国語硏究 어디까지 왔나” 서울: 동아출판사
서정수(1996) “국어 문법” 서울: 한양대학교출판원
심경민(2010) ‘공간 명사의 의미영역 연구: espace, lieu, place, endroit 를 중심으로’ 이화여자대학교 대학원 석사학위논문
안효경(2001) “현대국어의 의존명사 연구” 서울: 역락
양동휘(1978) ‘국어 관형절의 시제’ “한글” 제 162 호 서울: 한글학회
연세대학교 언어정보개발연구원 편(1998) “연세한국어사전” 서울: 두산동아
연재훈(2012) ‘유형론적 관점의 한국어 관계절 연구’ “國語學” 第 63 輯 서울: 國語學會
吳充淵(2012) ‘國語 關係節의 相’ “어문연구” 제 40 권 제 4 호 서울: 한국어문교육연구회
유타니유키토시[油谷幸利](1978) ‘現代朝鮮語의 動詞分類——aspect 를 중심으로——’ “朝鮮学報” 第 87 輯 天理: 朝鮮學會
유현경(2009) ‘관형사형 어미 '-을'에 대한 연구: 시제 의미가 없는 경우를 중심으로’ 어문학 104 서울: 한국어문학회
李南淳(1981) ‘現代國語의 時制와 相에 대한 硏究’ 國語硏究 46 서울: 國語硏究會
이은경(2005) ‘명사를 중심어로 하는 문법적 연어 구성’ 이중언어학회 제 12 차 국제학술대회 발표요지
李翊燮・任洪彬(1983) “國語文法論” 서울: 學硏社
李鍾徹(1964) ‘現代國語의 時制와 相의 硏究’ 國語硏究 12 서울: 國語硏究會
李弼永(1990) ‘관계화’ “國語硏究 어디까지 왔나——主題別國語學硏究史” 서울: 國語硏究會
이홍식(1990) ‘현대국어 관형절 연구’ 國語硏究 98 서울: 國語硏究會
李熙昇(1981) “국어대사전” 서울: 민중서림
이희자·이종희(2001) “한국어 학습용 어미・조사 사전” 서울: 한국문화사
임홍빈(1993; 2002) “서울대 임홍빈 교수의 한국어사전” 서울: 시사에듀케이션

張京姫(1985) “現代国語의 様態範疇研究” 서울: 塔出版社
정희정(2002) “한국어 명사 연구” 서울: 한국문화사
趙義成 (1997) 「현대한국어의 단어결합에 대하여」『朝鮮学報』 第 163 輯 天理: 朝鮮学会
차준경(2009) “국어 명사의 다의 현상 연구” 서울: 제이앤씨
차준경(2009) ‘추상 명사의 의미 분류’ “담화와 인지” 제 16 권 2 호 서울: 담화인지언어학회
최운호(2005) ‘관형절+일반명사’구성의 접속 기능에 대한 계량적 연구——‘가운데’ 와‘경우’ 를 중심으로——’ “한글” 제 269 호 서울: 한글학회
최윤갑・리세룡 편저(1984) “조선어학사전” 연변: 연변인민출판사
최현배(1937; 1994) “우리말본” 서울: 정음문화사
한글학회(1992) “우리말큰사전” 서울: 한글학회
한글학회(1995) “국어학 사전” 서울: 한글학회
한송화(2002) “현대 국어 자동사 연구” 서울: 한글학회
허웅(1975) “우리 옛말본” 서울: 샘문화사
허웅(1995) “20 세기 우리말의 형태론” 서울: 샘문화사
허웅(1999) “20 세기 우리말의 통어론” 서울: 샘문화사

(2) 日本語で書かれた文献
安藤貞雄・小野隆啓(1993;2000)『生成文法用語辞典』東京：大修館書店
李翊燮・李相億・蔡琬(2004)『韓国語概説』前田真彦訳 梅田博之監修 東京: 大修館書店
五十嵐孔一(2007)「現代朝鮮語の‘나마’について」『朝鮮學報』第 204 輯 天理：朝鮮学会
伊藤英人(1989)「現代朝鮮語動詞の非過去テンス形式の用法について」『朝鮮學報』第 131 輯 天理：朝鮮学会
伊藤英人(1990)「現代朝鮮語動詞の過去テンス形式の用法について(1)——했다形について——」『朝鮮學報』第 137 輯 天理: 朝鮮学会
井上和子(1976a)『変形文法と日本語(上)』 東京：大修館書店
井上和子(1976b)『変形文法と日本語(下)』 東京：大修館書店
井上優(2012)「事態の叙述形式と文法現象：日本語から見た韓国語」『朝鮮語教育論講座 第 2 巻』野間秀樹編著 東京：くろしお出版
梅田博之･村崎恭子(1982) 「朝鮮語のテンス・アスペクト」『講座日本語学 11』東京：明治書院
大阪外国語大学朝鮮語研究室偏(1986) 『朝鮮語大辞典』 東京：角川書店
生越直樹(1997)「朝鮮語と日本語の過去形の使い方——結果状態形との関連を中心にして」『日本語と朝鮮語（下巻）』（国立国語研究所編） 東京：くろしお出版
生越直樹(2002)「日本語・朝鮮語における連体修飾表現の使われ方——「きれいな花！」タイプの文を中心に——」『シリーズ言語科学 第 4 巻 対照言語学』 東京：東京大学出版会
奥津敬一郎(1974) 『生成日本文法論』 東京：大修館書店
尾上圭介(2001)『文法と意味 I 』東京：くろしお出版
亀井孝・河野六郎・千野栄一編著(1996)『言語学大辞典 第 6 巻 術語編』東京：三省堂
菅野裕臣(1981)『朝鮮語の入門』東京：白水社

菅野裕臣(1986)「朝鮮語のテンスとアスペクト」 『学習院大学言語共同研究所紀要』9 号 東京：学習院大学言語共同研究所
菅野裕臣(1987)「中級講座」『基礎ハングル』第 12 号 東京：三修社
菅野裕臣他(1988) 『コスモス朝和辞典』東京：白水社
菅野裕臣(1995)「朝鮮語語彙のクラスをめぐって」『朝鮮文化研究』第 2 号 東京：東京大学文学部朝鮮文化研究室
金田一春彦編(1976)『日本語動詞のアスペクト』東京：むぎ書房
金民(2009)「現代朝鮮語の動詞の連体形と被修飾名詞の共起に関する研究――hanun（…する）連体形を中心に――」『朝鮮学報』第 212 輯 天理：朝鮮学会
金民(2013)「現代朝鮮語の動詞の連体形할と高い頻度で現れる被修飾名詞について」『朝鮮語研究 5』東京：朝鮮語研究会
金民(2014)「現代朝鮮語の動詞の連体形と被修飾名詞に関する研究――han（…した）連体形と高い頻度で現れる名詞――」『朝鮮学報』第 231 輯 天理：朝鮮学会
工藤真由美(1995)『アスペクト・テンス体系とテクスト』東京：ひつじ書房
小西友七編(2001)『英語基本名詞辞典』東京：研究社出版
鈴木重幸(1972)『日本語の文法・形態論』東京：むぎ書房
高橋太郎(1979)「連体動詞句と名詞のかかわりあいについての序説」『言語の研究』東京：むぎ書房
田中春美(1988)『現代言語学辞典』東京：成美堂
田野村忠温(2004)「現代語のモダリティ」『朝倉日本語講座6 文法Ⅱ』東京：朝倉書店
趙義成(1994)「現代朝鮮語の-에서格について」『朝鮮学報』 第 150 輯 天理：朝鮮学会
趙義成(1996)「現代朝鮮語の-에格について」『大阪・アジアスカラシップ活動報告書』財団法人大阪国際交流センター
趙義成(2007)「不完全名詞をめぐって」『朝鮮語教育論講座 第 1 巻』野間秀樹編著 東京：くろしお出版
全恵子(2015)「現代韓国語の先語末語尾-겠-の研究―その機能と多義構造―」東京大学大学院博士論文
陳満理子(1996)「現代朝鮮語の-로格について」『朝鮮学報』第 160 輯 天理：朝鮮学会
寺村秀夫(1980)「名詞修飾部の比較」『日英語比較講座 第 2 巻 文法』東京：大修館書店
寺村秀夫(1982) 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』東京：くろしお出版
寺村秀夫(1982) 『日本語のシンタクスと意味Ⅲ』東京：くろしお出版
寺村秀夫(1993a) 「ムードの形式と否定」『寺村秀夫論文集Ⅰ 日本語文法編』東京：くろしお出版
寺村秀夫(1993b) 「連体修飾のシンタクスと意味」『寺村秀夫論文集Ⅰ 日本語文法編』東京：くろしお出版
中島仁(2002)「現代朝鮮語の動詞の連体形「한」について」『朝鮮学報』第 183 輯 天理：朝鮮学会
中島仁(2012) 「用言の連体形と連体節をめぐって」『韓国語教育論講座 第 2 巻』野間秀樹編著 東京：くろしお出版
中西恭子(2002)「現代朝鮮語の連体形語尾-는について――-ㄹとの使い分けという観点から――」『朝鮮語研究 1』東京：くろしお出版

南潤珍(2007) 「朝鮮語教育におけるコロケーション情報の活用」 『朝鮮語教育論講座 第1巻』 野間秀樹編著 東京：くろしお出版
仁田義雄・益岡隆志(1991)『日本語のモダリティ』東京：くろしお出版
日本語教育学会(1982) 『日本語教育事典』東京：大修館書店
野間秀樹(1988)「＜하겠다＞の研究――現代朝鮮語の用言の mood 形式をめぐって――」『朝鮮学報』第 129 輯 天理：朝鮮学会
野間秀樹(1990a)「＜할것이다＞の研究――再び現代朝鮮語の用言の mood 形式をめぐって――」『朝鮮学報』第 134 輯 天理：朝鮮学会
野間秀樹(1990b)「朝鮮語の名詞分類――語彙論文法論のために」『朝鮮学報』第 1 35 輯 天理：朝鮮学会
野間秀樹(1993) 「現代朝鮮語の対格と動詞の統辞論」 『言語研究Ⅲ』 東京：東京外国語大学 語学研究所
野間秀樹(1997a) 「朝鮮語と日本語の連体修飾節（冠形節）構造」『朝鮮文化研究』 第4号 東京：東京大学文学部朝鮮文化研究室
野間秀樹(1997b)「朝鮮語の文の構造について」『日本語と外国語の対照研究 4 日本語と朝鮮語 下巻研究論文篇』 東京：くろしお出版
野間秀樹(2007) 「動詞をめぐって」『朝鮮語教育論講座 第1巻』野間秀樹編著 東京：くろしお出版
浜之上幸(1991) 「現代朝鮮語のアスペクト的クラス」『朝鮮学報』第 138 輯 天理：朝鮮学会
浜之上幸(1992) 「現代朝鮮語の「結果相」＝状態パーフェクト――動作パーフェクトとの対比を中心に――」『朝鮮学報』第 142 輯 天理：朝鮮学会
韓必南(2014)「日本語と韓国語における所有表現の対照研究―所有に見られる連続的様相と機能の棲み分け」東京外国語大学博士論文
前野敬美(1997)「現代朝鮮語における-ㄹ連体形について」東京外国語大学 1996 年度卒業論文
益岡隆志(1991)『モダリティの文法』東京：くろしお出版
益岡隆志(2007)『日本語モダリティ探求』東京：くろしお出版
益岡隆志(2009)「連体節表現の構文と意味」『言語』第 38 巻 第 1 号 東京：大修館書店
村田寛(2000)「現代朝鮮語の<-ㄹ>連体形について」『朝鮮学報』第 175 輯 天理：朝鮮学会
村田寛(2012) 「アスペクトをめぐって」『韓国語教育論講座 第2巻』野間秀樹編著 東京：くろしお出版
山岡正紀(2000) 『日本語の述語と文機能』東京：くろしお出版
山田孝雄(1898) 『日本文法論』東京：宝文館
油谷幸利(1988)『ハングルの基礎』東京：大修館書店
油谷幸利・門脇誠一・松尾勇・高島淑郎編(1993)『朝鮮語辞典』 東京：小学館

(3)英語で書かれた文献

Comrie, B. (1976) *Aspect.* Cambridge: Cambridge University Press
Comrie, B. (1981) *Language Universals and Language Typology*. Chicago: University of Chicago
Conrad, S. (2000) *Will Corpus Linguistics Revolutionize Grammar Teaching in the 21st Century?* TESOL Quarterly, vol.34

Hunston, S., &Francis, G. (2000) *Pattern grammar: A corpus-driven approach to the lexical grammar of English*. Amsterdam: Benjamins
Jespersen, J.O.H. (1924) *The Philosophy of Grammar*. London: George Allen & Unwin
Lyons, John (1977) *Semantics I II*. Cambridge: Cambridge University Press
Palmer, F.R. (2001) *Mood and Modality 2nd ed*. Cambridge: Cambridge University Press
Ramstedt, G.J. (1939) *A Korean Grammar*. Helsinki: Suomalais-Ugrilaisen Seura
Sinclair, J. (1991) *Corpus, Concordance, Collocation.* Oxford: Oxford University Press
Sohn, Ho-min(1999) *The Korean Language*. Cambridge: Cambridge University Press

【謝辞】

本論文は東京外国語大学大学院総合国際学研究院の南潤珍先生のご指導のもとでまとめたものです.

東京外国語大学大学院総合国際学研究院の南潤珍先生，趙義成先生，五十嵐孔一先生には学部研究生時代から長年にわたってご指導とご鞭撻を賜りました．心より感謝申し上げます.指導教員でいらっしゃる南潤珍先生には丁寧なご指導を賜り，研究の過程を見守り続けていただいたことに深く感謝申し上げます.

東京外国語大学大学院総合国際学研究院におられた野間秀樹先生，伊藤英人先生には，学部研究生時代をはじめ大学院での研究においても多くのことを学ばせていただき，貴重なご助言を賜わりました．心よりお礼を申し上げます.

また，東京大学大学院総合文化研究科の生越直樹先生，神田外語大学の權容璟先生には，本論文の審査委員をお引き受け下さり，貴重なご意見やご助言をいただきましたこと，心よりお礼申し上げます.

さらに，研究を遂行するに当たり，励ましやご支援をくださいました多くの方々に，この場を借りて厚くお礼申し上げます.